

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第121集

志賀公園遺跡Ⅱ

2004

財団法人愛知県教育サービスセンター

愛知県埋蔵文化財センター

序

志賀公園遺跡は、名古屋市北区の志賀公園を中心とする区域に広がっています。付近は今でこそ静かな住宅街となっていますが、かつては製鉄所が建ち、重工業の中核の一つでした。

志賀公園遺跡の発掘調査は、製鉄所跡地の再開発に伴う調査として行われたもので、今回が当センターとしては2回目にあたります。調査地も街路を挟んで前回調査地の西隣に位置します。

前回の調査によって、志賀公園遺跡における人々の生活の跡は、弥生時代から現代まで連綿と続いていることが明らかにされました。非常に内容の濃い、重要な成果が得られています。今回は、古墳時代の水田跡が新たな発見といえます。この地域の土地利用の変遷を研究する上で重要な手懸りになるものと思います。

最後になりましたが、志賀公園遺跡の発掘調査・整理報告を実施するにあたり、各方面の方々にご配慮賜り、また関係者および関係諸機関のご理解とご協力を頂きましたことに対して、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成16年8月

財団法人 愛知県教育サービスセンター

理事長 古池 庸 男

例言

1. 本書は愛知県名古屋市北区中丸町2丁目に所在する志賀公園遺跡（遺跡番号01-02015『愛知県遺跡分布図Ⅰ（尾張地区1994）』）の発掘調査報告書である。前回の調査（平成8（1996）年度から平成11（1999）年度まで）分については『志賀公園遺跡』として平成14年度に刊行済みである。よって、本書を『志賀公園遺跡Ⅱ』とする。

2. 発掘調査はアーバニア志賀公園住宅建設に伴う事前調査として、都市基盤整備公団より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが実施した。

3. 調査期間は平成12（2000）年10月から平成13（2001）年3月までの6ヶ月間、調査面積は2,030 m²である。

現地調査は中野良法（調査研究員、現愛知県立大府東高等学校教諭）、木川正夫（調査研究員、現愛知県教育委員会）が担当し、調整を石黒立人（主査）が行った。

4. 調査にあたっては、愛知県埋蔵文化財センター運営協議会委員、同専門委員ならびに次の各関係機関のご指導とご協力を得た。（敬称略順不同）

愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター、都市基盤整備公団中部支社、名古屋市教育委員会文化財保護室

5. 本報告書作成にかかる整理期間は平成15（2003）年6月から平成16（2004）年3月までの10ヶ月であり、石黒が担当した。なお、調査研究員：平野昌子、整理補助員：鈴木加代子・時田典子が諸作業にあたった。

6. 本書作成において、次の方々、関係機関のご教示・ご協力をいただいた。

独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所

7. 本書の編集は石黒が担当し、執筆分担を目次または文頭に示した。なお、愛知県立明和高等学校教諭森勇一氏より自然科学分野に対して指導および玉稿を賜った。

8. 発掘調査および本書で使用した方位は国土座標第Ⅶ系、高度はT.P.に準拠している。

10. 図版に掲載した遺物実測図は原則として1/4であり、その他は必要に応じてその都度示した。

11. 層序の記載は小山正忠・竹原秀雄編著1994『新版標準土色帖1994年度』（日本色研事業株式会社）を参考にした。

12. 遺構番号は原則として発掘調査時のそれを踏襲した。ただし、一部について記載の必要上から新たに遺構記号・番号を付与したが、調査資料原本および遺物の注記に変更はない。新旧の対照については本文中でもわかるようにした。

13. 発掘調査の記録類（調査日誌・実測図・写真等）は愛知県埋蔵文化財センター（愛知県教育サービスセンター）で、出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センター（愛知県教育委員会）で保管している。

本文目次

第1章 遺跡と調査の概要

- (1) 遺跡の位置と環境 1/石黒
- (2) 調査の経緯・概要 3/石黒
- (3) 調査日誌抄録 3/石黒

第2章 遺構の概要

- (1) 基本層序 4/石黒
- (2) 古墳時代の遺構 4/石黒
- (3) 古代の遺構 7/石黒
- (4) 中世・戦国の遺構 14/石黒

第3章 遺物の概要

- (1) 弥生時代以前の遺物 17/石黒
- (2) 古墳時代の遺物 17/石黒
- (3) 古代の遺物
- A. 概要 17/石黒
- B. 須恵器・土師器類 17/石黒
- C. 木製品 19/樋上

第4章 自然科学分析

- (1) 庄内川低地、志賀公園遺跡における堆積環境 22/鬼頭
- (2) 志賀公園遺跡より出土した自然遺物 29/堀木・上田
- (3) 志賀公園遺跡産出の貝類化石 36/松岡
- (4) 箱状遺物の材質分析 37/佐藤
- (5) 志賀公園遺跡出土木製品の樹種同定 38/植田
- (6) 志賀公園遺跡から産出した昆虫化石について 41/森・上田

第5章 総括

- (1) 中世・戦国の遺構群と景観 47/石黒
- (2) 古代の遺構群と景観 48/石黒
- (3) 弥生・古墳の遺構群と景観 49/石黒
- (4) 古代の木製品について 50/樋上

図版目次

遺構図

- 図版 1 調査区全体図 1/400
図版 2 調査区部分図(1)1/200
図版 3 調査区部分図(2)1/200
図版 4 調査区部分図(3)1/200
図版 5 個別遺構図 00A 区 SB・SD1/50
図版 6 個別遺構図 00A 区 SD・SK1/50
図版 7 個別遺構図 00A 区 SK・00B 区 SD1/50
図版 8 個別遺構図 00B 区 SD・SE・SK1/50
図版 9 個別遺構図 00B 区 SK1/50
図版 10 個別遺構図 00B 区 SX1/50
図版 11 個別遺構図 00B 区 SX・杭列 1/50
図版 12 00A 区壁面土層セクション 1/100
図版 13 00A 区・00B 区壁面土層セクション 1/100
図版 14 00A 区・00B 区層名一覧
図版 15 00C 区壁面土層セクション・層名名一覧
図版 16 00A 区上層水田プラン(1)1/200
図版 17 00A 区上層水田プラン(2)1/200
図版 18 00A 区上層水田土層セクション 1/100
図版 19 00B 区下層水田プラン(1)1/200
図版 20 00B 区下層水田プラン(2)1/200
図版 21 00B 区下層水田土層セクション 1/100
図版 22 00B 区 NR03・04・杭列プラン 1/300
図版 23 00B 区 NR01 プラン 1/300
図版 24 00B 区 NR01・02 プラン 1/300
図版 25 00B 区 NR 遺物出土分布図(1)
図版 26 00B 区 NR 遺物出土分布図(2)
図版 27 00B 区 NR 遺物出土分布図(3)
図版 28 00B 区 NR 遺物出土分布図(4)
図版 29 00B 区 NR 遺物出土分布図(5)
図版 30 00B 区 NR 遺物出土分布図(6)
図版 31 00B 区 NR 遺物出土分布図(7)

遺物実測図 須恵器・陶磁器・土師器

- 図版 32 00A 区 SD01 他出土遺物
図版 33 00A 区 SD02 出土遺物
図版 34 SK・上層水田出土遺物
図版 35 00B 区 NR01 出土遺物(1)
図版 36 00B 区 NR01 出土遺物(2)
図版 37 00B 区 NR01 出土遺物(3)
図版 38 00B 区 NR01 出土遺物(4)
図版 39 00B 区 NR01 出土遺物(5)
図版 40 00B 区 NR01 出土遺物(6)

- 図版 41 00B 区 NR01 出土遺物(7)
図版 42 00B 区 NR01 出土遺物(8)
図版 43 00B 区 NR01 出土遺物(9)
図版 44 00B 区 NR01 出土遺物(10)
図版 45 00B 区 NR02 出土遺物(1)
図版 46 00B 区 NR02 出土遺物(2)
図版 47 00B 区 NR02 出土遺物(3)
図版 48 00B 区 NR02 出土遺物(4)
図版 49 00B 区 NR02 出土遺物(5)
図版 50 00B 区 NR02 出土遺物(6)
図版 51 00B 区 NR02(7)・NR03 出土遺物
図版 52 00B 区 SD02～06 出土遺物
図版 53 00B 区 SD04 出土遺物
図版 54 00B 区 SD12 出土遺物
図版 55 00B 区 SD13～17 出土遺物
図版 56 00B 区 SX 他出土遺物
図版 57 00B 区上層水田他出土遺物
図版 58 00C 区 NR01 出土遺物

遺物実測図 木製品

- 図版 59 古墳中期(1)
図版 60 古墳中期(2)
図版 61 古代(1) 斎串(1)
図版 62 古代(2) 斎串(2)
図版 63 古代(3) 掘削具(1)・工具
図版 64 古代(4) 掘削具(2)他
図版 65 古代(5) 農具(1)
図版 66 古代(6) 農具(2)・容器(1)
図版 67 古代(7) 容器(2)
図版 68 古代(8) 容器(3)
図版 69 古代(9) 下駄(1)
図版 70 古代(10) 下駄(2)
図版 71 古代(11) 雑具・運搬具
図版 72 古代(12) 杭(1)
図版 73 古代(13) 杭(2)
図版 74 古代(14) 杭(3)
図版 75 古代(15) 建築部材(1)
図版 76 古代(16) 板(1)
図版 77 古代(17) 板(2)・棒
図版 78 古代(18) 板(3)
図版 79 古代(19) 板(4)
図版 80 古代(20) 棒(1)
図版 81 古代(21) 棒(2)
図版 82 古代(22) 棒(3)
図版 83 古代(23) 丸太(1)
図版 84 古代(24) 丸太(2)

- 図版 85 古代(25) 残材／中世
遺構写真
- 図版 86 調査前風景
- 図版 87 00A 区上面全景
- 図版 88 00A 区上面中景・SD02・08 近景
- 図版 89 00A 区 SK292・SK305 近景
- 図版 90 00A 区水田全景
- 図版 91 00B 区上面全景
- 図版 92 00B 区上面全景・中景
- 図版 93 00B 区 NR02 遺物集積
- 図版 94 00B 区火葬跡
- 図版 95 00B 区水田全景
- 遺物写真
- 図版 96 00A 区 SD02 中世陶器
- 図版 97 00A 区 SD02 他中世陶器
- 図版 98 00A 区 NR01 須恵器
- 図版 99 00A 区 NR01 須恵器
- 図版 100 00A 区 NR01 須恵器
- 図版 101 00A 区 NR01 須恵器・土師器
- 図版 102 00B 区 NR02 須恵器
- 図版 103 00B 区 SD12・水田・00C 区 NR01 他
- 図版 104 木製品(1)掘削具
- 図版 105 木製品(2)農具
- 図版 106 木製品(3)

挿図目次

- 図 1 名古屋市北部の地形区分
- 図 2 名古屋市北部における遺跡分布
- 図 3 調査区位置図 1/8000
- 図 4 下層水田プラン 1/400
- 図 5 上層水田プラン 1/400
- 図 6 00B 区南壁 NR (自然流路) 土層断面図
- 図 7 古代遺構全体図 1 期 1/400
- 図 8 古代遺構全体図 2 期 1/400
- 図 9 古代遺構全体図 3 期 1/400
- 図 10 古代遺構全体図 4 期 1/400
- 図 11 中世の建物跡と井戸跡配置図 1/200
- 図 12 井戸跡プラン・土層セクション 1/50
- 図 13 中世・戦国遺構全体図 1/400
- 図 14 志賀公園遺跡出土斎串の形態分類
- 図 15 調査地点位置図
- 図 16 志賀公園遺跡 00A 区における深掘の柱状図

- 図 17 志賀公園遺跡 00A 区深掘結果を基にした古
環境変遷模式図
- 図 18 志賀公園遺跡 00A 区深掘における堆積環境
と堆積曲線
- 図 19 志賀公園遺跡 00B 区 T-03 セクション図
- 図 20 志賀公園遺跡出土の種子類・貝類
- 図 21 志賀公園遺跡箱状製品の FT-IR 分析結果
- 図 22 志賀公園遺跡で算出した昆虫化石の顕微鏡
写真
- 図 23 地籍図と主要遺構の合成図 (14 世紀後半から
16 世紀の景観)
- 図 24 中世・戦国遺構全体図
- 図 25 古代遺構全体図
- 図 26 古代の木製品器種組成比較グラフ
- 図 27 志賀公園遺跡 00A・B・C 区出土木製品時期
別器種・樹種組成グラフ

表目次

- 表 1 調査区壁面土層セクション層名一覧
- 表 2 放射性炭素年代測定および暦年代較正の
結果
- 表 3 志賀公園遺跡 00A 区深掘の放射性炭素年代
測定結果
- 表 4 出土地点ごとの種子類一覧
- 表 5 志賀公園遺跡自然遺物一覧
- 表 6 骨一覧
- 表 7 貝類一覧
- 表 8 志賀公園遺跡 古代の器種別の検出樹種比
較
- 表 9 志賀公園遺跡 古墳と中世の検出樹種比較
- 表 10 志賀公園遺跡から産出した昆虫化石(ブロッ
ク割り法)
- 表 11 志賀公園遺跡 (P-2 1 層) 水洗浮遊選別法
- 表 12 志賀公園遺跡 (P-2 4 層) 水洗浮遊選別法

第1章 遺跡と調査の概要

(1) 遺跡の位置と環境

志賀公園遺跡は、愛知県名古屋市北区中丸町・平手町にひろがる、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。遺跡付近の現状は、志賀公園部分以外は都市部の市街地であり、往時の様子はまったく伺い知ることができない。

遺跡付近の標高は5～6mで、沖積平野の微高地に立地する。北方約1kmには庄内川と矢田川の合流部がある。

土地条件図や地籍図によれば、旧流路に相当する低地(図1の後背湿地・谷底平野)が把握でき、河川最下流部の氾濫地帯に位置していることがわ

かる。土地条件図は現地表からの観察であるために古くまでは遡れないが、少なくとも現況においても志賀公園遺跡は平野の微高地(自然堤防)に立地していることがわかる。

実際、発掘調査では弥生時代から古代にかけて2～2.5mの堆積があったことが確認でき、急激な地表面の上昇があったことが明らかになった。現在でこそ庄内川は離れているが、往時は近接していたものと考えられる。

あるいは、下流部のデルタ地帯として、多くの流路が志賀公園遺跡に影響を与えていたであろう。

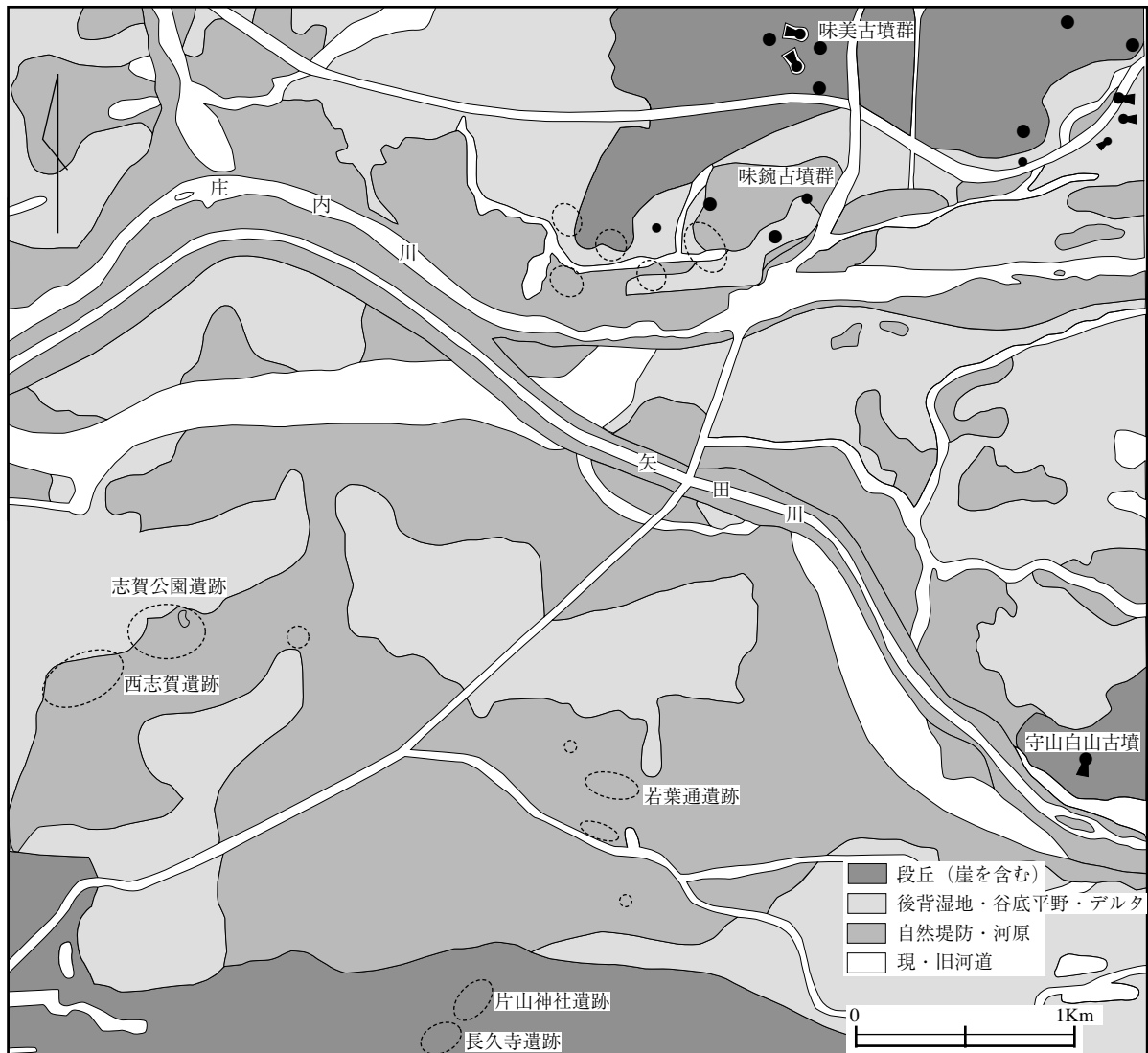


図1 名古屋市北部の地形区分

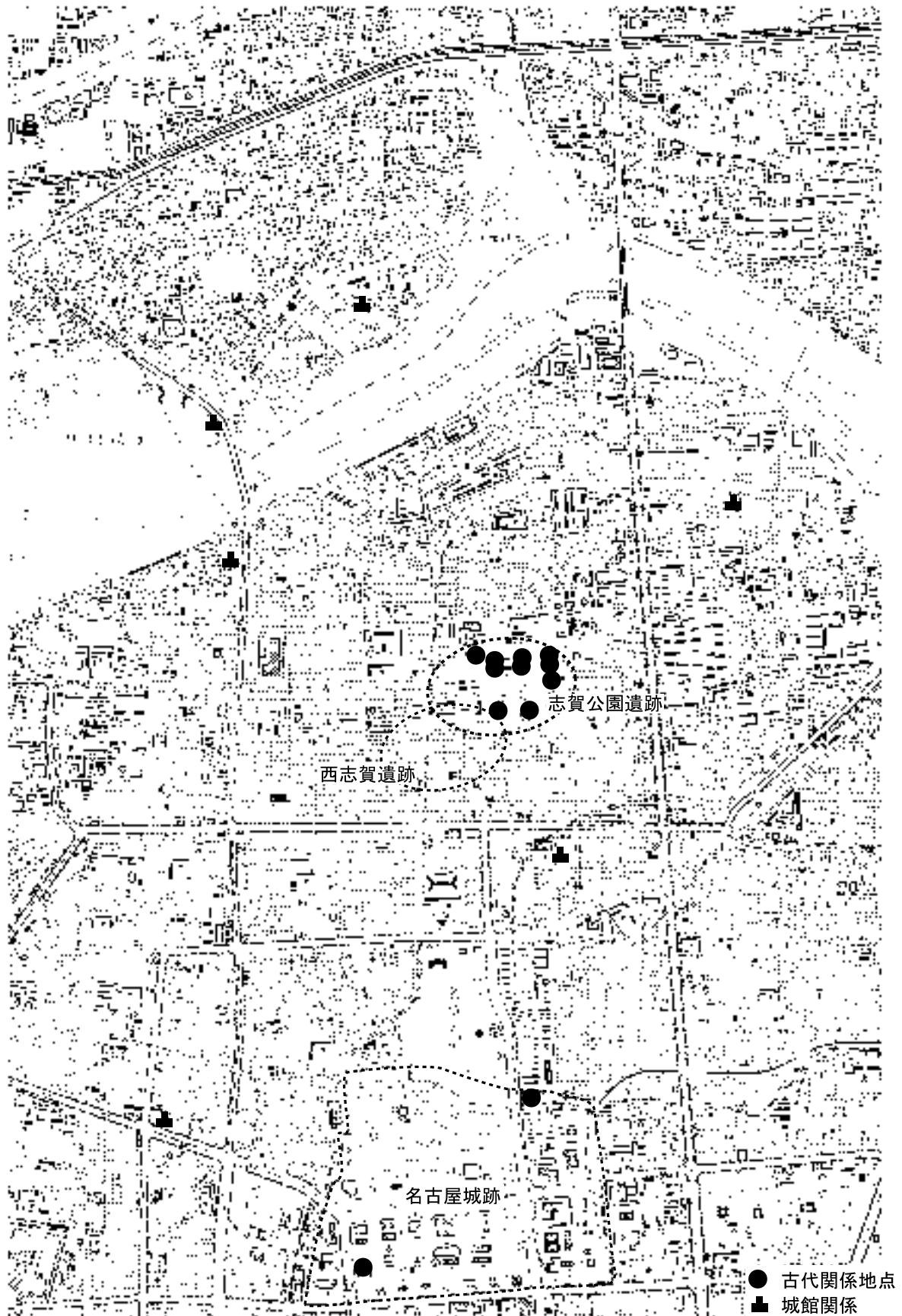


図2 名古屋市北部における遺跡分布

(2) 調査の経緯・概要

志賀公園遺跡にかかる当センターの発掘調査は、すでに1996年度から1998年度の3カ年14,200㎡が実施済みであり、報告書も2001年8月に刊行されている。

今回の調査は、前回と同様に都市基盤整備公団の集合住宅建設に伴う事前調査として実施されたものである。調査地は前回調査地の西隣の街区北半に位置し、地番は中丸町2丁目である。

調査区は面積が2,030㎡であり、主要部分と飛び地部分に分かれる。2,000㎡弱の主要部分は排土仮置場や作業スペースの確保の為に00A区(北側調査区)・00B区(南側調査区)の二つに区分して調査を実施した。

調査はまず重機で神戸製鋼工場跡地の整地層およびその下部の現代水田耕土を除去し、その後作業員を投入して人力で行った。

上面は古代から中世までほぼ同一面で調査ができた。下面は弥生時代から古墳時代の水田(上下層2面)であり、上面からの深さは2m前後であった。上面と下面の間には古代の河道があり、遺物を包含する部分については人力掘削を行い、下部では一部重機を使用した。

(3) 調査日誌抄録

- 10/16 00A区東側より上面表土剥ぎ開始。
- 10/19 トレンチ掘削。遺構検出。
- 10/24 遺構掘削開始。中世・古代の遺構が展開。
- 11/9 空撮。
- 11/13 下面表土剥ぎ開始。
- 11/16 NR01検出・掘削。
- 11/22 上層水田検出。
- 12/4 下層水田検出。
- 12/15 埋戻し開始。
- 12/19 00B区表土剥ぎ開始。
- 12/25 トレンチ掘削
- 12/26 降雪のため作業中止。
- 12/27 ベルトコンベアー設置。年内作業終了。
- 1/9 遺構検出。
- 1/12 遺構掘削開始。
- 1/15 00C区表土剥ぎ開始。
- 1/16 00C区調査開始。以後断続的に作業。
- 1/25 00B区空撮。
- 1/31 NR01・02・03の人力掘削開始。
- 2/21 NR03・04を重機で掘削・清掃・写真撮影。
- 2/22 下面表土剥ぎ。上層水田検出。測量。
- 3/2 下層水田検出。測量。
- 3/12 00B区、00C区ともに調査終了。
- 3/13 埋戻し開始。
- 3/14 現地調査終了。



図3 調査区位置図 1/8000

第2章 遺構の概要

(1) 基本層序

調査地は、直前まで貸駐車場であったのでアスファルトが敷設されていた。その下は砂利層であり、その下部を神戸製鋼工場関係の整地層が覆っていた。

整地層の下は現代（昭和以前）の水田耕作土・床土層である。

それらを除去すると即座に古代から中世・戦国の遺構検出面である黄灰色シルト層があらわれる。ただ、NRを除く古代以後の遺構はいずれも浅く、現代の水田造成によって大きく削平されていたことがわかっている。

中世には庄内川沿いに畠が広がっていたことが荘園の記録等で知られているので、旧地表面にはかなり起伏があったと考えられるからである。また、NRの堆積作用も影響していたであろう。とくに00B区は古代末以後も長期にわたって浅い谷地形であったようだ。

古代から中世の遺構検出面を上面として、下面の遺構検出面（上層水田検出面）との間には2m前後の堆積層がある。

この堆積層は、下半部が植物遺体を多量に含む腐植土層、上半部が砂層を含む洪水層である。下半部は古墳時代、上半部は古代の自然流路（NR）まで継続する可能性がある。年代的には5世紀から6世紀までの幅をもつ。

下面は、上層水田と下層水田からなる。

上層水田は上述の腐植土層に覆われている。下層水田はその約30cm下部に位置し、弥生基盤層上面に形成されている。弥生基盤層は、黒色シルト層が上部を覆う黄灰色シルト層で、濃尾平野では一般的な様相である。

下層水田の時期について確たることは言えないが、比較的安定した地表面の傾斜を利用して水田が造成されたものであろう。

(2) 古墳時代の遺構

A. 下層水田（図4、図版16～18・90・95）

00A区では部分的にしか検出できなかったが、00B区では全面にわたって検出できた。

水田面標高は2.15m～2.4mであり、水田面は大きくみて北東から南西に傾斜する。

水田は褐灰色粘土上層の黒色から黒褐色の粘土を耕作土としている。

水田はいずれも小区画で、北部および西部で弧状に、南東部では直線的に展開する。大畦は確認できなかった。

水田からは弥生土器や石鏟も出土しているが、水田造成以前の遺物が混入した可能性もあり、帰属時期については濃尾平野で広域に水田が検出される古墳時代前期に相当すると判断する。

B. 上層水田（図5、図版19～21・90・95）

00A区・00B区とも良好に検出できた。

水田面標高は2.45m～2.6mであり、大畦で区画された単位で標高が揃う傾向をみせる。

水田は褐灰色粘土を耕作土及び畦畔とし、上部には厚さ40cmの植物遺体を多く含む腐植土層が堆積していた。

水田は小区画、中区画、大区画が検出できたが、大畦は大・中区画にともなう。中区画は調査区内で扇形を呈し、長辺約34m、短辺は約20mである。

区画の軸線は下層と異なり、全体が西に向って弧状をなす。地表面の起伏が変化したためであろう。

水田からの出土遺物には、00A区ST411のS字状口縁台付甕D類新段階の破片（50・51）、00B区ST613他の台付甕（図版57-437・438）から判断して、水田の時期は、松河戸Ⅱ式前半に開田、宇田Ⅰ式後半に放棄されたと考える。

なお、水田跡から甕が出土する例は門間沼遺跡・大毛池田遺跡等にあり、農作業に伴う現地炊飯の痕跡であろう。



図4 下層水田プラン 1/400

- 水田面標高2.3m以上
- 2.2~2.29m
- 2.2m未満

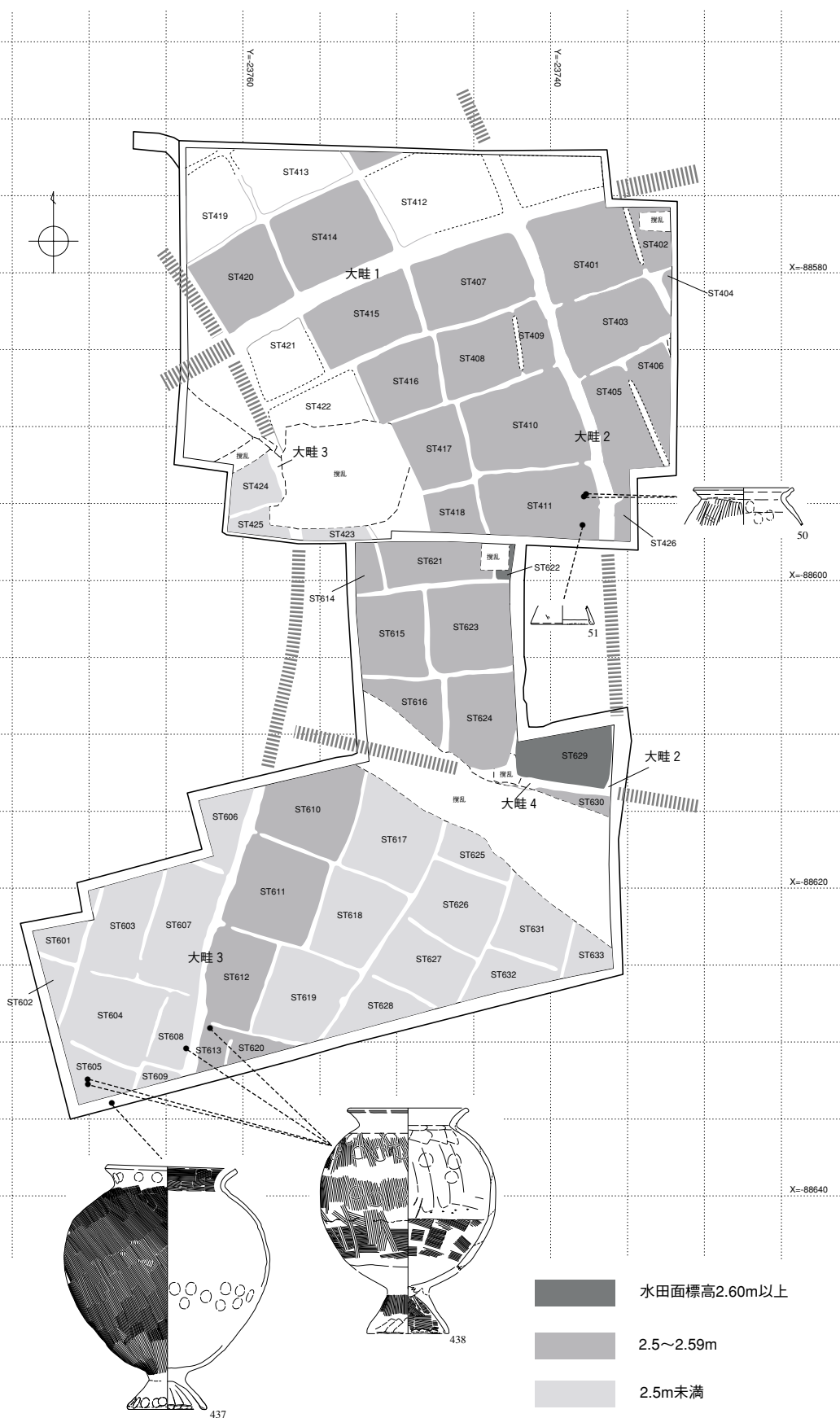


図5 上層水田プラン 1/400

(3) 古代の遺構

古代の遺構には竪穴建物・溝・土坑・自然流路(NR)などがある。ただいずれも後世の削平がいちじるしく、上部の形状は不明な点が多い。

A. 竪穴建物 (図版5・87)

00A区のみから検出された。

掘形の深さは5cm～10cmしかなく、カマドが検出できたのはSB02のみである。遺物の出土は全く無い。カマド(SK304)には炭化物が充満していたが、粘土など構築材は残存していなかった。いずれも柱穴は確認できなかった。

B. 溝

00A区に限定してのべる。

SD01 (図版5・87・88) 00A区を北西-南東にはしる溝である。ほぼ自然流路に並行しているので無関係ではないだろう。自然流路に対して土手状の高まりがあり、その裾を画していた可能性がある。上層からO-53期の灰釉陶器片が出土したが、下層は7世紀代まで遡るようであり、時期幅がある。溝の断面形は、下層はU字形、上層は平坦で幅広かったようだ。古代を通して基本となる溝であり、何度も再掘削されたのであろう。

SD08・18・21 (図版6・87・88) 検出面で7cm～20cmと浅く、SD21はSD01に切られ、SD08はSD21に切られる。SD08・21は西端で中世の土坑に切れ西にのびていないが、ここで収束するのかわからない。西へのびる可能性もある。溝底部から漆の皮膜は出土し、後に紙や布で箱をつくり、それを漆塗りで固めたものであることがわかった。SD18・SD21は別の溝になっているが、つながる可能性が高い。SD08を含めてSB04の周囲をめぐる排水溝の可能性もある。

SD24・25・26 (図版6・87・88) 重複する遺構すべてに切られる。検出面からの深さは10cm～25cm。自然流路やSD01に並行し、基本的な軸線を共有する。SD24・25は底面が平坦であり、断面逆台形の溝であったろう。

SD09・10・11・12・23 (図版87・88) 東西南北の方格地割を窺わせる軸線をもつ。

SD12・23は重複しているが、切り合い順序では間に土坑(SK125)がはいるので、直接関係はない。

SD10は底面が幅広い溝で、検出面からの深さは約10cmである。断面は逆台形を呈するのであろう。西端で収束する。

SD09はやや蛇行気味であり、同時期かどうかわからない。

C. 自然流路 (図版22～24)

自然流路とするが、それはあくまで堆積状況についてである。断面形状が安定しないNR01・02を除きNR03・04は規模が大きいとは言え、流路自体が人為掘削による人工水路の可能性を完全には否定できない。

NR01・02 自然流路の最終段階である。底面は平坦ではなく浅いので、人為的な改変は伺えない。全体にシルト質の堆積層で埋積しており、水流は停滞していたであろう。NR01からは木製品が大量に出土した。また小規模な貝層も認められた。NR01は7世紀のうちに埋没し、NR02は8世紀以後も窪地状に残っていたようだ。

NR03・04・05 NR03は下部に中粒砂や細粒砂が堆積し、活発な水流があったようだ。底面付近では12本の丸木杭列を確認した。太さは4cm前後で細く、用途は不明。ほぼ流路の方向に沿うが、土層断面に対応する堆積は確認できない。上部はシルト質で、水流は停滞していたと考えられる。

NR04は兩岸の壁面が急傾斜で、壁面付近にはシルト質や粘土と砂の互層が堆積し、中央寄りに粗粒砂や中粒砂が堆積している。最初はそれほど水流がなく、後に水流が活発化したのであろう。

NR05は土層断面から復元した流路であり、最古段階に属す。下部は砂層、上部は粘土・細粒砂・シルトの互層からなる。

これら流路は、基本的に当初は活発な水流があるが、後に停滞し堆積層の粒子が細密化する傾向が認められる。

D. 変遷

遺構の切り合い関係や軸線の対応関係から、都合4期に区分できる。

1期(図7) NR05・04/SB04/00A-SD08・00A-SD18・00A-SD21・00A-SD24・00A-SD25・00A-SD26など。

SB04はSD10に切られているという調査所見であったが、軸線は3期でも問題ない。自然流路は最大規模であり、幅は30m以上ある。底面標高は2.7m前後であり、当時の地表面標高を堅穴建物の深さを考慮して4.7mとすれば、深さは2m程度ということになる。

前回の調査ではNR07下部から宇田I式期の堆積層が検出されたが、今回検出した上層水田が宇田I式期であること、さらに上層水田の上部を洪水層が覆っていることからみて、年代はそこまで

遡らないだろう。古くても7世紀前半代と考える。

2期(図8) NR03/SB01・02/00A-SD01・00A-SD09・00A-SD10・00A-SD11・00A-SD23など。

SD01の掘削はNR03の水位上昇に対応したのもかもしれない。以北の溝は東西南北の方格の軸線をもち、SB01も同様である。NR03はほぼNR04に重複する。

3期(図9) NR01・02/SB03/00A-SD01・00B-SD10・00B-SD12・00B-SD17など。

00A区はSD01が継続し、SB03は軸線が合う。SD01とSD13がつながる確証はない。

00B区ではNR01が多量の木製品や遺物をともなって埋没する。埋没後に同じ方向に溝が掘削さ

表1 調査区壁面土層セクション層名一覧

1. 表土(神戸製鋼撤収時の土砂)または覆土	81.2.5Y4/2暗灰色粘質土上層は粘質シルト
2.2.5Y4/2暗灰色粘質シルト下層に沈鉄層戦前の水田	82.2.5Y4/2暗灰色粘質シルト沈鉄あり
3.10YR2/2黒褐色粘質シルト	83.10YR5/2灰黄褐色粘質シルト粘性弱い沈鉄層あり(上層)
4.10YR4/2灰黄褐色粘質シルト	10YR5/2灰黄褐色粘質シルト粘性やや強い沈鉄層あり(下層) SX01第1層
5.10YR4/1褐色粘土	84.10YR4/1褐色粘土SX01第2層
6.10YR4/1褐色粘土と10YR6/2灰黄褐色粘土との互層前者が厚い	85.10YR3/1黒褐色粘土SX01第3層
7.10YR5/2灰黄褐色粘土と10YR4/1褐色粘土との互層が厚い植物遺体少含む	86.10YR6/1褐色粘土
8.2.5Y4/1黄灰色粘土植物遺体多く含む植物遺体層1	10YR3/1黒褐色粘土ブロックの斑土下層に10mm大の小礫SX01第4層
9.2.5Y3/1黒褐色粘土植物遺体多く含む植物遺体層2	10YR5/2灰黄褐色粘土(上層)
10.2.5Y2/1黒褐色粘土植物遺体多く含む植物遺体層3	10YR4/2灰黄褐色粘土(下層)]中方形土坑?
11.10YR4/1褐色粘土しまりやや強い	88.10YR5/2灰黄褐色粘質シルト粘性弱い、マンガング斑沈鉄層あり(上層)
12.10YR3/1黒褐色粘土しまりや強い	10YR4/2灰黄褐色粘質シルト粘性やや強い(下層) SD04第1層
13.10YR2/1黒褐色粘土しまり強い	89.10YR5/2灰黄褐色粘土
14.10YR3/1黒褐色粘土しまり並	10YR4/2灰黄褐色粘質シルト(粘性やや強い)の互層SD04第2層
15.10YR4/1褐色粘土	90.10YR4/2灰黄褐色粘質シルト粘性弱い沈鉄層あり
16.10YR5/2灰黄褐色粘質シルト粘性弱い下に沈鉄層	91.10YR6/4にぶい黄褐色粘質シルト沈鉄含む
17.10YR5/1褐色粘土	92.10YR4/2灰黄褐色粘土
18.10YR2/1黒褐色粘土しまりや弱い	10YR6/4にぶい黄褐色粘土が混入
19.10YR5/1褐色粘土下層に沈鉄層	94.10YR4/3にぶい黄褐色粘土
20.10YR5/2灰黄褐色粘土	95.2.5Y4/1黄灰色粘質シルトに
21.10YR5/2灰黄褐色粘土と10YR6/2砂質シルト層混入	2.5Y6/3にぶい黄褐色粘質シルトが少々混入
22.10YR4/1褐色粘土と10YR7/1灰白色粘土層が混入	96.2.5Y4/1黄灰色粘土に
23.10YR5/1褐色粘土	97.10YR6/2灰黄褐色粘土が少々混入
24.10YR4/1褐色粘土と10YR6/2灰黄褐色粘土層が混入	98.10YR3/1黒褐色粘土ブロック混入
25.2.5Y4/1黄灰色粘土に2.5Y7/2灰黄褐色粘土層が混入	99.10YR8/2灰白色中粒砂~極細粒砂 10~20mm大の礫混入する)
26.2.5Y5/1黄灰色粘土に2.5Y7/1灰白色粘土層が混入	2.5Y4/2暗灰色粘質シルトと
27.2.5Y1/1黄灰色粘土と砂質シルト層と2.5Y6/2灰黄褐色粘土層の互層5mm~2cm大の小礫混入する前者の層が薄い	99.2.5Y6/2灰黄褐色粘土との互層(1)の層が厚い
28.2.5Y4/2暗灰色粘土と2.5Y3/1黒褐色粘土と2.5Y6/2灰黄褐色粘土との互層の層が厚い	100.10YR3/1黒褐色粘土炭化物少々含むSD09第1層
29.2.5Y5/3黄褐色粘土	101.10YR4/2灰黄褐色粘土粘性強い、炭化物少々含むSD09第2層
30.2.5Y4/3オリブ褐色粘土	102.10YR3/2黒褐色粘土粘性やや弱い、マンガング斑あり(上層)
31.2.5Y4/2暗灰色粘土	103.10YR4/2灰黄褐色粘土沈鉄層あり(下層) SD10
32.2.5Y7/2灰黄褐色粘土に2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック混入	104.10YR3/2黒褐色粘土粘性やや弱い、沈鉄ありSD12第1層
33.2.5Y5/2暗灰色粘土	105.10YR4/2灰黄褐色粘土沈鉄層ありNR01第1層
34.2.5Y4/2暗灰色粘土と2.5Y7/2灰黄褐色粘土層が混入	106.10YR4/2灰黄褐色粘土NR01第1層
35.2.5Y5/1黄灰色粘土に2.5Y3/3暗オリブ褐色粘土混入下層に沈鉄層混入	107.10YR3/2黒褐色粘土にぶい黄褐色粘土
36.2.5Y4/1黄灰色粘土	108.10YR2/2黒褐色粘土植物遺体含むNR01第2層
37.2.5Y3/2黒褐色粘土に2.5Y1/1黄灰色粘土混入5~10mm大の小礫含む	109.10YR3/2黒褐色粘土植物遺体含むNR01第3層
38.2.5Y5/2暗灰色粘土	110.10YR4/2灰黄褐色粘土と
39.10YR4/1褐色粘土しまり強い	10YR7/2にぶい黄褐色粘土(3~10mmの小礫含む)の互層NR01第6層
40.10YR3/1黒褐色粘土しまりや強い	111.10YR5/1褐色粘土マンガング斑、沈鉄層あり
41.2.5Y4/1黄灰色粘土粘性やや弱い	112.10YR5/2灰黄褐色粘土沈鉄あり
42.2.5Y4/2暗灰色粘土粘性弱い	113.10YR5/1褐色粘土
43.2.5Y3/1黒褐色粘土しまり強い	114.10YR5/2灰黄褐色粘土5mm以下の小礫混入、粘性やや強い
44.2.5Y4/1黄灰色粘土	115.2.5Y4/1黄灰色粘土粘性強い
45.2.5Y4/1黄灰色粘土しまりや弱い	116.2.5Y4/1黄灰色粘土中方形土坑
46.2.5Y3/2黒褐色粘土	117.10YR3/2黒褐色粘土NR02 葉
47.2.5Y5/1黄灰色粘土	118.10YR4/2灰黄褐色粘土炭化物少々含むNR02第2層
48.2.5Y4/2暗灰色粘土	119.10YR4/2灰黄褐色粘土(粘性弱い)炭化物と植物遺体少々含むNR02第3層
49.2.5Y4/1黄灰色粘土に沈鉄層混入	120.2.5Y5/1黄灰色粘土沈鉄層あり(上層)
50.2.5Y3/2黒褐色粘土	2.5Y4/1黄灰色粘土と2.5Y5/2極細粒砂の互層(下層)
51.2.5Y3/2黒褐色粘土	2.5Y5/2暗灰色粘土
52.2.5Y4/2暗灰色粘土5~20mm大の炭化物含む	2.5Y5/1黄灰色粘土
53.2.5Y4/2暗灰色粘土	122.2.5Y6/2灰黄褐色粘土と
54.2.5Y5/1黄灰色粘土	2.5Y7/2灰黄褐色粘土との互層
55.2.5Y4/2暗灰色粘土マンガング斑あり	123.2.5Y7/3透黄色粘土下層に沈鉄
56.2.5Y4/2暗灰色粘土	124.2.5Y3/2黒褐色粘土
57.2.5Y4/1黄灰色粘土最下層に炭化物層	125.2.5Y3/2黒褐色粘土と
58.2.5Y4/2暗灰色粘土	2.5Y7/2灰黄褐色粘土の斑土
59.2.5Y4/1黄灰色粘土	126.2.5Y7/2透黄色粘土
60.2.5Y4/2暗灰色粘土	127.2.5Y3/1黒褐色粘土
61.2.5Y6/2灰黄褐色粘土に	128.10YR7/2にぶい黄褐色粘土10mm大の礫混入する
62.2.5Y3/2黒褐色粘土しまりや強い上層は粘質シルト	129.2.5Y3/1黒褐色粘土に
63.2.5Y4/1黄灰色粘土しまりや強い	2.5Y6/1黄灰色粘土と極細粒砂混入する
64.2.5Y3/2黒褐色粘土しまりや強い	130.10YR7/2にぶい黄褐色粘土10mm大の礫混入する
65.2.5Y4/1黄灰色粘土に	131.2.5Y4/1黄灰色粘土と
2.5Y5/2暗灰色粘土	2.5Y5/1黄灰色粘土~細粒砂の混入
66.2.5Y5/2暗灰色粘土	132.2.5Y5/1黄灰色粘土マンガング斑、沈鉄あり(上層)
2.5Y6/2灰黄褐色粘土	2.5Y3/2黒褐色粘土炭化物と植物遺体含む(下層)
67.2.5Y3/2黒褐色粘土しまりや強い	133.2.5Y5/1黄灰色粘土と2.5Y6/1細粒砂がライ化(西部)
68.2.5Y3/1黒褐色粘土しまりや弱い	2.5Y7/1灰白色粘土下層で5~20mm大の礫混入する(東部)
69.10YR3/1黒褐色粘土しまり弱い	134.2.5Y7/1灰白色粘土下層で5~30mm大の礫混入する
70.2.5Y6/2灰黄褐色粘土粘質シルトに近い	135.10YR4/2灰黄褐色粘土粘性やや弱い、マンガング斑、沈鉄層あり(上層)
71.2.5Y4/1黄灰色粘土に	10YR5/2灰黄褐色粘土粘性強い(下層)
2.5Y7/2灰黄褐色粘土が混入	136.10YR6/2灰黄褐色粘土沈鉄あり
72.2.5Y4/1黄灰色粘土	137.10YR6/2灰黄褐色粘土沈鉄あり
2.5Y2/1黒褐色粘土	
73.2.5Y4/1黄灰色粘土に	
2.5Y5/1黄灰色粘土混入最下層は沈鉄	
74.2.5Y3/1黒褐色粘土に	
2.5Y4/1黄灰色粘土がラミナ状に混入	
75.2.5Y3/2黒褐色粘土	
76.2.5Y2/1黒褐色粘土マンガング斑多い	
77.2.5Y5/2暗灰色粘土	
2.5Y5/2暗灰色粘土	
78.2.5Y6/2灰黄褐色粘土が混入	
79.2.5Y5/2暗灰色粘土	
80.2.5Y4/2暗灰色粘土	

れる。当時、流路跡が帯状の窪地になっていた可能性が高く、溝は排水のためであろう。ただ、SD17は形状からして流路の底面（侵食面）のような印象を受けるので、溝すべてが人工であったのかどうか、検討の余地がある。NR02は流路の最終段階である。初期にはNR01と併存し、合流していた可能性が高い。流路内には須恵器や土師器の集積があった。

4期（図10） 00A-SD01・00A-SD12・00B-SD11・

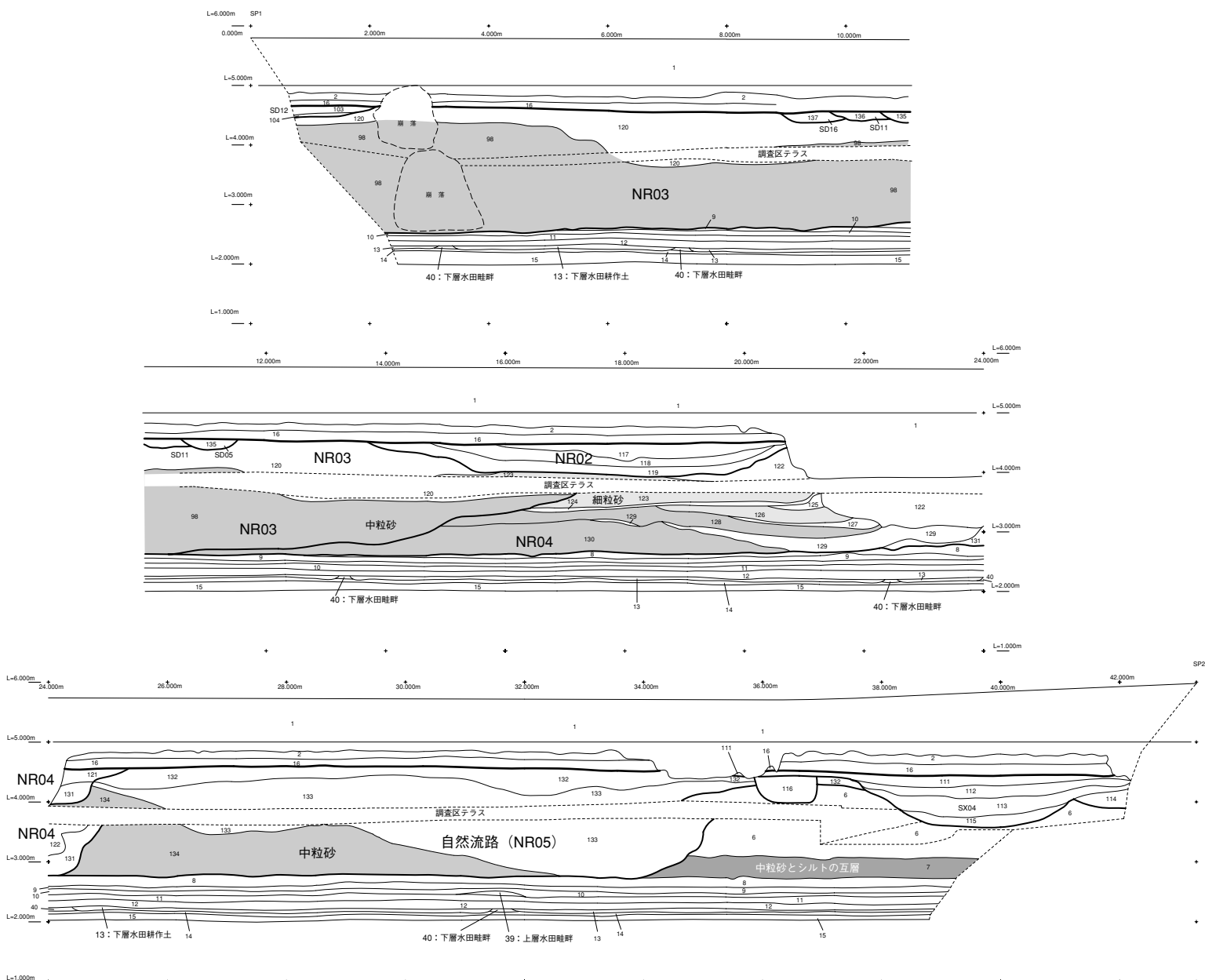
00B-SD15・00B-SD16など。

主要な遺構は溝のみである。

00A区のSD01は10世紀代まで存続している。

00B区ではNR01を横断して溝が掘削されているが、軸線は旧流路の方向から大きくずれるものではない。NR02は窪地状に残存していた可能性が高く、以後も窪地の状態が続いていたであろう。

図6 00B区南壁 NR（自然流路）土層断面図 1/50



Y=23790

Y=23780

Y=23770

Y=23760

Y=23750

Y=23740

Y=23730

Y=23720

X=88550

X=88560

X=88570

X=88580

X=88590

X=88600

X=88610

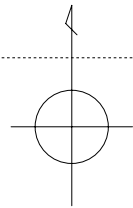
X=88620

X=88630

X=88640

X=88650

図7 古代遺構全体図1期 1/400



Y=23790

Y=23780

Y=23770

Y=23760

Y=23750

Y=23740

Y=23730

Y=23720

X=-88550

X=-88560

X=-88570

X=-88580

X=-88590

X=-88600

X=-88610

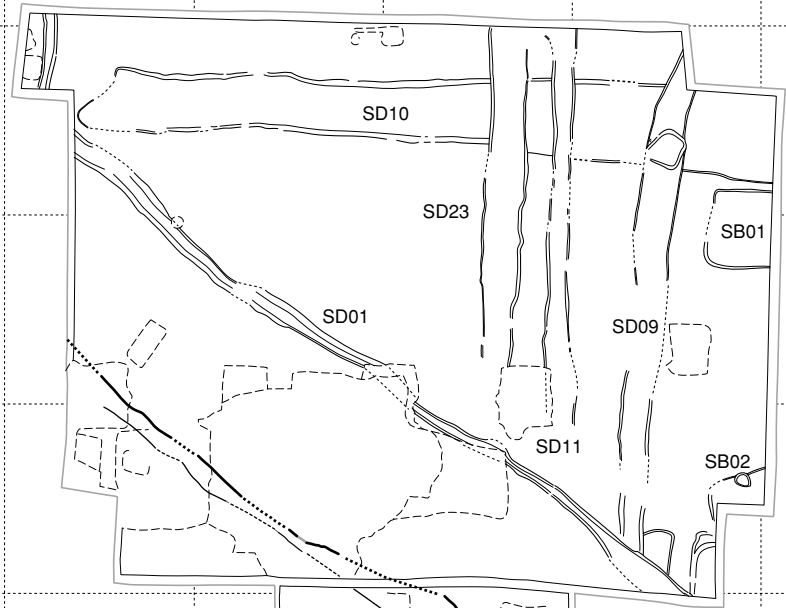
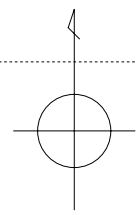
X=-88620

X=-88630

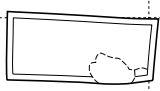
X=-88640

X=-88650

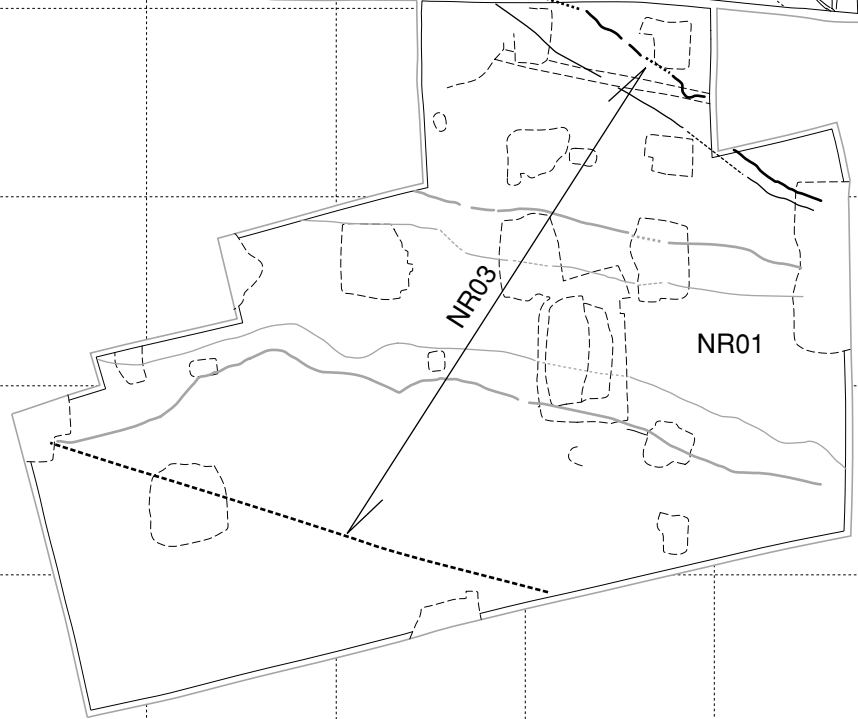
図8 古代遺構全体図2期 1/400



00A区



00C区



00B区

Y=23790

Y=23780

Y=23770

Y=23760

Y=23750

Y=23740

Y=23730

Y=23720

X=88550

X=88560

X=88570

X=88580

X=88590

X=88600

X=88610

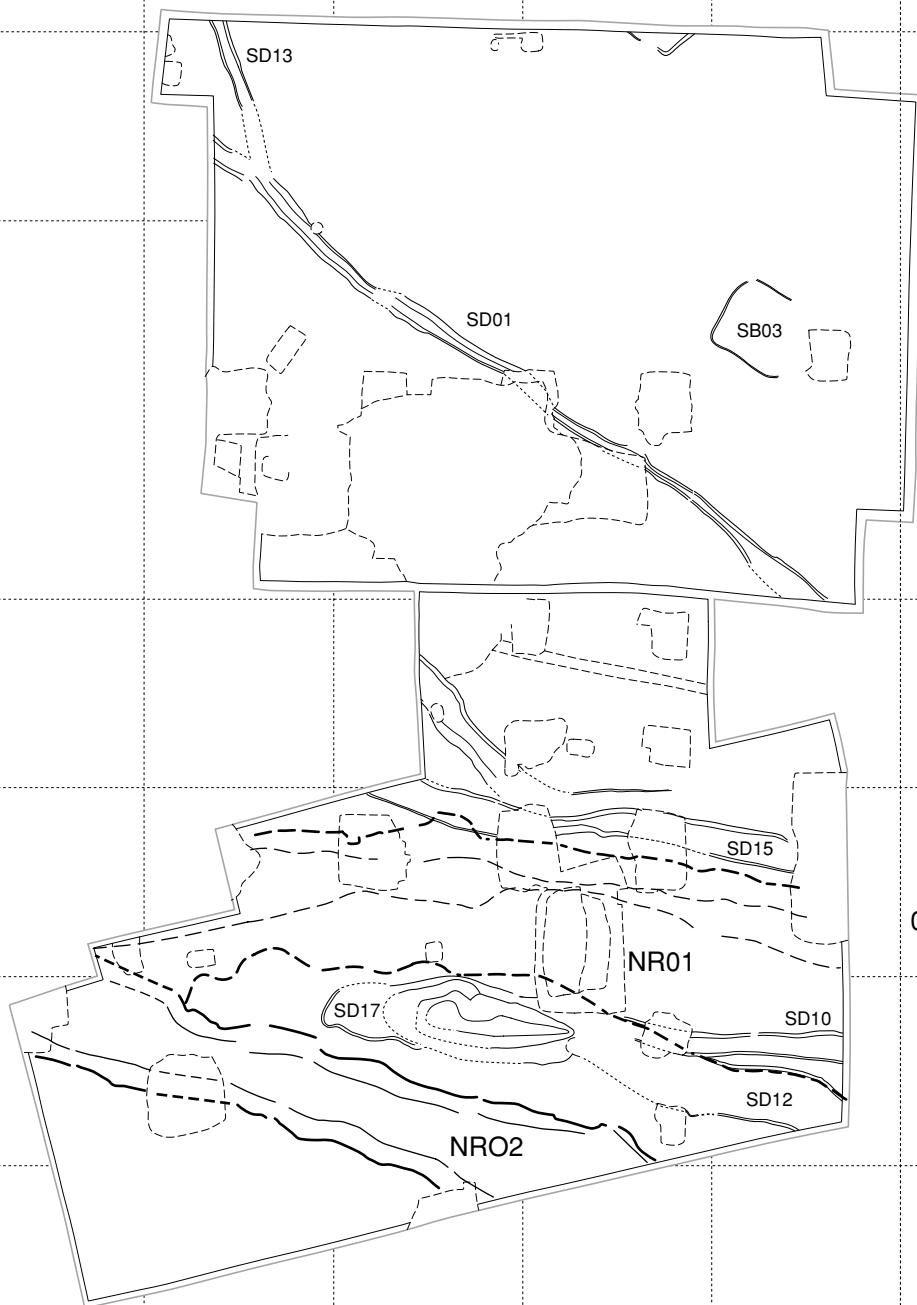
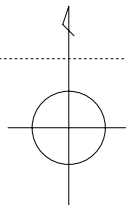
X=88620

X=88630

X=88640

X=88650

図9 古代遺構全体図3期 1/400



00A区

00B区



00C区

Y=23790

Y=23780

Y=23770

Y=23760

Y=23750

Y=23740

Y=23730

Y=23720

X=88550

X=88560

X=88570

X=88580

X=88590

X=88600

X=88610

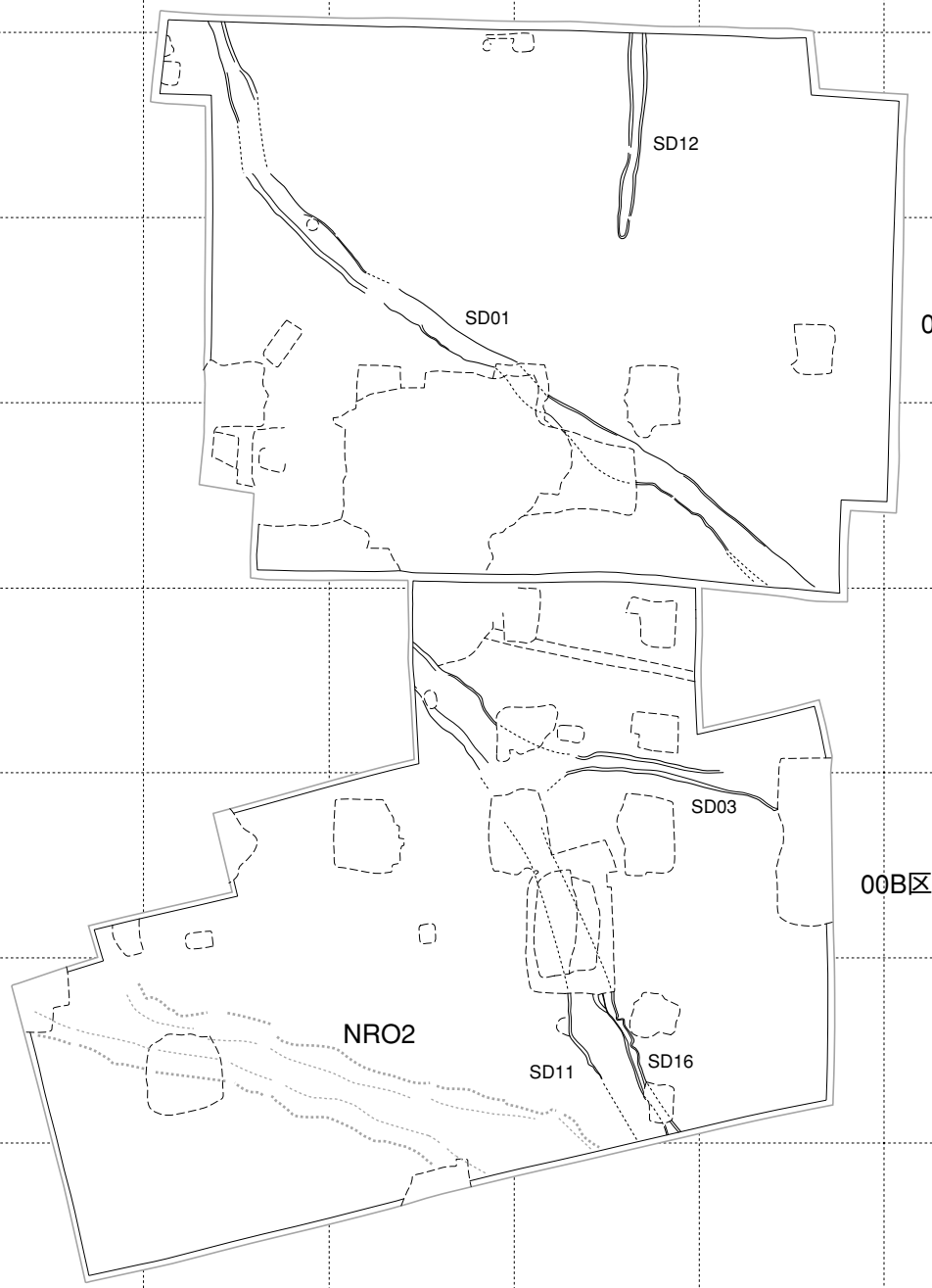
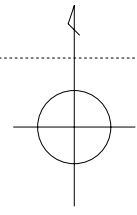
X=88620

X=88630

X=88640

X=88650

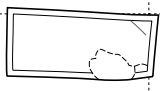
図10 古代遺構全体図4期 1/400



00A区

00B区

00C区



NRO2

SD12

SD01

SD03

SD11

SD16

(4) 中世・戦国の遺構

00A区は古代と同一面での検出である。柱穴については、古代の溝に重複して検出されているものがある一方で、古代の竪穴建物の柱穴の検出が困難である点からみて、多くは中世と考えて差し支えないだろう。00B区は、古代は自然流路に限られていたため、検出した遺構はそれ以後ということであるが、中世・戦国期での切り合いが認められた。池状遺構（SP01）を除き、14世紀後半～15世紀を中心とする遺構群であり、16世紀まで下らない。

A. 掘立柱建物（図11）

調査時点には認識していない。整理・報告の過程で掘立柱建物の可能性を考えられたので、ここに報告する。

SB06 1棟なのか2棟なのか判断に迷う。2棟なら、南に1間×2間の掘立柱建物、北に1間×1間の掘立柱建物となる。

SB07 長軸がSD03の方位に一致する切妻式の掘立柱建物である。

SB08 2間×2間の掘立柱建物である。

B. 井戸（図12、図版89）

SE01:00A-SK206 構築物はなく抜き取られていた。

SE02:00A-SK292 SE03を潰してSE02が構築されている。上部は抜き取られていた。

SE03:00A-SK305 SE03には曲物の内側に接して竹が打ち込まれ、曲物が固定されていた。

SE04:00B-SE02である。曲物の最下部が残存するのみである。

C. 火葬跡（図版94）

いずれも00B区で検出された。

火葬跡1 SK02である。SD13に直交する方向を向く舟形土坑である。内部から炭化物や人骨片が出土した。

火葬跡2 SK01。SK02と同様の方位である。

火葬跡3 SK102である。他とは軸線が異なり、また拳大の礫が遺存していた。骨片はなく、炭化木片、炭化物が多量に出土した。

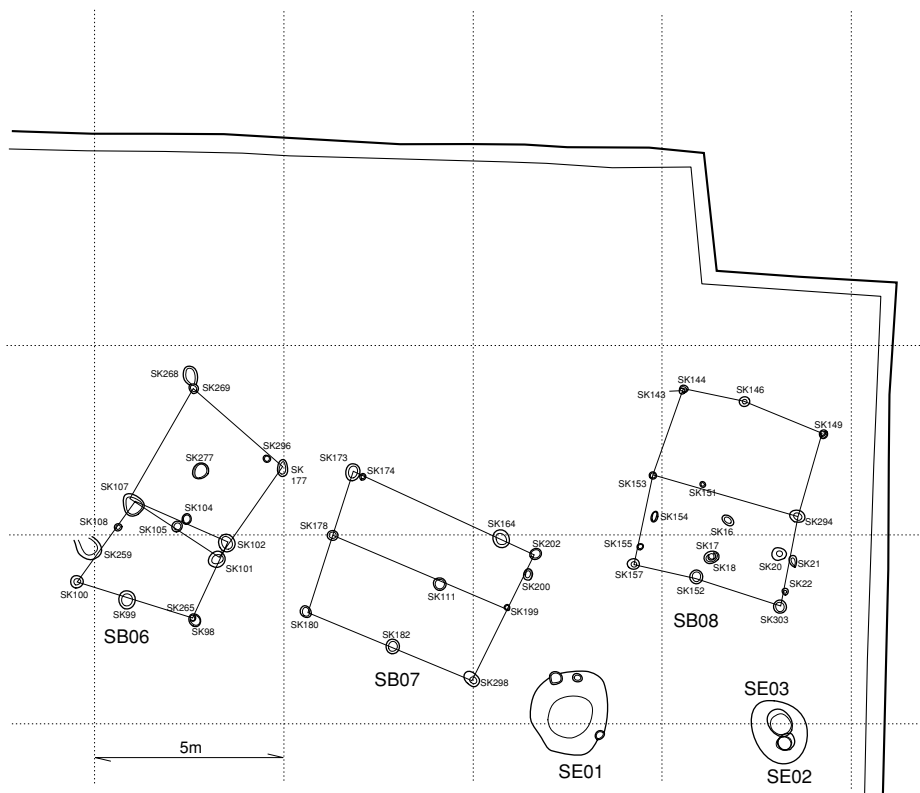


図11 中世の建物跡と井戸跡配置図 1/200

D. 墓坑群(図13、図版91・92)

平面が方形を呈する土坑が集中する箇所があり、いくつかの埋土に「中世方形土坑」と同様の斑土がみられたので墓坑群 (SZ01・02) とした。とくに墓坑群2では重複して設けられた3基(西からSK69、SK67、SK68)のうち東側の2基の埋土に斑土が認められた。こうした群集的な配置は朝日遺跡や西上免遺跡でも確認されている。

E. 溝

00A-SD02 (図版7・88) 下部は薬研堀状を呈し、上部は幅広く再掘削されている。薬研堀部分は幅約1m、深さ0.5m、上部は底面幅が2.5m以上あり、上端では大規模なものであったろう。

00A-SD03 (図版7) 建物群や井戸群を区画している溝だが、検出面では深さ10cmほどしか遺存していなかった。

00B-SD5・6・13 (図版7・8) 軸線をそろえて並ぶ溝である。SD5・6は断面逆台形形で、検出面で幅1.6~1.8m、深さは50cmと比較的規模が大きい。SD06からは漆椀が出土した。SD13は断面がU字形であり、上部の堆積層は斑状を呈し、人為的に埋められたようだ。底面標高はSD5、SD6、SD13の順で浅くなっている。

F. 池状遺構

SP01:00A-SE01 径約10m、深さ約1mの大規模なものである。南側がNR01に重複して掘削されており、地下水の湧出が考慮されたと考えられる。13世紀後半の灰釉系陶器が出土しており、中世でも年代的に先行し、かつ孤立する。生活関連の井戸というより、畠作にともなう施設：池もしくは溜井の可能性が高いと考える。なお、馬の歯が出土している。

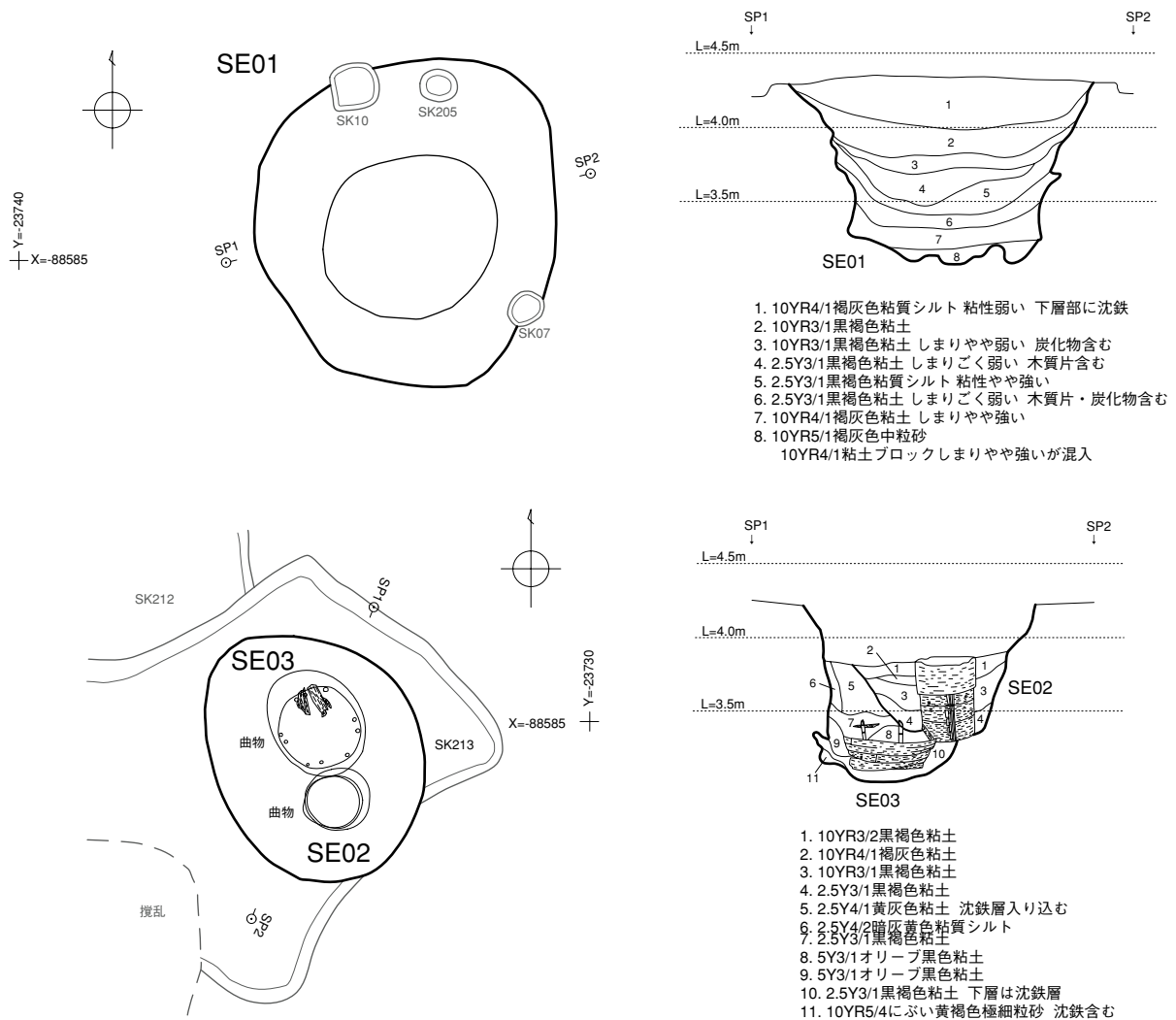


図12 井戸跡プラン・土層セクション 1/50

Y=23790

Y=23780

Y=23770

Y=23760

Y=23750

Y=23740

Y=23730

Y=23720

X=88550

X=88560

X=88570

X=88580

X=88590

X=88600

X=88610

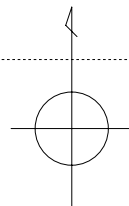
X=88620

X=88630

X=88640

X=88650

図13 中世・戦国遺構全体図 1/400



居住地

00A区

00B区

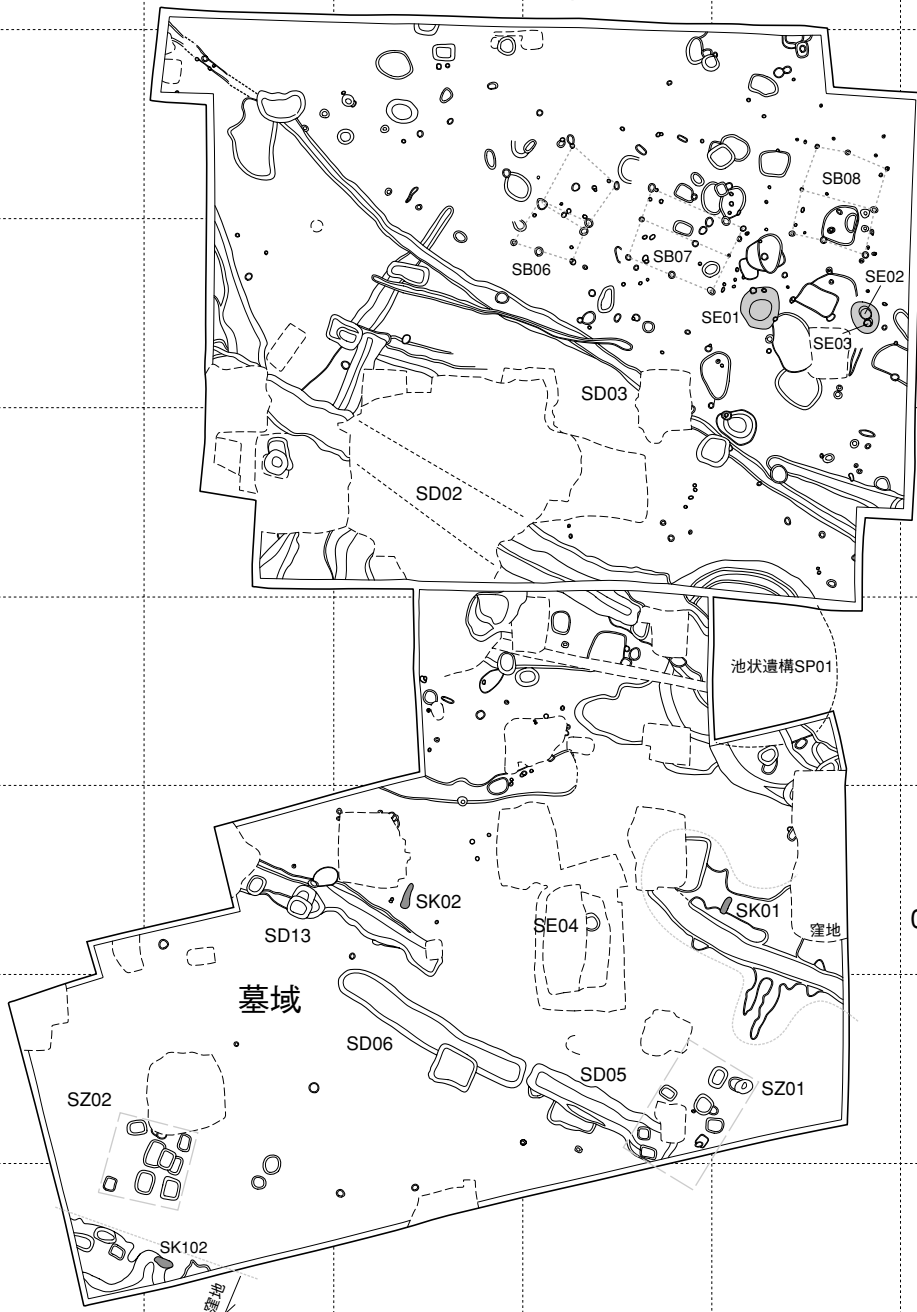
00C区

墓域

池状遺構SP01

窪地

窪地



第3章 遺物の概要

(1) 弥生時代以前の遺物

図示していないが、下層水田から非常に風化した弥生土器片が出土している。頸部に刺突紋がめぐり器壁も薄い。含まれている砂礫は大きい、中期後葉であろう。

下呂石の石鏃は3点、これも下層水田から出土している。無茎2点、有茎五角形1点である。水田造成以前の土地利用に関係するものかもしれない。

(2) 古墳時代の遺物

上層水田および古代の流路から出土した土師器・須恵器を掲載した。

全形がわかる台付甕2点(図版57-437・438)は宇田I式に属し、どちらも上層水田から出土した。また、S字状口縁台付甕D類(図版34-50)も00A区上層水田から出土している。

NR03からは松河戸I式から宇田I式までの遺物が出土している。底面標高は2.6m前後なので、一部上層水田を削って遺物が混入した可能性もあるが、松河戸I式の遺物は上流側の包含層からの混入であろう。

(3) 古代の遺物

A. 概要

古代の遺物は、NR01・02から土器類や木製品がまとまって出土した他は、目立った遺構は無い。やはり後世の削平が著しいためであろうか、堆積層が削られてしまった可能性が高い。

そのために、7世紀代の遺物は豊富だが、それ以降はほぼ皆無となっている。

B. 須恵器・土師器類

00A-SD01 (図版32)

1は大型甕、2は中型甕である。3は提瓶で、肩部の把手はない。上層からは灰釉陶器・皿(9世紀後半～10世紀)が出土したので、当該期までは窪地状を呈していたのであろう。

また、下層からは返り蓋が1点出土した。返り

蓋は今回の調査で唯一点である。

00B-SD12 (図版54)

須恵器には、杯H蓋、杯H、無蓋高杯、平瓶、甕、把手付鍋がある。

無蓋高杯382は脚部に凸レンズ形の透孔がある。把手付鍋は図面の中央部分がか片口状になっている。把手は挿入式である。

土師器には、伊勢系把手付鍋、伊勢系甕がある。の把手は挿入式である。7世紀後半。

00B-SD15 (図版55)

杯H、広口壺、甕がある。392は身が浅く、受け部も扁平になっている。甕の把手は貼付け式である。7世紀後半から8世紀初頭。

00B-SD17 (図版55)

須恵器には、無蓋高杯、甕、横瓶、土師器には伊勢系甕がある。IV期古段階。

無蓋高杯400は2段透孔で、口縁端部内面が小さく凹面をなす。7世紀後半。

00A・00B-NR01

3層・5層からの出土が多い。1層は検出時における最上層で、以下下部の層位となる。

1層(図版35) 須恵器には、杯H蓋、杯H、横瓶、無蓋高杯、甕、甕、大型甕がある。

蓋62には摘みが付く可能性がある。7世紀後半。

3層(図版36・37) 須恵器には、杯H蓋、杯H、無蓋高杯、大型浅鉢、堤瓶、甕、鍋、広口壺、大型広口壺、長頸瓶、鉢F、鉢、甕がある。

無蓋高杯61は口縁部が外折し、透孔は2段・2方向である。鍋95の把手は挿入式である。

土師器には濃尾系甕と伊勢系甕があり、濃尾系が優勢である。7世紀後半。

4層(図版38) 須恵器には、杯H蓋、杯H、無蓋高杯、半環把手付浅鉢、甕、大型甕がある。

土師器には、甕、濃尾系甕がある。7世紀後半。

5層(図版39～41) 須恵器には、杯H蓋、杯H、台付椀、平瓶、甕、鉢、大型広口壺、甕、甕がある。

杯H蓋137は上面観が楕円形に変形している。無蓋高杯151には波状紋がめぐる。153も大型で突帯は鋭い。同155～160は脚部に透孔が無く、155～

162は杯部外面の区画が、突帯、段、沈線、屈折となり、口縁端部は157～162が小さく外折する。

台付椀は3方向に透孔をもつ。168は片口状をなす。台付椀であろうか。173は底部と側面にいわゆる窯印と異なる線刻が施されている。

甕179は口縁部外面に崩れた波状紋がめぐる。

土師器には、伊勢系把手付鍋、濃尾系甕、伊勢系甕がある。把手は挿入式である。

伊勢系甕195は長胴で、胴部が中央からわずかに下がって、円形の焼成後穿孔がある。7世紀後半。6層(図版41) 須恵器の杯H蓋、広口壺、甕がある。

そのほか、201は土師器の甕、202は1層・2層にまたがって破片が出土した大型甕、203は1層・5層・6層にまたがって出土した甕、204～206は1層・3層・5層、207～209は4層・5層にまたがって出土した。多少古相を含みつつも、7世紀後半に埋没が進んだといえよう。

また次のNR02と接合したものがあるが、NR01との合流を示す資料である。

00B-NR02

1層(図版45) 須恵器には杯H蓋杯H、無蓋高杯、堤瓶、平瓶、甕、広口壺、杯B蓋(摘み蓋)、長頸瓶、大型甕、甗がある。7世紀後半にまじって8世紀以降の資料が出土している。

表2 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}C_{\text{PDB}}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1 σ 暦年代範囲
PLD-2462 (AMS)	木片 (ナナカマド属) 82 (杭)	-28.8	1,585 ± 25	cal AD 435	cal AD 430 - 440 (14.3%) cal AD 450 - 465 (24.2%) cal AD 485 - 530 (61.4%)
PLD-2463 (AMS)	木片 (ヒノキ) 100 (建築材)	-25.9	1,515 ± 25	cal AD 545 cal AD 550 cal AD 555	cal AD 540 - 600 (100%)
PLD-2464 (AMS)	木片 (アカガシ亜属) 30 (ナスビ形曲柄平鋏)	-27.5	1,525 ± 25	cal AD 540	cal AD 470 - 480 (10.1%) cal AD 530 - 600 (85.0%)
PLD-2465 (AMS)	木片 (エノキ属) 161 (丸太半裁)	-28.3	1,395 ± 25	cal AD 655	cal AD 640 - 665 (94.6%)
PLD-2466 (AMS)	木片 (アカガシ亜属) 1 (曲柄二又鋏刃部)	-26.8	1,655 ± 25	cal AD 410	cal AD 360 - 370 (11.2%) cal AD 380 - 425 (88.8%)
PLD-2467 (AMS)	木片 (ヤナギ属) 4 (杭)	-27.1	1,655 ± 25	cal AD 410	cal AD 355 - 370 (13.9%) cal AD 380 - 425 (86.1%)
PLD-2468 (AMS)	木片 (クワ属) 71 (背負子)	-29.2	1,405 ± 25	cal AD 650	cal AD 620 - 630 (17.3%) cal AD 640 - 660 (82.7%)

※ 実施機関：(株) パレオ・ラボ 報告者：山形秀樹

土師器には、伊勢系甕、畿内系土師皿がある。

本来の自然流路の深さがどの程度プラスされるのかわからないが、自然状態の埋没であるから上部にはさらに新しい時期の遺物が含まれていた可能性は高い。

2層(図版48) 須恵器には、杯H蓋、杯H、無蓋高杯、堤瓶、甕、鉢、甕、大型甕、甗がある。甗の把手は挿入式。

265の脚部には枝垂状の線刻がある。

土師器には伊勢系把手付鍋、濃尾系甕、伊勢系甕がある。把手はすべて挿入式である。7世紀後半。

遺物集積(図版93)として出土したものは、須恵器：甕1点、杯H9点、高杯2点、堤瓶1点、土師器甕2点他、である。

3層(図版51) 須恵器には、杯H蓋、杯H、無蓋高杯がある。土師器には伊勢系甕、製塩土器3類の脚部がある。7世紀後半。

00C-NR01(図版58)

大きくは00B-NR01・02と同一流路であろうが、層位の対応関係は明確ではない。

3層 杯H、甕がある。7世紀後半。

4層 杯H蓋、杯H、無蓋高杯、鉢F、鉢がある。7世紀後半。

5層 杯Hがある。7世紀後半。

C. 木製品

志賀公園遺跡からは、弥生中期後半から中世にかけての木製品が多数出土している。このうち、前回の報告書では186点を掲載し、今回の報告書では新たに140点を掲載する。今回報告分では、弥生中期後半に属する木製品はなく、また、古代の木製品も東山50～岩崎17号窯式期（前回報告分のNR07下層黒色土層に相当）に限られる。木製品が出土した調査区は00A・B・C区である。その大半は00B・C区で検出した古代の自然流路NR01（前報告書ではNR07）からの出土で、このほか、古墳中期は水田面および検出Ⅲ・トレンチで、古代は土坑・溝・検出Ⅱ、中世は井戸と土坑からの出土である。以下、前報告書にならって、まず古墳中期・古代・中世の三時期に分け、それぞれ器種ごとに記述をおこなっていくこととする。

なお、今回報告分の木製品のうち、古墳中期・古代の計7点について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した（表2）。

a. 古墳中期：松河戸Ⅱ～宇田Ⅰ式期（図版59・60）

00B区から8点の木製品が出土している。3・4が水田、8が南トレンチからの出土で、その他はすべて検出Ⅲである。

1は曲柄二又鋏の刃部。軸部から肩部にかけて欠損しているため、軸部の形態が伊勢湾型かナスビ形かの判別は不能である。刃部幅は上半部が広く、下端にかけてすぼまる。アカガシ亜属の柁目材をもちいる。AMS法による放射性炭素年代測定値はcal AD 410（暦年代較正值）である。2は両端に突起部をつくり出した有挾板で、全面が炭化している。残存長は30.8cmで、厚さが1.9cmあり、紡織具の腰当あるいは糸巻の可能性はある。樹種はスギ。3・4は杭。3はST606（上層水田）出土で、アスナロの芯持材を使用。4はST702（下層水田）からの出土でヤナギ属の芯持材をもちいる。4のAMS測定値も1と同じくcal AD 410（暦年代較正值）である。5～7は板。うち、5・7は丸太を半割した材である。6は厚さ0.8cmの薄板。8は板から製品を取ったあとに残るいわゆる残材（端材）である。これらの材の存在から、古墳中期には本遺跡において、木製品の製作がおこなわれていたこ

とがわかる。樹種は5がムクノキ、6・8がヒノキで、7はヒサカキである。

b. 古代：東山50～岩崎17号窯式期

古代の木製品は162点で、うち39点は00B・C区のNR01から出土している。NR01の木製品出土層位は第2層から第6層までであるが、土器の所属時期に大きな差はないので、一括してあつかう。NR01出土土器の所属時期は東山50号窯式期から岩崎17号窯式期におよぶが、主体は東山50号窯式期で、前回報告分のNR07下層黒色土層よりはやや古くなる可能性がある。祭祀具、掘削具、農具、工具、容器、下駄、運搬具、雑具、杭、建築部材、板、棒、丸太、残材の順に記述する。

i) 祭祀具（図版61・62） 祭祀具には齋串（齋串状木製品を含む）とミニチュアの木錘（木錘形）があり、前回報告分のNR07黒色土層から多数出土した馬形は、今回の調査では1点も認められない。9～28が齋串である。齋串の形態分類は前回の報告書に準拠する（図14）。

9～11は頭部が圭頭（Ⅰ類）で、10・11は側縁に切り込みをもたないⅠa類、9は両側縁にそれぞれ2ヶ所以上（左23、右24ヶ所）上からの切り込みを施すⅠc2類に属する。12～15は方形頭で幅が3cm未満のⅡa1類、16～18は方形頭で幅が3cmを超えるⅡa2類に属する。19～26は頭部を欠損する幅狭のタイプで、27・28は頭部欠損の幅広タイプ。樹種は10がモミ属で、それ以外はすべてヒノキ。29は平面形を木錘（渡辺誠氏の分類によるⅠYb型（渡辺1981））に似せてつくったミニチュアの形代で、樹種はクワ属。

ii) 掘削具（図版63・64） 30はナスビ形曲柄平鋏

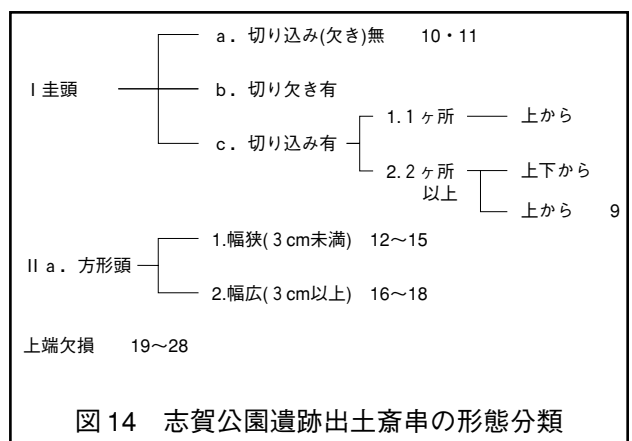


図14 志賀公園遺跡出土齋串の形態分類

で、約半分を欠損する。軸部上半には方形柄孔があり、刃部にはU字形鉄刃を装着するために段がつけられている。笠部の突起は著しく退化し、肩部はゆるやかなナデ肩を呈する。樹種はアカガシ亜属の柾目材。AMS法による暦年較正值はcal AD540である。31は一木づくりの四又鋤で、32はその刃部の破片だが、31とは別個体。前回の報告書ではこの31の身部のみが出土し、伊勢湾型曲柄四又鋤と報告した(図版205-43)が、本稿において、これも一木四又鋤と訂正しておく。樹種は31がクヌギ節で、32はアカガシ亜属。

iii) 農具(図版65・66) 33は鎌柄の基部とおもわれる。樹種はクワ属。34は堅杵で、合田茂伸氏の分類(合田1988)では、握部に節帯をもたず、搗き部が円柱状をなすC I類に属する。搗き部の端部は平坦で、表面粉碎機能をもつ「みかん掘り」とよばれるタイプの臼で使用されたと考えられる。樹種はクヌギ節。35～37は木錘で、35は渡辺分類のI Y f型で、36がI Y d型、37はI Y b型である。樹種は35が広葉樹、36はクワ属で、37がアスナロ。38は大足(杵型田下駄)の横板で、樹種はヒノキ。

iv) 工具(図版63) 39は斧柄の未成品で、台部のみ遺存している。樹種はサカキ。40は木材を分割する際などにもちいるクサビとおもわれる。樹種はアカガシ亜属。

v) 容器(図版66～68) 43～52は円形の曲物底(蓋)板で、46のみ側板が完存している。『木器集成図録 近畿原始篇』(奈良国立文化財研究所1993)の分類によると、44・46・52は側板を目釘で留めるF類、43は側板を底板に乘せるだけのE類で、他はすべて底板の周縁部を一段薄くし、穿孔して側板を桜皮で留めるD類に属する。43・44は直径が15cm未満の小型品で、他は直径15～20cmの中型品である。53～55は平面が楕円形ないしは長方形を呈する大型の曲物底板(折敷)である。うち、55は前述の分類ではD類にあたる。樹種は44がスギで、それ以外はすべてヒノキ。

41・42は2個1対で曲物の側板に巻き込んでもちいる把手である(山田1997)。両者ともに今回出土した円形の曲物用としては大きすぎることから、53～55のような大型の曲物に用いられた可能性が高い。樹種はいずれもヒノキ。

56はコップ状の刳物容器。3分の2以上を欠損しており、全体の形状は不明だが、欠損部分に直立する柄がつく縦杓子とおもわれる。樹種はケヤキをもちいる。57は方形の刳物容器(槽)の破片と考えられる。樹種はヒノキ。58はユウガオ属(ヒョウタン or ユウガオ)の破片で、容器として利用された可能性がある。

vi) 下駄(図版69・70) すべて連歯下駄で、59～66は右足用、67・68は左足用。『木器集成図録 近畿古代篇』(奈良国立文化財研究所1985)による分類では、59・67がB I d型式(B:前壺を左右いづれかに片寄せ、後壺を後歯の前にあけたもので、I:台の両側から少し内寄りから歯をつくり、前・後歯ともに側面からみて外開きにつくりだすもので、d:前後の端を弧形にするが、前幅より後幅をせまくするもの)、63・64・66がB I 型式、60・61・62がB II d型式(II:台と同じ幅で、縦断面が台形ないしは方形の歯がつくもの)、69がB II c型式(c:平面形が小判形)、68・65がB II 型式となる。樹種は67のみがコウヤマキで、他はすべてヒノキ。

vii) 運搬具(図版71) 71は背負子で、『木器集成図録 近畿原始篇』によると、縦の杵木の中央から荷受けの爪木(腕木)が枝分かれする、有爪型に属する。杵木は上・下端ともに横棧を紐結合するための突起をつくりだし、爪木の中央にも横棧をホゾ結合するための穿孔をほどこす。杵木の全長は45.7cmで、爪木の長さは14.5cmと、かなり小型の部類にはいる。樹種はクワ属。AMS法による暦年較正值はcal AD 650である。

viii) 雑具(図版71) 72は火鑽臼。両端が欠損しており、8ヶ所の火鑽穴が認められる。樹種はヒノキ。73～77は一般に燃えさしとよばれる、一方の端が炭化している小型の棒状品で、火鑽杵の可能性が高い。樹種は74がヒノキで、他はアカマツ。

78は建築部材など別材を結合する際にもちいる栓と考えられる。加工痕を明瞭にとどめることから、未成品の可能性が高い。樹種はサカキ。79も栓状の形態のものだが、用途は不明。樹種はヒノキ。

ix) 杭(図版72～74) 80～95は杭。すべて芯持材で、樹皮を残すものも多い。このうち、80・81には上端付近に横架材と組み合わせるための挟りが

はいり、80は全長3.5cmと長く、何らかの構築物の部材である可能性が考えられる。86～95はNR01の底で確認された土坑状の落ち込みに打ち込まれており、所属時期はNR01よりも古い。樹種は80・81がサカキ、82がナシ亜科、83・86～90・94がクヌギ節、85・87・91～93・95がコナラ節、84がクワ属、85がアスナロで、NR01より下の土坑出土の杭にはクヌギ節・コナラ節がもちいられている。82のAMS法による暦年較正值はcal AD 435である。

x) 建築部材 (図版75) 96～102は建築部材の可能性が高い穿孔板。96・97は幅10cm前後、長さ80cm以上の板で、長辺の片側のみ一定間隔で穿孔をほどこす。96は残存する側の短辺を丸く仕上げ、97は両側の短辺にホゾをつくりだす。使用部位は不明だが、横架材としてもちいたとおもわれる。樹種は96がスギで97はヒノキ。98・99は複数の部材を結合するための留め具。樹種はいずれもヒノキ。100はヒノキの角柱の一端に未貫通の方形孔を穿つ。100・102は方形の穿孔をほどこした長方形の板。十分な厚みをもつことから建築部材に分類した。樹種はいずれもヒノキ。100のAMS法による暦年較正值はcal AD 545/550/555である。107はヒノキをもちいた全長54.4cm、幅7.4cmの大型の有扶板で、片面のみ炭化する。建物の壁あるいは床材の可能性はある。

xi) 板 (図版75～79) 103～106は用途不明の穿孔板で、樹種はすべてヒノキ。108・109は有扶板でヒノキをもちいる。110・111は不整形の板で、樹種は111がヒノキ。110はヘラの未成品の可能性はある。樹種はヒノキ。112はヒノキの薄板で、四周を隅丸方形に丁寧に面取りする。113～137は特に製品ないしは何かの部材ではない、加工途中の板材で、分割したままの面を残すものや、加工痕をとどめるものが多い。樹種は113がシイノキ属、114がケヤキ、115がモミ属、130がスギで、その他はすべてヒノキ。

xii) 棒 (図版80～83) 140は図面上の上端に突起を、下端付近に方形の穿孔をほどこした棒で、ヒノキの芯持材。全長は132.5cmである。138は残存長68.3cmを測るヒノキ製の有頭棒で、下端は欠損している。139は片側 (図面上の下端) に出ホゾをつくりだし、上端付近は断面を長方形に整形し、方

形の小孔をあけた棒。140と同様に、何かの部材だが、用途は不明。樹種はサカキ。141は両端に挟りをほどこした棒。142は下端をとがらせ、上端付近に横方向の溝を刻んだ棒。樹種はいずれもヒノキ。143～160は端部付近に挟りや突起をもたない棒。樹種は155がスギ、89がケヤキ、106がコウヤマキ、70がヒノキ科、159がマキ属、160がヤブツバキで、他はヒノキ。

xiii) 丸太 (図版83・84) 161はエノキ属の丸太を半截したもので、用途は不明。AMS法による暦年較正值はcal AD 655である。162はエノキ属の枝分かれ部分を残した丸太で、下端は炭化しており、本来は建物の柱であった可能性もある。163～165は直径8～9cmの丸太で、いずれも炭化した痕跡が残る。樹種は163がコナラ節、107がヒノキ、165がアスナロ。

xiv) 残材 (図版85) 166～172は原材から製品をつくりだす際にできる残材で、いずれも金属製の工具による加工痕を明瞭にとどめる。樹種は172がコウヤマキ、173がアカマツで、他はすべてヒノキである。

c. 中世 (図版85)

174～177は中世の木製品。174は両端付近に挟りをほどこした板。175・176は曲物底板で、型式は側板を底板に乗せるだけのE類に属する。177は杭。樹種は177がクヌギ節で、他はヒノキ。

文献

- 渡辺 誠 1981 「もじり編み用木製鐘の考古資料について」『考古学雑誌』66-4。
- 合田茂伸 1988 「弥生時代の杵と臼」『網干善教先生華甲記念考古論集』。
- 奈良国立文化財研究所 1985 『木器集成図録 近畿古代篇』
- 奈良国立文化財研究所 1993 『木器集成図録 近畿原始篇』
- 山田昌久 1997 「考古資料の曲げ物研究を器具研究にするために」『人類誌集報1997』東京都立大学考古学報告2

第4章 自然科学分析

(1) 庄内川低地、志賀公園遺跡における堆積環境

鬼頭 剛*

はじめに

名古屋市北部、庄内川・矢田川と熱田台地との間に広がる庄内川低地にある名古屋市北区中丸町の志賀公園遺跡では、1996～1998年に行なった調査結果が既に報告されている(永井編 2001)今回、2000年に実施された調査区において地下層序を観察する機会を得た。その層序解析と放射性炭素年代測定から新たな知見が得られたので報告する。

A. 試料および分析方法

調査地周辺における現在の詳細な等高線図作成のため、財団法人名古屋都市整備公社発行の1/5,000「用途地域指定図」にプロットされた標高値を用い、等高線図を作成した(図1)。等高線図上には服部編(1996)、川添(2000)、永井編(2001)、愛知県史編さん委員会編(2002)、伊藤(2003)を参考にして、調査地周辺の主要な縄文時代遺跡をプロットした。

志賀公園遺跡の地下層序解析のため、00A区南端において遺構検出面からバックホーにより掘削し、層序断面を露出させ、層序断面図の作成と放射性炭素年代測定の試料を採取した。層序断面図の作成にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。層序断面からは放射性炭素年代測定に有効な植物片や土壌を9試料採取した(図2)。また、庄内川沖積低地の地下層序解析のため、都市基盤整備公団と愛知県建設技術研究所から調査地周辺のボーリング・データを得た。

放射性炭素年代測定は加速器質量分析(AMS)法により測定を行なった。分析方法は125 μ mの篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨(グラファイト)に調整後、加速器質量分析計にて測定した。測定

された¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した¹⁴C濃度を用いて¹⁴C年代を算出した。¹⁴C年代値の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。¹⁴C年代の暦年代への較正にはCALIB4.3を使用した。測定は株式会社パレオ・ラボ(Code No.; PLD)に依頼した。

B. 分析結果

a. 調査地周辺の等高線図

一般に沖積低地では、低地部の単位面積内における高度差が小さく低平なため、例えば、国土地理院発行の地形図(1/25,000や1/10,000)には低地面の等高線が描かれていない。また、調査地点である庄内川低地の場合、国土地理院発行地盤高図「濃尾平野」には沖積低地面に1mごとの等高線が描かれているものの、考古遺跡を解析するのに適当な精度とは言い難い。そのため筆者は、より詳細な等高線図を得るため財団法人名古屋都市整備公社発行の1/5,000「用途地域指定図」を用い、等高線図を作成した(図15)。なお、等高線間隔は標高5mまでが0.5m、標高5～10mまでは1m、標高10m以上では2mである。

図15の南側にみられる標高8m以上で示される等高線間隔が狭い部分は急傾斜であり、急崖を形成する。この標高8m以上には更新統上部層である熱田層が分布し、熱田台地と呼ばれる、この台地上に長久寺遺跡や片山神社遺跡といった縄文時代遺跡が立地するのがわかる。

庄内川・矢田川と熱田台地との間にひろがる庄内川低地には、低平ながらも東西方向にのびる2つの尾根部と4つの谷部が読みとれる。尾根部は名古屋市北区山代町(標高5.0m)から志賀公園遺跡のある北区中丸町や平手町を通り、西区鳥見町(標高3.5m)までと、北区名城二丁目(標高5.0m)から西区城西四丁目を通り、西区天神山町(標高3.0m)までである。谷部は南側(熱田台地側)から北へ向かって、北区大杉一丁目(標高6.0m)から西区城西三丁目(標高3.0m)にいたる熱田台地

*当センター調査研究員

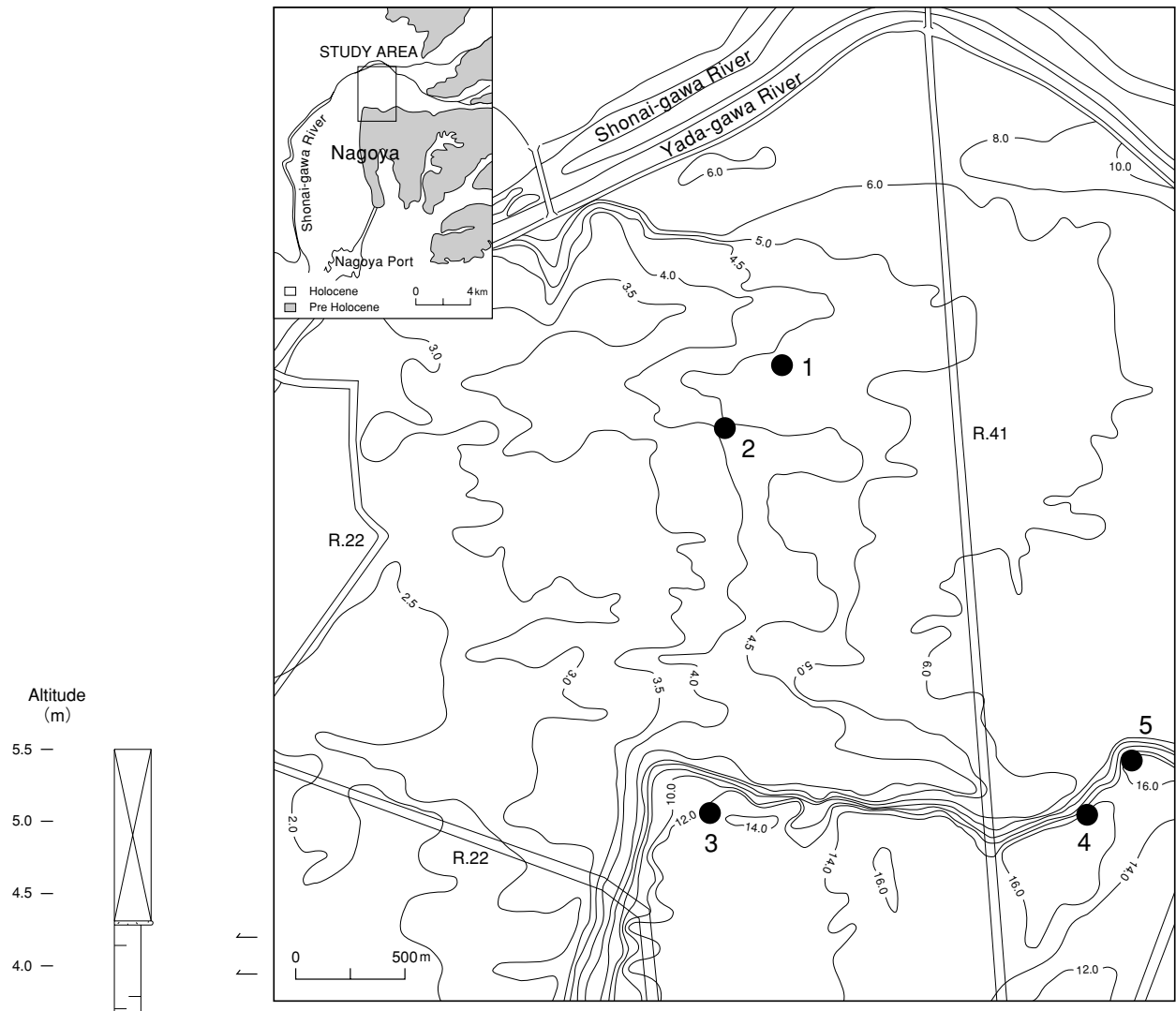


図 15 調査地点位置図

黒丸 ● は調査地点と周辺の主な遺跡を示す。
 1. 志賀公園遺跡 2. 西志賀遺跡 3. 名古屋城天
 守閣貝塚 4. 長久寺遺跡 5. 片山神社遺跡
 等高線(m)は財団法人名古屋都市整備公社発
 行の「用途地域指定図(1/5000)」の標高値を基に
 作成。等高線間隔は標高5mまでは0.5m、標高
 5～10mまでは1m、標高10m以上は2m。

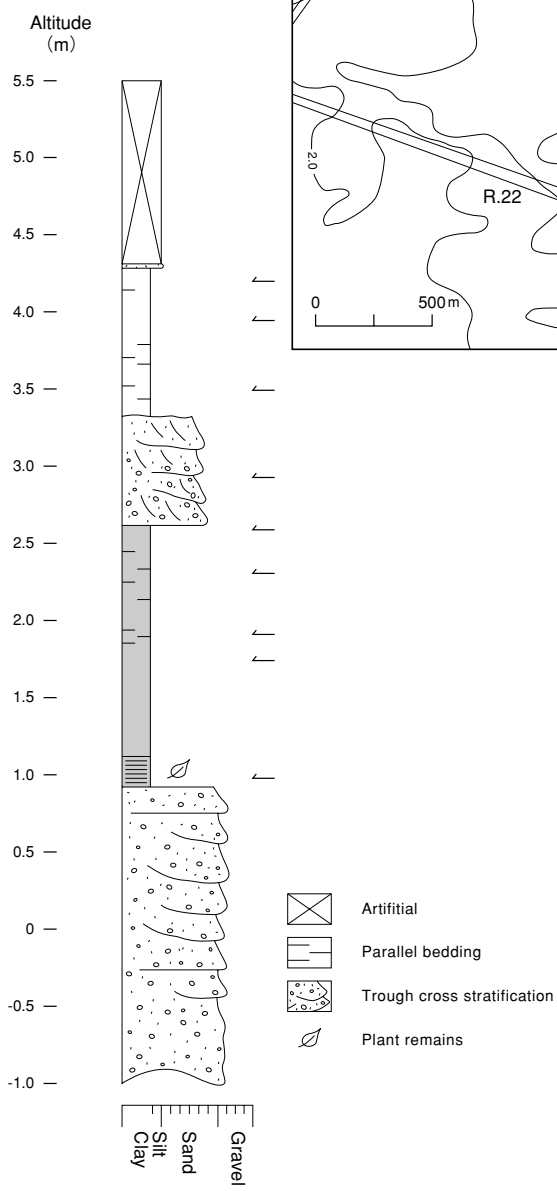


図 16 志賀公園遺跡 00A 区にお
 ける深掘の柱状図

矢印は放射性炭素年代測
 定の試料採取層準を示す。

北縁に沿うものや、北区柳原二丁目（標高 5.0m）から西区上名古屋二丁目（標高 3.0m）までにも確認される。また、北区元志賀町（標高 5.0m）から西区万代町（標高 3.0m）までと、北区鳩岡町（標高 5.0m）から西区新福寺町（標高 3.0m）までにも確認される。志賀公園遺跡や西志賀遺跡は、名古屋市北区山代町（標高 5.0m）から西区鳥見町（標高 3.5m）までに認められる尾根部の上に位置することがわかる。

b. 志賀公園遺跡の深掘層序

志賀公園遺跡00A区南端においてバックホーにより地表面（標高 5.50m）から深度約 6.5m までの地下層序断面を得た（図 16）。下位層より、標高 -1.10 ~ 0.90m までは細礫の混じる極粗粒砂層からなる。標高 -1.10m で湧水したため、それよりも下位層は確認できなかった。標高 0.90 ~ 2.60m は全体に黒褐色を呈する塊状・均質な粘土層よりなる。本粘土層最下部の標高 0.90 ~ 1.10m までには未分解の植物片が集積した部分がみられる。標高 2.60 ~ 3.30m は長径 10mm の中礫を含む極粗粒砂層からなり、平板状斜層理が明瞭に発達する。淘汰は悪い。下位の粘土層との境界は明瞭であり、側方へほぼ水平に連続する。本砂層はまれに植物遺体を含む。標高 3.30 ~ 4.25m は灰色や明褐色を呈する粘土層からなり、本層下部では砂粒子や中礫の含まれる層準がみられる。上部は塊状・均質である。植物の根跡などの生物活動の影響を受けており、土器片といった考古遺物の分散がみられる。標高 4.25 ~ 4.29m には明褐色なシルト層からなる薄層である。標高 4.29 ~ 5.50m は現代の人工的な盛り土となる。

c. 放射性炭素年代測定

深掘層序断面から計 9 試料の放射性炭素年代値を得た（表 3）。もっとも古い値は標高 0.90 ~ 2.60m でみられる黒褐色粘土層最下部の未分解植物集積層準から採取した木片（標高 0.96m）で、4785、4770、4610、4595、4580 cal yrs BP (PLD-2328) を示した。もっとも若い年代値では標高 3.47m の褐色粘土層から採取した植物片で 1325、1310 cal yrs BP (PLD-2334) であった。

C 考察

a. 深掘層序に記録される堆積環境

深掘層序断面はその粒度組成から、標高 0.90m を境として下位の粗粒堆積物と上位の細粒堆積物が卓越する層相に大きく分けられる。下位の粗粒堆積物では、標高 -1.10 ~ 0.90m に細礫の混じる極粗粒砂層が認められた。庄内川低地におけるこのような粗粒堆積物の分布について、住宅・都市整備公団が今回の調査地点と同じ名古屋市北区中丸町三丁目で行ったボーリング資料（B-1）では、標高 -10.75 ~ -3.25m に標準貫入試験の N 値が 20 ~ 50 以上の中粒~粗粒砂を基質とする細礫~中礫層が堆積し、その上（標高 -3.25 ~ -2.55m）を細粒砂層から細礫~中礫層にいたる上方粗粒化・層厚化傾向を示す粗粒堆積物がみられる。また、愛知県建設技術研究所のボーリング・データベースによると、調査地点の北側約 1.3km の名古屋市北区中切町 (No. 52366752002) では、標高 -9.19 ~ -3.75m の N 値 50 以上を示す砂礫層を覆って、下位のシルト層から上位の砂礫層にいたる堆積物（標高 -3.75 ~ -1.50）がみられる。調査地点の北側約 0.5km の北区金城町 (No. 52366742036) でも標高 -7.10 ~ -5.80m に N 値 50 以上の砂礫層があり、細粒砂層から砂礫層にいたる堆積物（標高 -5.80 ~ -1.45m）が覆っている。また、調査地点の南側約 1km の北区田端二丁目 (No. 52366732005) でも標高 -7.61 ~ -2.76m に N 値 40 ~ 50 以上を示す砂礫層とそれを覆う細粒砂層から中粒砂層にいたる堆積物（標高 -2.76 ~ -3.14m）が認められる。

このように、庄内川低地の地下には N 値 50 以上の礫層と、その上を覆って上方粗粒化・層厚化傾向を示す粗粒堆積物が側方への連続性よく分布する。ところで、濃尾平野の上部更新統~完新統は上部更新統である熱田層を不整合に覆い、更新統最上部の第一礫層および濃尾層と、完新統の南陽層とに区分される（古川 1972、松澤・嘉藤 1954）。さらに南陽層は下位より中部粘土層、上部砂層、最上部粘土層に細分される。また、自然地理学的には完新統の最上部粘土層を沖積陸成層ともよぶ（井関 1956、海津 1979）。これらのうち南陽層の上部砂層は、三角州の前置層として堆

積した堆積物であり、三角州の海側への前進にもなって堆積した砂質堆積物であるとされている(井関1956、海津1979)。先にのべたボーリング資料から、庄内川低地地下のN値50以上を示す礫層は第一礫層にあたる。その礫層を覆う粗粒堆積物は濃尾層または上部砂層にあたるが、礫層を覆う粗粒堆積物が、側方への連続性が良好で、かつ上方粗粒化・層厚化傾向を示すことから、三角州上部の三角州前置層を形成する堆積物であると推定でき、上部砂層に対比できると考えられる。三角州最上部は頂置層とよばれ、河川の流路や河口州の粗粒物、潮汐低地の砂泥物からなる。深掘層序断面でみられる標高-1.10~0.90mの細礫の混じる極粗粒砂層は、三角州頂置層を形成する河川流路や河口州の堆積物であると考えられる。この砂層の堆積年代について、極粗粒砂層を覆う直上の黒褐色粘土層が4580 cal yrs BP(PLD-2328)を示したことから、極粗粒砂層は約4600年よりも前に堆積していたことがわかる。

深掘層序断面の標高0.90~4.25mには粘土層からなる細粒堆積物が確認された。これは南陽層の最上部粘土層にあたり、その層相から氾濫原堆積物である。本層下部(標高0.96m)で4580 cal yrs BP(PLD-2328)、上部(標高3.47m)で1310 cal yrs BP(PLD-2334)の年代値が得られた。このことから、調査地点では約4500年前以降から氾濫原であったことがわかる。

標高2.60~3.30mには層厚約70cmの極粗粒砂層がみられた。明瞭な平板状斜層理が観察されることから、本砂層は河川流路のポイント・バー堆積物である。一般に、平板状斜層理の確認される砂層の層厚は河川流路の古水深にほぼ等しい。調査地点の河川流路は少なくとも70cm以上の水深であったことがわかる。砂層中の標高2.93mからは種実が採取され、その暦年代較正值は1410 cal yrs BP(PLD-2333)であった。砂層直下の粘土層(標高2.56m)は1415 cal yrs BP(PLD-2332)であり、およそ1400年前のごく短い間に砂層の埋積が進んだことがわかる。

以上の結果を模式的にまとめたものを図17に示す。志賀公園遺跡の調査地点では約4600年よりも前には三角州頂置面の河川流路、約4600年から

現在までは主に粘土粒子が堆積する氾濫原であった。また、約1400年前以降のごく短時間にはポイント・バーを形成する河川が調査地点を流下していたことがわかった。また、等高線図の読図により、現在の庄内川低地面には、詳細な時代は不明であるものの、庄内川・矢田川の主流あるいはそれらの分岐流路と考えられる複数の河川の存在が指摘される。

b. 庄内川低地における堆積速度

志賀公園遺跡における深掘層序断面の層序解析の結果から、三角州頂置面の河川流路から氾濫原へといたる堆積環境の変化がとらえられた。ここでは調査地点での堆積速度について検討を加える。暦年代較正值を横軸に、標高を縦軸にとり、年代値と年代測定した試料の採取標高をプロットした(図18)。プロットした値を滑らかな曲線で結んだものは堆積曲線とよばれる(Masuda and Ito1999、増田2000)。なお、堆積曲線を描くにあたり1 σ で示される暦年代較正值が複数算出される場合には、もっとも若い値をプロットした。また、圧密は考慮していない。

深掘層序断面の堆積曲線を概観すると、上位層の標高3.91mの2125 cal yrs BP(PLD-2335)、標高4.18mの1535 cal yrs BP(PLD-2336)の年代値は、明らかに堆積曲線からはずれてプロットされる。これらは二次的に堆積した試料であるといえる。

堆積物の上方への累積変化量を $\Delta h(\text{mm})$ 、時間変化量を $\Delta t(\text{year})$ とすると堆積速度は $\Delta h / \Delta t (\text{mm/y})$ で求められる。深掘層序断面最下位層の標高-1.10~0.90mの極粗粒砂層からは年代測定に有効な試料が得られなかったため、具体的な堆積速度は求められない。しかし、礫の混じる極粗粒砂であることから水理学的なエネルギーは高く、堆積速度は速かったと予想される。この極粗粒砂層の上に氾濫原堆積物の粘土層が堆積する。極粗粒砂層直上の粘土層下部(標高0.96~1.72m)では1.2mm/yであるが、中部(標高1.72~1.92m)では0.2mm/y、標高1.92~2.26mでも0.2mm/yと、調査地点ではもっとも遅い値となる。堆積速度がもっとも遅くなる層準では考古学的に水田跡(標高2.0m付近)が推定されるとともに、弥生時代中

表3 志賀公園遺跡 00A 区深掘の放射性炭素年代測定結果

標高 (m)	堆積物	試料の種類	¹⁴ C年代 (yrs BP)	δ ¹³ CPDB	暦年代較正值 (1σ, cal yrs BP)	1σ 暦年代範囲 (cal yrs BP)	Code No.
0.96	未分解植物片集積層	木片(枝)	4120±35	-28.6	4785,4770,4610,4595,4580	4645-4570(53.3%)	PLD-2328(AMS)
1.72	黒褐色粘土層	土壌	3660±35	-19.6	3980,3935	4080-4030(40.5%)	PLD-2329(AMS)
1.92	黒褐色粘土層	土壌	2830±30	-20.6	2945,2935,2925	2955-2915(52.1%)	PLD-2330(AMS)
2.26	黒褐色粘土層	炭化物	1640±30	-24.8	1530	1570-1515(82.3%)	PLD-2331(AMS)
2.56	未分解植物片集積層	葉	1545±30	-27.4	1415	1490-1430(56.2%)	PLD-2332(AMS)
2.93	細礫混じり極粗粒砂層	種子 (アカガシ亜属殻斗)	1535±30	-26.3	1410	1420-1355(64.7%)	PLD-2333(AMS)
3.47	褐色腐植混じり粘土層	植物片 (単子葉類の茎)	1435±30	-26.9	1325,1310	1345-1305(100%)	PLD-2334(AMS)
3.91	灰褐色粘土層	土壌	2145±30	-25.9	2145,2140,2125	2150-2100(62.2%)	PLD-2335(AMS)
4.18	赤褐色粘土層	土壌	1650±30	-24.2	1535	1570-1520(88.8%)	PLD-2336(AMS)

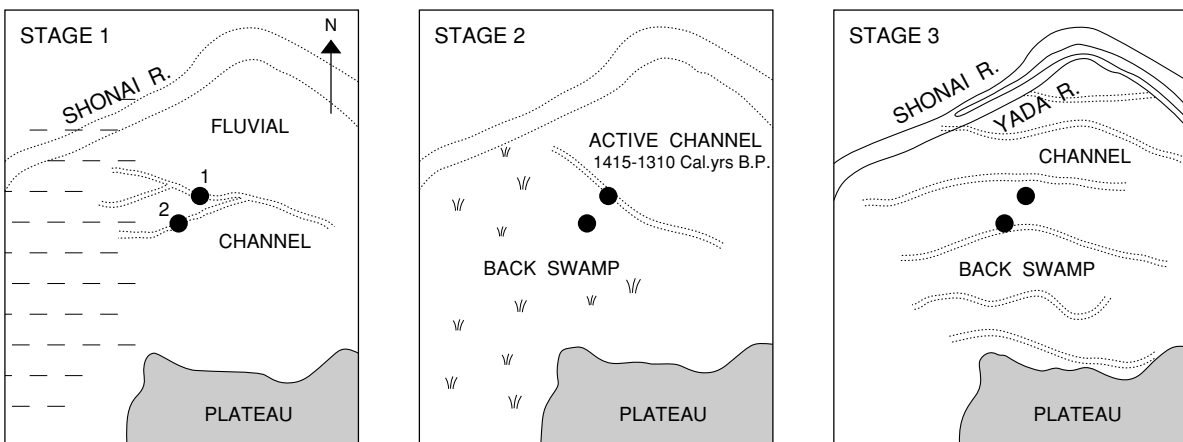


図17 志賀公園遺跡 00A 区深掘結果を基にした古環境変遷模式図

黒丸●は遺跡を示す。1. 志賀公園遺跡, 2. 西志賀遺跡

STAGE1は約4600年前以前(破線は海～汽水域)、STAGE2は約4000～1300年前、STAGE3は近・現代(推定される河道跡:年代は不明)。

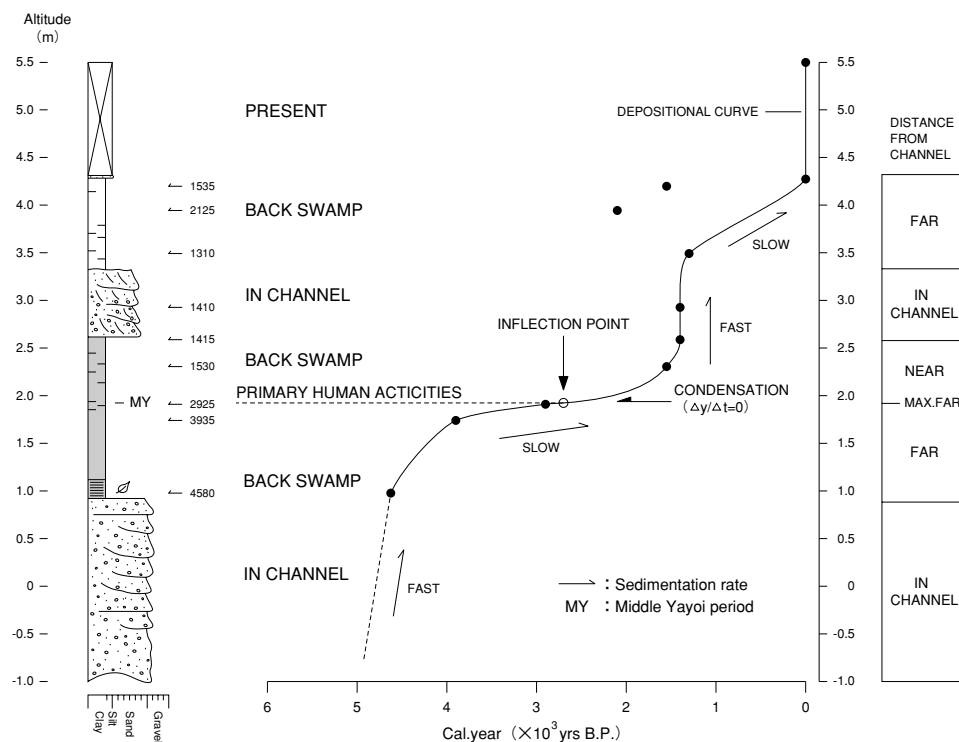


図18 志賀公園遺跡 00A 区深掘における堆積環境と堆積曲線

期の土器片が10点ほど出土している(木川 2001)。また、その層準よりも下位層からは考古遺物がまったく確認されなかった。調査地点における初源的な人為活動は相対年代の弥生時代中期頃であり、それは標高2.0mに記録されていることになる。初源的人為活動を記録する層準と、堆積曲線で示される堆積速度のもっとも遅くなる層準とが明瞭な対応関係を示すことがわかる。ところで、堆積速度と化石密集層の関係について、堆積速度が大きければ化石は希釈され、小さければ濃縮が生じる(Kidwell 1986・1991、Kidwell and Bosence 1991)。堆積速度と化石密集層とは逆相関の関係になる。志賀公園遺跡では土器片が出土する層準と堆積速度がもっとも遅くなる層準とが一致することから、本層準において考古遺物の濃集が生じたことがわかる。また、人為活動が行なわれた証拠から、本層準では離水しており、堆積物の供給が一時的に休止したことを示す。すなわち、堆積速度($\Delta h/\Delta t$)が0であったことがわかる。いっぽう、堆積速度の遅い層準よりも上位の標高2.26~2.56mの粘土層では2.6mm/yと速くなることから、標高2.0mを境にして速度変化が生じており、変曲点が存在するといえる。

標高2.56~2.93mにおける極粗粒砂層の堆積速度は74mm/yを示した。増田(2000)は日本における河川堆積システムの累積速度についてまとめ、河川流路堆積物の堆積速度は5~10mm/yの値をとるとした。今回得られた74mm/yという値は、それと比較して7倍ほど大きく、たいへん速いことがわかる。庄内川は名古屋市内を流れる河川の中でも堆積物供給量の多い河川として知られ、例えば、1787年(天明7年)には頻発する洪水を軽減させるため、庄内川の西側に新川を掘削している(井関1994、大平1998)。このような堆積物供給量が多い原因について、自然地理学者の井関(1994)は人為的要因をもとに説明した。それは、庄内川上流域の三河山は窯業地帯であり、薪材として森林が伐採されたことにより、山地から大量の土砂が庄内川に供給されたとするものである。極粗粒砂層中の年代値(標高2.93m)は1410 cal yrs BP (PLD-2333)を示した。庄内川・矢田川の上流には窯業生産を示す古窯跡が群をなし、7世紀後半こ

ろからの美濃窯、5世紀前半から14世紀ころまでの猿投窯、11世紀初頭からの瀬戸窯が知られている(加藤1992)。得られた放射性炭素年代値は考古学的に提示される窯業生産遺跡の相対年代と対応している。今後、庄内川低地域での調査が増加すれば、さらに確かな証拠として提示できよう。

標高2.56~2.93mの極粗粒砂層の堆積以降、その上位には細粒堆積物が累積するが、標高3.47~2.93mで5.4mm/y、ほぼ現代(標高3.47~4.29m)までで0.6mm/yとゆっくりした堆積へと変化する。以上のように、調査地点の堆積速度は、下位層から標高2.0m付近にかけて徐々に遅くなり、標高2.0~3.5mにかけて速く、標高3.5~4.5mにかけて再び遅くなった。このような堆積(累積)パターンが生じる原因のひとつとして、庄内川低地を流下する活動的流路が蛇行あるいは転位する際の、流路の側方移動と流路からの距離との関係によって説明できる(図18)。

庄内川低地は名古屋市という大都市圏をつくる低地として重要であるにも関わらず、完新統上部に関しては地質学的、自然地理学のおよび考古学的にも極めてデータが少ない。今後、新たな調査地点の増加に期待したい。

謝辞

本論を作成するにあたり、放射性炭素年代測定では株式会社パレオ・ラボ東海支店の山形秀樹氏にお世話になった。愛知県建設技術研究所の滝本守氏、都市基盤整備公団の由見慎一氏には名古屋市北区地域のボーリング・データを供与していただいた。愛知県立明和高等学校の森 勇一氏と愛知県埋蔵文化財センター調査研究員の石黒立人氏には分析結果に対するご助言・ご批判を賜った。図面の整理では愛知県埋蔵文化財センター元研究補助員の尾崎和美氏・上田恭子氏、トレース作業では研究補助員の山口典子氏、試料の整理・保管では元整理補助員の服部恵子氏・宇佐美美幸氏・山口きみ代氏、整理補助員の服部久美子氏・村上志穂子氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

文献

- 愛知県史編さん委員会編 2002 『愛知県史 資料編 1 旧石器・縄文』考古1、愛知県、p 818。
- 古川博恭 1972 「濃尾平野の沖積層」『濃尾平野の研究 その1 -』地質学論集、7、p 39-59。
- 服部哲也編 1996 『西志賀遺跡 - 発掘調査の概要』名古屋市教育委員会、p29。
- 井関弘太郎 1956 「日本周辺の陸棚と沖積統基底面との関係について」『名古屋大学文学部研究論集』14、p85-102。
- 井関弘太郎 1994 「新川の役割・凄まじかった庄内川」『東海叢書 24 車窓の風景科学』 - 名鉄名古屋本線編、名古屋鉄道株式会社、p 50-58。
- 伊藤正人 2003 「縄文時代の名古屋 - 地形変遷と遺跡立地」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』5、p1-16。
- 加藤安信 1992 「a 古窯跡」『東海の自然史』財団法人東海財団、p348-357。
- 川添和暁 2000 「愛知県の縄文遺跡（1） - 尾張北部地域について」『研究紀要』第1号、愛知県埋蔵文化財センター、p1-8。
- Kidwell, S. M., 1986, Models for fossil concentrations: paleobiologic implications, *Paleobiology*, 12, 6-24.
- Kidwell, S. M., 1991, The stratigraphy of shell concentrations, In Allison, P. A. and Briggs, D. E. G., eds., *Taphonomy. Releasing the data locked in the fossil record*, Plenum Press, New York, 211-290.
- Kidwell, S. M. and Bosence, D. W. J., 1991, *Taphonomy and time-averaging of marine shelly faunas*, In Allison, P. A. and Briggs, D. E. G., *Taphonomy. Releasing the data locked in the fossil record*, Plenum Press, New York, 151-209.
- 木川正夫 2001 「志賀公園遺跡」『平成12年度愛知県埋蔵文化財センター年報』愛知県埋蔵文化財センター、p8-9。
- 松澤 勲・嘉藤良次郎 1954 『名護屋付近の地質』同地質図, 愛知県、p35。
- Masuda, F. and Ito, M., 1999, Contributions to sequence stratigraphy from the Quaternary studies in Japan, *The Quat. Res.(Daiyonki-Kenkyu)*, 38, 3, 184-193.
- 増田富士雄 2000 「堆積曲線から求める堆積年代と累重速度」『月刊地球』22、3、p191-197。
- 永井宏幸編 2001 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第90集 志賀公園遺跡』愛知県埋蔵文化財センター、p182。
- 大平明夫 1998 「1 沖積低地の地形環境」『新修名古屋市史』新修名古屋市史編集委員会編、8、p20-30。
- 海津正倫 1979 「更新世末期以降における沖積低地の古地理」『地理評論』52、p199-208。

(2) 志賀公園遺跡より出土した自然遺物

堀木真美子*・上田恭子**・森 勇一**

はじめに

名古屋市北区に位置する志賀公園遺跡は、弥生時代中期から中世にかけての複合遺跡である。弥生時代中期の頃は主に水田跡が検出され、古墳時代中期では水田跡の検出に加え木製錘が出土している。飛鳥時代から古代にかけては溝や竪穴住居跡が検出されている。中世になると、井戸や柵列、火葬施設等が検出されている。

今回分析を行った試料は、00B区自然流路NR01および00B区SX01、SD02、SE01などの遺構から出土した自然遺物である。遺物の種類は、種子類、貝類、骨類である。今回同定作業を進める過程において、ハマグリの殻と殻の間に固結した状態で砂質堆積物が残存しているのを確認した。そこでこの砂質堆積物より珪藻化石を抽出し、貝類が人為的に破棄されたものか、出土地点で生息していたものなのかの推測を試みた。

A. 種子類

a. 試料

種子類が出土した地点は、00B区および00C区にまたがって検出された自然流路NR01の第2層、第3層、第5層、00B区NR03、00B区T-03である。

同定結果を表4に示す。また同定された種類毎にまとめたものを表5に示す。

・エゴノキ属 *Styrax* 核

長径6～10mm、短径約7mm、厚さ約5mmの卵状をなす。長軸方向に1～3条の溝が確認できる。基部は切断され楕円に近い平面形を呈する。

・オニバス *Euryale ferox* Salisb. 果実

長径4～8mm程度の球形。表面に模様はなくなめらかである。1mm程度の口状の穴があり、その隣に長径1mm、短径0.5mm程度の楕円のくぼみを有する。

・クマヤナギ属 *Berberis* 核

長径4～5mm、短径3mm、厚さ1mm程度の一

端がく字状に欠けた角丸の長方形をなす。長軸方向に1本の条溝がある。

・スギ (*Clyptomeria japonica* (Linn. fil.)D.Don もしくはヒノキ科 CHAMAECYPARICEAE 毬果

長さ10mm、幅13mm、厚さ7mm程度の扇状をなす。スギもしくはヒノキ科の毬果の一部と思われる。果鱗の一部が残存。

・ヒョウタン *Lagenaria leucantha* Rosby.var.gourda Makino 種子

長径15mm、短径6mm、厚さ1～2mm。辺部に2本の黒色の線がある。基部の両端に2つの凸部がある。

・ブドウ属 *Vitis* 種子

長径5mm、短径3mm、厚さ1～2mm。水滴状をなす。

・マツ属 *Pinus* 毬果

長径35mm、短径23mm、厚さ15mm。一部破損している。鱗片の先端部は菱形をなす。

・モモ *Prunus persica* (Linn.) Batsch. 核

長径20～30mm、幅15～20mm、厚さ18mm程度。表面の溝が連続するものが多く、モモと同定した。一部破損しているものもある。

b. 考察

エゴノキ属が509点と最も多く、NR01第3層にまとまって出土している。これら多量のエゴノキ属の種子の中には、果皮の一部と思われる薄膜状のものをつけたものも数点確認された。現在、植樹されたエゴノキの樹下を観察すると種子を見つけることができるが、その場合、薄膜状のものを残存している個体を見つけることはない。つまり、今回出土したエゴノキ属の種子で果皮と思われる薄膜状のものを残すものは、水中に落下しそのまま堆積層中に取り込まれたのではないと思われる。

またNR01第3層については、オニバスが23点とエゴノキに次いで多く、ほかにクマヤナギ属、モモ等となっている。オニバスが水生植物であることから、NR01の第3層が堆積する頃には淀んだ水が存在していた可能性が考えられる。

エゴノキ属については、大量に出土していることから、果実に含まれるサポニンを利用しての漁

*当センター調査研究員

**愛知県立明和高校

表4 出土地点ごとの種子類一覧

和名	学名	NR01			NR03	T-03	合計
		第2層	第3層	第5層			
エゴノキ属	<i>Syrax</i>	3 (1)	506(8)				509 (9)
オニバス	<i>Euryale ferox</i> Salisb.		23				23
クマヤナギ属	<i>Berchemia</i>		2				2
スギもしくはヒノキ科 (毬果)	<i>Clyptomeria japonica</i> (Linn. fil.)D.Don or Chamaecypariceae		1				1
ヒョウタン	<i>Lagenaria leucantha</i> Rosby.var.gourda Makino		1				1
ブドウ属	<i>Vitis</i>		1				1
マツ属 (毬果)	<i>Pinus</i>		1		1		2
モモ	<i>Prunus persica</i> (Linn.) Batsch.		3(2)	4		1(1)	8 (3)
		3(1)	538(10)	4	1	1(1)	547 (12)

撈の可能性も考えられる。が、単にNR01の周辺(上流部もふくむ)にエゴノキ属が生えていた可能性も否定できない。

B. 骨

a. 試料

00B区NR01第5層より魚骨が2点出土している。

00A区南トレンチ、SD10、00B区SX01から不明骨片が多数出土している。白色化して表面にひび割れていることなどから火葬骨と考えられる。種類については、大きさと形状からヒトの可能性はある。

00A区SE01、SD02からは大型の草食獣の臼歯の破片が出土している。破損がひどく種の同定はできなかった。

C. 貝類

a. 試料

00B区NR01第5層の同一地点から、7種の貝類が出土している。マガキ、ハマグリ、ヤマトシジミ、オキシジミ、ウミニナ、不明二枚貝、不明巻貝である。

・マガキ *Crassostrea gigas* THUNBERG

40mm程度の破片。波状の形状からマガキとする。生息域は内湾で鹹度の低い浅海帯の岩礁底。

・ハマグリ *Meretrix lusoria* [RODING]

殻頂部が残存するもので、右殻19個、左殻18個を確認。

殻長は30～55mm。生息域は、淡水が流れ込む内湾の潮間帯から上部浅海帯の砂底。

・ヤマトシジミ *Corbicula japonica* PRIME

殻頂部が残存するもので、右殻47個、左殻47個。

殻長は20～30mm。生息域は汽水域の砂泥底。

・オキシジミ *Cylina orientalis* SOWERBY

35mm程度の円形をなす。右殻のみ2点確認。生息域は内湾や内湾奥部の浅海帯もしくは潮間帯の泥底。

・ウミニナ *Batillaria multiformis* (LISCHKE)

殻高35mm程度。殻口部が残存する個数は27。頂部のみの個体も1点確認された。生息域は海岸および河口の泥底。

・不明二枚貝

黒色の表面部分が30～50mm程度の破片として残存。

・不明巻貝

頂部のみ残存。

b. 考察

今回出土した貝類について、その生息域を見てみると内湾から浅海帯の砂底に棲息するハマグリやオキシジミ、河口部から潮間帯に棲息するウミニナやマガキ、淡水から汽水域に棲息するヤマトシジミと多種多様な生息域であることがわかる。またその生息域が多種類であることから、貝類すべてが人為的に遺跡内に持ち込まれたものと考えられがちである。

ここで、貝類が出土した志賀公園遺跡00B区および00C区にまたがる自然流路NR01の環境について考察してみる。貝類が包含されていたNR01第5層の標高を見てみると、堆積物の上面で標高4.2m、底部で3.5mである。7C後半の海水面が現在のものより2m程度高いと仮定しても、試料を採取した自然流路内に淡水もしくは汽水が存在した可能性が考えられる。この場合、ハマグリやオキシジミ、マガキ、ウミニナはこの地点で棲息していた可能性は考えられないことから、確実に人

為的な行為の結果といえる。

しかし、自然流路内に淡水もしくは汽水が存在していたと仮定するならば、ヤマトシジミは同地点で棲息していたとも思われる。また今回の試料において、ヤマトシジミの左右の殻数が同数であることから、試料採取地点周辺で棲息していたものが偶然、人為的な貝類とともに取り上げられた可能性が考えられる。

そこで今回ハマグリに殻の間に残存していた堆積物より珪藻化石を抽出し、貝類が堆積した当時の環境の復元を試みた。

D. 珪藻分析

a. 分析方法

自然流路NR01（第5層）において見つかった

ハマグリ *Meretrix lusoria*（殻長55mm）の左殻2枚の間に残存した試料について珪藻分析を行った。

分析方法は森（2000）にしたがって実施した。その概略は以下のとおりである。

- ① 採取した試料1gをトールビーカーにとり、過酸化水素水（35%）を加えて煮沸する。
 - ② 岩片除去の後、水洗を4～5回繰り返しながら、遠心分離を行う。
 - ③ 分離した試料を希釈し、カバーガラスに滴下し、ホットプレート上で乾燥させる。
 - ④ 封入剤をスライドガラス上にのせ、③のカバーガラスをかぶせる。
 - ⑤ アルコールランプで焼き付ける。
- 検鏡は1,000倍の光学顕微鏡を用いて行った。

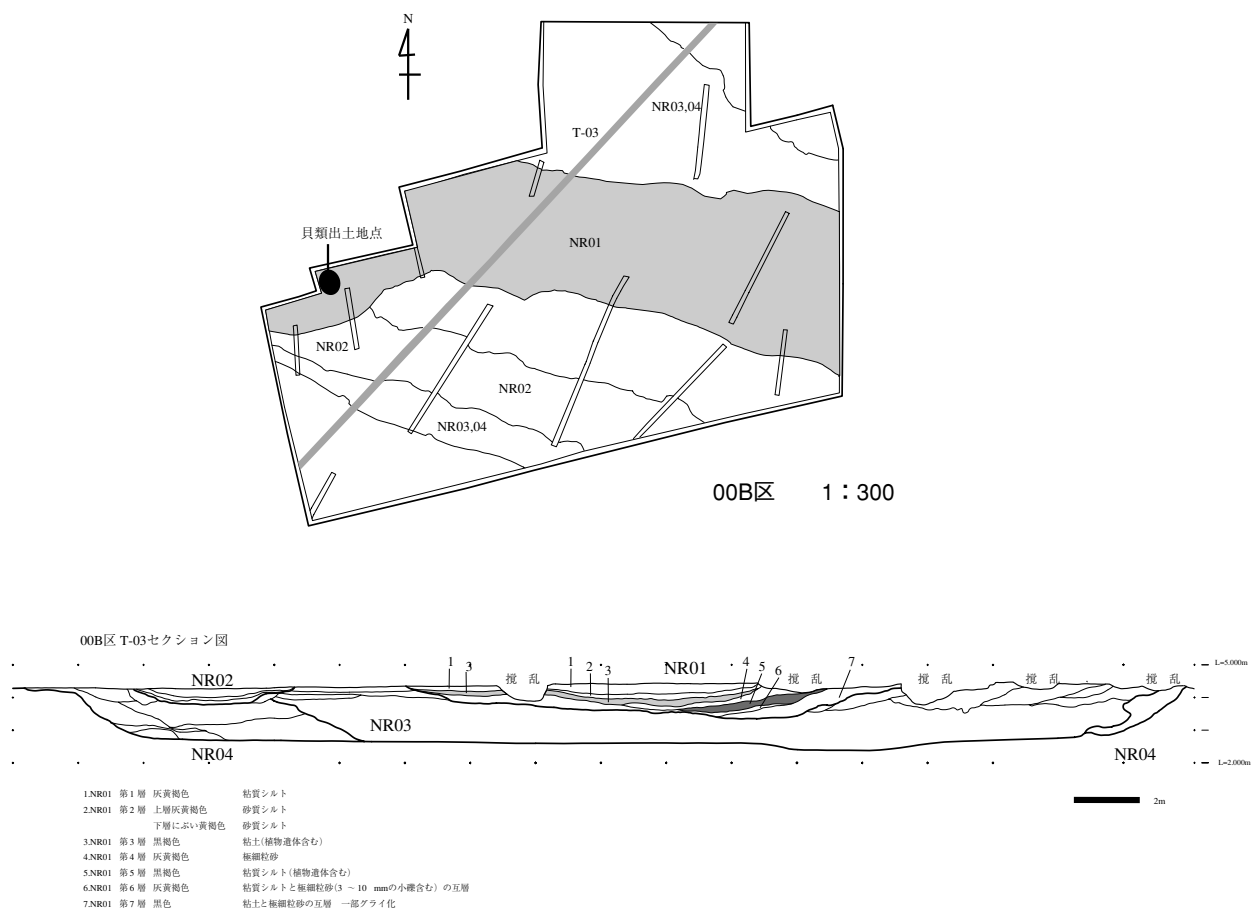


図19 志賀公園遺跡 00B区 T-03 セクション図

通常、検鏡は1プレパラートにつき200個体になるまで計数を行うが、今回は珪藻殻の破片が多数であったため、その中で同定可能な珪藻について述べる。

検出された珪藻は *Thalassionema nitzschioides* と *Denticulopsis lauta* の両分類群が過半を占め、その他 *Achnanthes hauxiana*、*Fragilaria ulna*、*Rhaphoneis surirella*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula tokyoensis*、*Coscinodiscus* sp.、*Cyclotella* sp.、*Thalassiosira* sp. などであった。

b. 考察

今回の分析結果より、以下の2点について検討を試みた。

- ・試料中の珪藻化石の示す時代がハマグリが生息時期と直接符合するものであるか否か。
- ・試料中に含まれる珪藻殻の生息環境が、ハマグリを示す生態と一致するものであるか否か。

まず、時代について検討する。本試料からは殻長や殻壁、表面の条線などの観察結果から *D. lauta* に同定される珪藻類が多数検出された。*D. lauta* は、新生代第三紀の中期中新世～後期中新世を示す示準化石である(小泉1976)。なお、本種の生態は、塩分濃度の高い海域を指標する浮遊性珪藻であり、また本分類群は新生代第三紀中新世の堆積物を特徴づける二次化石(金谷1970)としても知られている。ハマグリを採取した自然流路NR01(第5層)の示す時代は7C後半であるため、*D. lauta* を含む堆積物は、何らかの理由で再堆積したものであると考えられる。*D. lauta* は岐阜県南東部の瑞浪市および多治見市周辺に分布する瑞浪層群に多く含まれている(森2000)。志賀公園遺跡の北部には、庄内川および矢田川があり、古墳時代においても、多くの堆積物をもたらしていたものと考えられる。現在、庄内川は岐阜県恵那市の夕立山を源流とし、瑞浪層群が広く分布する地域を削剥する。一方、矢田川は猿投山北部を源流とし、主に東海層群の分布域を流れている。分析試料中に *D. lauta* が含まれていたことから、今回の試料は、矢田川よりも庄内川の影響を強く受けていたと思われる。

次に環境について述べる。*T. nitzschioides* は、

外洋～内湾において浮遊生活を営む珪藻であることが知られている(小杉1988)。一方、この試料を含むハマグリは、内湾の底泥を生活圏とする二枚貝である(吉良1989)。このため、ハマグリとその殻中に残存した分析試料との間には生活圏に差異が認められる。

珪藻化石の検鏡結果は、前述のとおり、ハマグリとの相関性に乏しい *D. lauta* と *T. nitzschioides* が多くを占めた。また、検出された珪藻化石は破片が多く、完形で検出された珪藻化石は、殻が丈夫であるため残存した *D. lauta* のみであったと考えてよい。ハマグリが生息環境と同様の環境を示す珪藻が本試料中に存在しなかったことから、ハマグリは現地性のものではなく、人の手を介するなど、なんらかの方法で運ばれたものであることが推測される。

以上により、本試料は時代および生息環境双方において、ハマグリと直接相関を示すものではないと考える。

E. まとめ

今回、志賀公園遺跡00B区および00C区より出土した種子類、骨類、貝類の同定を行った。

その結果、NR01第3層からは、果皮と思われる薄膜状のものをつけたままのエゴノキ属の核が多量に出土するとともに、水生植物のオニバスの果実も出土した。このことから第3層が堆積する頃には、NR01内には停水域があったと推定した。

またNR01の第5層においては、ハマグリやオキシジミ、ウミニナ、ヤマトシジミなど多様な生息域を示す貝類が同一地点より出土した。この貝類のうちハマグリは殻の間に残存していた堆積物を用いて、珪藻分析を行った。その結果、堆積物中には *D. lauta* という新生代第三紀中新世の堆積層中に含まれる珪藻化石や *T. nitzschioides* など外洋～内湾において浮遊生活を営む珪藻の破片ばかりが多く含まれていた。このことから、貝類が包含されていた自然流路NR01第5層は明らかに二次堆積物であると判断された。もしも、ヤマトシジミなどが生息できるような環境であったと仮定するならば、珪藻分析においてそれらの水域を示す珪藻化石が多量に検出されるべきである。しか

表5 志賀公園遺跡自然遺物一覧

種子	調査区	グリッド	遺構番号	層序	種名	個数 (破片)
Xp-01	00B2	VIIC3h	T-03		モモ	1 (1)
Xp-02	00B2	VIIC5i	NR03		マツ属 (球果)	1
Xp-03	00C2	VIIC3o	NR01	第2層	エゴノキ属	3 (1)
Xp-04	00B2	VIIC3j	NR01	第5層	モモ	1
Xp-05	00B2	VIIC3h	NR01	第5層	モモ	1
Xp-06	00B2	VIIC3i	NR01	第5層	モモ	2
Xp-07	00B2	VIIC5k	NR01	第3層	モモ	1
Xp-08	00B2	VIIC4i	NR01	第3層	モモ	1
Xp-09	00C2	VIIC3c	NR01	第3層	エゴノキ属	3
Xp-10	00C2	VIIC3b	NR01	第3層	エゴノキ属	13
Xp-11	00C2	VIIC3b	NR01	第3層	エゴノキ属	9
Xp-12	00C2	VIIC3b	NR01	第3層	オニバス	10
Xp-13	00C2	VIIC3b	NR01	第3層	木片	1
Xp-14	00C2	VIIC3c	NR01	第3層	エゴノキ属	17
Xp-15	00C2	VIIC3c	NR01	第3層	オニバス	1
Xp-16	00C2	VIIC3c	NR01	第3層	エゴノキ属	1
Xp-17	00C2	VIIC3b	NR01	第3層	エゴノキ属	27
Xp-18	00C2	VIIC3b	NR01	第3層	オニバス	5
Xp-19	00C2	VIIC3b	NR01	第3層	オニバス	2
Xp-20	00C2	VIIC3b	NR01	第3層	不明	1
Xp-21	00C2	VIIC3c	NR01	第3層	エゴノキ属	12
Xp-22	00C2	VIIC3c	NR01	第3層	オニバス	1
Xp-23	00C2	VIIC3c	NR01	第3層	エゴノキ属	337 (7)
Xp-24	00C2	VIIC3c	NR01	第3層	エゴノキ属	10
Xp-25	00C2	VIIC3c	NR01	第3層	オニバス	3
Xp-26	00C2	VIIC3c	NR01	第3層	不明	1
Xp-27	00C2	VIIC3c	NR01	第3層	木片	-
Xp-28	00C2	VIIC3c	NR01	第3層	クマヤナギ属	2
Xp-29	00C2	VIIC3c	NR01	第3層	ブドウ属	1
Xp-30	00C2	VIIC3c	NR01	第3層	エゴノキ属	67 (1)
Xp-31	00C2	VIIC3c	NR01	第3層	モモ	(1)
Xp-32	00C2	VIIC3c	NR01	第3層	ヒョウタン	1
Xp-33	00C2	VIIC3c	NR01	第3層	木片等	-
Xp-34	00C2	VIIC3c	NR01	第3層	エゴノキ属	10
Xp-35	00C2	VIIC3c	NR01	第3層	オニバス	1
Xp-36	00C2	VIIC3c	NR01	第3層	スギもしくはヒノキ科 (球果)	1
Xp-37	00C2	VIIC3c	NR01	第3層	マツ属 (球果)	1
Xp-38	00C2	VIIC3c	NR01	第3層	モモ	1

表6 骨一覧

調査区	グリッド	遺構番号	層序	種名	個数
Xb-01	00B2	VIIC4e	NR01	第5層 魚骨	2
Xb-02	00A	VIIC1i	南トレンチ	不明骨片	
Xb-03	00A	VIIC15j	SD10	不明骨片	
Xb-04	00B	VIIC2j	SX01	不明骨片	
Xb-05	00B	VIIC2i	SX01	不明骨片	
Xb-06	00B	VIIC2i	SX01	不明骨片	
Xb-07	00B	VIIC2i	SX01	第3層 不明骨片	
Xb-08	00B	VIIC2i	SX01	第3層 不明骨片	
Xb-09	00B	VIIC2i	SX01	不明骨片	
Xb-10	00B	VIIC2i	SX01	不明骨片	
Xb-11	00B	VIIC2i	SX01	不明骨片	
Xb-12	00B	VIIC2i	SX01	第3層 不明骨片	
Xb-13	00B	VIIC2i	SX01	第3層 不明骨片	
Xb-14	00A	VIIC20i	SE01	不明獣骨 (歯)	
Xb-15	00A	VIIC20j	SD02	不明獣骨 (歯)	

表7 貝類一覧

調査区	グリッド	遺構番号	層序	種名	左右	個数
Xs-01	00B2	VIIC4e	NR01	第5層 不明二枚貝	不明	1
Xs-02	00B2	VIIC4e	NR01	第5層 カキ	不明	1
Xs-03	00B2	VIIC4e	NR01	第5層 オキシジミ	右	2
Xs-04	00B2	VIIC4e	NR01	第5層 ウミニナ	破片 (口数)	28 (27)
Xs-05	00B2	VIIC4e	NR01	第5層 不明巻貝	螺部	1
Xs-06	00B2	VIIC4e	NR01	第5層 シジミ	右	47
Xs-07	00B2	VIIC4e	NR01	第5層 シジミ	左	47
Xs-08	00B2	VIIC4e	NR01	第5層 ハマグリ	右	19

し、今回の試料においては、このような仮定を裏付けるものは検出されなかったことから、出土したヤマトシジミなどの貝類は、人為的な行為によって同地点にもたらされたものであると推測された。

これまで、偶発的に採取された自然遺物は古環境を示す材料にはならないと考えてきたが、条件によっては古環境を復元するのに役立つ情報を引き出せることが判明した。今後、自然遺物の取り扱い方を見直していくきっかけにしていきたい。

文献

磯貝文男・柴田松太郎・真野勝友編 1993 『地学ハンドブックシリーズ7 貝化石のしらべかた』地学団体研究会、p146。

金谷太郎 1970 『秋田県男鹿半島の中新世珪藻化石1（女川層下部）』日本化石集第10集、築地書館、p10-60。

吉良哲男 1989 『原色日本貝類図鑑』保育社、240pp

小杉正人 1998 『珪藻の環境指標种群の設定と古環境復元への応用』第四紀研究vol.27、p1-20。

小泉 格 1976 「8.珪藻」『微古生物学』朝倉書店、p138-221。

森 忍 2000 「第3章 珪藻」『考古学と自然科学3 考古学と植物学』同成社、p43-77。

森 勇一 2000 「第3章 珪藻」『考古学と自然科学3 考古学と植物学』同成社、p43-77。

図 20 志賀公園遺跡出土の種子類・貝類



1. モモ 核
prunus persica(linn.)Batsch.



2. マツ属 毬果 *Prunus*



3. エゴノキ属 核 *Styrax*



4. エゴノキ属 核 *Styrax*



5. エゴノキ属 核 *Styrax*



6. エゴノキ属 核 *Styrax*



7. クマヤナギ属 核 *Berchemia*



8. ブドウ属 種子 *Vitis*



9. ヒョウタン属 種子
Lagenaria leucantha
Rosby-gourda Makino



10. オニバス属 果実
Euryale ferox
Salisb.



11. シジミ *Corbicula japonica* Prime



12. オキシジミ *Cylna orientalis* Sowerby



13. ハマグリ *Meretric lusoria* Roding



14. ウミニナ
Batillaria multiformis
Lischke



15. 不明巻貝



16. マガキ *Crassostrea gigas* Thunberg

(3) 志賀公園遺跡産出の貝類化石

松岡敬二*

名古屋市北区中丸町二丁目の志賀公園遺跡から産出した貝類化石を報告する。貝類化石は、2000年度調査区C区の南壁面から2001年3月12日に採集されたものである。産出層準は、遺跡南壁面に露出する最下位層の22層で、オリーブ黒色粘土質シルト層である。採集された標本は、一括して「ⅡKS00C、P-2、1層、010312」のラベルがつけられ、19個のプラスチック容器にエタノールを含む脱脂綿に挟んで保管されている。1個の容器には、1から数個体を含んでいる。採集された貝類化石は、全体的に保存が悪く、殻皮の一部残ったものや殻の一部が残ったものである。貝類化石を含む22層はオリーブ黒色粘土質シルト層とされているが、化石の周囲の堆積物は砂質部分もありやや粗粒である。

貝類化石のうち、属まで決定できたのがシジミ属の化石だけである。シジミ属の1種 *Corbicula* sp. は、黒色の殻皮だけが残るものと、黒色の殻皮と石灰質の殻が酸化鉄に置換したものがある。殻皮に輪肋は認められる。しかし、鋸歯部が破損しており、種の同定には至らなかった。その他に数種の貝殻片は、殻質の状態から海産種のものであると考えられる。これらは、石灰質の殻が酸化鉄に置換しているが、いずれも断片的なものと、殻の表面著しく溶触しており、同定に耐えるものはなかった。

貝類化石の産出状況や保存状態から、現地性のもは含まれていないと判断した。一番保存状態のよかったシジミ属の1種でも、合弁のものではなく、片殻のものも完全に外形をとどめていなかった。海産種の貝殻片は、断片的かつ強く磨耗ないし溶触していることから、貝の死後かなり水流により運ばれたり、堆積の前に殻の溶けやすい環境下にさらされていた可能性が高い。

貝類化石の産出した22層は、考古学的所見に基づくと、河道跡の堆積物と解釈されている(木川2001)。貝類化石の産状からは、河道にすんでいたものではないことを示している。貝類化石の産

出した地層の標高が2.74～3.03mであることから、当時の志賀公園遺跡の場所は、海に近く、海水の影響を受けやすい場所であったことがうかがえる。仮にそうであれば、潮の干満、高波などにより海産種の遺骸が、遺跡のある場所まで河道を伝わって運ばれ、再堆積することも十分に可能である。

文献

木川正夫 2001「志賀公園遺跡」『平成12年度愛知県埋蔵文化財センター年報』愛知県埋蔵文化財センター、p8-9。

謝辞

本報告を書くにあたり、試料の提供と執筆の機会を与えていただいた愛知県埋蔵文化財センターの鬼頭剛氏、愛知県明和高等学校の森勇一博士に感謝申し上げます。

*豊橋市自然史博物館

(4) 箱状遺物の材質分析

佐藤昌憲*

箱状遺物を光学顕微鏡で観察したところ、滑らかな表面層が観察されたので約1mg以下の微量試料を採取し顕微赤外分析（FT-IR）法で材質を調査した。試料は金属台上でプレスして薄層とし、そのまま装置に取り付け透過法で赤外スペクトルを測定した。図の縦軸は透過率（%）であり、物質が特定の赤外光を吸収するとスペクトル（曲線）は下に下がり、下に凸状のピークになる。横軸は波数（単位は cm^{-1} （カイザーと呼ぶ））で赤外エネルギーに比例し、左方向ほどエネルギーは大きい。スペクトルのパターンは各物質に固有であるため材質の同定ができる。図21の（1）は試料のスペクトル、（2）は現代産の漆のスペクトルである。比較すると漆の特性的な吸収ピーク（約3000カイザーより少し下の鋭い2本の吸収、約

1700カイザーの強い吸収、約1400カイザーの吸収、約1100カイザーの吸収など）は良く一致しており試料は漆であると言える。試料は明るい色調であり、漆層に無機顔料などが含まれている可能性はあるが明確な赤外吸収は見られない。しかし試料スペクトルの約1000カイザー以下の領域にある数本の小さい鋭い吸収は無機顔料に由来する可能性はある。無機顔料の同定には他の方法による調査が必要である。漆の下層（母体）の材質は、漆の強い吸収に隠されているのでわからない。恐らく植物性物質と考えられるがこれも他の分析方法による調査が必要である。

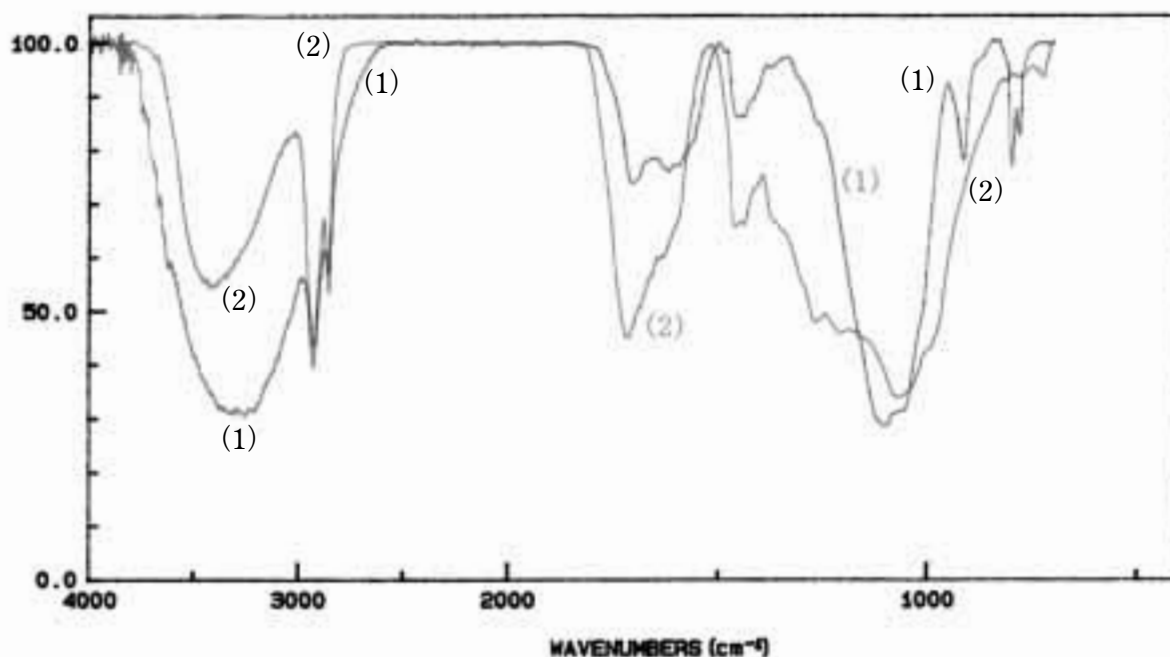


図21 志賀公園遺跡箱状製品のFT-IR分析結果

*奈良文化財研究所／客員

(5) 志賀公園遺跡出土木製品の樹種同定

植田弥生*

1. はじめに

ここでは、古墳時代(5世紀)の農具・杭・板など8点、古代(主に7世紀)の主に流路NR01から出土した農具・板・曲物・斎串・杭・下駄など160点、中世の曲物底板・杭など4点、合計177点の樹種同定結果を報告する。

前回の調査地区からも、7～8世紀の木製品が多く出土し、その樹種が報告されている(松葉2001)。今回さらに樹種同定試料数が増えた事により、当遺跡で利用されていた木製品の全体的な樹種選択性が、より明瞭となり、その特徴について若干の考察をおこなった。

2. 試料と方法

木製品から材の3方向(横断面・接線断面・放射断面)を見定めて、剃刀を用いて各方向の薄い切片を剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロールで封入し、永久プレパラート(材組織標本)を作成した。この材組織標本を、光学顕微鏡で40～400倍に拡大し観察した。

材組織標本は、愛知県埋蔵文化財センターに保管されている。

3. 結果

同定結果の一覧(001～177)を、表1-1～1-3に示した(添付CDに収録)。また表8では、古代と時期区分され、主に7世紀の遺物と考えられている木製品を、器種別にその利用樹種を集計した。表9では、古墳(5世紀)と中世に関して、同様に集計した。046・050・052の木製品は、付属品がありその樹種も調べたので合計数は木製品数177点より多くなっている。

検出樹種は、マキ属・モミ属・アカマツ・コウヤマキ・スギ・ヒノキ・アスナロ・ヒノキ科の針葉樹8分類群、ヤナギ属・アカガシ亜属・コナラ節・クヌギ節・シイノキ属・ケヤキ・エノキ属・ムクノキ・クワ属・ナシ亜科・ヤブツバキ・サカキ・ヒサカキの広葉樹13分類群、ユウガオ属の双子葉類のツル性草

本1分類群であった。

主な樹種利用傾向は、次のようであった。全体的にヒノキが圧倒的に多く検出され、斎串・板・曲物・棒・下駄など様々な製品に幅広く利用されている。ヒノキ以外の樹種が選択的に利用されていたと思われる製品もある。燃えさし(火鑽杵)は、アカマツが多い。丸棒は、ヒノキ以外にもマキ属・コウヤマキ・スギなどの針葉樹材とケヤキ・ヤブツバキの広葉樹材も利用されていた。杭は、針葉樹はアスナロ1点だけであり、コナラ節・クヌギ節・サカキなど広葉樹材がほとんどであり、特にコナラ節とクヌギ節が多い。杭材のコナラ節とクヌギ節には、丸木芯持ち材で樹皮が残っているものが多く、その最終年輪は晩材で終わっている杭がほとんどで、1点だけ孔圏が1層形成されているものがあつた。従ってこれらの材は、秋から早春に伐採されたことが判った。鋏・鋤・堅杵・背負子・柄などは、アカガシ亜属・クヌギ節・クワ属・サカキなどの広葉樹材が多く利用されていた。

時期による利用樹種の変化は、古代の試料数がほとんどであり、古墳時代(5世紀)と中世の試料数が少ないので断定はできないが、全期間を通じてヒノキの利用が多く、目だった変化は見られなかった。

4. 考察

様々な製品から圧倒的に多く利用されていたのは、針葉樹のヒノキであった。これは、前回の調査結果(松葉2001)とも一致し、7～8世紀の志賀公園遺跡では恒常的にヒノキの木製品が利用されていた事が確認された。

当遺跡より更に庄内川上流に位置する勝川遺跡においても、8世紀後半や9世紀後半～10世紀の木製品に占めるヒノキの割合は、非常に多い事が報告されている(樋上2002)。樋上(2003)は、勝川遺跡は立地環境からして、庄内川を通じて上流の山地からコウヤマキ・スギ・ヒノキ科の針葉樹材を入手し、遺跡が展開している鳥居松段丘上に成立していたアカガシ亜属を主体とする照葉樹林とコナラ節・クヌギ節が主体の二次林化した森林から広葉樹材を利用していたのではないかと推測している。勝川遺跡より下流に位置する当遺跡は、庄

*株式会社パレオ・ラボ

器種	樹種		針葉樹						広葉樹											合計	
	マキ属	モミ属	アカマツ	コウヤマキ	スギ	ヒノキ	アスナロ	ヒノキ科	アカガシ亜属	コナラ節	クヌギ節	シイノキ属	ケヤキ	エノキ属	クワ属	ナシ亜科	ヤブツバキ	サカキ	広葉樹		ユウガ才属
板		1			1	23						1	1								27
齋串		1				19															20
曲物底板・側板					1	13															14
曲物把手						2															2
曲物の木釘						4															4
下駄				1		11															12
角棒					1	8															9
残材			1	1		6															8
穿孔板(建築部材)					1	6															7
穿孔板						4															4
有挟板						2															2
有挟板(ヘラ未製品)						2															2
燃えさし(火鑽杵)			4			1															5
大足横板						1															1
穿孔有頭棒						1															1
火鑽臼						1															1
有挟板(建築部材)						1															1
有挟棒						1															1
有頭棒						1															1
栓状						1												1			2
槽?						1														1	2
丸太						1	1			1				2							5
丸棒	1			1	1	3		1				1					1				9
杭							1			5	6				1	1		2			16
木錘							1								1				1		3
一木四又鋤											1										1
竪杵											1										1
背負子														1							1
鎌柄?														1							1
木錘状														1							1
クサビ								1													1
多又鋤(鋤)刃部								1													1
ナスビ形曲柄平鋤								1													1
斧柄(未)																		1			1
穿孔角棒(ホゾ付き)																		1			1
縦杓子?												1									1
合計	1	2	5	3	5	113	3	1	3	6	8	1	3	2	5	1	1	5	1	1	170

表8 志賀公園遺跡 古代の器種別の検出樹種比較

内川と矢田川の合流点より南約1kmの庄内川左岸に位置し、標高2.5m前後の沖積地に立地する。

従って当遺跡から出土した豊富な木製品を製造したヒノキ材を供給できたヒノキ林が遺跡周辺に成立していたとは考えにくく、やはり庄内川や矢田川の上流に広がる東濃地域の森林地帯から材を

供給利用していたと考えるのが妥当と思われる。東濃地域の山林はヒノキが豊富であることは良く知られているが、ヒノキ以外にも利用可能な針葉樹としてサワラ・モミ・スギ・コウヤマキも生育している。

モミやスギはヒノキより標高が低い所から生育

しており、ヒノキが尾根筋に多いのに対しスギやモミは溪谷沿いや斜面に多いので、ヒノキよりもモミやスギの方が先に伐採運搬しやすいと思われる。しかし、当遺跡や勝川遺跡からは、モミやスギの出土は非常に少ない。当時は現在の生育状況とは異なりヒノキが入手容易な立地にも豊富に生育していたか、またはヒノキ材を入手することが強く選択されていた可能性がある。現に古代においては、勝川遺跡からは律令祭祀に関する木製品が出土し勝川廃寺が造営されており、当遺跡は地方官衙的性格を帯びていたと考えられている。このような遺跡の性格から、水系上流域にヒノキの豊富な生育地があり入手可能または容易であった事と、ヒノキの材を選択的に必要とした地方都市としての樹種選択的の要求があったと思われる。鈴木(2000)は、全国の古代やその前後の時期に最も多く利用されていた針葉樹材に注目し、スギ・ヒノキ・モミ・サワラのどの樹種が多く利用されていたのかにより、スギ圏・ヒノキ圏・モミ圏・サワラ圏の4つの木材利用文化圏を提唱した。勝川遺跡や当遺跡は、鈴木が提唱するサワラ圏とヒノキ圏の境界付近に位置し、データが少ないので破線で引かれた付近であり、ヒノキが多く利用されていた事が確認されたと言える。

その一方で、杭材は主に複数の広葉樹材であり、多くは樹皮付きの丸木芯持ちである事から、遺跡周辺のおそらく名古屋台地北端に成立していた森林から入手したと推測される。そして二次林要素であるコナラ節やクスギ節の杭材の多くは、最終年輪部位から晩秋から早春に伐採された材が多い事が読み取れた。杭材など広葉樹材は、勝川遺跡と同様に当遺跡でも、広葉樹材は身近な森林を利用していたことを、連想させられた。

引用文献

- 松葉礼子 2001 「志賀公園遺跡出土木材の樹種同定」『志賀公園遺跡』p115-125、愛知県埋蔵文化財センター。
- 樋上 昇 2002 「樹種からみた尾張地域の木製品」『考古学フォーラム』15、p2-28、考古学フォーラム。
- 樋上 昇 2003 「春日井市勝川遺跡出土木製品の再検討」『研究紀要』第4号、p10-33、愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木三男 2000 「木材」『考古学と植物学』p151-187、同成社。

		樹種		針葉樹					広葉樹				合計
		スギ	ヒノキ	アスナロ	ヤナギ属	アカガシ亜属	クスギ節	ムクノキ	ヒサカキ				
古墳	器種												
	曲柄二又鋸刃部					1							1
	有挾板(機織具?)	1											1
	杭			1	1								2
	板		1						1	1			3
	残板		1										1
中世	有挾板		1										1
	曲物底板		2										2
	杭							1					1
合計		1	5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	12

表9 志賀公園遺跡 古墳と中世の検出樹種比較

(6) 志賀公園遺跡から産出した 昆虫化石について

森 勇一*・上田恭子**

1. はじめに

先史～歴史時代の遺物包含層から発見された昆虫化石を用い、植生や古環境、人為による自然改変などについての情報を得るための研究は、これまでに多数行われてきた(森1994a, 1997, 1998, 1999)。本論は、志賀公園遺跡の遺物包含層より産出した昆虫化石とその意義について述べる。

2. 試料および分析方法

志賀公園遺跡は、名古屋市北区中丸町二丁目に位置する弥生時代から古墳時代、および古代・中世を中心とした複合遺跡である。本遺跡は庄内川の形成した沖積平野内に所在している。

昆虫分析試料は、志賀公園遺跡00C区の南壁断面から、愛知県埋蔵文化財センター科学分析室の鬼頭剛調査研究員により採取されたものである。試料は、遺跡をほぼ南北に貫流する庄内川水系の自然流路(NR01)を埋積する河道内堆積物から得られた。分析試料は、河道内堆積物の最下層(ⅡKS00CP-2の1層;試料1)と、これより約0.5m上位に堆積した地層(同4層;試料2)の計2サンプル採取されており、堆積物の層相は、試料1については暗緑色粘土質シルト層、試料2では黒褐色粘土層であった。両試料の相対年代は出土遺物より7世紀後半と推定されている(愛知県埋蔵文化財センター2001)。昆虫化石の抽出は、同一試料についてブロック割り法と、水洗浮遊選別(フローテーション)法を併用して実施した。浮遊選別にあたっては、径200mm, 500 μ mの篩を使用した。

昆虫化石の同定は、筆者採集の現生標本と実体顕微鏡下で1点ずつ比較のうえ実施した。昆虫化石は、いずれも節片に分離した状態で検出されており、そのため、本論に記した産出点数は、昆虫の個体数を示したものではない。

3. 昆虫化石の分析結果

A. ブロック割り法

志賀公園遺跡の分析試料中よりブロック割り法により抽出された昆虫化石は、217点であった(表10)。試料ごとにみると、試料1が84点、試料2が133点であった。試料1および試料2について分析結果に有意な差が認められなかったため、ここでは一括して述べる。なお、産出した昆虫化石のうち、主なものについては、図22に実体顕微鏡写真を掲げた。

昆虫化石を分類群ごとにみると、目レベルまで同定したものの2目2点、科レベルまで分類できたものの12科82点、亜科レベル3亜科7点、族レベル2族2点、属レベル6属30点、種まで同定できたものは20種72点であった。これ以外に、不明甲虫とした昆虫が21点存在する。検出部位別では、上翅(Elytron)が最も多く、このほか前胸背板(Pronotum)、腿脛節(Legs)、腹部(Abdomen)点などが目だった。

生態別では、陸生の食植性昆虫が58点、水生昆虫が55点、食肉性ないし雑食性の地表性歩行虫および食糞・食屍性昆虫が計72点確認された。

特徴的な種についてみると、まず地表性歩行虫では、人為度の高い裸地的環境下の人糞や獣糞に集まるコブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis* が計11点検出され、これ以外におそらく同種かこの近縁種に同定されるエンマコガネ属 *Onthophagus* sp. が計3点発見された。その他の食糞性昆虫では、獣糞に多いマグソコガネ *Aphodius rectus* が3点、同じく獣糞に多く人糞にも来るコマグソコガネ *Aphodius pusilus* が1点など、食糞性昆虫4分類群が計18点確認された。

また、食屍性の歩行虫では、人家周辺の畑作地・ゴミ捨て場などに多く、動物の糞に集まるハエのサナギや腐肉などを食するエンマムシ科 *Histeridae* が2点、屍体や腐肉などに多いシテムシ科 *Sillphidae* が計2点発見された。これに、同様の環境下に生息することが多いハネカクシ科 *Staphylinidae* が12点伴われた。

食糞性および食屍性昆虫以外の地表性歩行虫では、属および種名が未同定のオサムシ科 *Carabidae* が計29点産出した。本分類群は、腿脛節(10点)

・・*愛知県立明和高等学校

生態	和名	学名	IKS00C P-2 1層	IKS00C P-2 4層	小計			
水	食肉性	ゲンゴロウ科	Dytiscidae	P1	P1 E1 A1	4		
		ゲンゴロウ	<i>Cybister japonicus</i> Sharp	P1	P1 E6	8		
		ヒメゲンゴロウ亜科	Colymbetinae	T2	P1 T1	4		
		キベリクロヒメゲンゴロウ	<i>Ilybius apicalis</i> Sharp	E4	E1	5		
		オオミズスマシ	<i>Dineutus orientalis</i> Moeber	E2	E1	3		
		ミズスマシ	<i>Gyrinus japonicus</i> Sharp		E1 T1	2		
生	食植性	ガムシ科	Hydrophilidae	E2 A1 L2	P2 E3	10		
		ガムシ	<i>Hydrophilus acuminatus</i> Motschulsky		A1 L1	2		
		コガムシ	<i>Hydrochara affinis</i> (Sharp)	E2 L1	L1	4		
		ヒメガムシ	<i>Sternolophus rufipes</i> (Fabricius)		L1	3		
		マメガムシ	<i>Regimbartia attenuata</i> (Fabricius)	E2	E1	3		
		セマルガムシ	<i>Coelostoma stultum</i> (Walker)	P1 E3	P1	5		
地	食糞性	エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.		S1 E2	4		
		コブマルエンマコガネ	<i>Onthophagus atripennis</i> Waterhouse		A2 L1	3		
		マクゾコガネ	<i>Aphodius rectus</i> (Motschulsky)	P3 E3 T4	T1	11		
		コマグゾコガネ	<i>Aphodius pusilus</i> (Herbst)	E1 T1	E1	3		
		エンマムシ科	Histeridae		E1 A1	2		
		シテムシ科	Silphidae		A1 T1	2		
表	食肉・雑食性	オサムシ科	Carabidae	H1 E2 T2 A2 L2	P1 E4 T1 A5 L8 O1	29		
		トックリゴミムシ属	<i>Lachnocrepis</i> sp.	P1 E1	P1	3		
		ミズギワゴミムシ属	<i>Bembidion</i> sp.		E1	1		
		ツヤヒラタゴミムシ属	<i>Synuchus</i> sp.		E3	4		
		ヒラタゴミムシ族	Platynini	P1		1		
		キマワリ属	<i>Plesiophthalmus</i> sp.		E2	2		
		ハネカクシ科	Staphylinidae	P2 A1	P1 E3 T1 A4	12		
		コガネムシ科	Scarabaeidae	E2		2		
		サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	P1 A1 L5	P2 E2 A2 L4	17		
		ドウガネブイブイ	<i>Anomala cuprea</i> Hope		P1 E1	2		
陸	食植性	アオドウガネ	<i>Anomala albopilosa</i> Hope	T1	P1	2		
		ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	H1 S1 P2	P4 E2	10		
		コガネムシ	<i>Mimela splendens</i> Gyllenhal	T1	T1	2		
		ヒメカンショコガネ	<i>Apogonia amida</i> Lewis		E2	2		
		クロコガネ	<i>Holotrichia kiotoensis</i> Brenske		H1	1		
		ハナムグリ亜科	Cetoniinae	E1	A1	2		
		カミキリムシ科	Cerambycidae	L1	E1 L1	3		
		コメツキムシ科	Elateridae	E1	P1 E1	3		
		ハムシ科	Chrysomelidae	E2 A1	E4 L1	8		
		ノミハムシ亜科	Alticinae	E1		1		
		サビキコリ族	Agrypnini		P1	1		
		イネノクロカメムシ	<i>Scotinophara lurida</i> Burmeister		S1 A1	2		
		その他	その他	デントウムシ科	Coccinellidae		E1	1
				アリ科	Formicidae	A1	H2 A3	6
トンボ目	Odonata				T1	1		
双翅目	Diptera			C1		1		
不明甲虫	Coleoptera			P1 E3 L1 O1	E3 A1 O11	21		
合計				84	133	217		

(検出部位凡例)

H(Head):頭部 An(Antenna):触角 M(Mandible):大腸 S(Scutellum):小橋板 P(Pronotum):前胸背板 C(Chrysalis):蛹

E(Elytron):鞘翅 W(Wing):上翅 T(Thorax):胸部 A(Abdomen):腹部 L(Leg):腿脛節 O(Other):その他

表 10 志賀公園遺跡から産出した昆虫化石 (ブロック割り法)

をはじめ、上翅 (6点)・胸部 (3点)・腹部腹板 (7点) など、多数の部位が確認された。オサムシ科に所属する昆虫は、体節片のみによる種の同定はきわめて難しく、そのため、本分類群の多産だけから、生息環境や食性など詳細な情報を得ることはできない。雑食性の地表性歩行虫では湿潤地表面上に多いツヤヒラタゴミムシ属 *Synuchus* sp. が4点、ほぼ同様の地表環境に生息するトックリゴミムシ属 *Lachnocrepis* sp. が3点、ミズギワゴミムシ属 *Bembidion* sp. が1点、ヒラタゴミムシ族 Platynini が1点見いだされた。また、倒木や樹木付近の地表面上に多いキマワリ属 *Plesiophthalmus* sp. が2点確認された。

陸生の食植性昆虫では果樹や畑作物などを加害するヒメコガネ *Anomala rufocuprea* (10点)、および種を同定することができないものの同種と考えてよいサクラコガネ属 *Anomala* sp. の体節片が計17点検出された。このほか、ドウガネブイブイ *A. cuprea* (2点)、アオドウガネ *A. albopilosa* (2点)、ヒメカンショコガネ *Apogonia amida* (2点)、コガネムシ *Mimela splendens* (2点) など、畑作地に多い昆虫が認められた。また、産出点数は少ないものの、稲作害虫であるイネノクロカメムシ *Scotinophara lurida* が計2点発見された。

水生昆虫では、食肉性のゲンゴロウ *Cybister japonicus* (8点)、キベリクロヒメゲンゴロウ *Ilybius*

apicalis (5点)、オオミズスマシ *Dineutus orientalis* (3点)、ミズスマシ *Gyrinus japonicus* (2点) などが発見され、また食植性の水生昆虫ではガムシ *Hydrophilus acuminatus* (3点)、コガムシ *Hydrochara affinis* (4点)、ヒメガムシ *Sternolophus rufipes* (1点)、マメガムシ *Regimbartis attenuata* (3点)、セマルガムシ *Coelostoma stultum* (5点)、および稲作害虫として知られるイネネクイハムシ *Donacia provosti* (3点) など多種・多様な昆虫が確認されている。

B. 水洗浮遊選別法

水洗浮遊選別（フローテーション）法により、試料中より検出された昆虫化石は計86点であった。うち、1層が64点（表11）、4層が22点（表12）であった。これらのうちのいくつかについては、図22に実体顕微鏡写真を掲げた。

水洗浮遊選別法の特徴として、検出される昆虫片が小さいことがあげられる。そのため、種の同定まで至らず、科や属単位の同定にとどまったものも多かった。試料1と2では昆虫化石の産出傾向にとくに差が認められないため、ブロック割り法同様一括して論ずる。

出現昆虫を分類群ごとにみると、目レベルまで同定したもの2目4点、科レベルまで分類できたもの9科51点、亜科レベル1亜科1点、属レベル3属8点、種まで同定できたものは9種13点であった。これ以外に、不明甲虫とした昆虫が計21点検出された。

主な出現種では、陸生の食植性昆虫で畑作害虫として知られるヒメコガネが3点、同じく陸生・食植性昆虫で畑作害虫の一種ドウガネブイブイが1点、両種より小型の食植性昆虫で主にマメ類を加害するマメコガネ *Popillia japonica* (1点)、果樹等の花粉を食するクロハナムグリ *Glycyphana fulvistemma* (1点) など、人為度の高い畑作地、人間が介在した植生の存在を示す昆虫類が見いだされた。また、水生の食植性昆虫で水田指標昆虫の一種セマルガムシが2点、同じく水田をはじめ流れの乏しい水域を好む肉食性のコガシラミズムシ *Peltodytes intermedius* (2点)、同様の止水水域を好むミズスマシ (1点) などが検出された。

No.	昆虫名	学名	部位	食性	生態
1	ハムシ科	Chrysomelidae	左上翅	食植性	好植性
2	ハムシ科	Chrysomelidae	右上翅	食植性	好植性
3	ミスネワゴミシ属	<i>Bembidion</i> sp.	左上翅	雑食性	地表性
4	オサムシ科	Carabidae	腹部	雑食性	地表性
5	ゾウムシ科	Curculionidae	口吻	食植性	好植性
6	オサムシ科	Carabidae	腹部	雑食性	地表性
7	不明甲虫	Coleoptera	左上翅	不明	不明
8	ゲンゴロウ科	Dytiscidae	腹部	食肉性	水生
9	不明甲虫	Coleoptera	中胸腹板	不明	不明
10	ゾウムシ科	Curculionidae	中胸腹板	食植性	好植性
11	ハネカクシ科	Staphylinidae	前胸背板	雑食性	地表性
12	アリ科	Formicidae	頭部	雑食性	地表性
13	ハネカクシ科	Staphylinidae	腹部腹板	雑食性	地表性
14	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	上翅片	食植性	好植性
15	ハネカクシ科	Staphylinidae	腹部腹板	雑食性	地表性
16	ゾウムシ科	Curculionidae	中胸腹板	食植性	好植性
17	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	上翅片	食植性	好植性
18	ハネカクシ科	Staphylinidae	右上翅	雑食性	地表性
19	オサムシ科	Carabidae	腹部	雑食性	地表性
20	オサムシ科	Carabidae	前胸背板	雑食性	地表性
21	オサムシ科	Carabidae	腹部	雑食性	地表性
22	セマルガムシ	<i>Coelostoma stultum</i> (Walker)	右上翅片	食植性	水生
23	不明甲虫	Coleoptera	上翅片	不明	不明
24	セマルガムシ	<i>Coelostoma stultum</i> (Walker)	前胸背板	食植性	水生
25	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	中胸腹板	食植性	好植性
26	コガムシ科	Scarabaeidae	上翅片	食植性	好植性
27	ドウガネブイブイ	<i>Anomala cuprea</i> Hope	腹部	食植性	好植性
28	ハネカクシ科	Staphylinidae	腹部背板	雑食性	地表性
29	不明甲虫	Coleoptera	部位不明	不明	不明
30	双翅目	Diptera	胴体	雑食性	地表性
31	コガネムシ科	Scarabaeidae	上翅片	食植性	好植性
32	コガシラミズムシ	<i>Peltodytes intermedius</i> (Sharp)	前胸背板	食肉性	水生
33	オサムシ科	Carabidae	中胸腹板	雑食性	地表性
34	ガムシ科	Hydrophilidae	上翅片	食植性	水生
35	ミズスマシ	<i>Gyrinus japonicus</i> Sharp	左上翅	食肉性	水生
36	オサムシ科	Carabidae	上翅片	雑食性	地表性
37	コガネムシ科	Scarabaeidae	上翅片	食植性	好植性
38	オサムシ科	Carabidae	腹部	雑食性	地表性
39	不明甲虫	Coleoptera	部位不明	不明	不明
40	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	上翅片	食植性	好植性
41	不明甲虫	Coleoptera	上翅片	不明	不明
42	オサムシ科	Carabidae	腹部	雑食性	地表性
43	オサムシ科	Carabidae	上翅片	雑食性	地表性
44	マメコガネ	<i>Regimbartia attenuata</i> (Fabricius)	左上翅	食植性	水生
45	不明甲虫	Coleoptera	頭部	不明	不明
46	オサムシ科	Carabidae	上翅片	雑食性	地表性
47	ハムシ科	Chrysomelidae	腹部	食植性	好植性
48	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	前胸背板片	食植性	好植性
49	コマダツコガネ	<i>Aphodius pusillus</i> (Herbst)	左上翅	食肉性	地表性
50	ハネカクシ科	Staphylinidae	腹部腹板	雑食性	地表性
51	ハネカクシ科	Staphylinidae	前胸背板	雑食性	地表性
52	コガネムシ科	Scarabaeidae	上翅片	食植性	好植性
53	コガネムシ科	Scarabaeidae	右上翅	食植性	好植性
54	クロハナムグリ	<i>Glycyphana fulvistemma</i> Motschulsky	小胸板	食植性	好植性
55	マメコガネ	<i>Popillia japonica</i> Newmann	前胸節	食植性	好植性
56	カメムシ目	Hemiptera	上翅	食植性	好植性
57	コガネムシ科	Scarabaeidae	上翅片	食植性	好植性
58	オサムシ科	Carabidae	腹部腹板	雑食性	地表性
59	オサムシ科	Carabidae	上翅片	雑食性	地表性
60	オサムシ科	Carabidae	腹部腹板	雑食性	地表性
61	不明甲虫	Coleoptera	上翅片	不明	不明
62	ゴミシダマシ科	Tenebrionidae	左上翅	雑食性	地表性
63	ゴミシダマシ科	Tenebrionidae	左上翅	雑食性	地表性
64	ゾウムシ科	Curculionidae	左上翅	食植性	好植性

表11 志賀公園遺跡 (P-2 1層) 水洗浮遊選別法

No.	昆虫名	学名	部位	食性	生態
1	ハナムグリ亜科	Cetoniinae	腿節	食植性	好植性
2	オサムシ科	Carabidae	左上翅	雑食性	地表性
3	双翅目	Diptera	胴体	雑食性	地表性
4	コガシラミズムシ	<i>Peltodytes intermedius</i> (Sharp)	左上翅	食肉性	水生
5	ハネカクシ科	Staphylinidae	腹部腹板	雑食性	地表性
6	ゴミシダマシ科	Tenebrionidae	上翅片	雑食性	地表性
7	エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.	前胸腹板	食肉性	地表性
8	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	頭部	食植性	好植性
9	エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.	前胸背板	食肉性	地表性
10	オサムシ科	Carabidae	右上翅	雑食性	地表性
11	ハネカクシ科	Staphylinidae	腹部腹板	雑食性	地表性
12	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	上翅片	食植性	好植性
13	双翅目	Diptera	胴体	雑食性	地表性
14	不明甲虫	Coleoptera	腹部	不明	不明
15	コガネムシ科	Scarabaeidae	腹部	食植性	好植性
16	オサムシ科	Carabidae	上翅片	雑食性	地表性
17	ハムシ科	Chrysomelidae	上翅片	食植性	好植性
18	オサムシ科	Carabidae	大腿	雑食性	地表性
19	エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.	前胸背板	食肉性	地表性
20	コガネムシ科	Scarabaeidae	腹部腹板	食植性	好植性
21	オサムシ科	Carabidae	前胸背板	雑食性	地表性
22	ゾウムシ科	Curculionidae	右上翅	食植性	好植性

表12 志賀公園遺跡 (P-2 4層) 水洗浮遊選別法

属や科レベルまで分類できた昆虫では、食植性のヒメコガネやドウガネブイブイなどに由来する昆虫片と考えられるサクラコガネ属が4点、これらを含む分類群であるコガネムシ科が計8点発見された。このほか、地表性昆虫では食肉ないし雑食性のオサムシ科が19点、同じく食肉ないし雑食性昆虫のハネカクシ科が9点、食糞性昆虫であるエンマコガネ属が3点認められた。

4. 昆虫群集が示す古環境

志賀公園遺跡の河道内堆積物より得られた昆虫化石群集をみると、全体に地表性昆虫の出現率が高いことにより特徴づけられる。このことは、7世紀後半のころ、本遺跡周辺の地表環境が多様であり、彼らの生息を許す餌資源が遺跡内に豊富に存在したことを示している。試料中より多数検出されたエンマコガネ属やコブマルエンマコガネ・マグソコガネ・コマグソコガネ・エンマムシ科・シテムシ科などの食糞ないし食屍性の地表性昆虫は、従来、都市型昆虫（森 1994b・1997）とされ、人の集中居住や、人為による環境汚染を示すものとして注目される。

計2点産出したイネノクロカメムシは、体長8.0～10mm、半翅目異翅亜目カメムシ科（PENTATOMIDAE）に属する稲作害虫である。本種は、アッサムから中国・台湾・朝鮮南部より日本の南西部にかけての広い地域に分布し、北海道からは知られていない。年1世代でイネ単食性である。成虫態のままマツや雑木の落葉の下に潜って越冬する習性があり、越冬成虫は6～7月のころ本田に飛来して、口吻を茎に差し込み吸汁・加害する。イネノクロカメムシは周囲に丘陵地を控えた水田に生息しており、成虫越冬するため、排水の悪い湿田や強湿田に決して生息することのない乾田型水田の指標種である。また、計3点産出したイネネクイハムシは、幼虫がイネの根を加害する農林有害昆虫として著名である。セマルガムシやコガムシ・マメガムシ・ヒメガムシ・ミズスマシ・キベリクロヒメゲンゴロウなどの水生昆虫も、水田内に多い昆虫（水田指標昆虫）である。このため、志賀公園遺跡の周辺には、一時期、水田が存在した可能性が高い。

また、ブロック割り法および水洗浮遊選別の両分析を通じ、多数検出されたヒメコガネ・ヒメカンショコガネ・マメコガネ・ドウガネブイブイなどの畑作害虫の出現結果からは、水稻耕作地背後の丘陵地や台地上にマメ類や各種畑作物・クワ・果樹などが植栽された人為度の高い植生空間が展開していたと推定される。

なお、同じ志賀公園遺跡の中世の井戸からカメ遺骸とともに産出した昆虫化石の分析結果を調査する過程で、この時期の昆虫群集に、ヒメコガネ・サクラコガネ・マメコガネなどの畑作害虫が多数認められたことから、中世のころ、同遺跡周辺に人為度の高い畑作空間が存在した可能性について指摘した（森 2001）。今回の分析結果は、志賀公園遺跡が位置する濃尾平野北東部では、畑作地の出現がすでに7世紀にまで遡ることが示されたといえる。

5. まとめ

志賀公園遺跡の遺物包含層中より産出した昆虫化石を同定・分析し、その群集組成から当時の古環境を復元した。昆虫群集は、コブマルエンマコガネ・マグソコガネ・クロマルエンマコガネなど人糞や獣糞に集まる食糞性昆虫で多数が占められた。このほか、地表面上に存在するエサを求めて徘徊する地表性歩行虫が多く検出され、遺跡周辺は人為による環境汚染が進行していたことを示している。

植生環境に関する情報では、稲作害虫として著名なイネノクロカメムシやイネネクイハムシが検出されたことから、志賀公園遺跡周辺に水田（乾田タイプの水田）が存在したことが考えられる。このことは、水田指標昆虫として知られるセマルガムシやガムシ・コガムシ・マメガムシ・ゲンゴロウ・キベリクロヒメゲンゴロウなどの水生昆虫の出現によっても示される。

また、イモ類やマメ・果樹等を食害するヒメコガネ・ヒメカンショコガネ・マメコガネ・コガネムシ・ドウガネブイブイなどの畑作害虫の出現からは、志賀公園遺跡付近に人為度の高い畑作空間が展開していたことが推定される。



1. ミズスマシ *Gyrinus japonicus* Sharp
 右上翅 長さ 3.1 × 1.7mm
 フローテーション No.126



2. マメガムシ *Regimbartia attenuata* (Fabricius)
 左上翅片 長さ 2.2 × 1.2mm
 フローテーション No.44



3. クロハナムグリ *Glycyphana fulvitemma* Motschulsky
 小楯板 長さ 1.2 × 1.2mm
 フローテーション No.54



4. コブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis* Waterhouse
 前胸背板 長さ 4.0 × 5.0mm
 ブロック割り No.38



5. ヒメコガネ *Anomala urfocuprea* Motschulsky
 前胸背板 長さ 4.0 × 7.0mm
 ブロック割り No.62



6. コガシラミズムシ *Peltodytes intermedius* (Sharp)
 前胸背板 長さ 0.7 × 1.8mm
 フローテーション No.32



7. イネノクロカメムシ *Scotinophara lurida* Burmeister
 小楯板 長さ 3.3 × 2.6mm
 ブロック割り No.41



8. イネノクイハムシ *Donacia provosti* Fairmaire
 右上翅 長さ 5.0 × 1.3mm
 ブロック割り No.60



9. ドウガネブイブイ *Anomala cuprea* Hope
 右上翅片 長さ 10.0 × 8.0mm
 ブロック割り No.86

図 22 志賀公園遺跡で算出した昆虫化石の顕微鏡写真

文献

- 愛知県埋蔵文化財センター2001『愛知県埋蔵文化財センター年報 平成12年度』、p8-9。
- 森 勇一1994a「昆虫化石による先史～歴史時代における古環境の変遷の復元」『第四紀研究』33(5)、p331-349。
- 森 勇一1994b「都市型昆虫の起源－愛知県朝日遺跡における昆虫群集について－ 特集 考古遺跡の昆虫遺体」『昆虫と自然』29(8)、ニューサイエンス社、p4-12。
- 森 勇一1995「静岡県川合遺跡（八反田地区）より得られた昆虫群集について」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書（第63集）川合遺跡（八反田地区Ⅱ）』静岡県埋蔵文化財調査研究所、p327-329。
- 森 勇一1996「第2トレンチ3号井戸から産した昆虫群集」『高崎市文化財調査報告書（第145集）下中居条里遺跡，都市計画道路下中居矢中線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』。

第5章 総括

(1) 中世・戦国の遺構群と景観

地表面に人為的な改変がなければ、本来は現地表からでも埋没旧地表が把握できるはずである。しかし、現在の地表面の多くは現代の土地改良・区画整理で様変わりし、旧地表の把握に困難を伴う。そこで頼りになるのが明治の地籍図である。

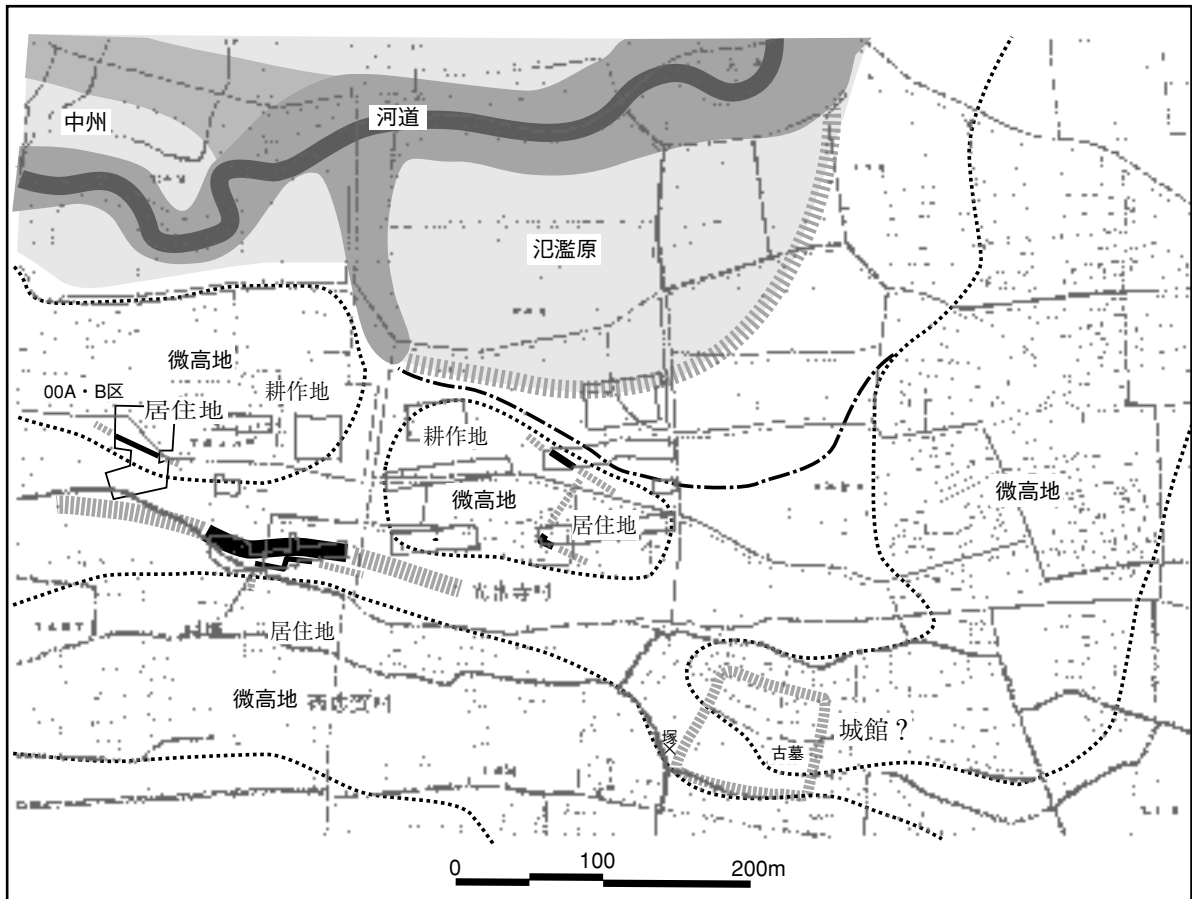
地籍図には畑や田、用水・道・宅地などが表現されており、とくに畑や田は旧地表の起伏に対応している場合がある。中世城館も、この方法で濠や土塁の位置が推定されているように、信頼度は高い。これに発掘調査成果が加われば確度も高まる。

図23は志賀公園遺跡周辺の地籍図に調査成果

を描き加えたものである。図24は調査成果の全体図である。調査の結果、微高地相当部分の水田は旧地表を大きく削平していることが判明した。中世・戦国と古代の地表面が同一か異なるのか直接判断する資料は無いが、00A区のSD01から10世紀代の遺物が出土しており、古代地表面の継続は窺える。00B区古代河道上面の埋没がそれほど進行していないことを考慮すれば、古代から中世にかけて大幅な地表の更新はなかった可能性がある。

要点のみ述べる。北には河道と氾濫原があり、北東の97B区で縁辺が見つかった。氾濫原に沿って微高地が逆L字状にのびる。微高地上には複数の居住地が展開し、その周囲や居住地間には空閑地がある。空閑地には土坑か溝が掘削

図23 地籍図と主要遺構の合成図（14世紀後半から16世紀の景観）



される。96A 区の溝は古代の河道群に重複し、この部分が中世にも低地であったことを窺わせる。00B 区では墓坑が群在し、低地が墓地として利用されていたことを示している。98I 区・96D 区・96C 区では土坑以外検出されていないが、門間沼遺跡の調査所見を参考にすれば畠であった可能性が高い。畠も通路など低い部分に墓坑が展開する場合があります、参考になろう。00A 区は池状遺構の存在から、当初は畠が展開し、後に居住地になったと考えられる。居住地は 15 世紀前半に終息し、それ以後は 96A 区の南や 97F 区・98J 区・98K 区付近で大溝に区画された内部に移る。大溝で区画された屋敷地が展開する集住地が形成される。

(2) 古代の遺構群と景観

地籍図から推定することは不可能である。北東の河道は蛇行し、南の河道は直線的である。前者は中世にも河道が重複し、氾濫原の縁辺が継続している。後者は人工的な印象を受ける。建物群は 3ヶ所に認められるが、竪穴建物が主で、同時期の建物が複数集中するわけではない。散居的で閑散としている。一角には水田もあり、農村景観そのものである。

注目されるのは直線的な河道から出土した多量の遺物である。特に木製品には祭祀具が含まれており、律令祭祀的な色彩が濃い。流れ着いた場

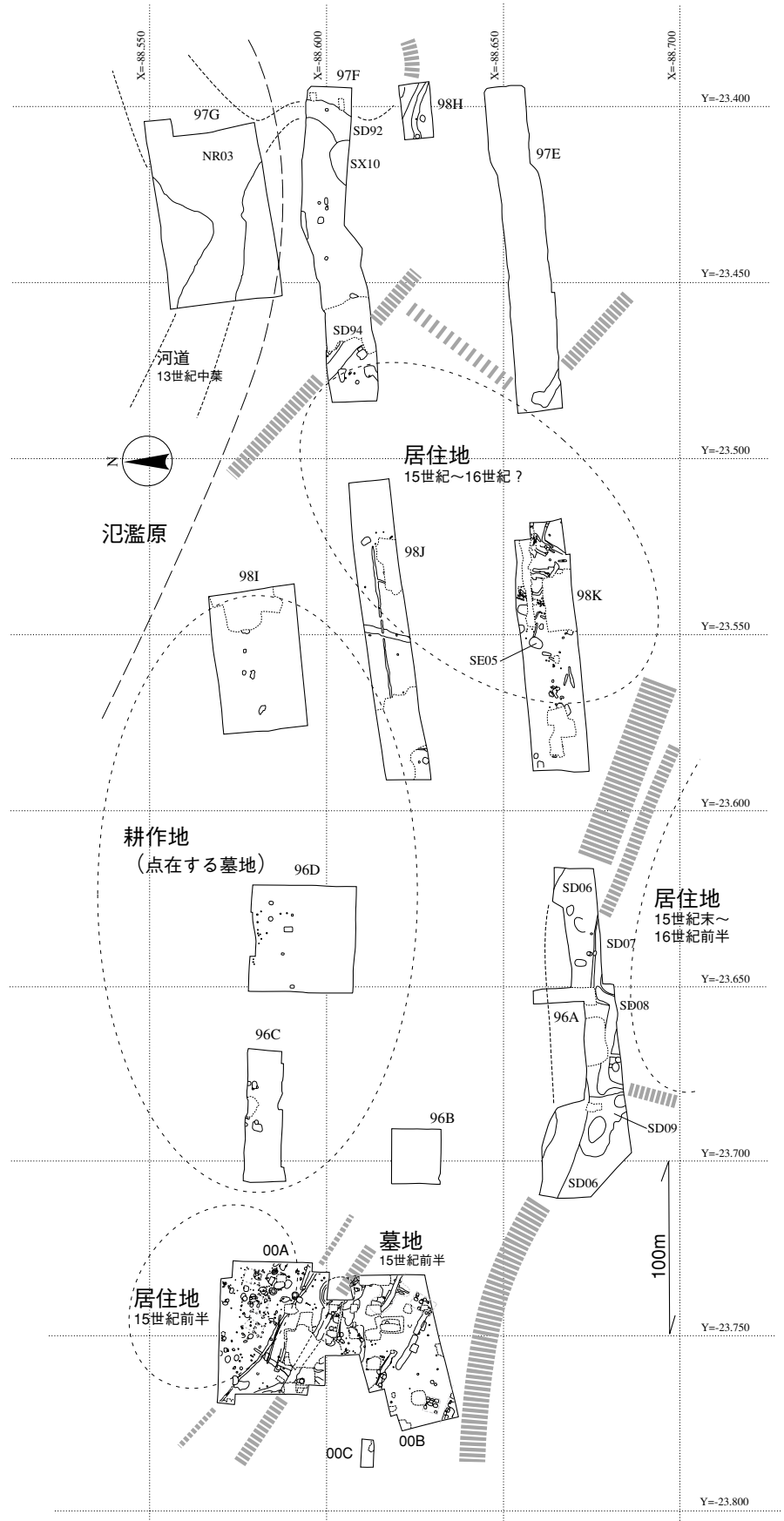


図 24 中世・戦国遺構全体図

所とは関係なく、本来は河道の上流、南西方向に官公的地区が存在したことを示す。志賀公園遺跡の範囲は明確ではないが、調査範囲に関しては氾濫原縁辺の農村といったイメージであり、官公的性格とは程遠い。中心地区から離れた場所と考えられるが、距離を考えるためにも庄内川下流の古代遺跡についてあらためて注目する必要がある。

(3) 弥生・古墳の遺構群と景観

現地表下約3mに埋没し、発掘調査によって初めて確認できる。

00A区・00B区ともに上下2面の水田が検出された。弥生時代から5世紀までは多少の埋没はあっても、急激な地表面の更新は無いようだ。集落(居住地)、墓地、水田、荒蕪地の組み合わせが基本であり、古代になって河道の活動が活発化し、景観の主要要素に加わる。

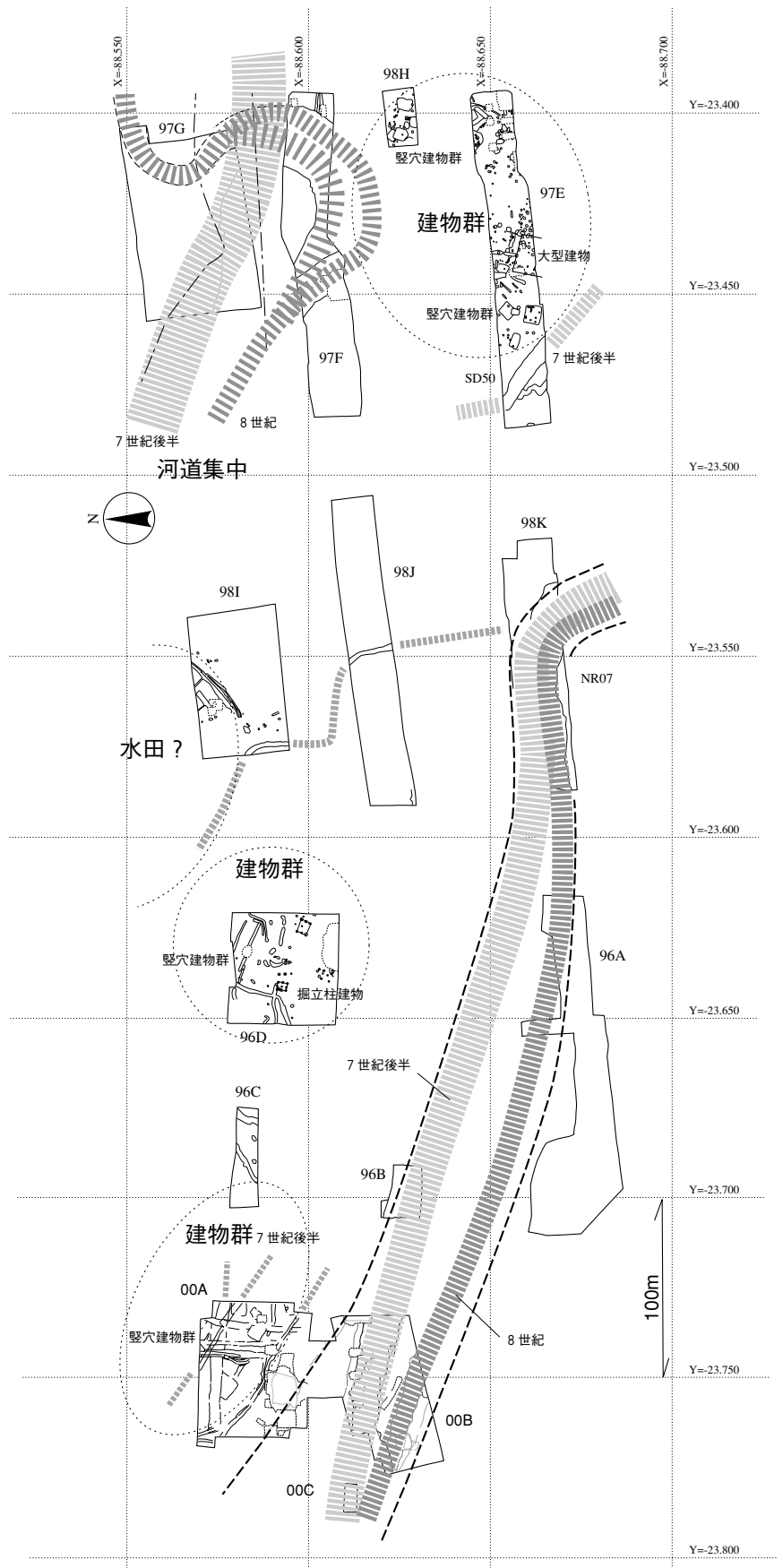


図 25 古代遺構全体図

(2) 古代の木製品について

今回の調査では、古墳中期・古代・中世の木製品が多数出土し、うち177点を報告した。各時期の木製品を器種分類し、それぞれの使用樹種をまとめたのが図27である。

古墳中期・中世は点数が少なく、器種組成を復元するにはいたらない。古代は165点の木製品を掲載した。うち、86～95の杭以外はすべて自然流路NR01からの出土である。共伴する須恵器の所属時期はおおむね東山50～岩崎17号窯式期に属する。今回、そのうち5点についてAMS法による年代測定をおこない、それぞれA.D.540(30)、650(71)、435(82)、545/550/555(101)、655(161)の年代値を得た。前述の須恵器の推定年代を大きくはずれる3点をのぞくと、A.D.650年前後に2点集中することから、須恵器の実年代もほぼ650年前後(7世紀中葉)とみてよいのではないと思われる。

次に器種組成をみると、祭祀具以下、ほぼひととおりの器種が揃っている。なかでも齋串と曲物底板、下駄の出土量が多い。図27のうち、

火鑽白以下の器種をはぶいた器種を円グラフにし、前回報告分のNR07下層黑色土層(7世紀後半)・黑色土層(7世紀末)と比較したのが図26である。今回のNR01出土木製品は、掘削具・工具を含み、齋串を主体とする祭祀具・下駄が多い点ではNR07下層黑色土層と共通するが、NR07下層黑色土層では1点も出土しなかった曲物容器が全体の4分の1近い割合を占める点が大きく異なる。

使用樹種では、前報告と同様にヒノキが全体の4分の3近くを占めているが、掘削具・農具・杭が比較的多いためか、広葉樹も4分の1近くみとめられる。特にNR01の底で確認された土坑群の杭にはすべてコナラ節・クヌギ節がもちいられていることから、遺跡の付近(名古屋台地の北縁辺部か)にはこれらの樹種を主体とする雑木林が存在したと考えられる。

また、丸太や加工途中の板、残材が多く出土していることから、今回の調査区周辺には、前回想定したプレ郡衙段階の豪族居宅に付随する木製品の加工施設が存在していた可能性が指摘できる。

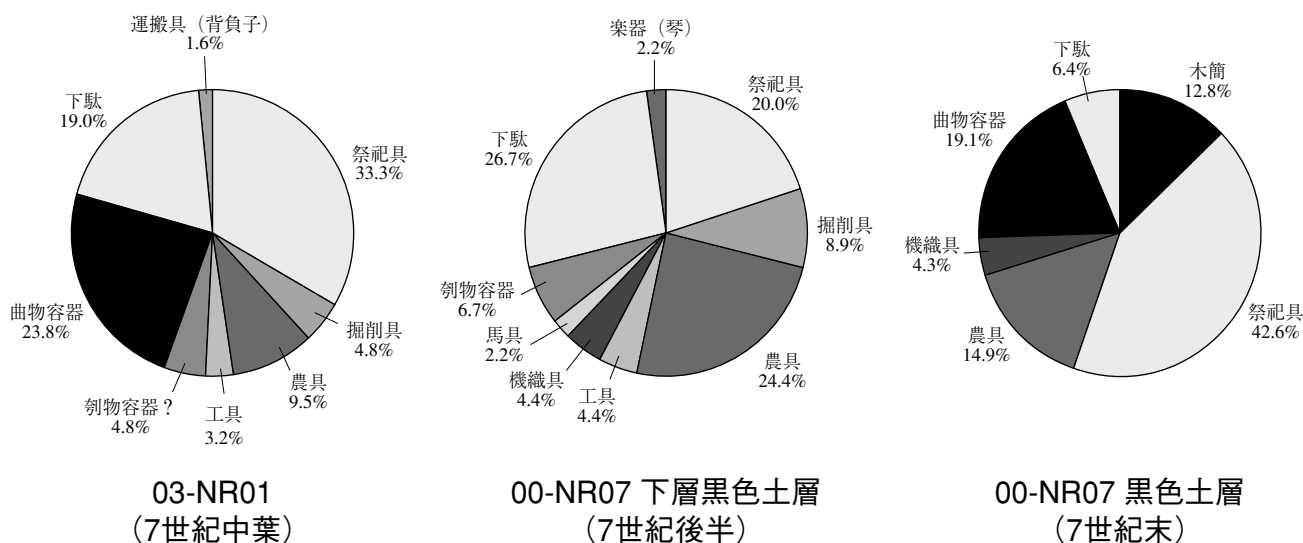
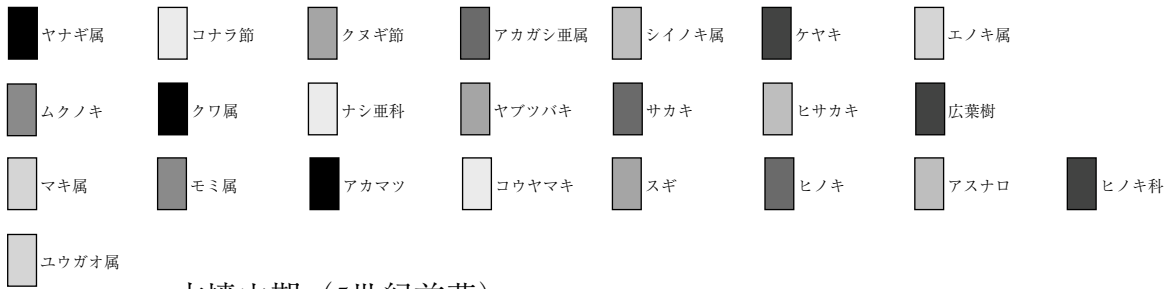
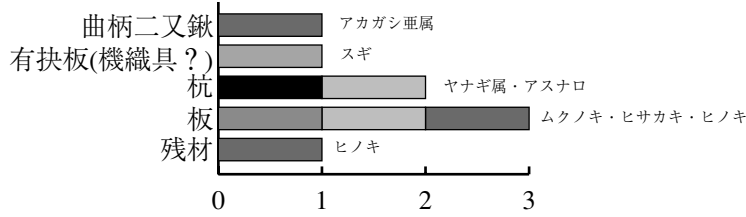


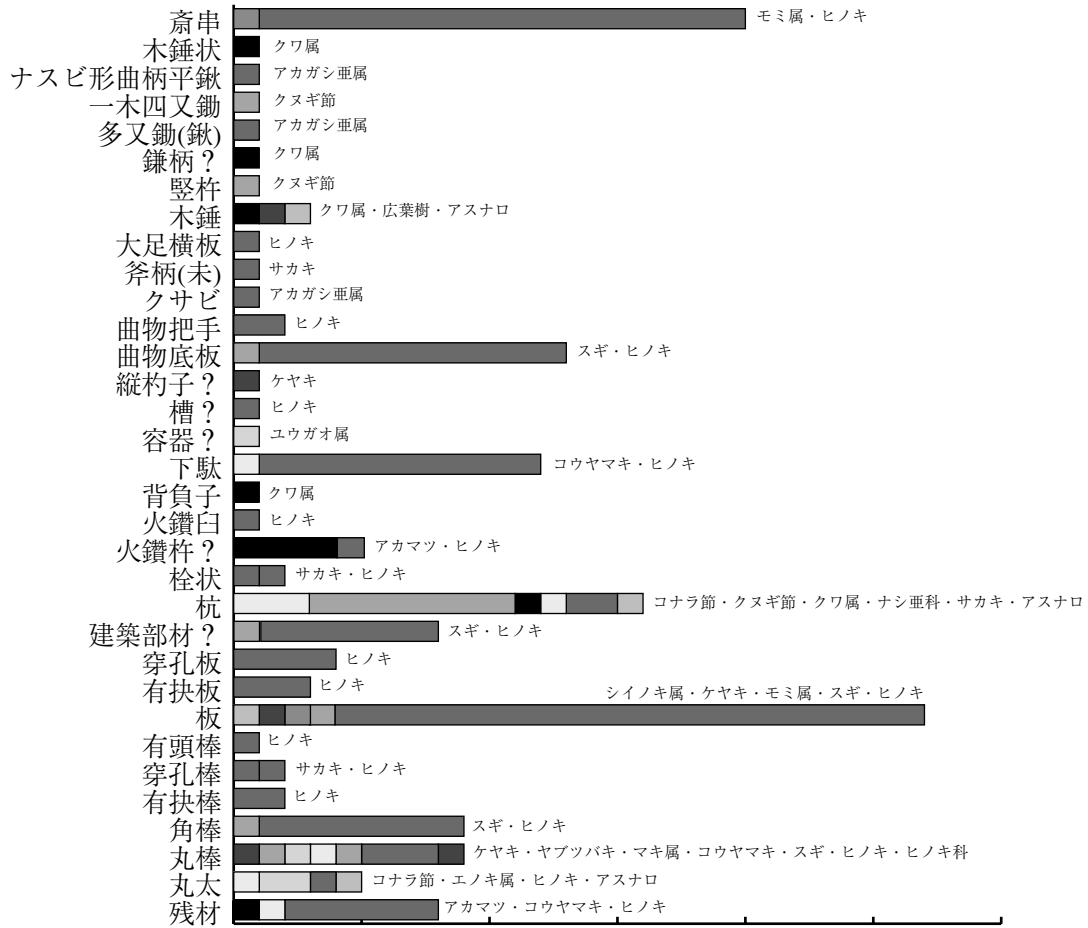
図26 古代の木製品器種組成比較グラフ



古墳中期 (5世紀前葉)



古代 (7世紀中葉)



中世

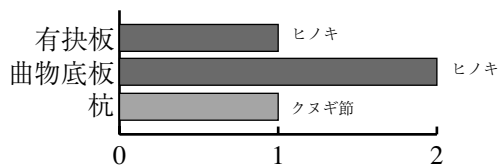


図 27 志賀公園遺跡 00A・B・C 区出土木製品時期別器種・樹種組成グラフ

抄録

ふりがな	しがこうえんいせき
書名	志賀公園遺跡Ⅱ
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター報告書
シリーズ番号	第121集
編著者名	石黒立人（編著）・樋上 昇・鬼頭 剛・堀木真美子 森 勇一・上田恭子・植田弥生・松岡敬二・佐藤昌憲
編集機関	愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ケ須新田字野方802-24
発行年月日	西暦 2004年8月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しがこうえん 志賀公園遺跡	なごやしきたく 名古屋市北区 ちゅうまるちよう 中丸町2丁目	23102	2015	35 度 12 分 15 秒	136 度 54 分 30 秒	200010～ 200103	2,030m ²	都市整備公団 アーバニア志 賀公園建設に 伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
志賀公園遺跡	集落	古墳前期	水田	土師器	
		古墳中期	水田	土師器・木製品	水田面から出土した甕
		古代	竪穴住居・自然流路	須恵器・土師器 木製品	
		中世戦国	掘立柱建物・井戸・ 池状遺構・溝・土坑	灰釉系陶器 施釉陶器	

図版

遺構

遺物

写真

Y=23730

Y=23740

Y=23750

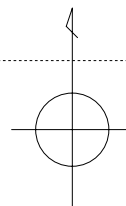
Y=23760

Y=23770

Y=23780

Y=23790

X=88560



X=88570

X=88580

00A区

X=88590

X=88600

X=88610

00B区

X=88620

X=88630

X=88640



00C区

1:400 調査区全体図

X=88650

Y=23720 X=88560

X=88565

X=88570

X=88575

X=88580

X=88585

X=88590

Y=23730

Y=23735

Y=23740

Y=23745

Y=23750

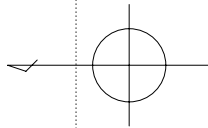
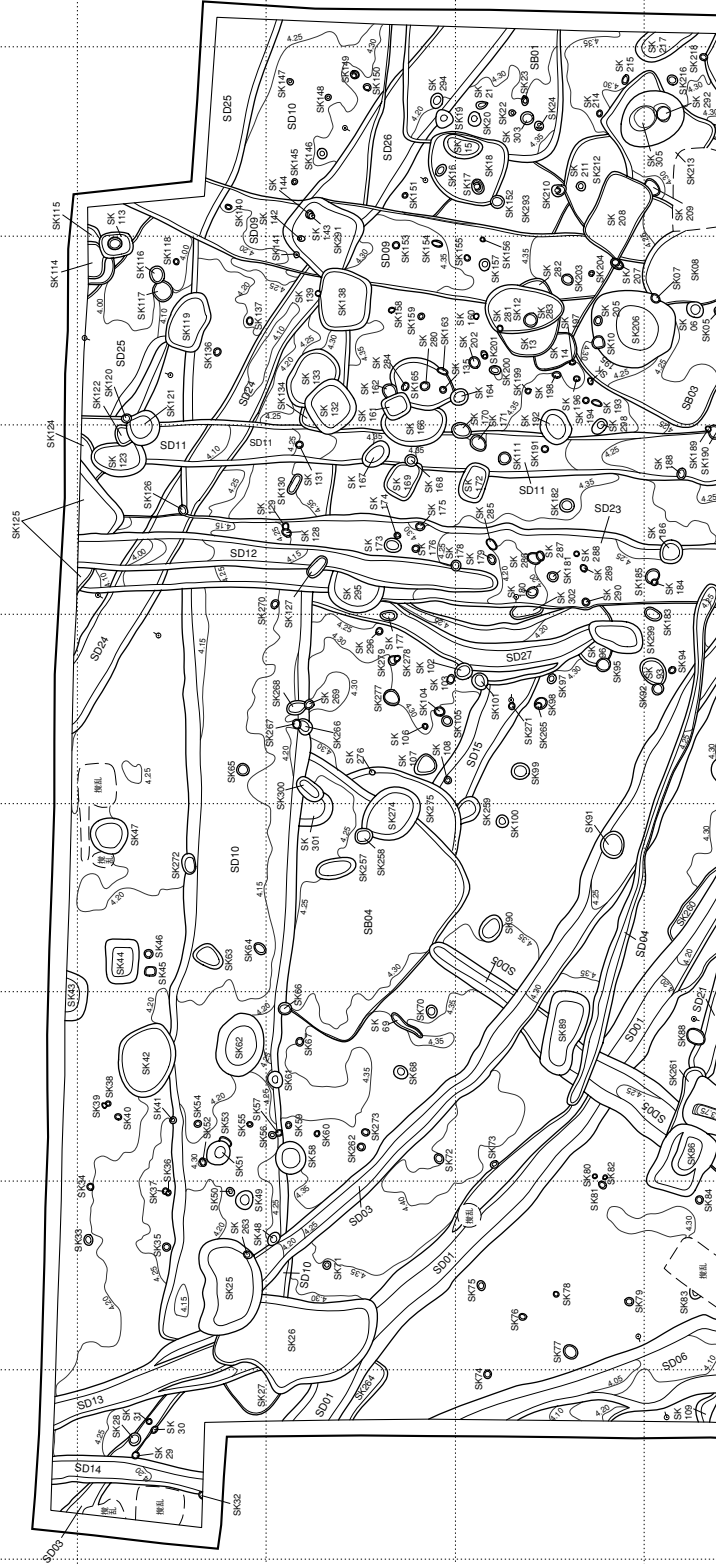
Y=23755

Y=23760

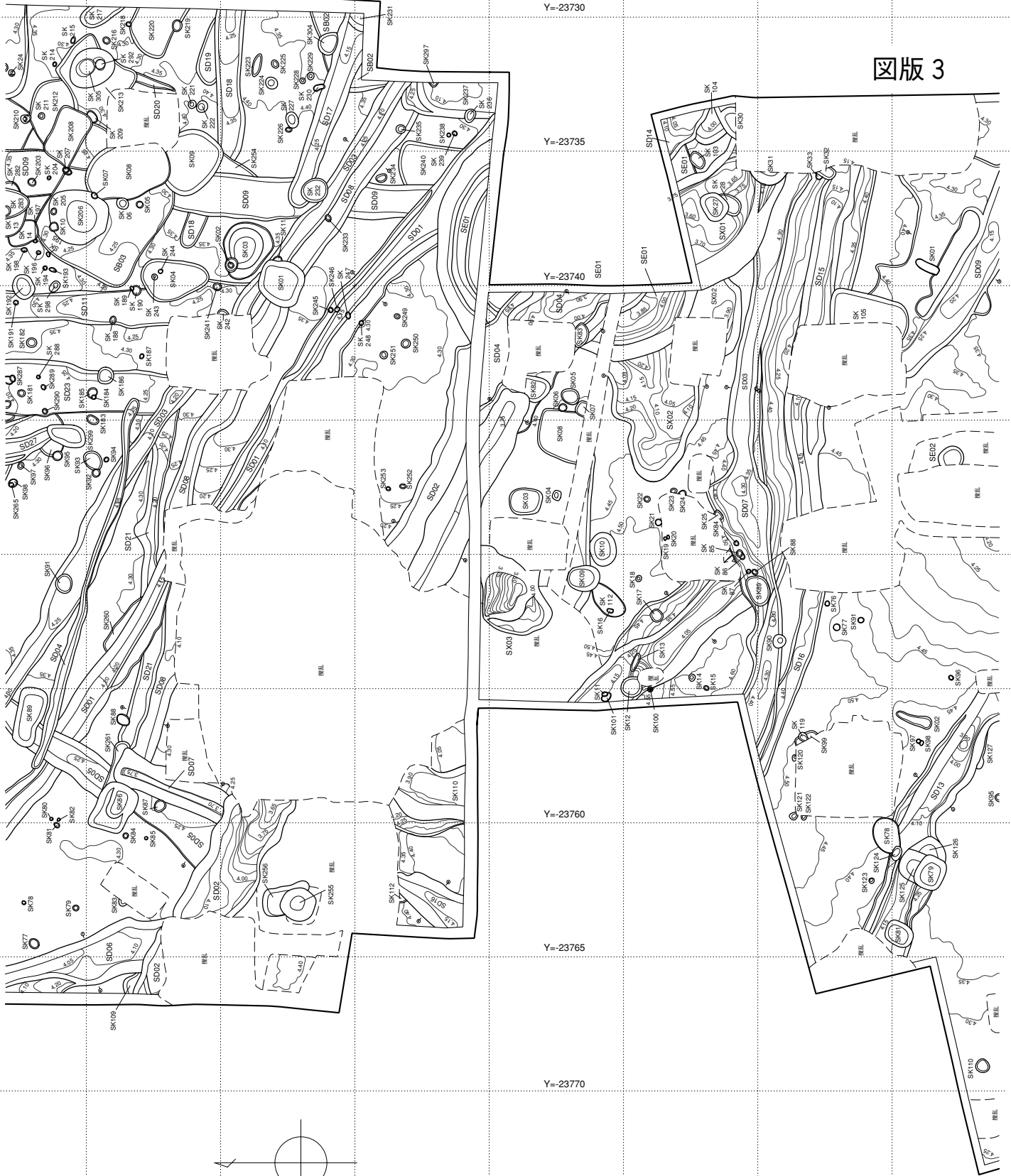
Y=23765

Y=23770

Y=23775



図版 3



Y=23730

Y=23735

Y=23740

Y=23760

Y=23765

Y=23770

Y=23775

Y=23780

Y=23785

X=88550

X=88595

X=88590

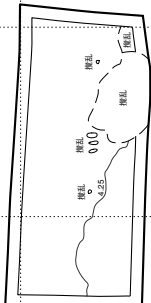
X=88595

X=88600

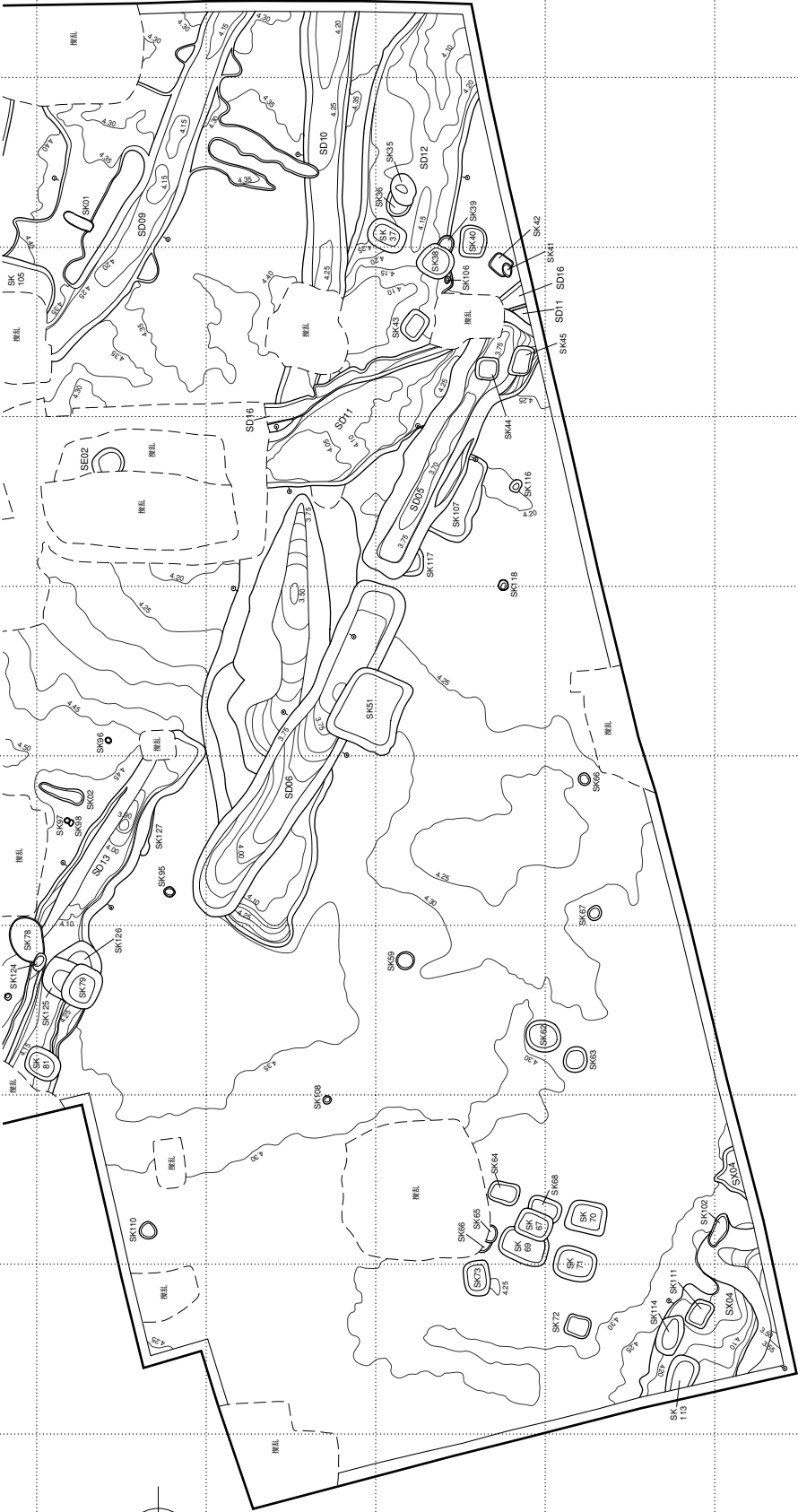
X=88605

X=88610

X=88615



図版 4



X=88615

X=88620

X=88625

X=88630

X=88635

X=88640

X=88645

Y=23730

Y=23735

Y=23740

Y=23745

Y=23750

Y=23755

Y=23760

Y=23765

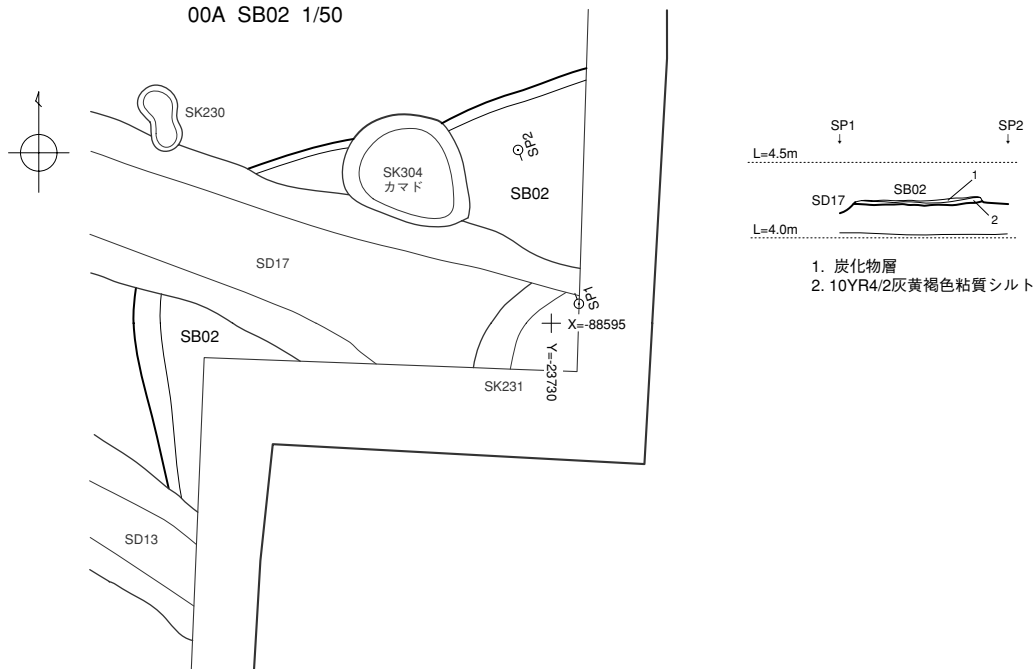
Y=23770

Y=23775

Y=23780

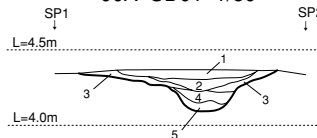
00A区SB

00A SB02 1/50



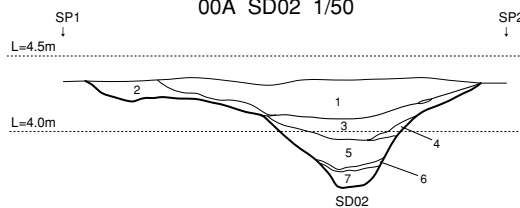
00A区SD

00A SD01 1/50



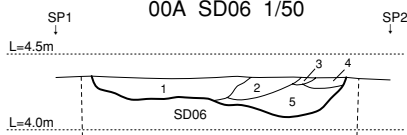
- | | |
|--------------------------------------|--------|
| 1. 10YR2/1黒色粘質シルト マンガン斑あり | SD01上層 |
| 2. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト マンガン斑あり | 〃 |
| 3. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト 砂質シルトに近い マンガン斑あり | 〃 |
| 4. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 10YR6/2砂質シルトが混じる | SD01下層 |
| 5. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 粘土に近い | 〃 |

00A SD02 1/50



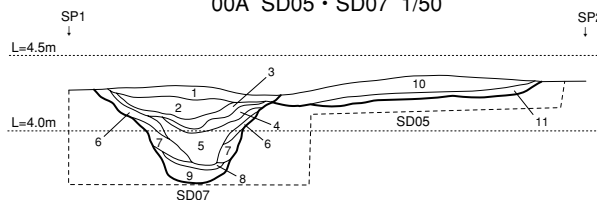
- | | |
|---|--------|
| 1. 10YR4/1褐灰色粘質シルトと10YR5/2灰黄褐色砂質シルトの斑土 マンガン斑と沈鉄あり | SD02上層 |
| 2. 10YR6/2灰黄褐色砂質シルトと10YR5/2灰黄褐色砂質シルトの斑土 沈鉄あり | 〃 |
| 3. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 5~10mm大の炭化物少々含む | SD02下層 |
| 4. 10YR4/1褐灰色砂質シルト | 〃 |
| 5. 10YR4/1褐灰色粘土 | 〃 |
| 6. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト | 〃 |
| 7. 10YR4/1褐灰色粘土 極軟質 | 〃 |

00A SD06 1/50



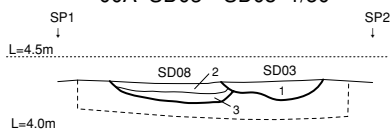
- | | |
|---|--------|
| 1. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト 10mm大の炭化物わずかに含む | SD06上層 |
| 2. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト | SD06下層 |
| 3. 10YR6/1褐灰色砂質シルト | 〃 |
| 4. 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト マンガン斑あり | 〃 |
| 5. 10YR4/1褐灰色砂質シルトと 10YR7/1灰白色砂質シルト互層状に混合 | 〃 |

00A SD05・SD07 1/50



- | | |
|----------------------------------|--|
| 1. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 粘性弱い マンガン斑あり | |
| 2. 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト | |
| 3. 10YR4/1褐灰色粘土 | |
| 4. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト | |
| 5. 10YR3/2黒褐色粘土 | |
| 6. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト 砂質シルトまじり | |
| 7. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト 粘質シルトまじり | |
| 8. 10YR4/2灰黄褐色粘土 砂質シルト少々まじる | |
| 9. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト 粘土まじり 最下層に沈鉄 | |
| 10. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト マンガン斑あり | |
| 11. 10YR5/1褐灰色砂質シルト | |

00A SD03・SD08 1/50

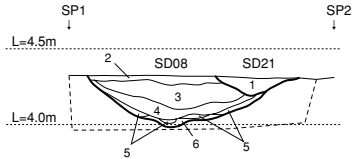


- | |
|-----------------------------|
| 1. 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト マンガン斑あり |
| 2. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト マンガン斑あり |
| 3. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト |

図版 6

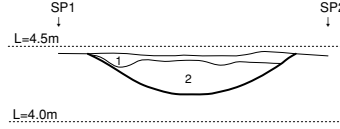
00A区SD

00A SD08・SD21 1/50



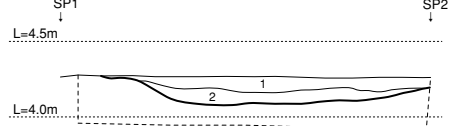
1. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 粘性弱い
2. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト
3. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト 5~10mm大の炭化物含む
4. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト
5. 10YR6/1褐色砂質シルト
6. 10YR4/2灰黄褐色粘土

00A SD16 1/50



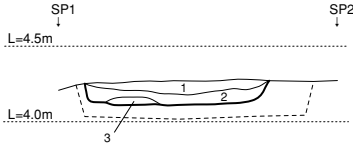
1. 5Y4/4暗オリーブ色粘土 鉄斑少量含む
2. 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質シルト 細粒砂を多く含む 鉄斑・酸化マンガン斑多く含む

00A SD25 1/50



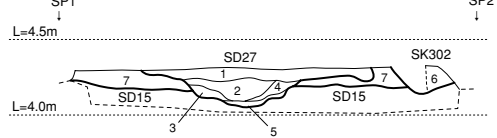
1. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト マンガン斑あり
2. 10YR4/1褐色粘土 マンガン斑あり 沈鉄層が混入

00A SD24 1/50



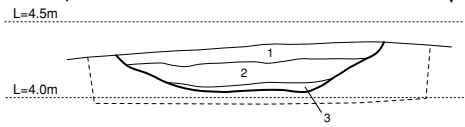
1. 10YR4/1褐色粘質シルト
2. 10YR3/2黒褐色粘質シルト マンガン斑あり
3. 10YR4/1褐色粘質シルト マンガン斑あり

00A SD27 1/50



- | | |
|------------------------------|--------|
| 1. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 粘性弱い | SD27上層 |
| 2. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト | |
| 5mm大の炭化物少々含む | SD27下層 |
| 3. 10YR3/2黒褐色粘質シルト | 〃 |
| 4. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト | 〃 |
| 5. 10YR3/2黒褐色粘質シルト 中粒砂まじり | 〃 |
| 5mm大の炭化物含む | SK302 |
| 6. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト | 〃 |
| 7. 10YR6/2灰黄褐色砂質シルト 粘質シルトまじり | SD15 |

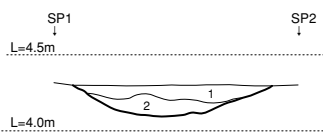
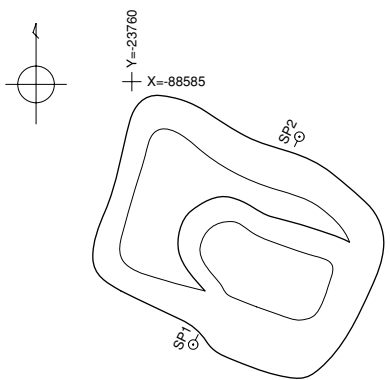
00A SD26 1/50



1. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト
2. 10YR4/1褐色粘質シルト 粘土に近い 10YR3/2粘質シルトが混入
3. 10YR4/1褐色粘質シルト

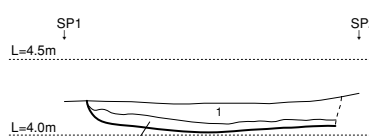
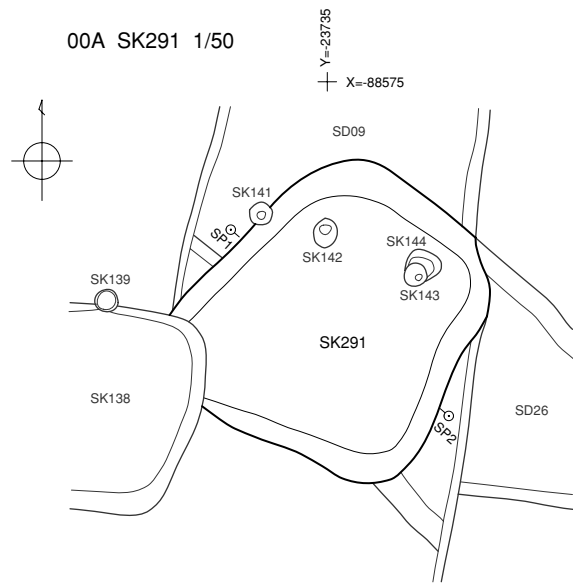
00A区SK

00A SK86 1/50



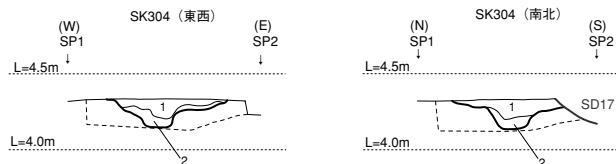
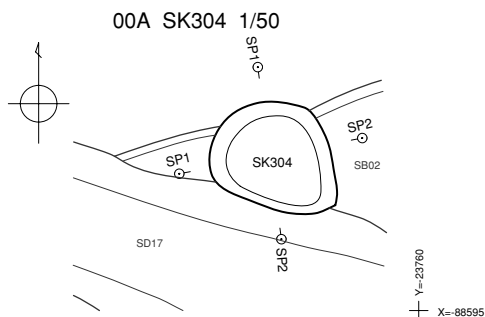
1. 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト シルト締りやや弱い
2. 5Y4/2灰オリーブ色粘土 粘性強

00A SK291 1/50



1. 10YR3/2黒褐色粘質シルト 10YR4/2粘質シルトが混入 マンガン斑あり
2. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト

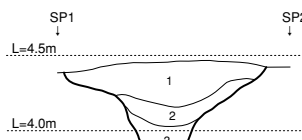
00A区SK



1. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト 粘性弱い 炭化物が下層に層状に堆積
2. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 粘性やや弱い 炭化物が下層に層状に堆積 (主に西部)

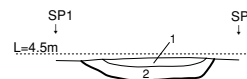
00B区SD

00B SD02 1/50



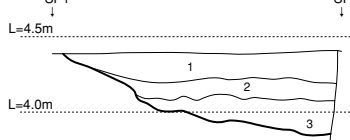
1. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト 粘性弱い
マンガン斑沈鉄層あり 第1層
2. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 粘土まじり 第2層
3. 10YR4/2灰黄褐色粘土

00B SD03 1/50



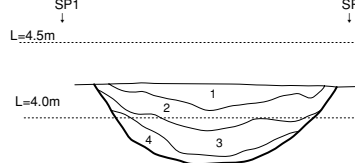
1. 10YR3/2黒褐色粘土
2. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト

00B SD04 1/50



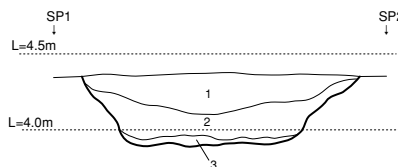
1. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト 粘性極弱い
マンガン斑沈鉄層あり 第1層
2. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 粘性やや強い
3. 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂と
10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 粘性やや強い互層 第2層

00B SD05 1/50



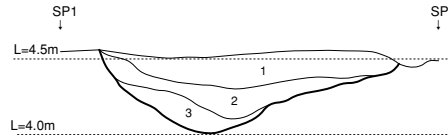
1. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 粘性やや弱い
マンガン斑・沈鉄層あり
2. 10YR5/2灰黄褐色粘土 粘性強い
3. 10YR5/2灰黄褐色粘土 粘性強いに
10YR4/2灰黄褐色砂質シルトが混入
4. 10YR4/2灰黄褐色砂質シルトに
10YR6/2灰黄褐色極細粒砂が混入 沈鉄層あり

00B SD06 1/50



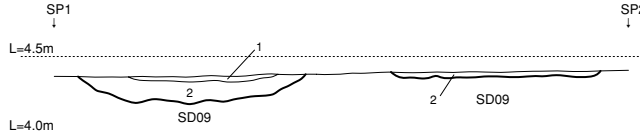
1. 10YR4/2灰黄褐色粘土 上層にマンガン斑あり
2. 10YR4/1褐灰色粘土 粘性やや強い
3. 10YR4/1褐灰色粘土 粘性やや強いに
10YR6/2灰黄褐色 中粒砂が混入

00B SD08 1/50



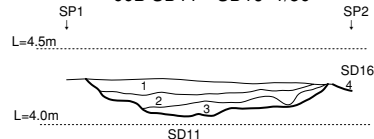
1. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 粘性弱い
2. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト
3. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルトに10YR6/2灰黄褐色
砂質シルトが互層状に混入

00B SD09 1/50



1. 10YR3/1黒褐色粘土 炭化物少々含む
2. 10YR4/2灰黄褐色粘土 粘性強い 炭化物少々含む

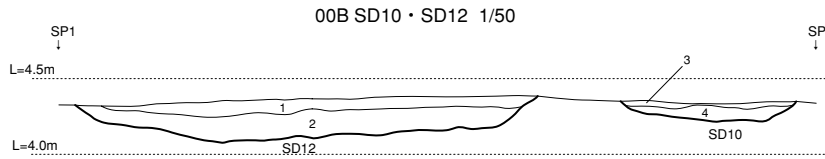
00B SD11・SD16 1/50



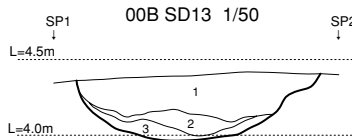
1. 10YR6/2灰黄褐色砂質シルト 沈鉄あり
2. 10YR3/1黒褐色粘土
3. 10YR5/1褐灰色粘質シルト
4. 10YR6/2灰黄褐色砂質シルト 沈鉄あり

図版 8

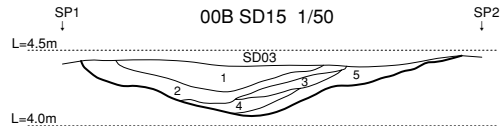
00B区SD



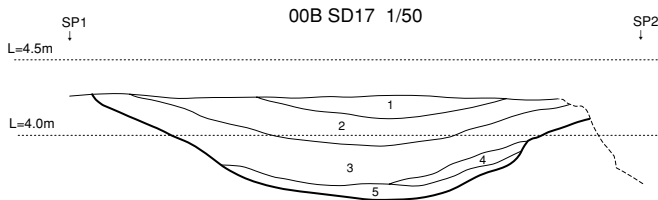
1. 10YR3/2黒褐色粘土 粘性やや弱い 沈鉄あり
2. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト
3. 10YR3/2黒褐色粘土 粘性やや弱い マンガン斑あり
4. 10YR4/2灰黄褐色粘土 沈鉄層あり



1. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルトに
10YR2/2黒褐色粘土ブロック(径15cm大)が密に混入 第2層
2. 10YR3/1黒褐色粘土 粘性やや強い
3. 10YR3/1黒褐色粘土 粘性やや強いに
10YR5/2灰黄褐色砂質シルトが混入



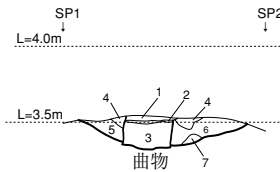
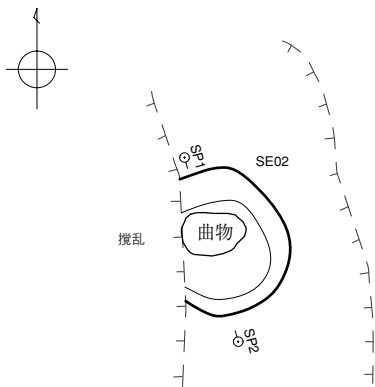
1. 10YR4/1褐灰色粘質シルト 粘性やや弱い マンガン斑あり 第1層
2. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト マンガン斑・沈鉄あり
3. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト 第2層
4. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト
5. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト



1. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト 第1層
2. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 上層は沈鉄層
3. 10YR3/2黒褐色粘土 第2層
4. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルトに
10YR6/2灰黄褐色粗粒砂まじる
5. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト

00B区SE

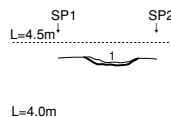
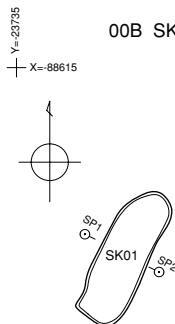
00B SE02 1/50



1. 10YR3/1黒褐色粘土
2. 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト
3. 10YR5/4にぶい黄褐色粗粒砂 1~2cm大の小石まじる
4. 10YR3/1黒褐色粘土
5. 10YR4/1褐灰色粘質シルト 1~2cm大の小石少々まじる
6. 10YR4/1褐灰色粘質シルト 砂質シルトまじり
7. 10YR3/2黒褐色粘土

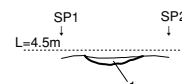
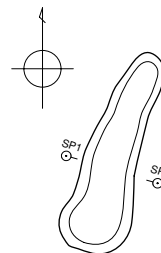
00B区SK

00B SK01 1/50



1. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 粘性やや強い
20mm大の骨片・炭化物多く含む

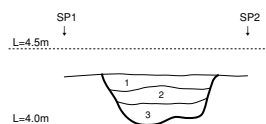
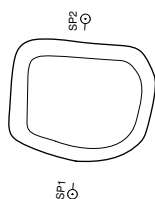
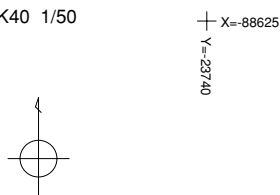
00B SK02 1/50



1. 10YR3/2黒褐色粘質シルト
20mm大の骨片十数点と20mm大の炭化物多量に含み
10YR6/6明黄褐色砂質シルトからなる20~30mm大の
焼土塊(しまり性固い)数十点含む

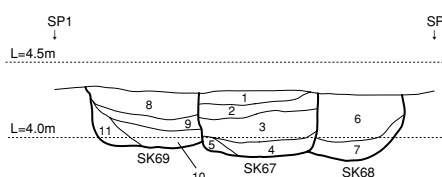
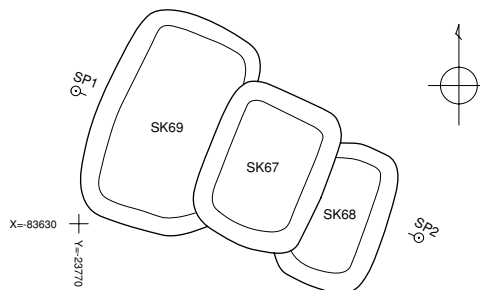
00B区SK

00B SK40 1/50



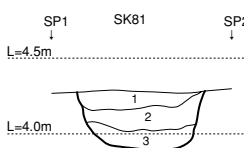
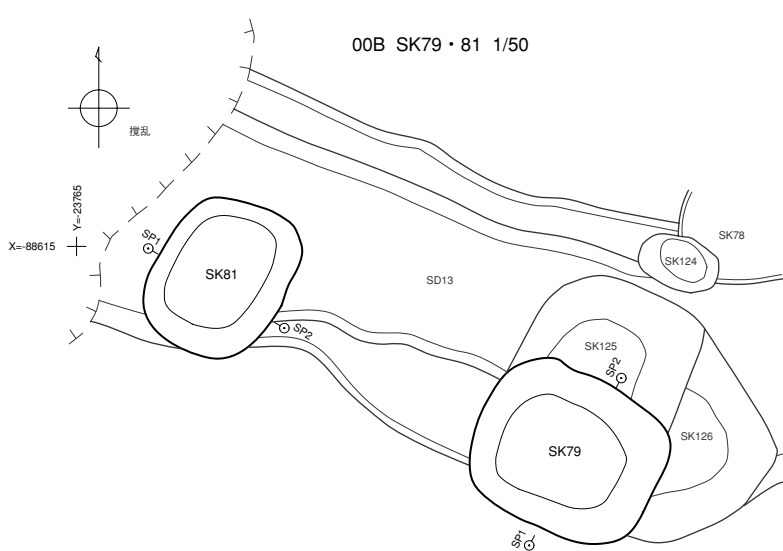
1. 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 酸化マンガン沈積多く下方集中
2. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土
5Y4/1細粒砂を流状に若干含む(15%)
3. 2.5Y3/2黒褐色粘土 粘性強

00B SK67・SK68・SK69 1/50

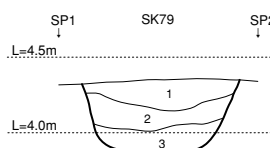


1. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト マンガン斑あり
2. 10YR5/1褐灰色粘質シルト
3. 10YR5/1褐灰色粘質シルトに10YR5/1褐灰色粘土ブロック混じる
4. 10YR5/1褐灰色粘土
5. 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂
6. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト マンガン斑あり(上層)
10YR5/1褐灰色粘質シルトに10YR5/1褐灰色粘土ブロック混じる(下層)
7. 10YR5/1褐灰色粘土
8. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト マンガン斑あり
9. 10YR5/1褐灰色粘質シルト
10. 10YR5/1褐灰色粘土
11. 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂

00B SK79・81 1/50

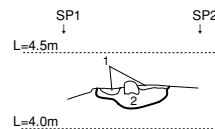
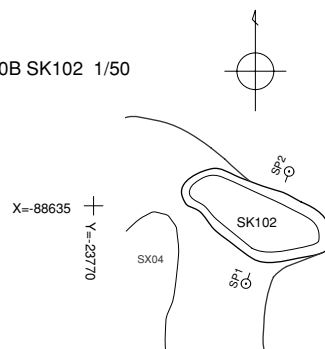


1. 10YR5/1褐灰色粘質シルトマンガン斑あり
2. 10YR5/1褐灰色粘質シルト沈鉄層あり
3. 10YR5/1褐灰色粘土



1. 10YR5/1褐灰色粘質シルトマンガン斑あり
2. 10YR5/1褐灰色粘質シルト沈鉄層あり
3. 10YR5/1褐灰色粘土

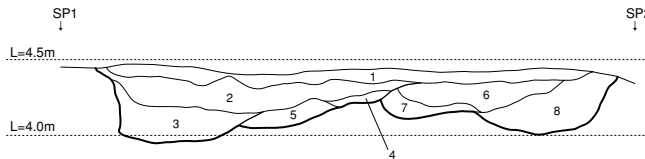
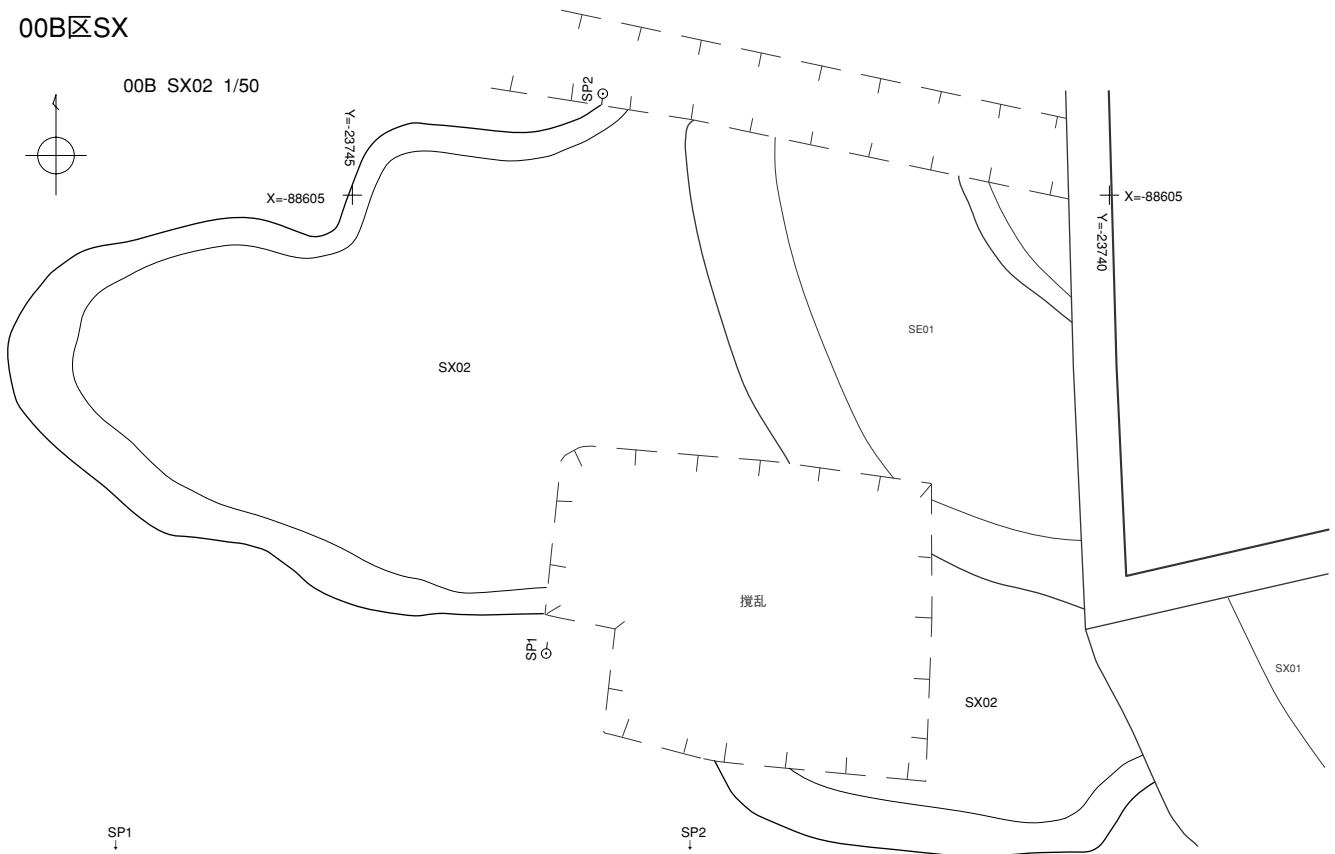
00B SK102 1/50



1. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 粘性極弱い(SX04の埋土)
2. 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト 粘性やや弱い
長20cm径4cm大の炭化木片数本、その他炭化物大量に含む

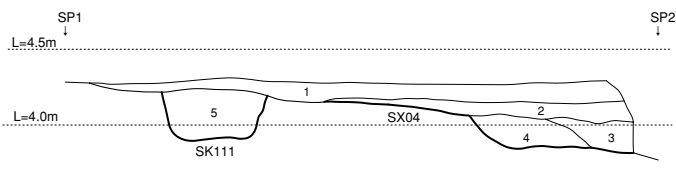
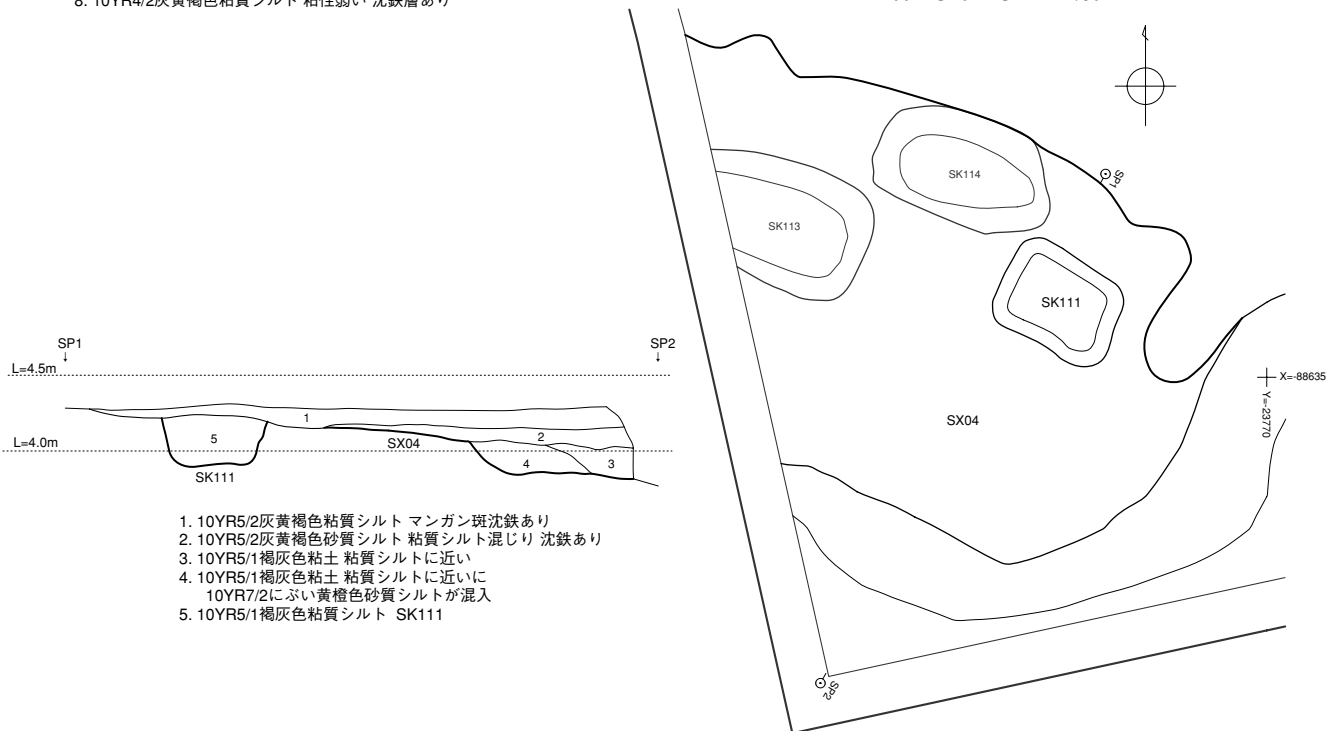
図版 10

00B区SX



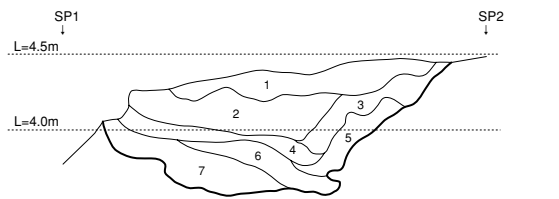
1. 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルトに10YR3/2 黒褐色粘土ブロックを少々含む
2. 10YR4/1 褐灰色粘質シルトに10YR7/3 にぶい黄橙色極細粒砂と10YR3/2 黒褐色粘土ブロック混入
沈鉄層あり
3. 10YR4/1 褐灰色粘質シルトに10YR5/4 にぶい黄橙色細粒砂と10YR3/1 黒褐色粘土ブロック混入
沈鉄層あり
4. 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト
5. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルトに10YR2/1 黒色粘土ブロック混入
6. 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト 砂質に近い 沈鉄層あり
7. 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト 粘性弱い
8. 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト 粘性弱い 沈鉄層あり

00B SX04・SK111 1/50



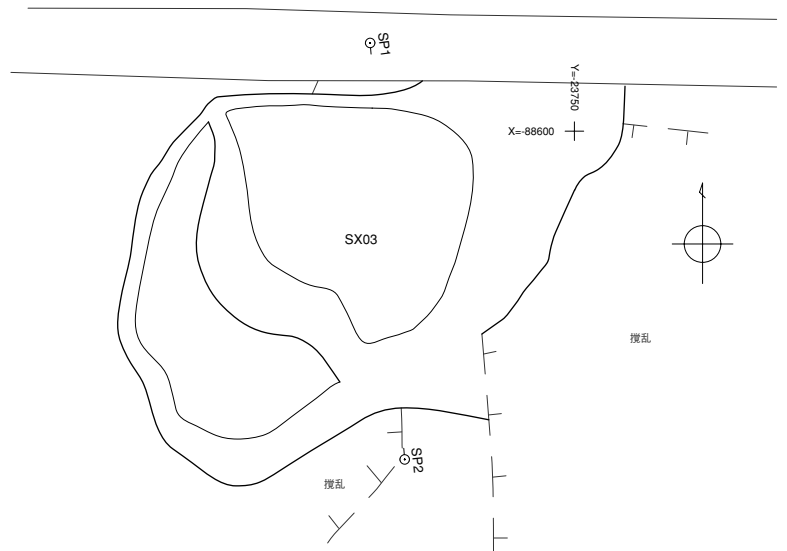
1. 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト マンガン斑沈鉄あり
2. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘質シルト混じり 沈鉄あり
3. 10YR5/1 褐灰色粘土 粘質シルトに近い
4. 10YR5/1 褐灰色粘土 粘質シルトに近い
10YR7/2 にぶい黄橙色砂質シルトが混入
5. 10YR5/1 褐灰色粘質シルト SK111

00B区SX

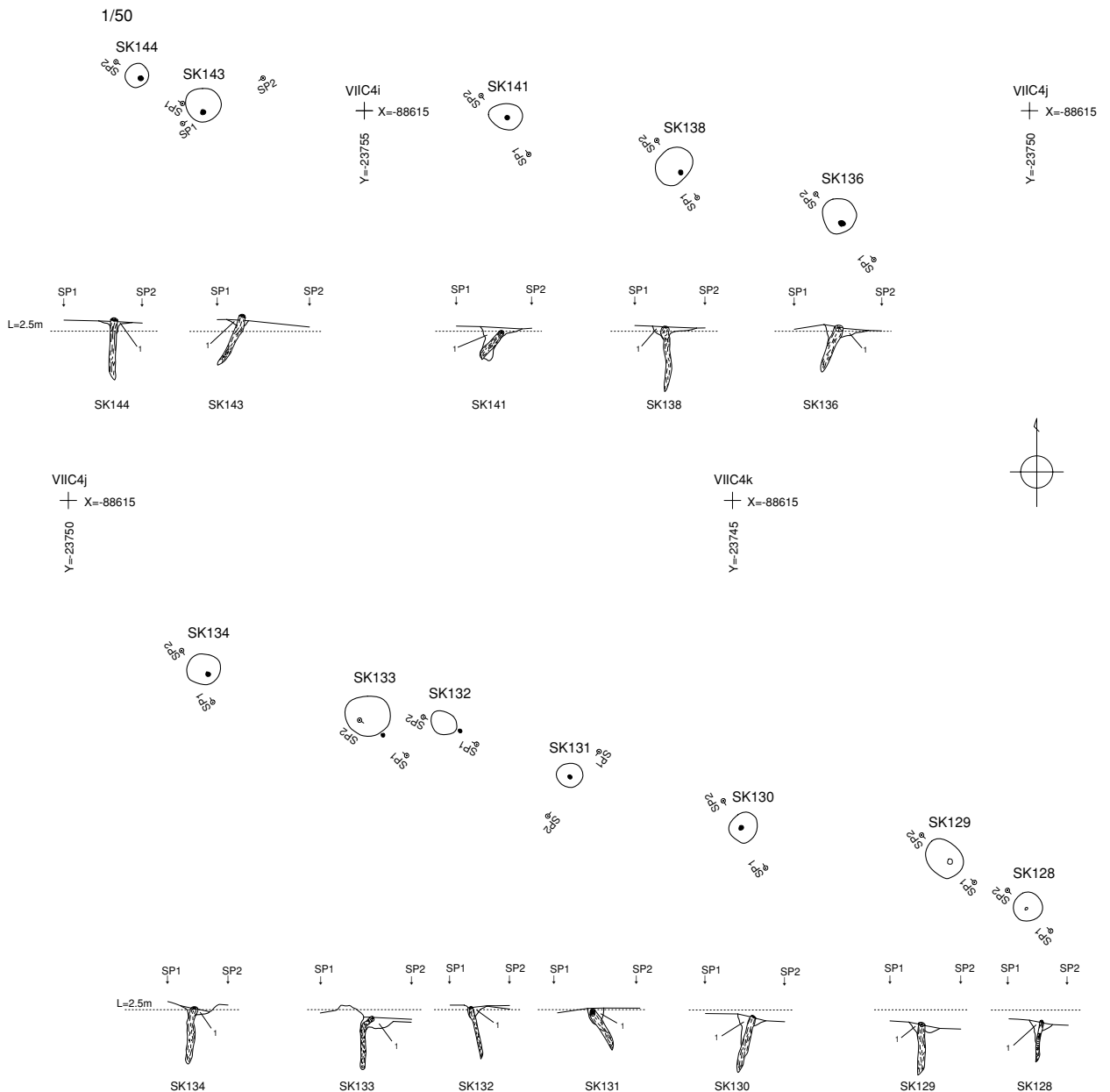


1. 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト粘性弱いに10YR6/2灰黄褐色砂質シルトが少々混入マンガン斑あり
2. 10YR4/1褐灰色粘質シルトと10YR7/1灰白色極細粒砂の互層
3. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト 上層は砂質シルト
4. 10YR5/1褐灰色砂質シルトに10YR7/1灰白色細粒砂が混入
5. 10YR6/1褐灰色砂質シルト
6. 10YR7/1灰白色細粒砂に10YR5/2灰黄褐色粘質シルトが混入 沈鉄あり
7. 10YR4/1褐灰色粘土に10YR7/1灰白色細粒砂が混入

00B SX03 1/50

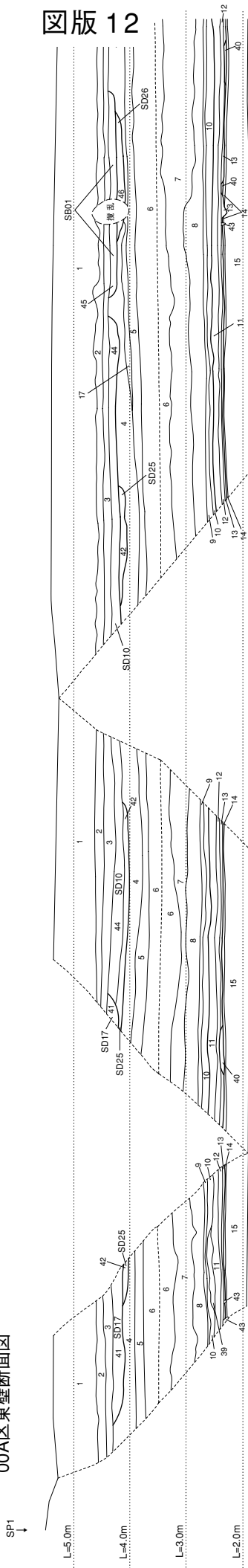


00B区 杭列

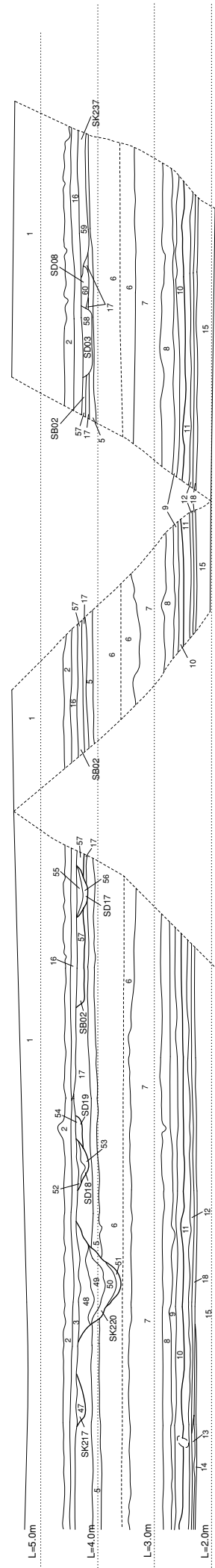


1. 10YR5/6黄褐色中粒砂～粗粒砂

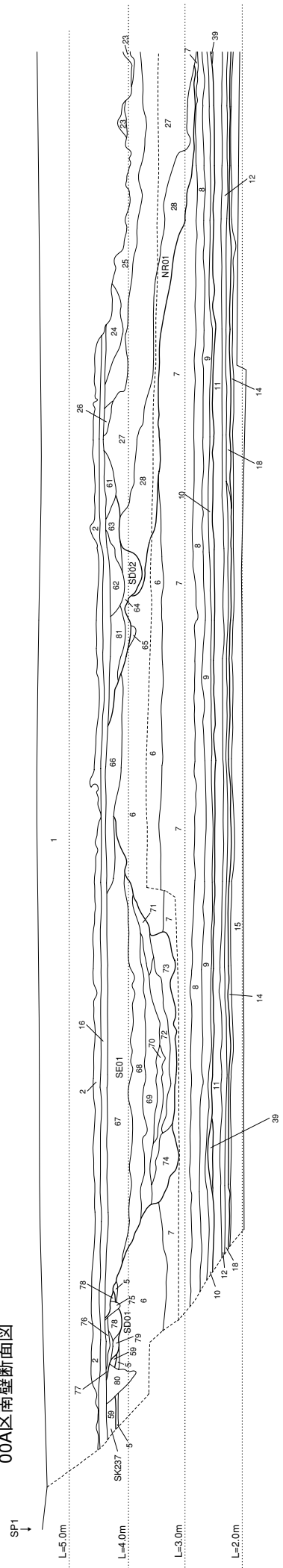
00A区東壁断面図



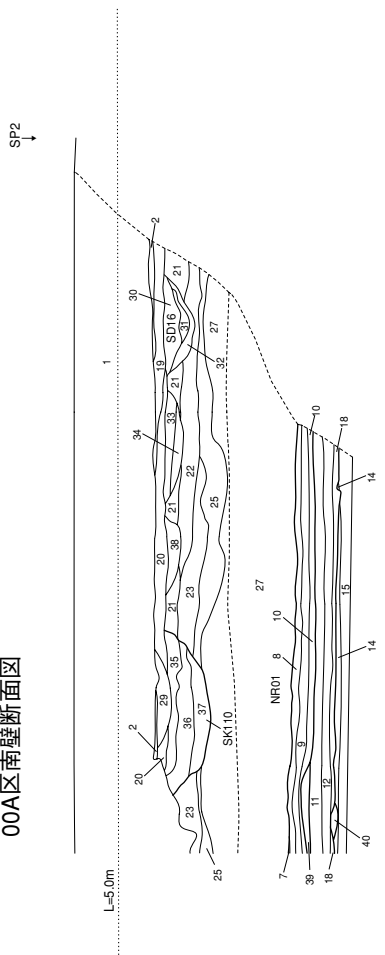
SP2 ↑



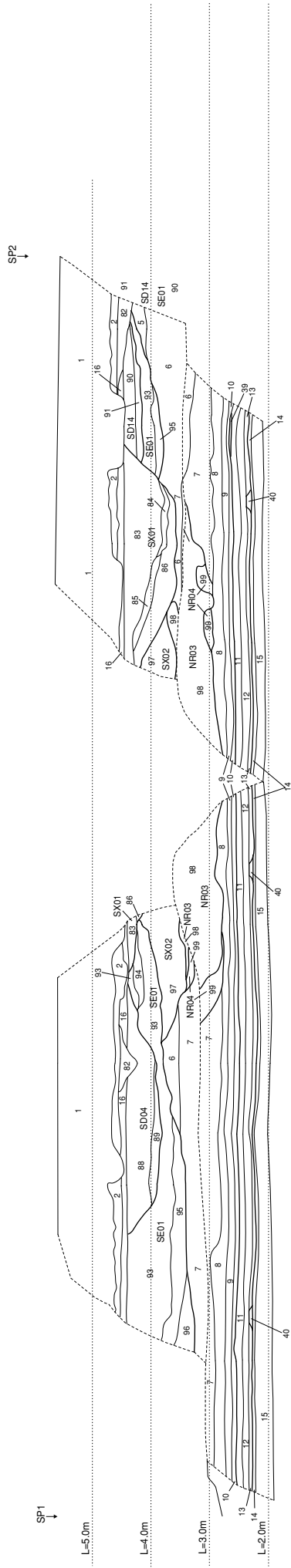
00A区南壁断面図



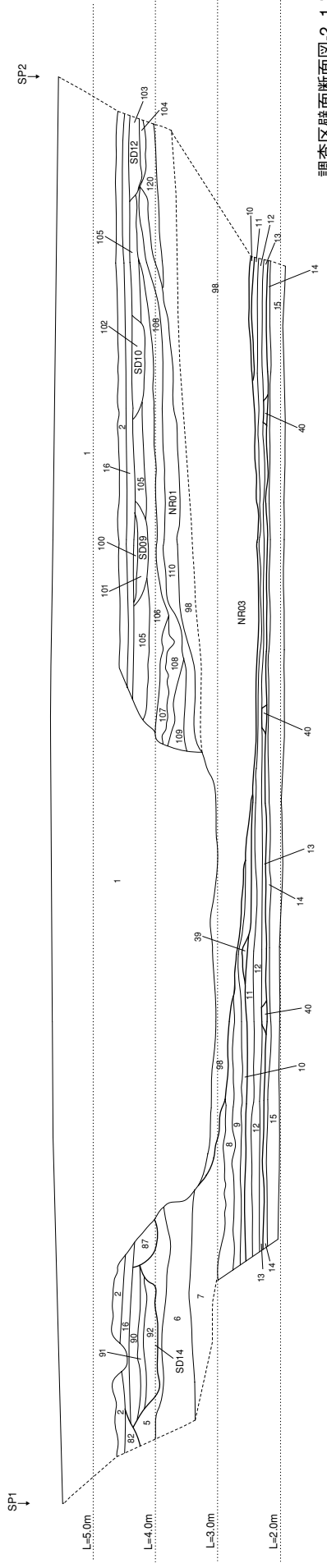
00A区南壁断面図



00B区北壁断面図



00B区東壁断面図

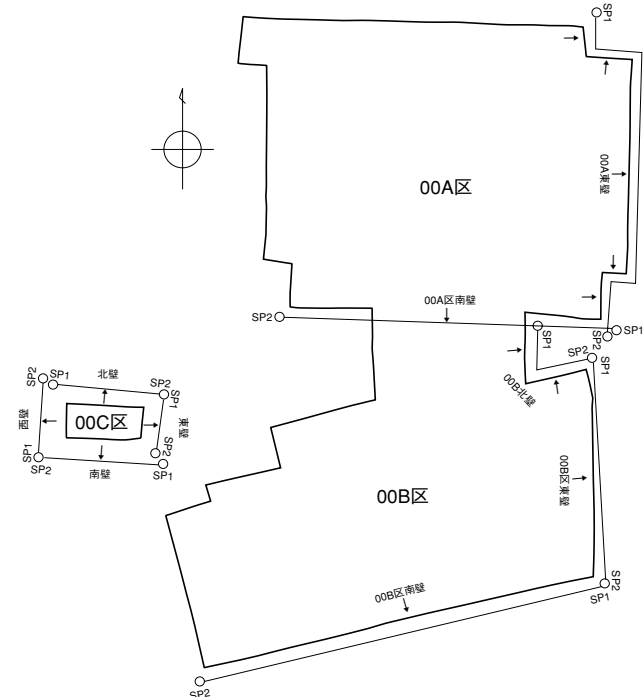


図版 14

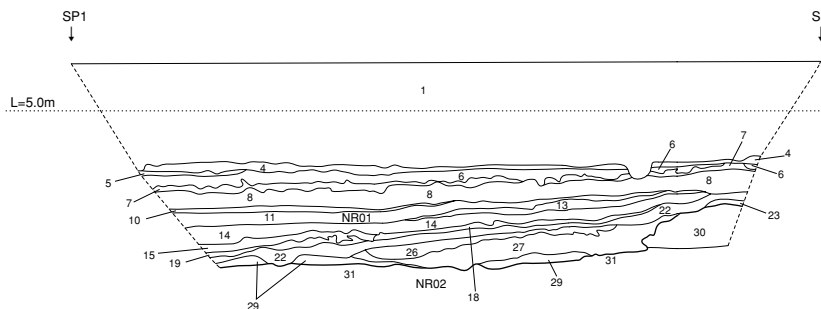
00A・B区壁面断面図土層注記

1. 表土 (神戸製鋼撤収時の土砂) または攪乱
- 2.2.5Y4/2暗灰色粘質シルト 下層に沈鉄層戦前の水田
- 3.10YR2/2黒褐色粘質シルト
- 4.10YR4/2灰黄褐色粘質シルト
- 5.10YR4/1褐灰色粘質シルト
- 6.10YR4/1褐灰色粘土と10YR6/2灰黄褐色細粒砂との互層 前者が厚い
- 7.10YR5/2暗黄褐色中粒砂と10YR4/1褐灰色粘質シルトとの互層 前者が厚い植物遺体少し含む
- 8.2.5Y4/1黄灰色粘土 植物遺体多く含む 植物遺体層1
- 9.2.5Y3/1黒褐色粘土 植物遺体多く含む 植物遺体層2
- 10.2.5Y2/1黒色粘土 植物遺体多く含む 植物遺体層3
- 11.10YR4/1褐灰色粘土 しまりやや強い
- 12.10YR3/1黒褐色粘土 しまりやや強い
- 13.10YR2/1黒色粘土 しまり強い
- 14.10YR3/1黒褐色粘土 しまり並
- 15.10YR4/1褐灰色粘土
- 16.10YR5/2暗黄褐色粘質シルト 粘性弱い 下層に沈鉄層
- 17.10YR5/1褐灰色砂質シルト
- 18.10YR2/1黒色粘土 しまりやや弱い
- 19.10YR5/1褐灰色砂質シルト 下層に沈鉄層
- 20.10YR5/2暗黄褐色砂質シルト
- 21.10YR5/2暗黄褐色砂質シルトに10YR6/2砂質シルト層が混入
- 22.10YR4/1褐灰色粘質シルトに10YR7/1灰白色極細粒砂層が混入
- 23.10YR5/1褐灰色砂質シルト
- 24.10YR4/1褐灰色粘質シルトに10YR6/2暗黄褐色砂質シルト層が混入
- 25.2.5Y4/1黄灰色砂質シルトに2.5Y7/2暗黄褐色極細粒砂層が混入東部にマンガン層あり
- 26.2.5Y5/1黄灰色砂質シルトに2.5Y7/1灰白色砂質シルトが混入東部にマンガン層あり
- 27.2.5Y5/1黄灰色砂質シルト砂質シルト層と2.5Y6/2暗黄褐色極細粒砂層の互層 5mm~2cm大の小礫混じる 前者の層が薄い
- 28.(1)2.5Y4/2暗黄褐色砂質シルトと(2)2.5Y3/1黒褐色粘質シルトと(3)2.5Y6/2暗黄褐色砂質シルトとの互層 (1)の層が厚い
- 29.2.5Y5/3黄褐色粘質シルト
- 30.2.5Y4/3オリーブ褐色粘質シルト
- 31.2.5Y4/2暗黄褐色粘土
- 32.2.5Y7/2暗黄褐色粘質シルトに2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック混入
- 33.2.5Y5/2暗黄褐色砂質シルト
- 34.2.5Y4/2暗黄褐色粘質シルトに2.5Y7/2暗黄褐色砂質シルトが混入
- 35.2.5Y5/1黄灰色砂質シルトに2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土混入下層に沈鉄層流入
- 36.2.5Y4/1黄灰色砂質シルト
- 37.2.5Y3/2黒褐色粘土に2.5Y5/1黄灰色砂質シルト混入5~10mm大の小礫含む
- 38.2.5Y5/2暗黄褐色砂質シルト
- 39.10YR4/1褐灰色粘土 しまり強い
- 40.10YR3/1黒褐色粘土 しまりやや弱い
- 41.2.5Y4/1黄灰色粘質シルト 粘性やや強い
- 42.2.5Y4/2暗黄褐色粘質シルト 粘性弱い
- 43.2.5Y3/1黒褐色粘土 しまり強い
- 44.2.5Y4/1黄灰色粘質シルト
- 45.2.5Y4/1黄灰色粘質シルト しまりやや弱い
- 46.2.5Y3/2黒褐色粘質シルト
- 47.2.5Y5/1黄灰色粘質シルト
- 48.2.5Y4/2暗黄褐色粘質シルト
- 49.2.5Y4/1黄灰色粘質シルト 沈鉄層流入
- 50.2.5Y3/2黒褐色粘質シルト
- 51.2.5Y3/2黒褐色粘土
- 52.2.5Y4/2暗黄褐色粘土 5~20mm大の炭化物含む
- 53.2.5Y4/2暗黄褐色粘質シルト
- 54.2.5Y5/1黄灰色粘質シルト
- 55.2.5Y4/2暗黄褐色粘質シルト マンガン斑もあり
- 56.2.5Y4/2暗黄褐色砂質シルト
- 57.2.5Y4/1黄灰色砂質シルト 最下層に炭化物層
- 58.2.5Y4/2暗黄褐色砂質シルト
- 59.2.5Y4/1黄灰色粘土
- 60.2.5Y4/2暗黄褐色粘質シルト
- 61.2.5Y6/2暗黄褐色砂質シルトに2.5Y5/2暗黄褐色砂質シルトが混入
- 62.2.5Y3/2黒褐色粘土 しまりやや強い 上層は粘質シルト
- 63.2.5Y4/1黄灰色粘質シルト
- 64.2.5Y3/2黒褐色粘土 しまりやや弱い
- 65.2.5Y4/1黄灰色粘質シルトに2.5Y5/2暗黄褐色砂質シルトが混入
- 66.2.5Y5/2暗黄褐色粘質シルトに2.5Y6/2暗黄褐色砂質シルトが混入
- 67.2.5Y3/2黒褐色粘土 しまりやや強い
- 68.2.5Y3/1黒褐色粘土 しまりやや弱い
- 69.10YR3/1黒褐色粘土 しまり弱い

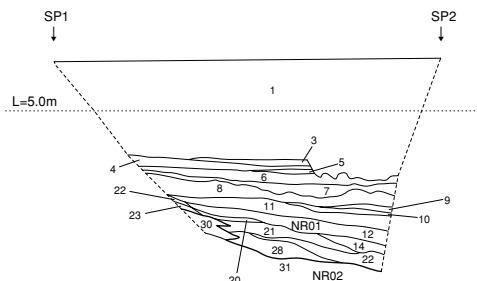
- 70.2.5Y6/2暗黄褐色極細粒砂 砂質シルトに近い
- 71.2.5Y4/1黄灰色砂質シルトに2.5Y7/2暗黄褐色砂質シルトが混入
- 72.2.5Y4/1黄灰色砂質シルトに2.5Y2/1黒色粘土が混入
- 73.2.5Y4/1黄灰色粘土に2.5Y5/1黄灰色砂質シルトが混入 最下層は沈鉄
- 74.2.5Y3/1黒褐色粘土に2.5Y4/1黄灰色砂質シルトがラミナ状に混入
- 75.2.5Y3/2黒褐色粘土
- 76.2.5Y2/1黒色粘土 マンガン斑多い
- 77.2.5Y5/2暗黄褐色粘質シルト
- 78.2.5Y5/2暗黄褐色粘質シルトに2.5Y6/2暗黄褐色砂質シルトが混入
- 79.2.5Y5/2暗黄褐色砂質シルト
- 80.2.5Y4/2暗黄褐色シルト
- 81.2.5Y4/2暗黄褐色粘土 上層は粘質シルト
- 82.2.5Y4/2暗黄褐色粘質シルト 沈鉄あり
- 83.10YR5/2暗黄褐色粘質シルト 粘性弱い沈鉄層あり (上層)
10YR5/2暗黄褐色粘質シルト粘性やや強い沈鉄層あり (下層) SX01第1層
- 84.10YR4/1褐灰色粘土 SX01第2層
- 85.10YR3/1黒褐色粘土 SX01第3層
- 86.10YR6/1褐灰色極細粒砂と10YR3/1黒褐色粘土ブロックの斑土 下層に10mm大の小礫 SX01第4層
- 87.10YR5/2暗黄褐色粘質シルト (上層)
10YR4/2暗黄褐色粘土 (下層) 中世方形土坑?
- 88.10YR5/2暗黄褐色粘質シルト粘性極弱い、マンガン斑沈鉄層あり (上層)
10YR4/2暗黄褐色粘質シルト粘性やや強い (下層) SD04第1層
- 89.10YR5/2暗黄褐色極細粒砂と10YR4/2暗黄褐色粘質シルト (粘性やや強い) の互層 SD04第2層
- 90.10YR4/2暗黄褐色粘質シルト 粘性弱い 沈鉄層あり
- 91.10YR6/4にぶい黄褐色粘質シルト 沈鉄含む
- 92.10YR4/2暗黄褐色極細粒砂に10YR6/4にぶい黄褐色極細粒砂が混入
- 93.2.5Y3/2黒褐色粘土 しまりやや強い
- 94.10YR4/3にぶい黄褐色粘土
- 95.2.5Y4/1黄灰色粘質シルトに2.5Y6/3にぶい黄色砂質シルトが少々混入
- 96.2.5Y4/1黄灰色粘土に2.5Y5/1黄灰色砂質シルトが少々混入
- 97.10YR6/2暗黄褐色極細粒砂に10YR3/1黒褐色粘土ブロック混入
- 98.10YR8/2灰白色中粒砂~極細粒砂 (10~20mm大の礫混じる)
- 99.(1)2.5Y4/2暗黄褐色砂質シルトと(2)2.5Y3/1黒褐色粘質シルトと (3)2.5Y6/2暗黄褐色砂質シルトとの互層 (1)の層が厚い
- 100.10YR3/1黒褐色粘土 炭化物少々含む SD09第1層
- 101.10YR4/2暗黄褐色粘土粘性強い炭化物少々含む SD09第2層
- 102.10YR3/2黒褐色粘土粘性やや弱いマンガン斑あり (上層)
10YR4/2暗黄褐色粘土沈鉄層あり(下層) SD10
- 103.10YR3/2黒褐色粘土 粘性やや弱い 沈鉄あり SD12第1層
- 104.10YR4/2暗黄褐色粘質シルト SD12第2層
- 105.10YR3/2黒褐色粘土 沈鉄層あり NR01第1層
- 106.10YR4/2暗黄褐色粘質シルト NR01第1層
- 107.10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト NR01第2層
- 108.10YR2/2黒褐色粘土植物遺体含む NR01第3層
- 109.10YR3/2黒褐色粘質シルト植物遺体含む NR01第5層
- 110.10YR4/2暗黄褐色粘質シルトと10YR7/2にぶい黄褐色極細粒砂 (3~10mmの小礫含む) の互層 NR01第6層
- 111.10YR5/1褐灰色粘土 マンガン斑 沈鉄層あり
- 112.10YR5/2暗黄褐色粘土 沈鉄あり
- 113.10YR5/1褐灰色粘土
- 114.10YR5/2暗黄褐色粘土 5mm以下の小礫混じる 粘性やや強い
- 115.2.5Y4/1黄灰色粘土 粘性強い
- 116.2.5Y4/1黄灰色粘土 中世方形土坑
- 117.10YR3/2黒褐色粘土 NR02第1層
- 118.10YR4/2暗黄褐色粘質シルト 炭化物少々含む NR02第2層
- 119.10YR4/2暗黄褐色粘質シルト (粘性弱い) 炭化物と植物遺体少々含む NR02第3層
- 120.2.5Y5/1黄灰色粘質シルト 沈鉄層あり (上層)
2.5Y4/1黄灰色砂質シルトと2.5Y5/2極細粒砂の互層 (下層)
- 121.2.5Y5/2暗黄褐色砂質シルトと2.5Y5/1黄灰色粘土
- 122.2.5Y6/2暗黄褐色極細粒砂と2.5Y3/1黒褐色粘質シルトの互層
- 123.2.5Y7/3浅黄色極細粒砂下層に沈鉄
- 124.2.5Y3/2黒褐色粘土
- 125.2.5Y3/2黒褐色粘土と2.5Y7/2暗黄褐色極細粒砂の斑土
- 126.2.5Y7/3浅黄色極細粒砂
- 127.2.5Y3/1黒褐色粘土
- 128.10YR7/2にぶい黄褐色粗粒砂 10mm大の礫混じる
- 129.2.5Y3/1黒褐色粘土に2.5Y6/1黄灰色中粒砂~極細粒砂混じる
- 130.10YR7/2にぶい黄褐色粗粒砂 10mm大の礫混じる
- 131.2.5Y4/1黄灰色粘土と2.5Y5/1黄灰色極細粒砂~細粒砂の混土
- 132.2.5Y5/1黄灰色粘質シルトマンガン斑 沈鉄あり (上層)
2.5Y3/2 黒褐色粘土 炭化植物遺体含む (下層)
- 133.2.5Y3/1黒褐色粘土と2.5Y6/1細粒砂がグライ化 (西部)
2.5Y7/1灰白色細粒砂 下層で5~20mm大の礫混じる (東部)
- 134.2.5Y7/1灰白色中粒砂 下層で5~30mm大の礫混じる
- 135.10YR4/2暗黄褐色粘質シルト 粘性やや弱いマンガン斑、沈鉄層あり (上層)
10YR5/2暗黄褐色粘土 粘性強い (下層)
- 136.10YR6/2暗黄褐色砂質シルト 沈鉄あり
- 137.10YR6/2暗黄褐色砂質シルト 沈鉄あり



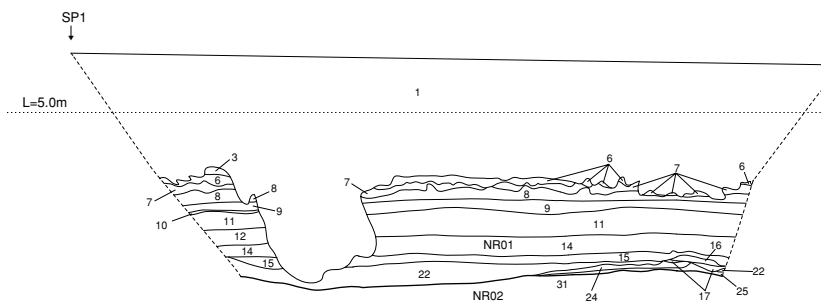
00C区北壁断面図



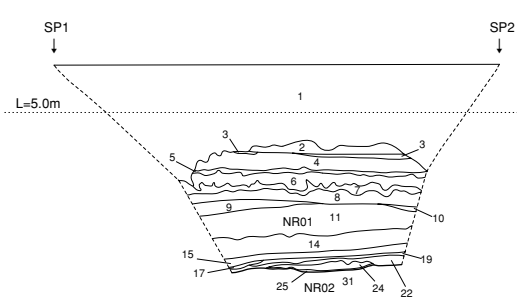
00C区東壁断面図



00C区南壁断面図



00C区西壁断面図



調査区壁面断面図-3 1 : 100

00C区壁面断面図土層注記

- 1.表土（神戸製鋼撤収時の土砂）または攪乱
- 2.7.5GY4/1暗緑灰色シルト 耕作土
- 3.5GY5/1オリブ灰色シルト鉄分多い 床土
- 4.10YR5/2灰黄褐色シルト 核
- 5.10YR5/1褐灰色シルト NR01第1層
- 6.5YR3/1黒褐色粘土 NR01第1層
- 7.7.5YR4/1褐灰色粘土 NR01第2層
- 8.10YR4/2灰黄褐色粘質シルト NR01第2層
- 9.10YR3/1黒褐色粘土 NR01第2層
- 10.5YR3/2暗赤褐色粘質シルト 植物遺体層 NR01第3層
- 11.2.5Y3/2黒褐色粘土 植物遺体を多く含む NR01第3層
- 12.7.5Y4/1灰色粘土 植物遺体を多少含む NR01第3層
- 13.2.5Y5/1黄灰色シルト NR01第3層
- 14.7.5Y3/1オリブ黒色粘土 植物遺体を多少含む NR01第3層
- 15.10GY4/1暗緑灰色粘土 植物遺体を多少含む NR01第3層
- 16.10YR8/1灰白色 粗粒砂2cm以下の小礫を含む NR01第3層
- 17.2.5Y3/3暗オリブ褐色 極細粒砂植物遺体を多く含む NR01第3層
- 18.10YR3/3暗褐色極細粒砂 植物遺体層 NR01第3層
- 19.2.5GY3/1暗オリブ灰色粘土
- 第15層と第19層の間に数ミリの厚みの5Y6/2灰オリブ色極細粒砂が部分的にみられる NR01第4層
- 20.10YR4/1褐灰色極細粒砂 1cm以下の小礫と植物遺体を含む NR01第4層
- 21.10YR6/1褐灰色中粒砂～極粗粒砂 1cm以下の小礫を含む NR01第4層
- 22.5Y3/2オリブ黒色粘質シルト 2cm以下の小礫多くを含む NR01第4層
- 23.2.5Y3/2灰黄色極細粒砂 0.5cm以下の小礫を含む NR01第4層
- 24.10YR8/1灰白色砂礫 NR01第5層
- 25.2.5Y3/1黒褐色粘質シルト NR01第5層
- 26.10YR5/1褐灰色中粒砂～極粗粒砂 2cm以下の小礫多くを含む NR01第5層
- 27.(1)7.5YR4/1褐灰色シルトと(2)7.5Y4/1灰色シルト
(3)2.5Y8/1～7/1灰白色極細粒砂と(4)10YR6/2灰黄褐色粗粒砂の混合層 NR01第5層
- 28.(1)7.5YR4/1褐灰色シルトと(2)2.5Y7/1灰白色極細粒砂と
(3)10YR7/1灰白色粗粒砂の混合層 1cm以下の小礫多くを含む NR01第5層
- 29.10YR6/1褐灰色中粒砂～極細粒砂 3cm以下の礫を多く含む
- 30.(1)10YR3/1黒褐色砂礫と(2)10YR7/1灰白色砂礫と
(3)10YR5/6暗褐色砂礫の混合層 NR02
- 31.10YR6/6明黄褐色中粒砂～極粗粒砂 3cm以下の礫を多く含む NR02

図版 16

Y=23725

X=88570

X=88575

X=88580

X=88585

X=88590

X=88595

X=88600

X=88605

Y=23730

Y=23735

Y=23740

Y=23745

Y=23750

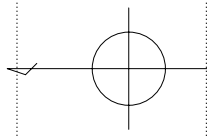
Y=23755

Y=23760

Y=23765

Y=23770

Y=23775



00A2・00B3(1) 1/200

X=88605

X=88610

X=88615

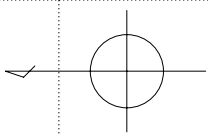
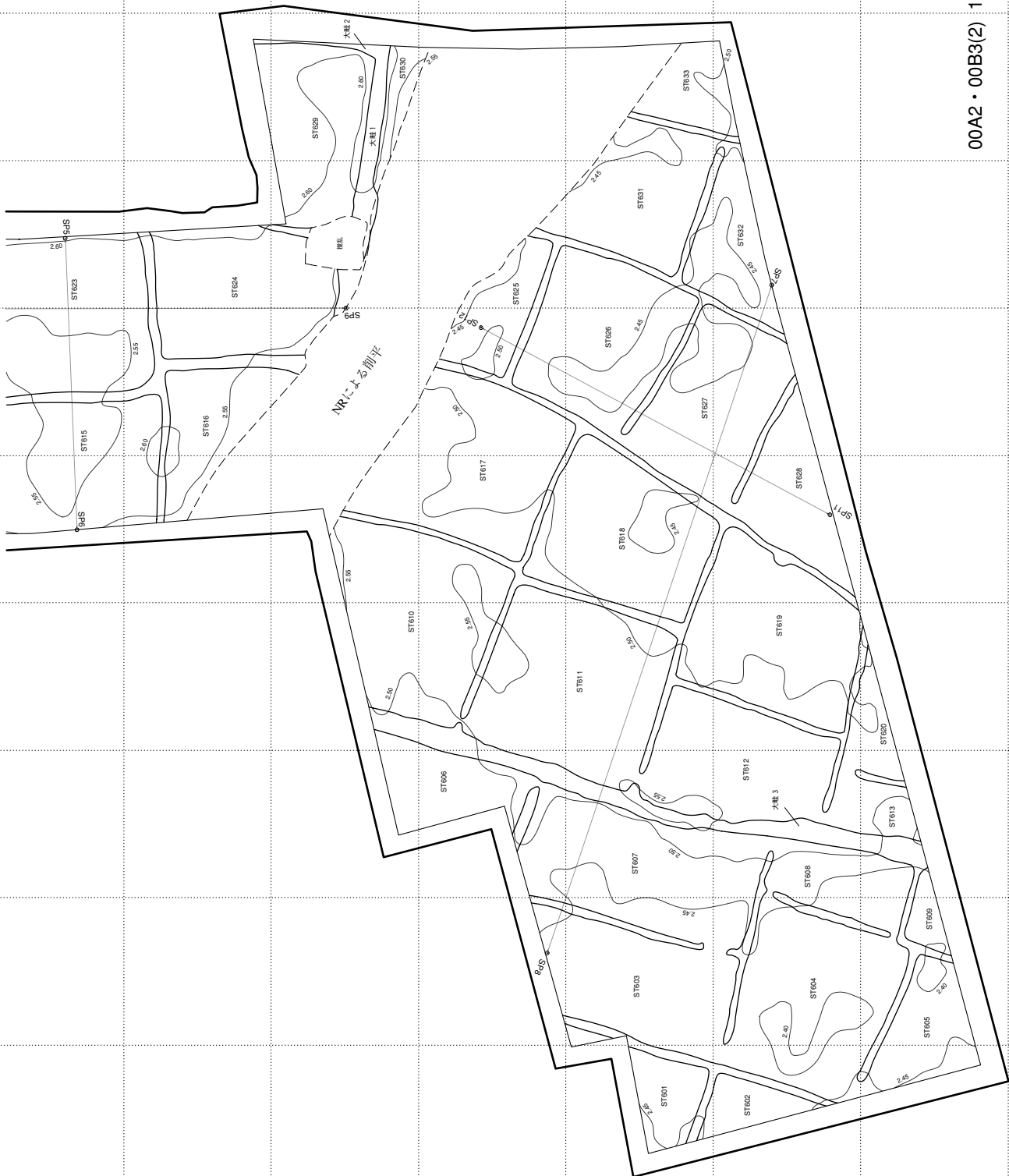
X=88620

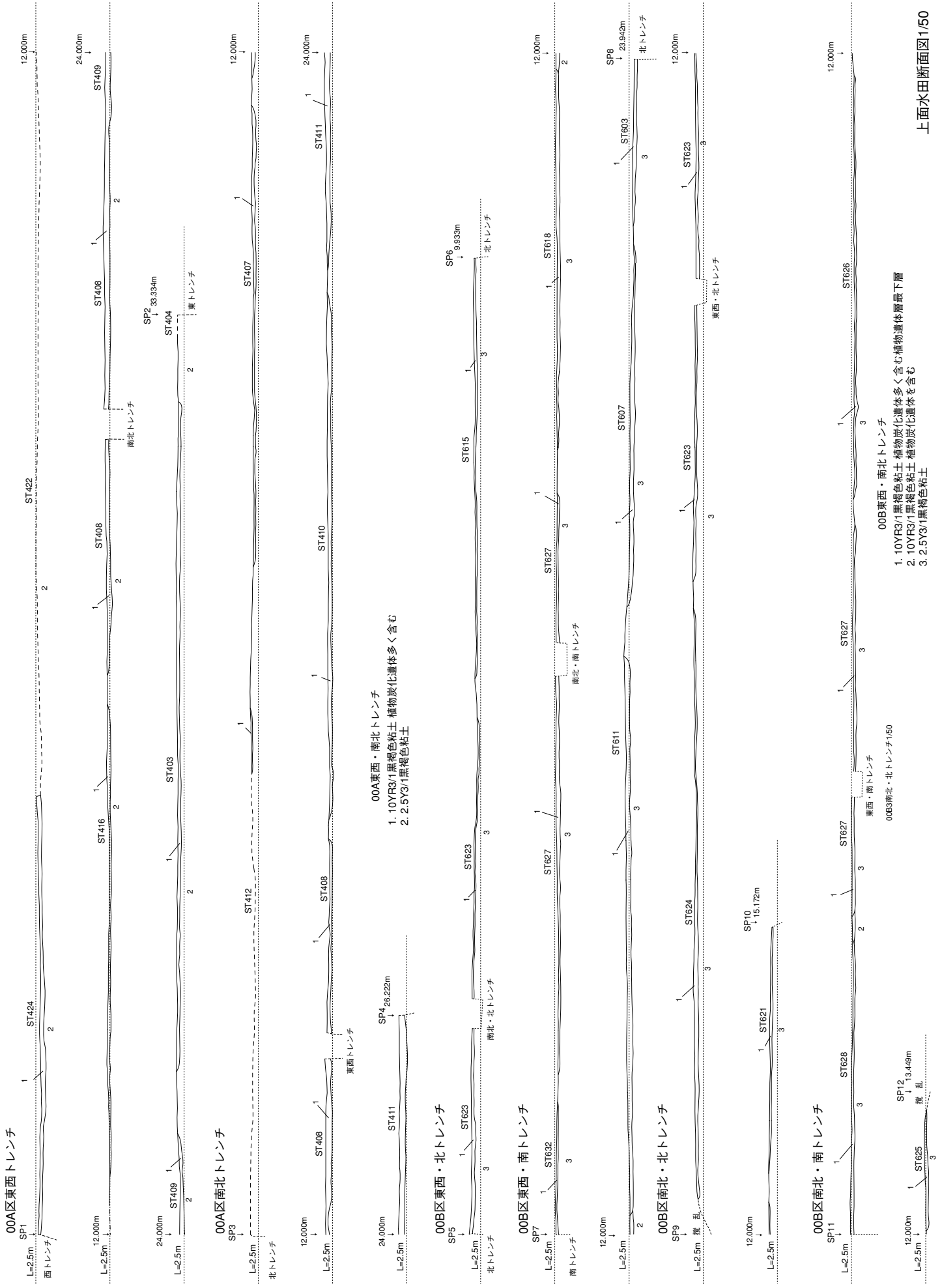
X=88625

X=88630

X=88635

00A2・00B3(2) 1/200





Y=23725

Y=23730

Y=23735

Y=23740

Y=23745

Y=23750

Y=23755

Y=23760

Y=23765

Y=23770

Y=23775

X=88570

X=88575

X=88580

X=88585

X=88590

X=88595

X=88600

X=88605



00A3・00B4(1) 1/200

X=88605

X=88610

X=88615

X=88620

X=88625

X=88630

X=88635

Y=23725

Y=23730

Y=23735

Y=23740

Y=23745

Y=23750

Y=23755

Y=23760

Y=23765

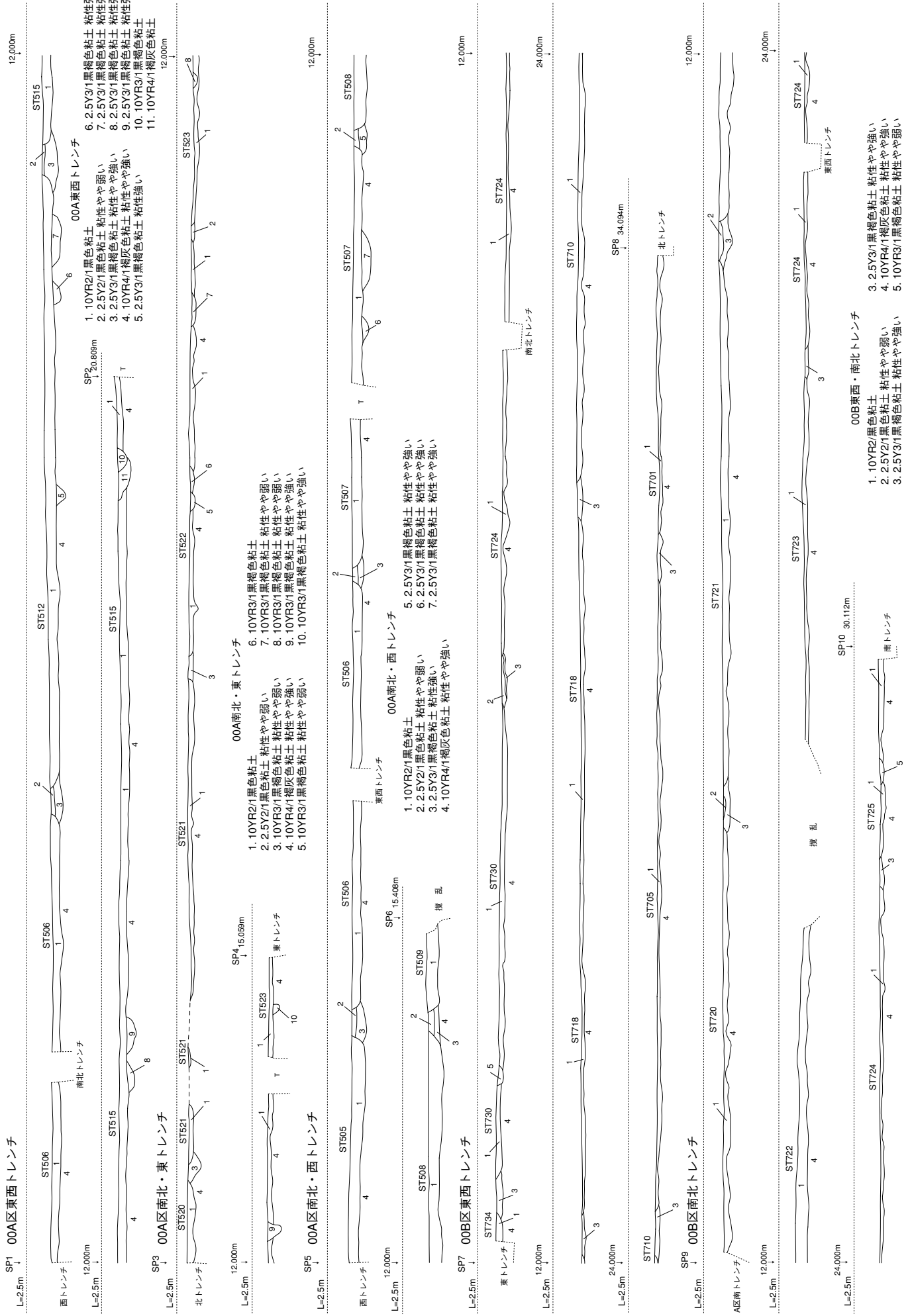
Y=23770

Y=23775

Y=23780

00A3・00B4(2) 1/200





X=88570

Y=23780

Y=23770

Y=23760

Y=23750

Y=23740

Y=23730

X=88580

X=88590

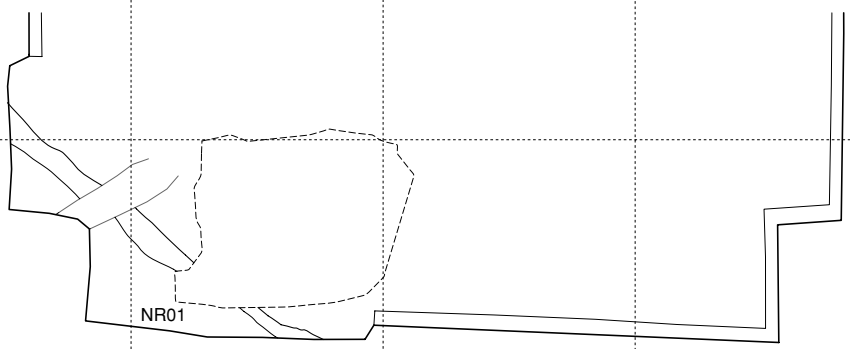
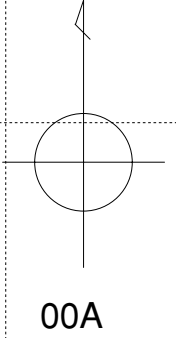
X=88600

X=88610

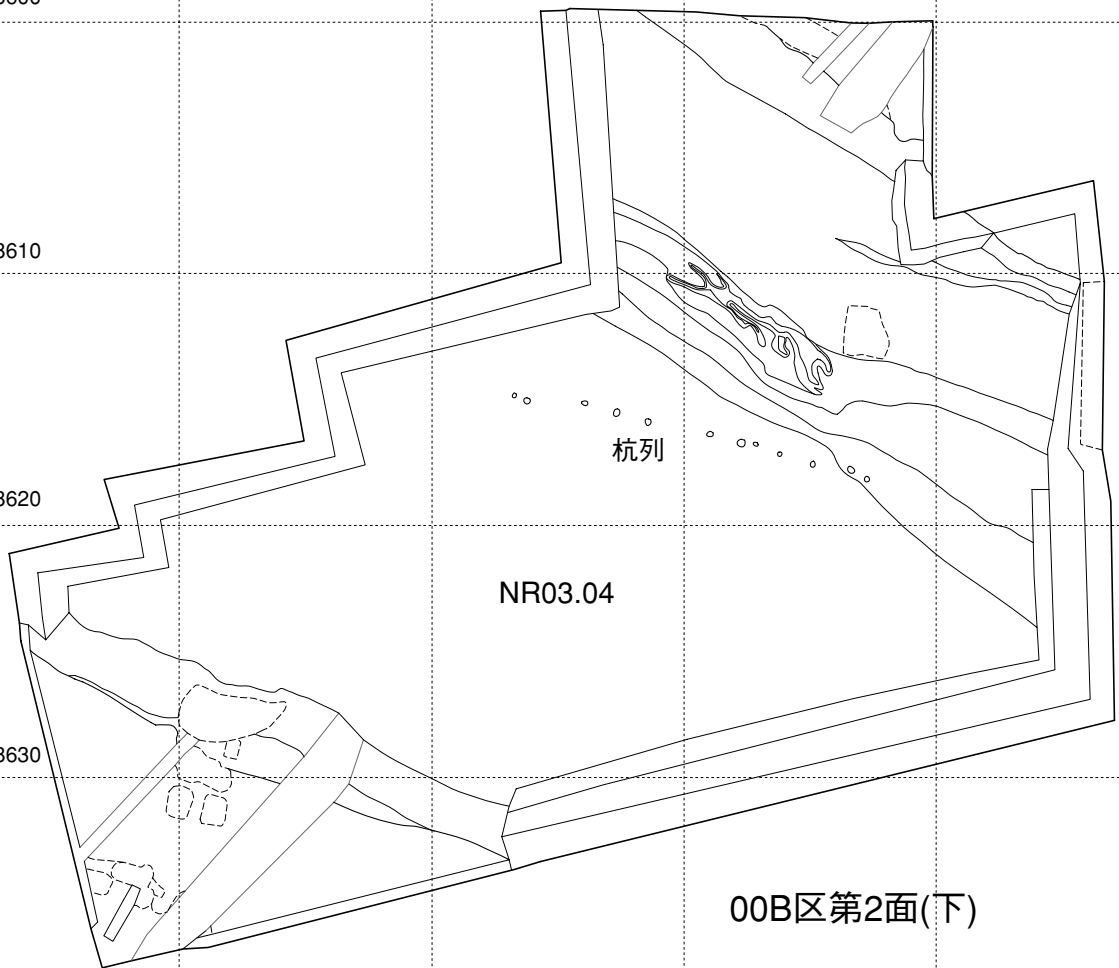
X=88620

X=88630

X=88640



NR01



杭列

NR03.04

00B区第2面(下)

Y=23730

Y=23740

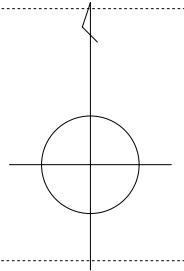
Y=23750

Y=23760

Y=23770

Y=23780

Y=23790



X=88570

X=88580

X=88590

X=88600

X=88610

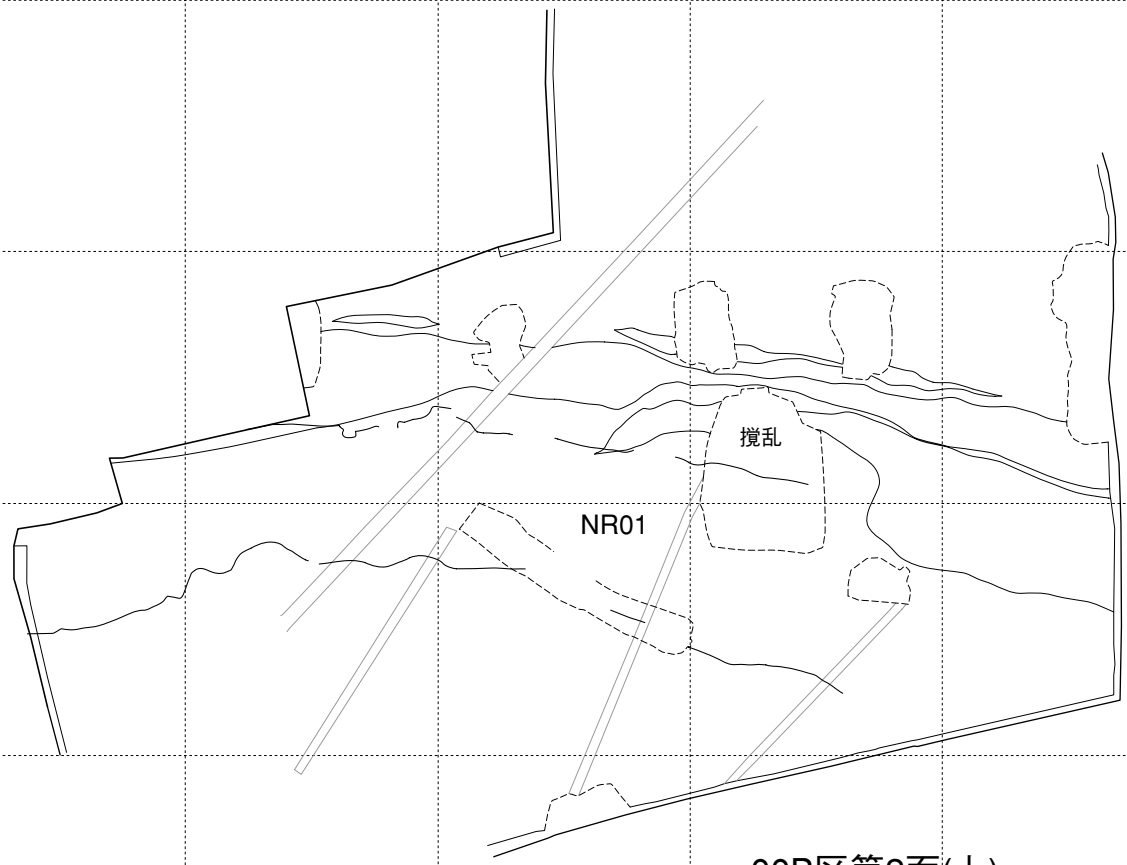
X=88620

X=88630

X=88640



00C2(上)



00B区第2面(上)

1 : 300

図版 24

Y=23780

Y=23770

Y=23760

Y=23750

Y=23740

Y=23730

X=88570

X=88580

X=88590

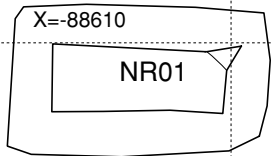
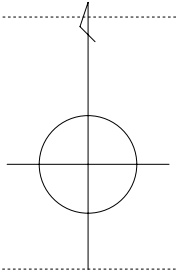
X=88600

X=88610

X=88620

X=88630

X=88640



00C区第2面(下)

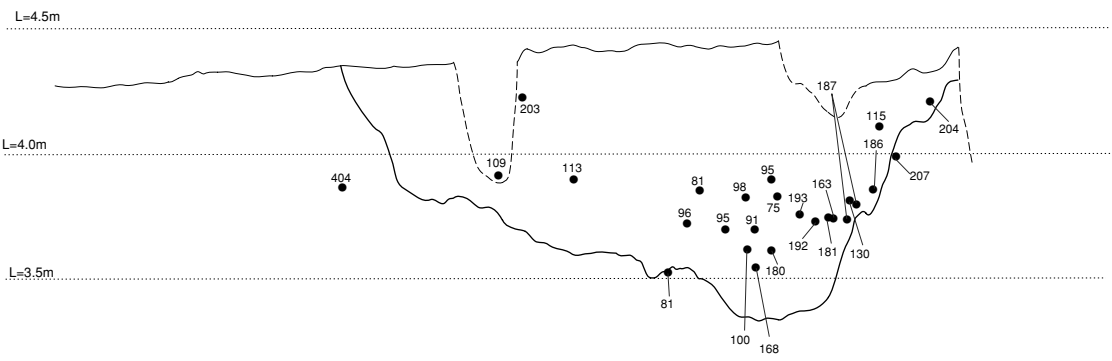


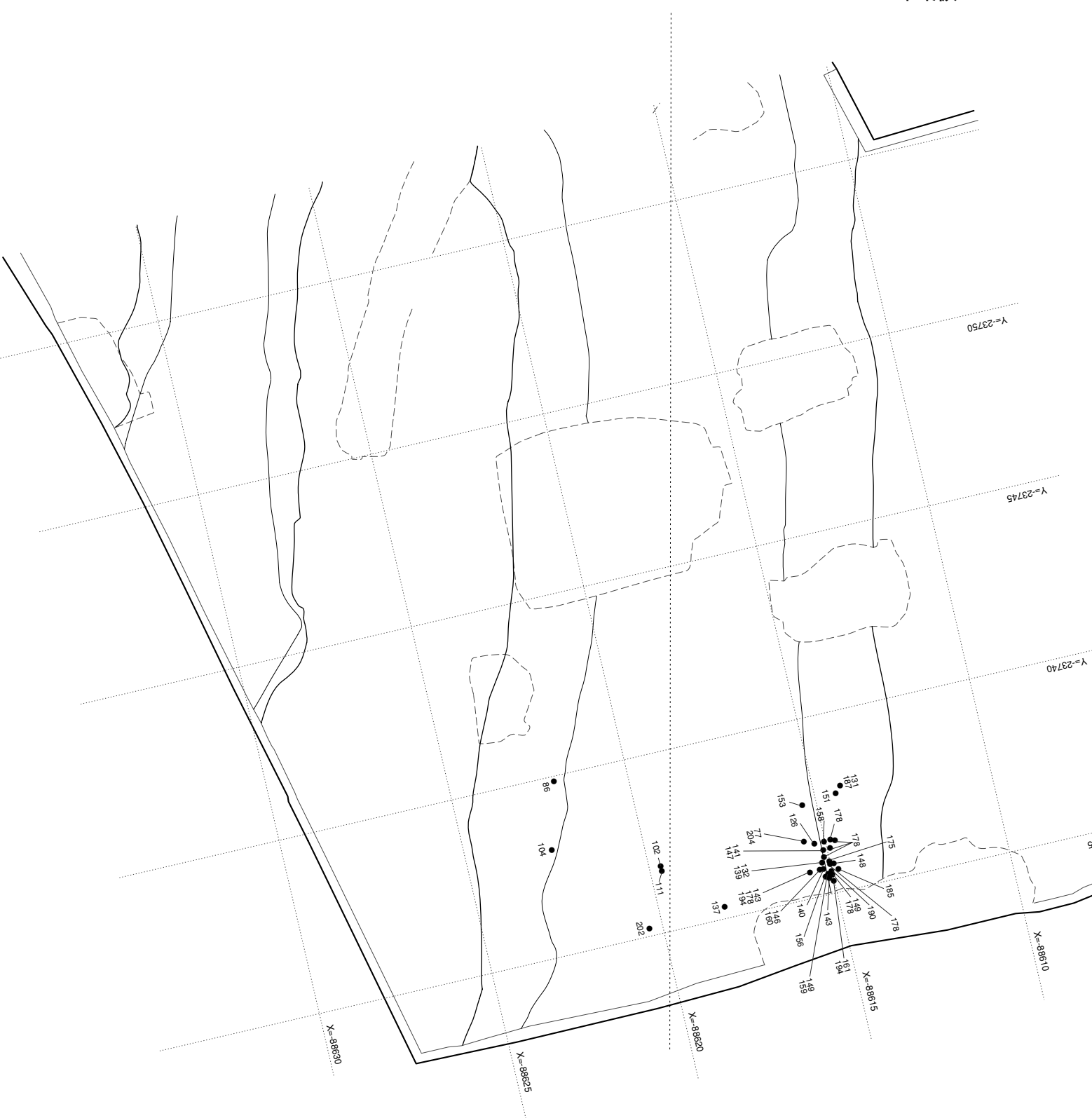
00B区第2面(中)

1 : 300

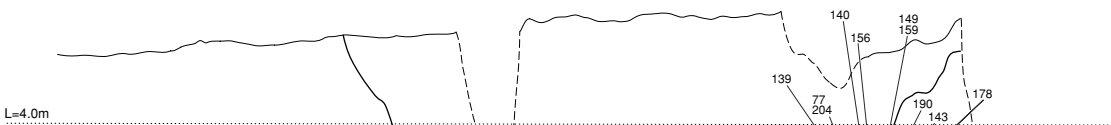


※ 数字は遺物（木器を除く）の図番号に対応。以下同じ。

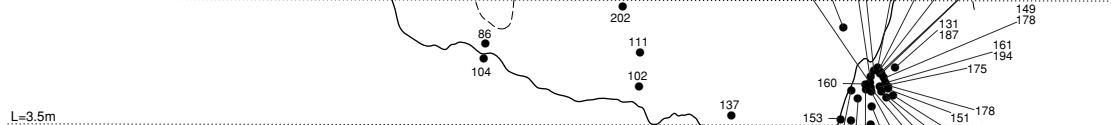




L=4.5m

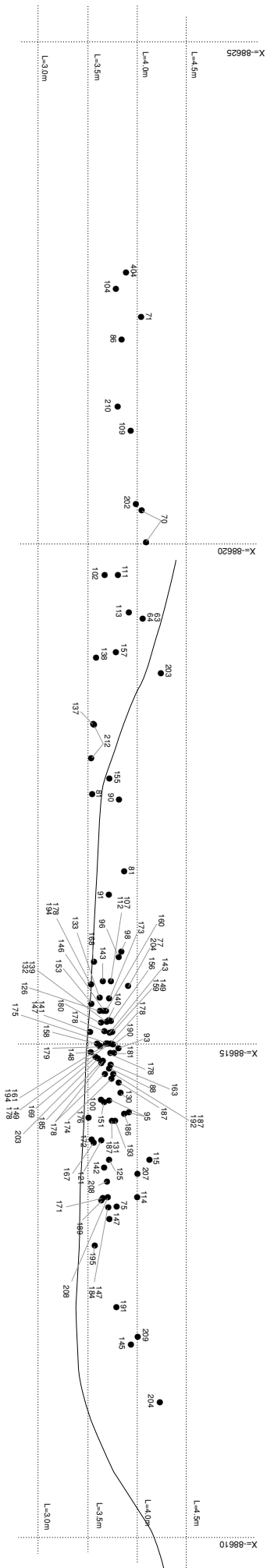


L=4.0m

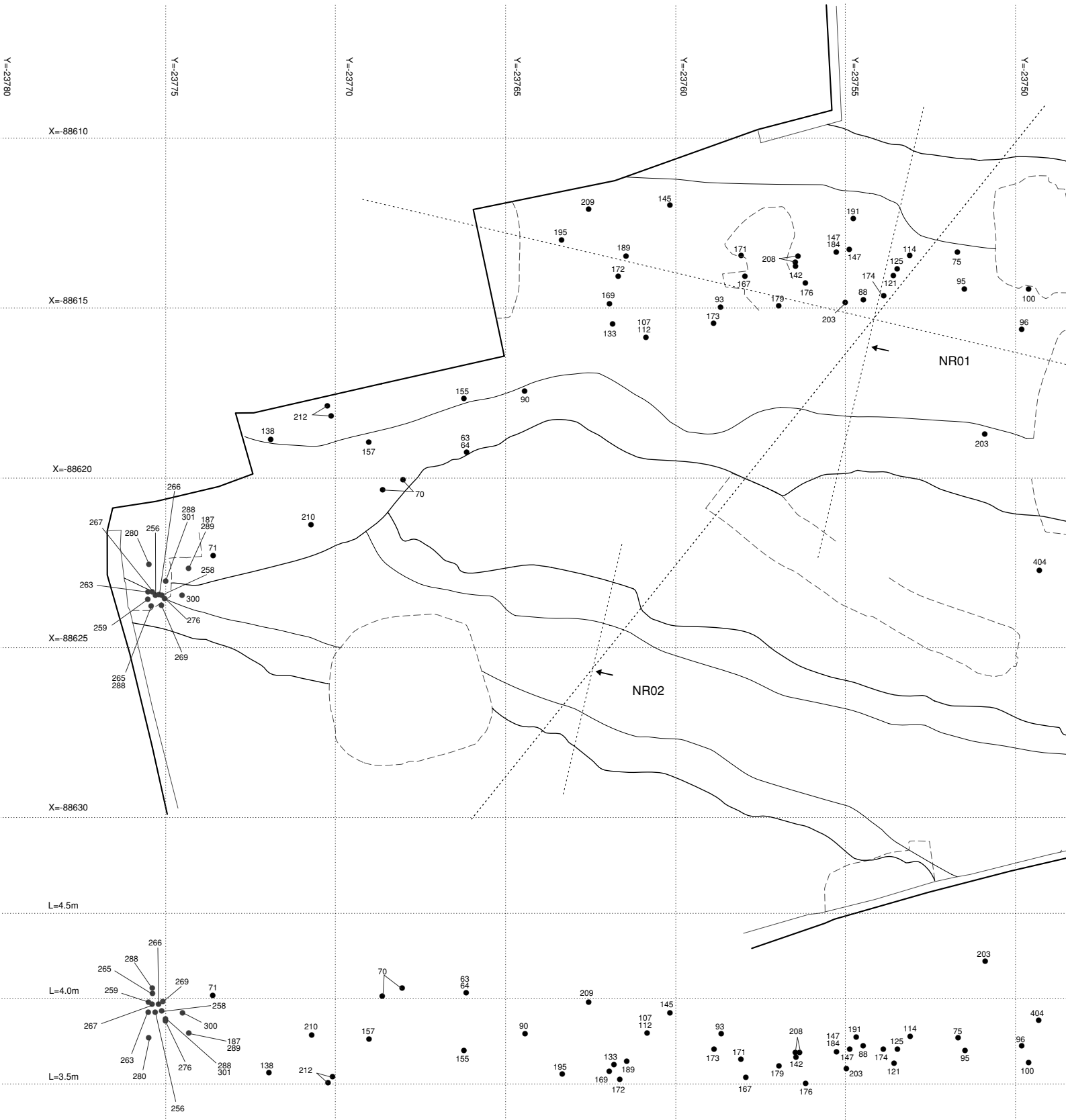


L=3.5m





NR01 1/50土器出土状況

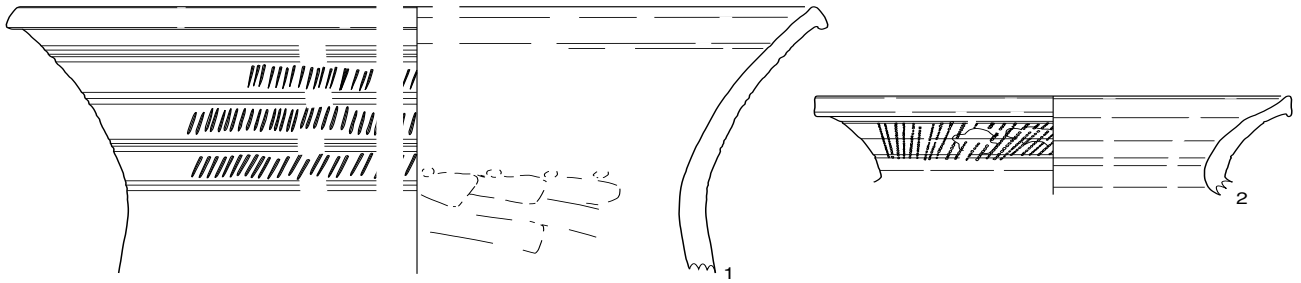




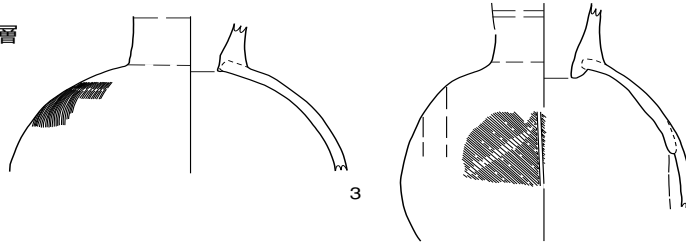


00A区

SD01

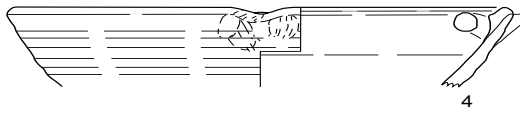


SD01/SD01下層

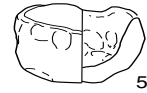


0 10cm

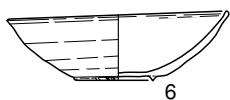
SD16



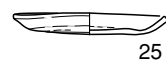
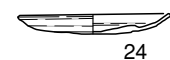
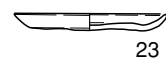
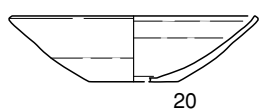
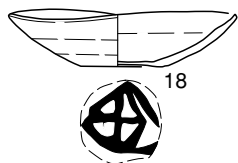
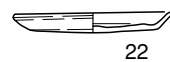
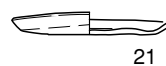
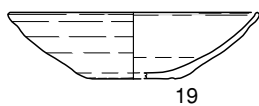
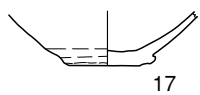
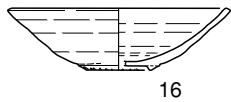
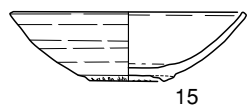
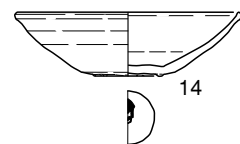
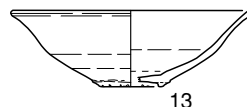
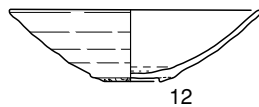
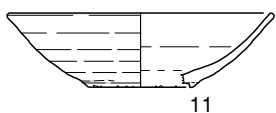
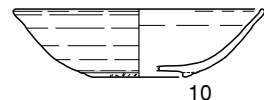
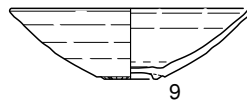
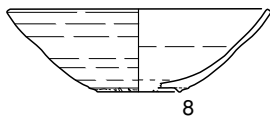
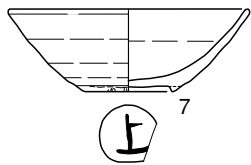
SD26



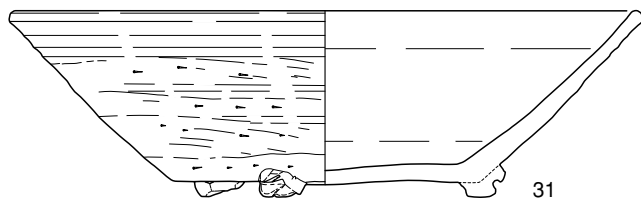
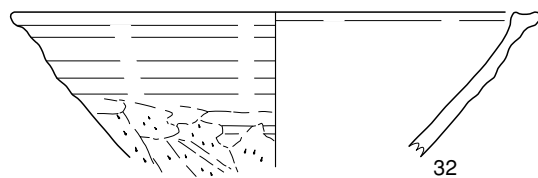
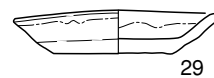
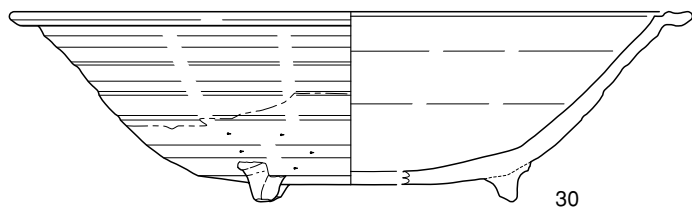
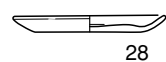
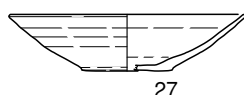
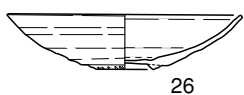
SD02上層



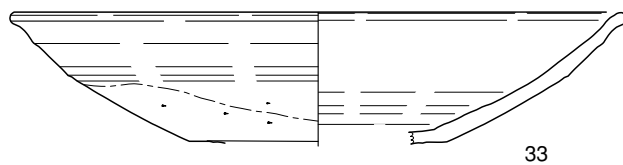
SD02下層



SD02



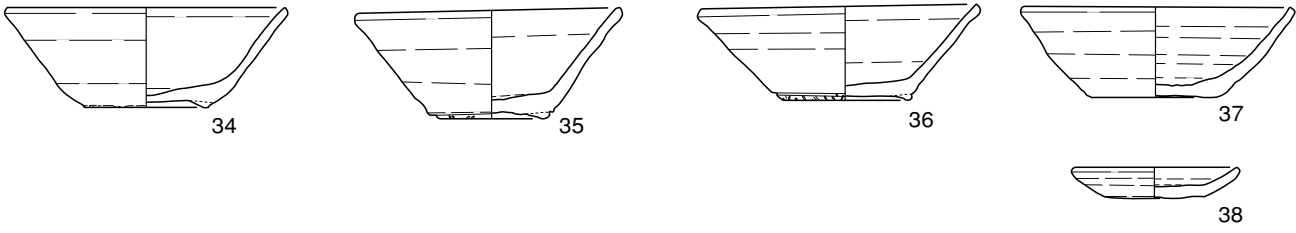
SD02/SD02下層



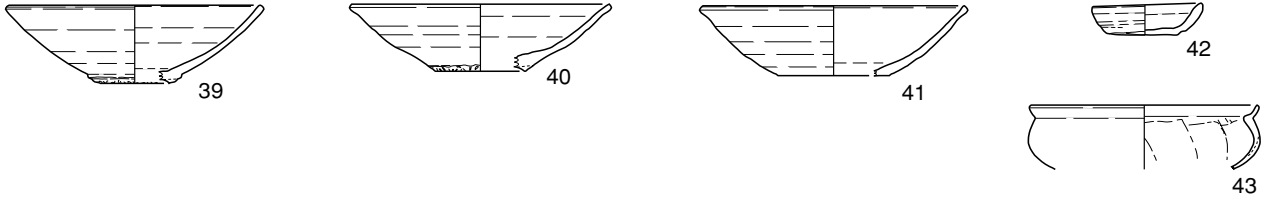
0 10cm

図版 34

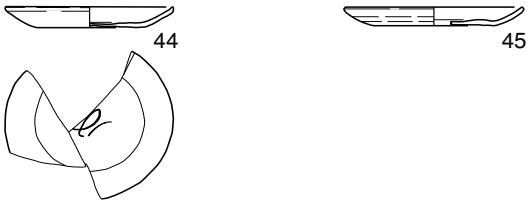
SE01



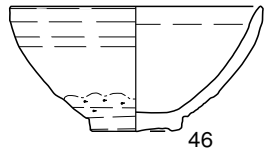
SK206



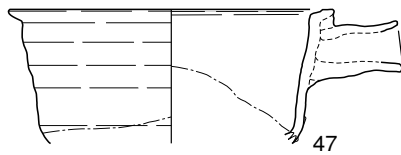
SK292



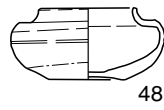
SK13



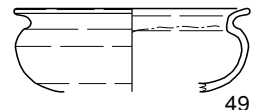
SK86



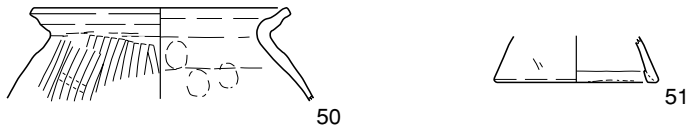
SK168



SK195



ST411下



0 10cm

陶丸

SD02下層

SK206

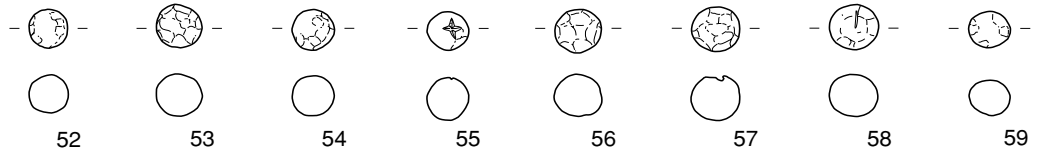
SK231

SK261

西下

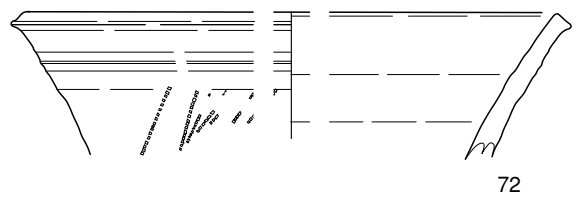
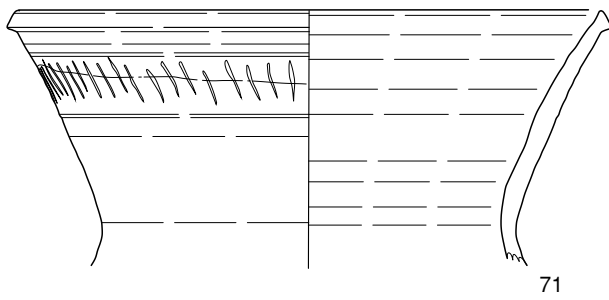
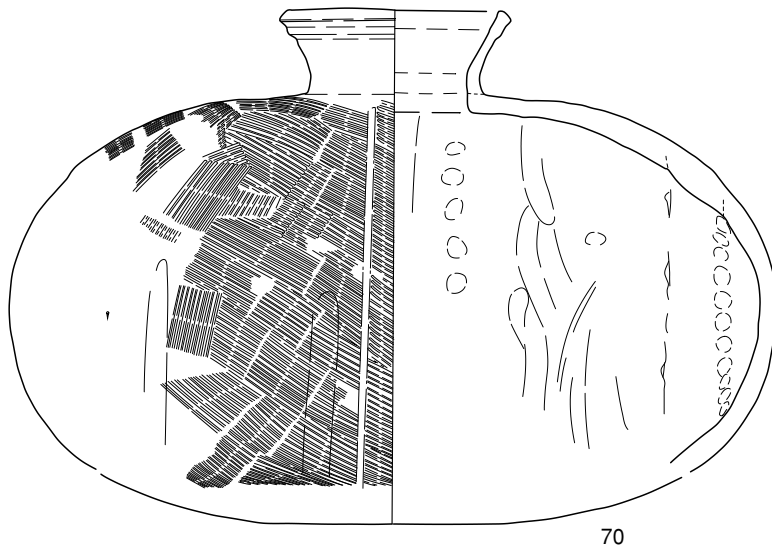
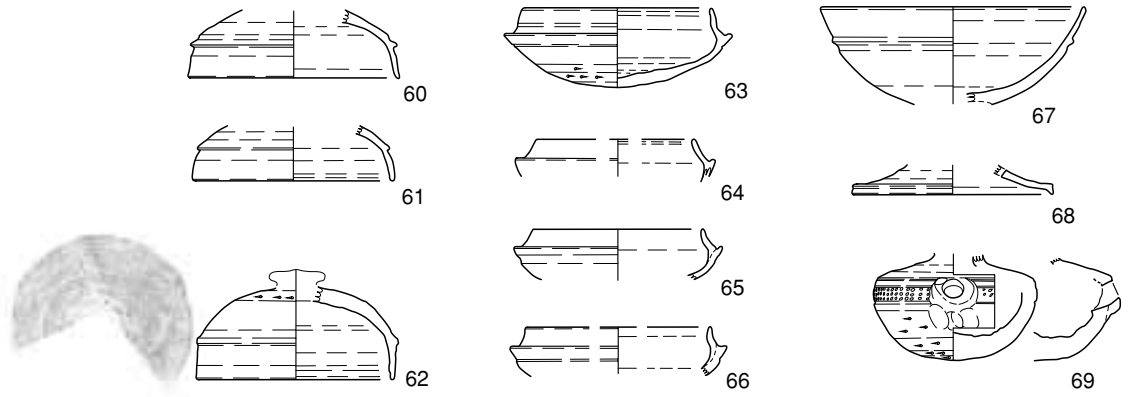
検出。

0 5cm



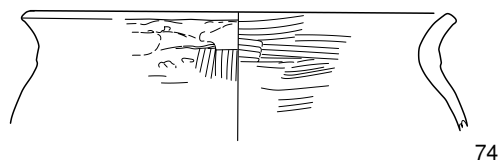
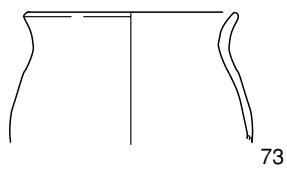
00B区

NR01-第1層

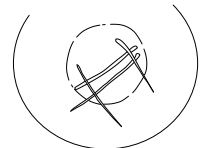
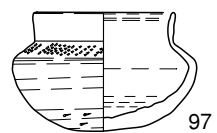
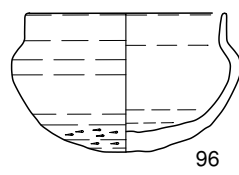
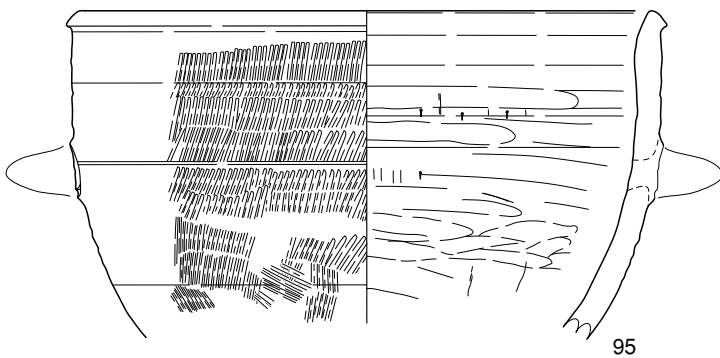
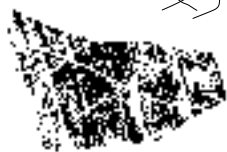
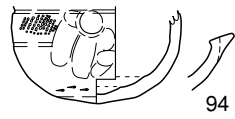
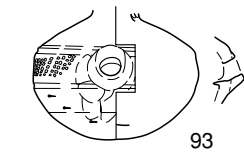
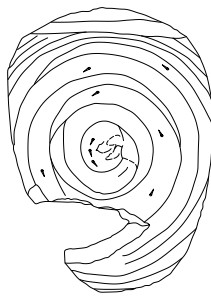
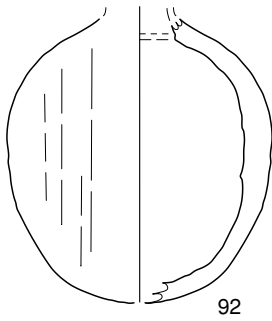
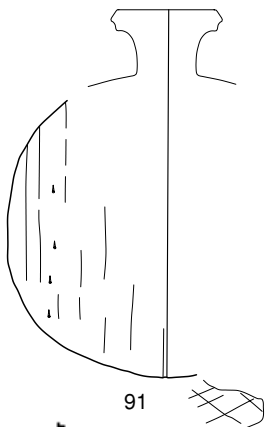
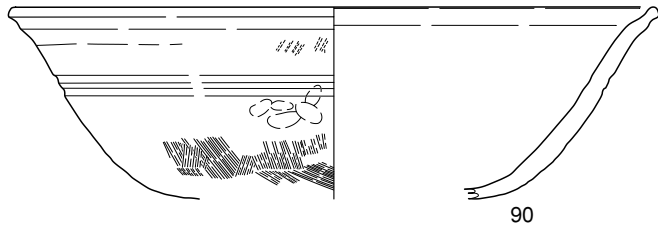
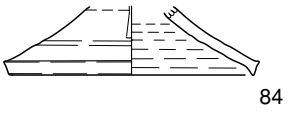
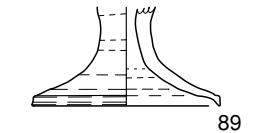
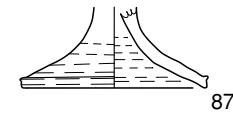
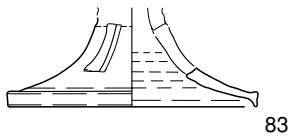
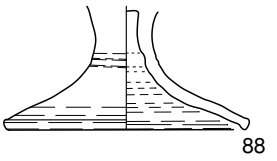
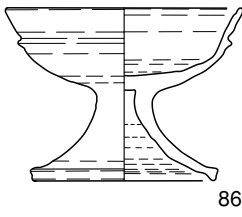
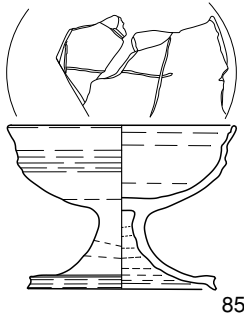
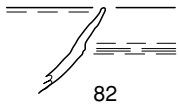
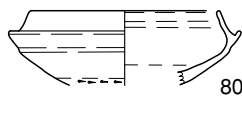
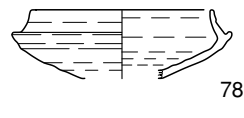
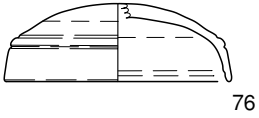
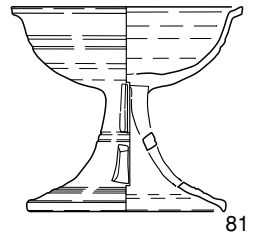
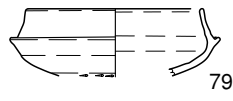
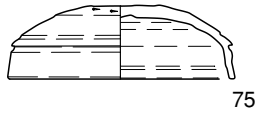


0 10cm

NR01-第2層

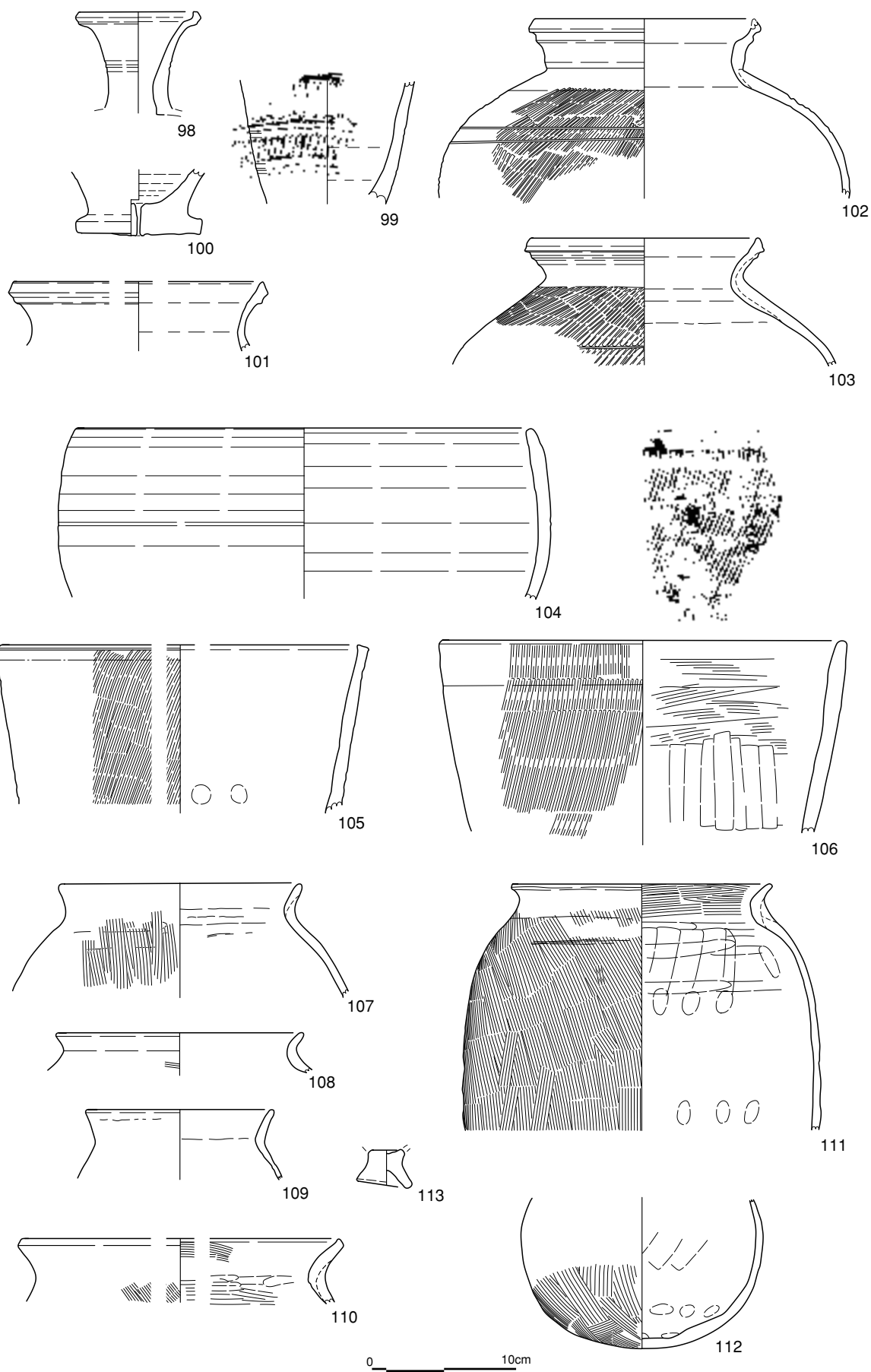


NR01-第3層

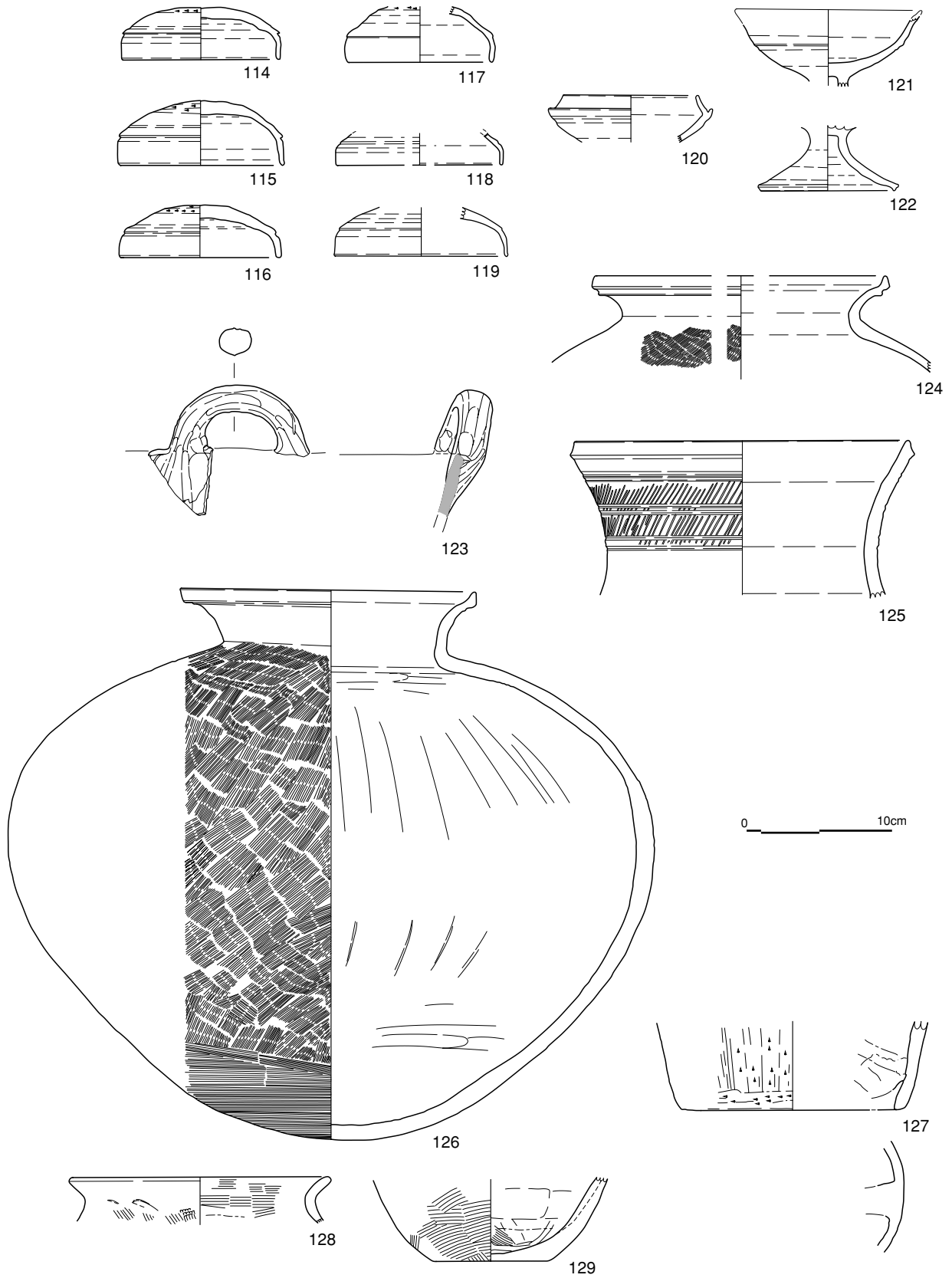


0 10cm

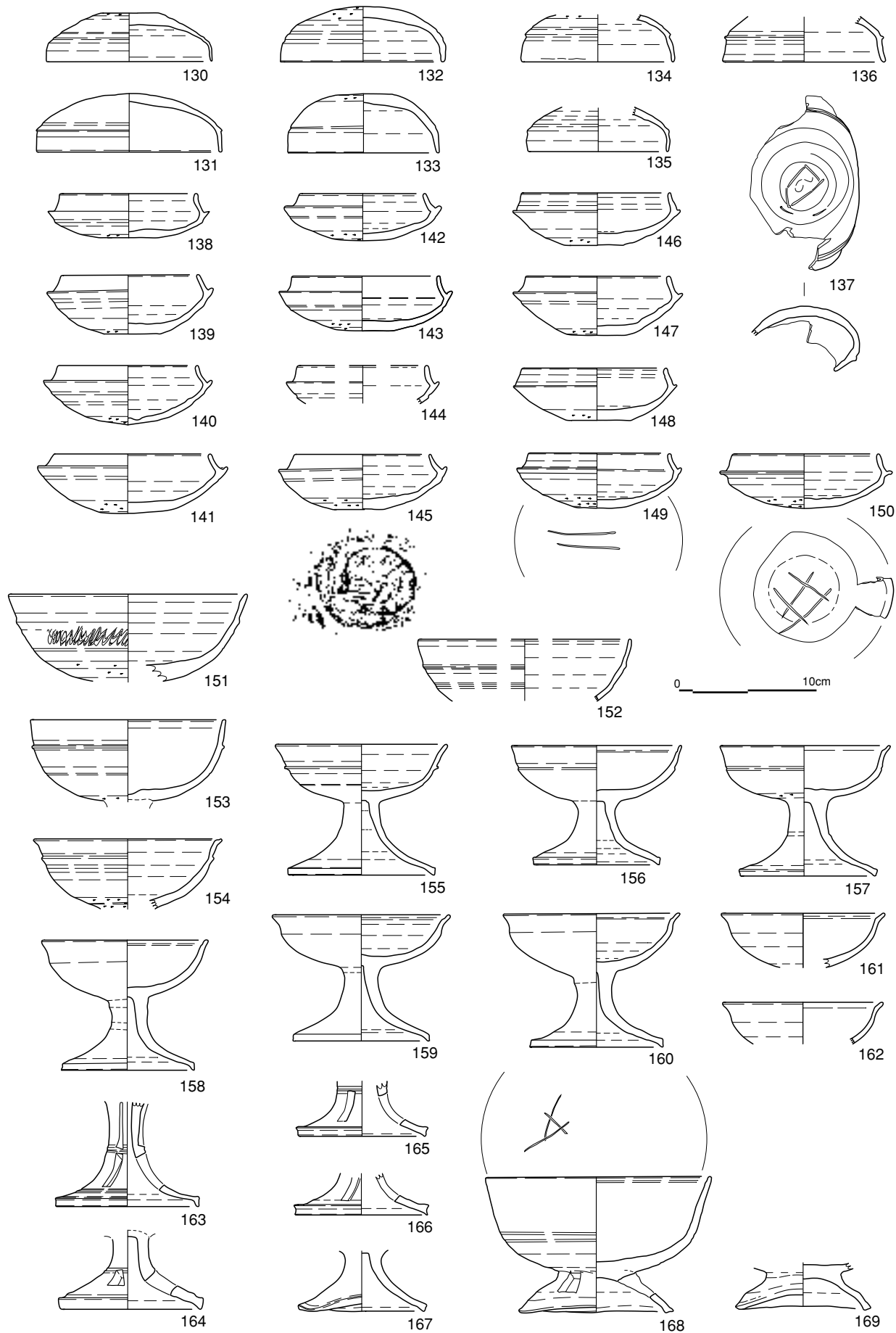
NR01-第3層



NR01-第4層

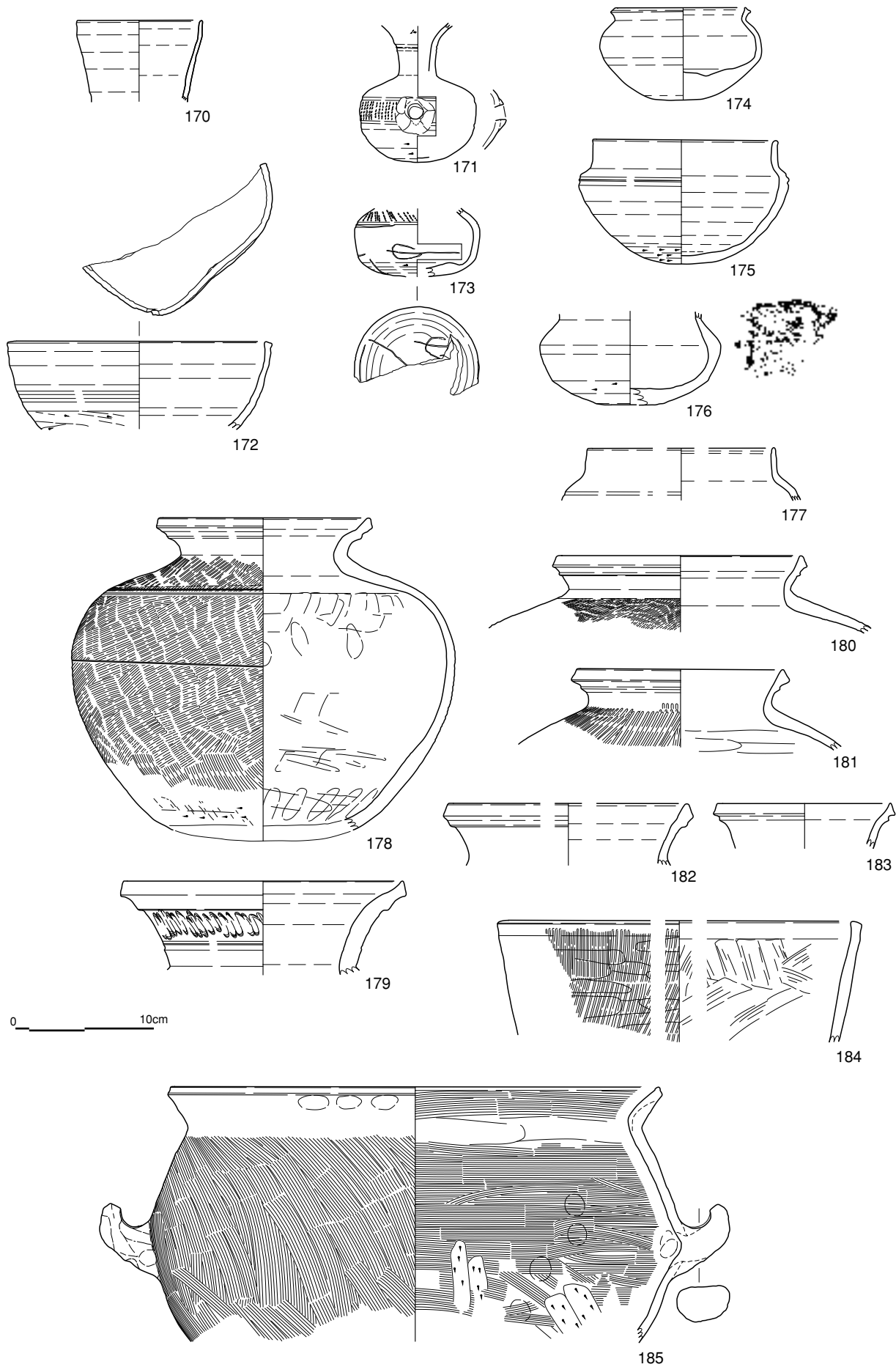


NR01-第5層

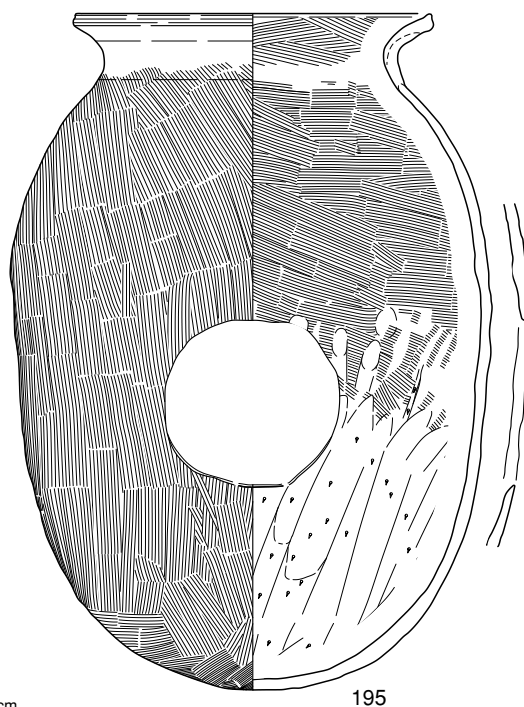
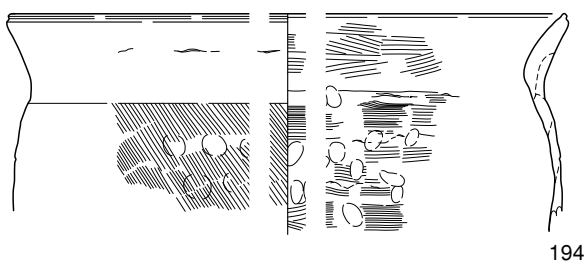
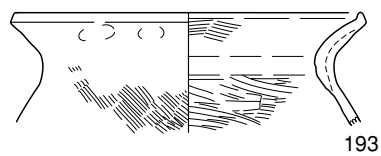
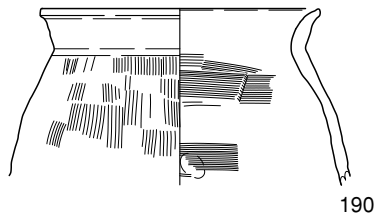
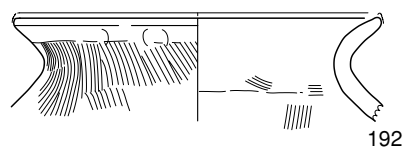
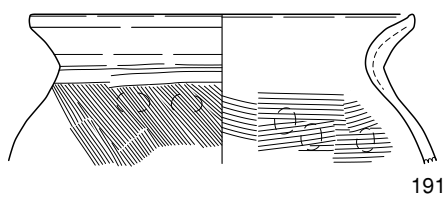
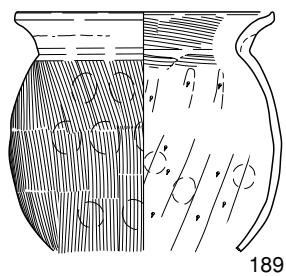
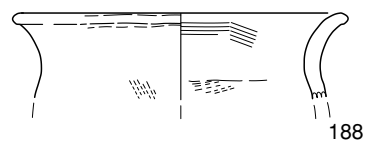
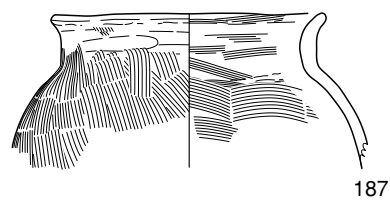
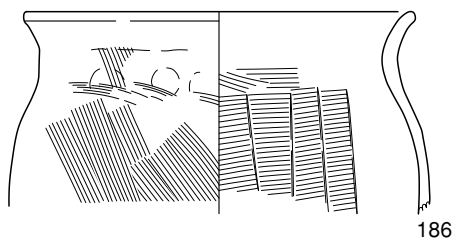


图版 40

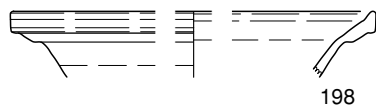
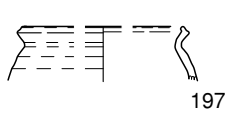
NR01-第5層



NR01-第5層



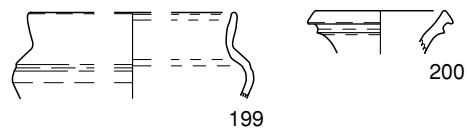
NR01-第6層



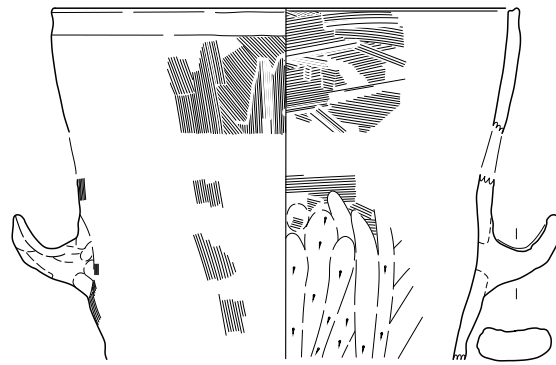
0 10cm

図版 42

NR01

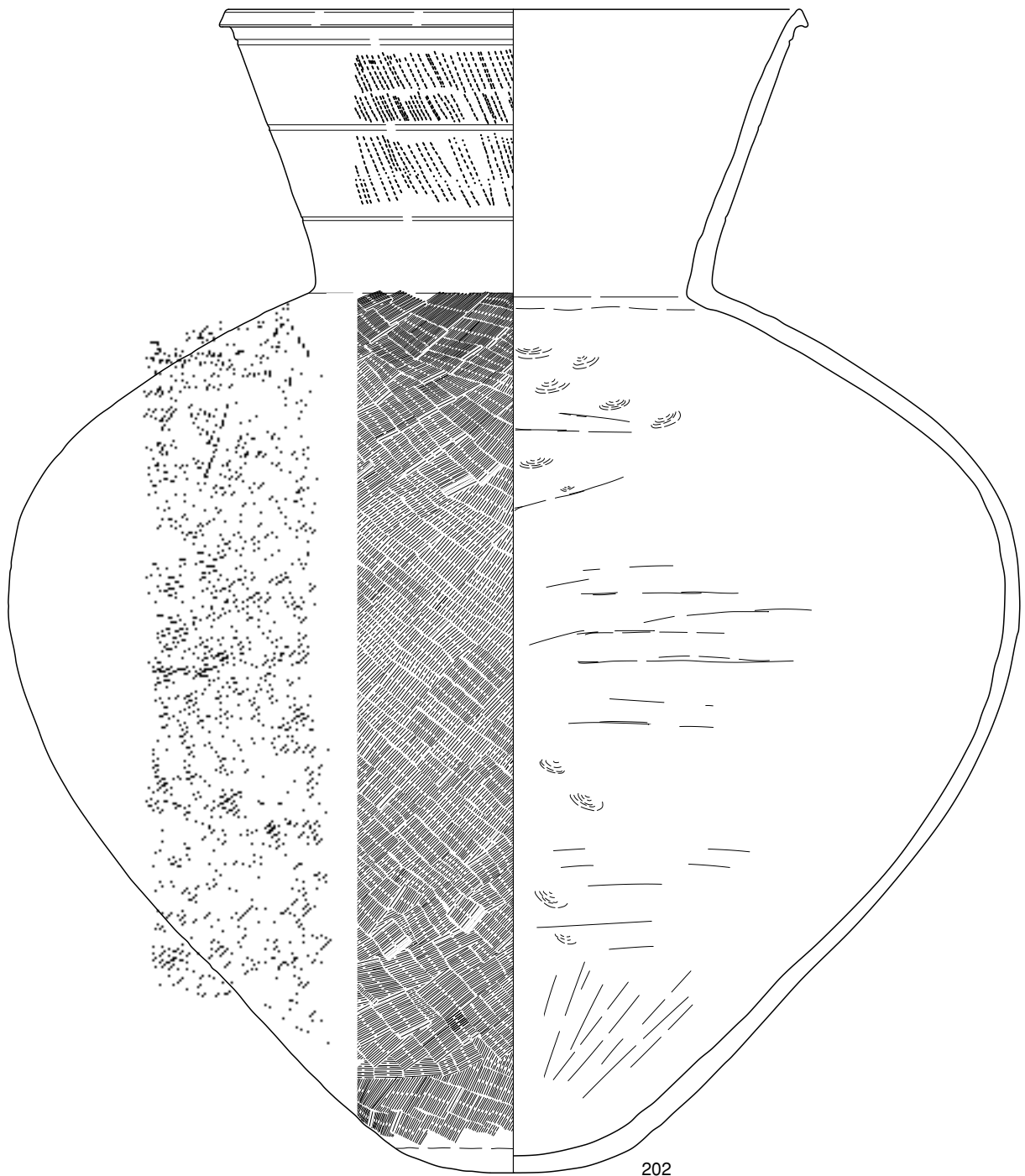


0 10cm

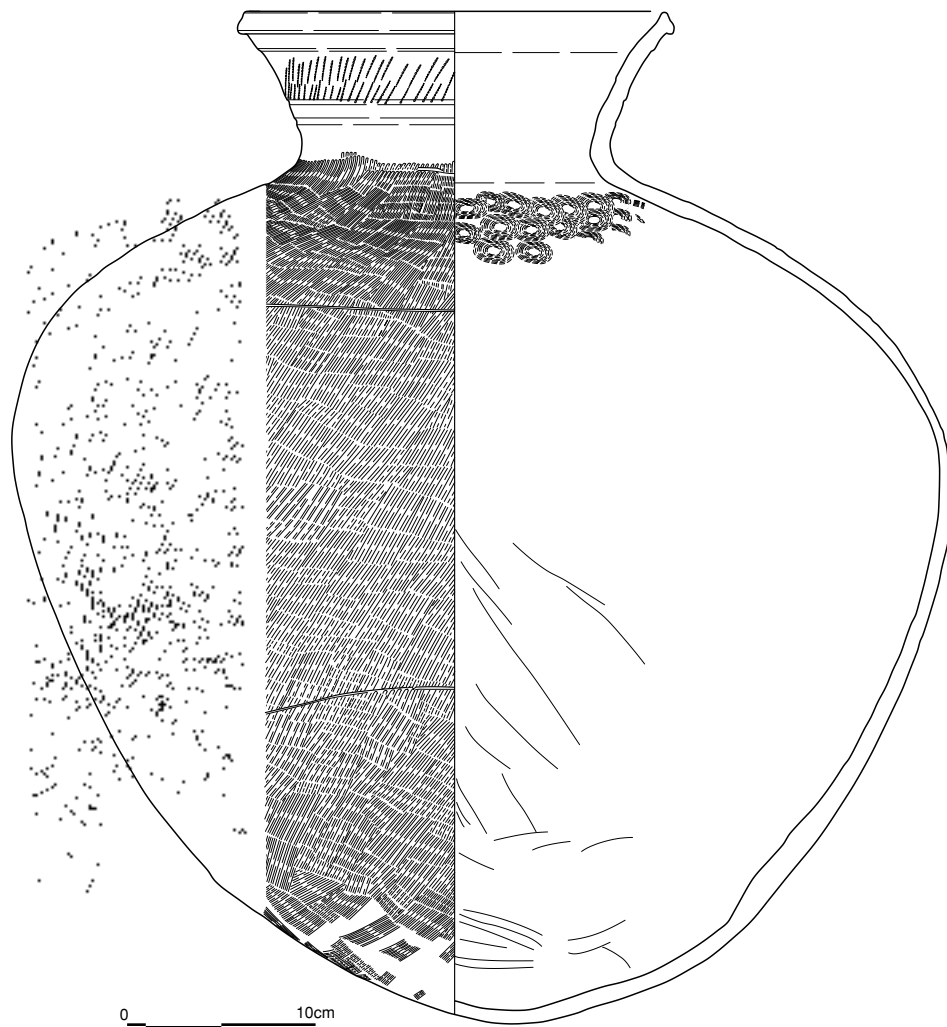


NR01-第1層/第2層/検出。

201

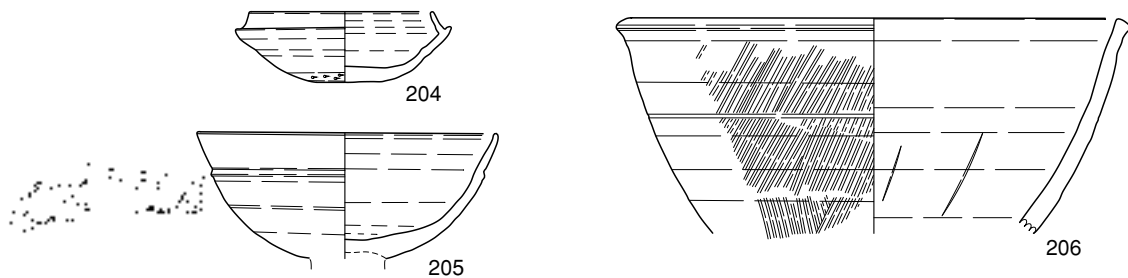


NR01-第1層/第5層/第6層

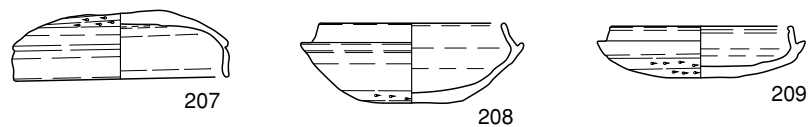


图版 44

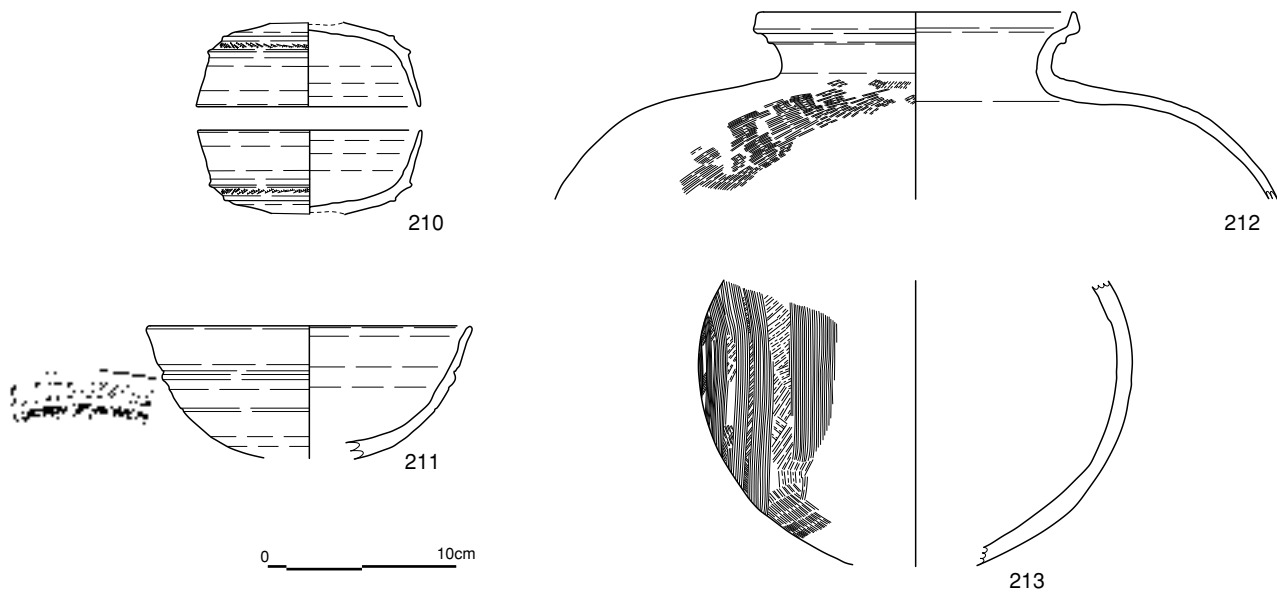
NR01-第1層/第3層/第5層



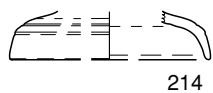
NR01-第4層/第5層



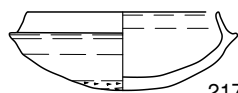
NR01/NR02



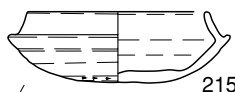
NR02-第1層



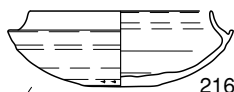
214



217



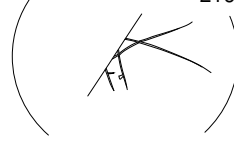
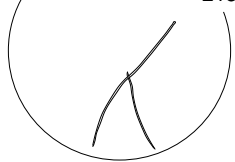
215



216



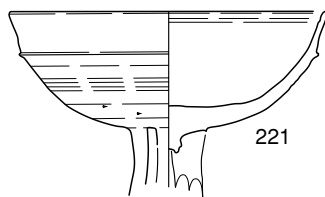
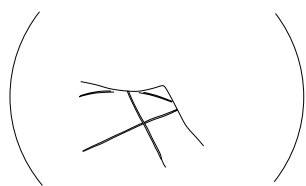
218



219



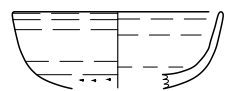
※223の杯部内面の樹状線刻 1/1



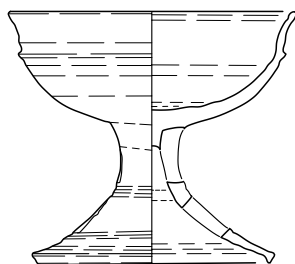
221



222



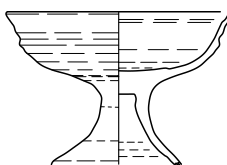
223



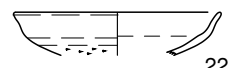
220



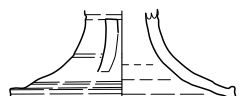
224



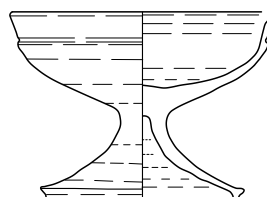
226



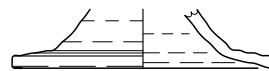
228



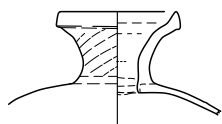
225



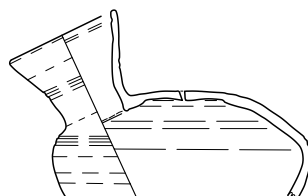
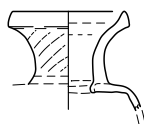
227



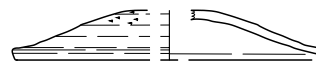
229



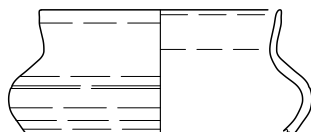
230



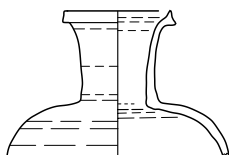
233



236



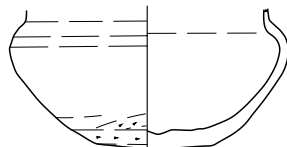
231



234



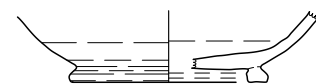
237



232

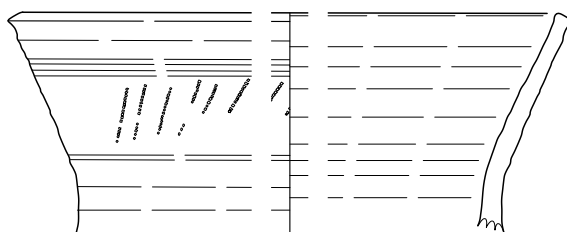


235



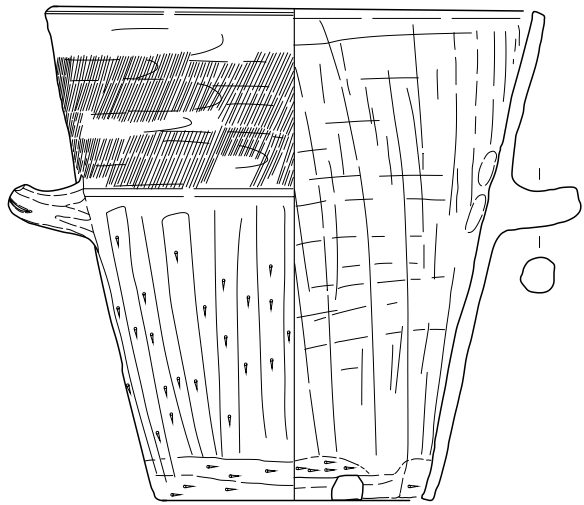
238

0 10cm

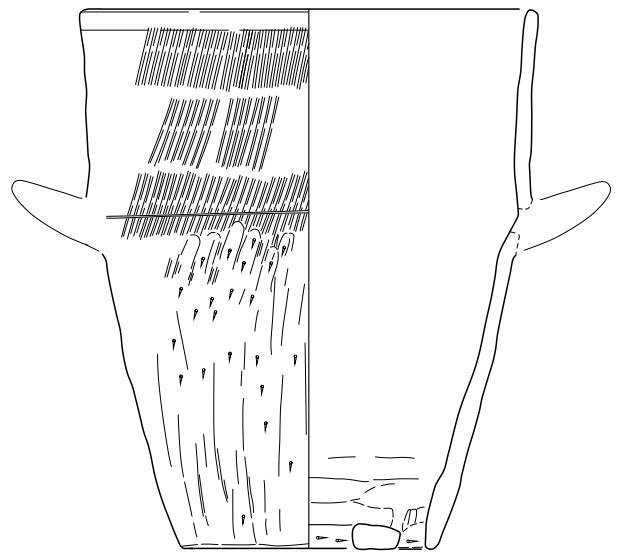


239

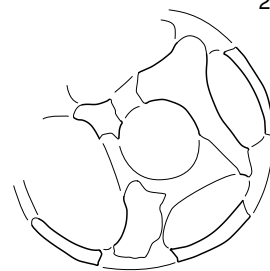
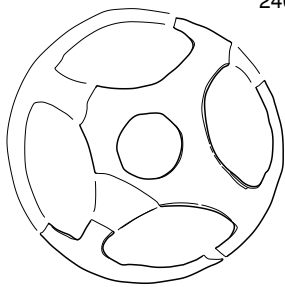
NR02-第1層



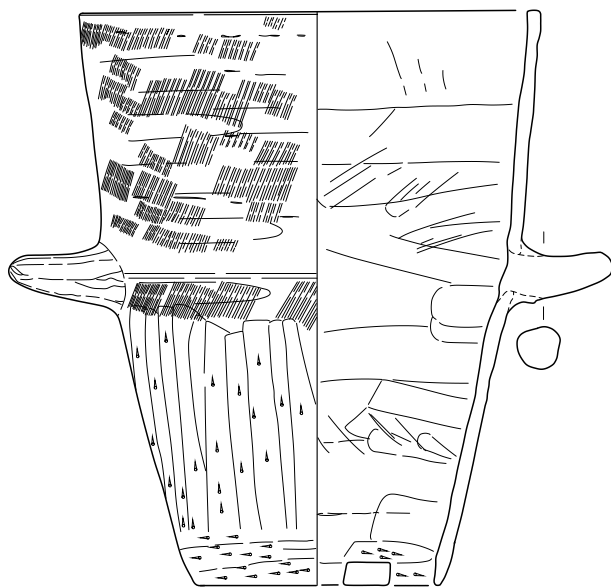
240



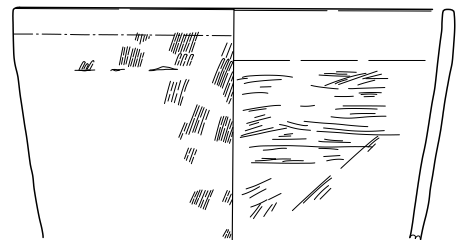
241



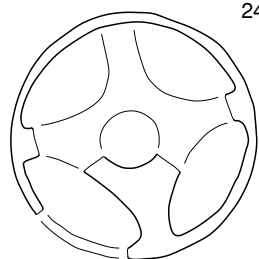
0 10cm



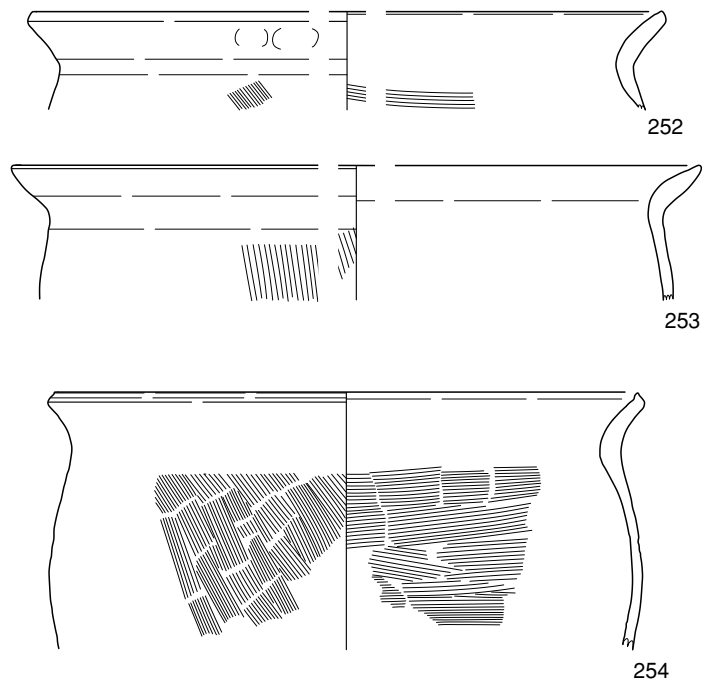
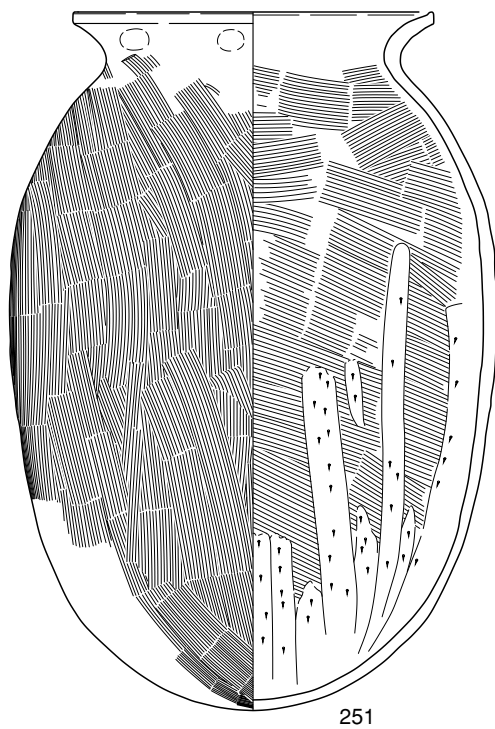
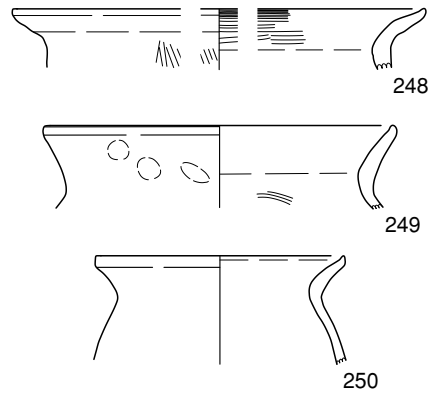
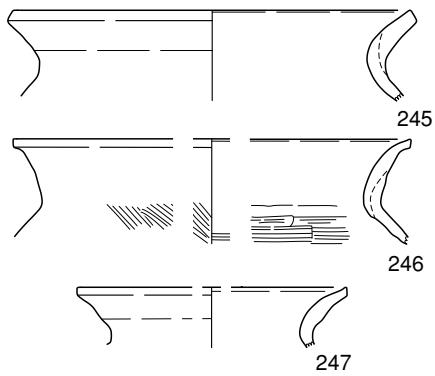
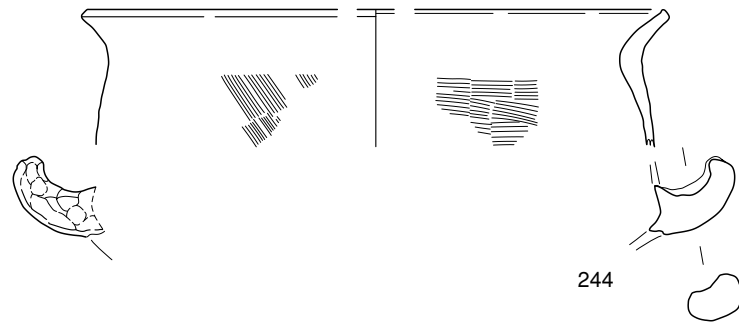
242



243



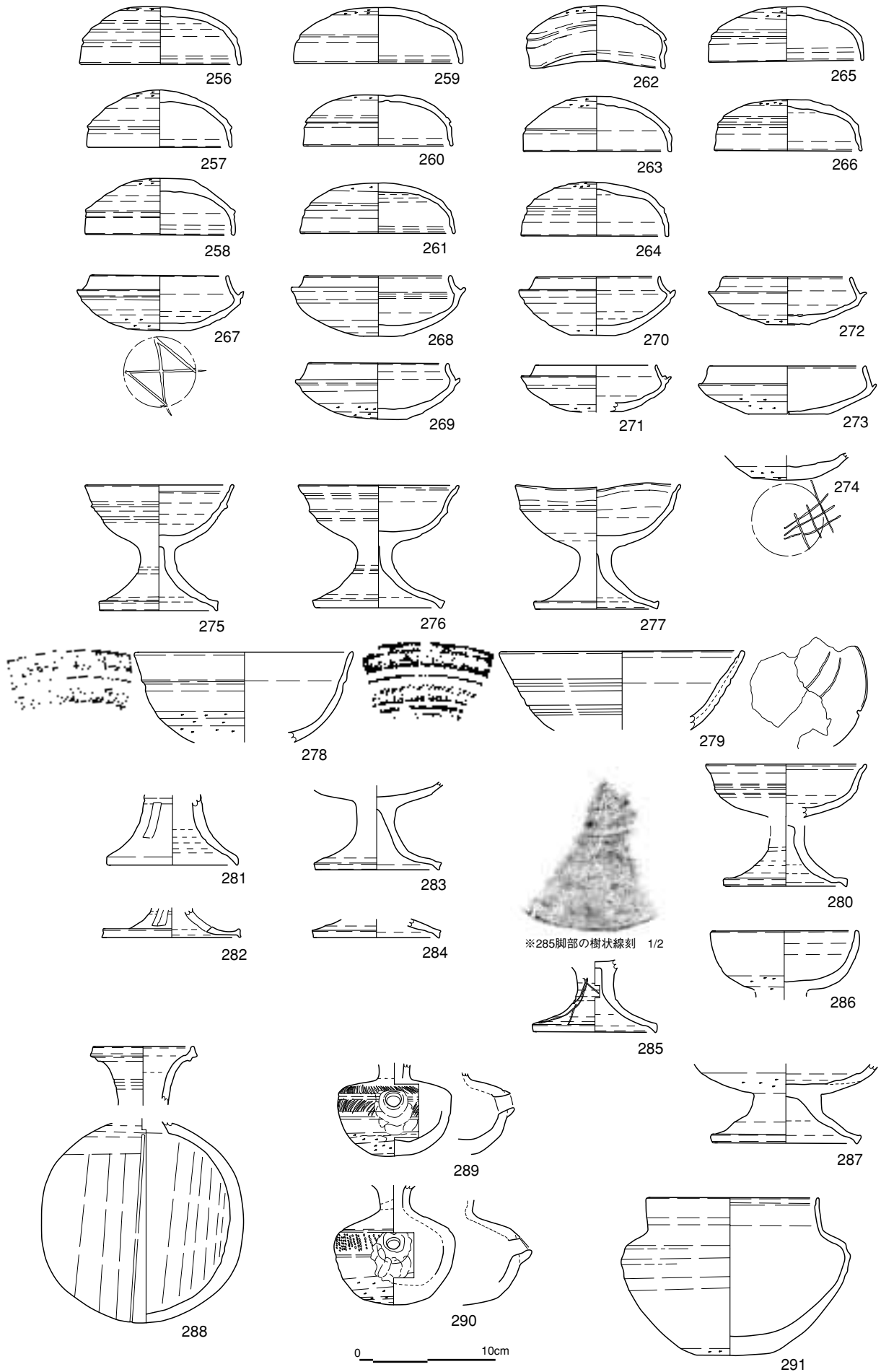
NR02-第1層



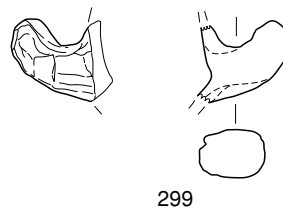
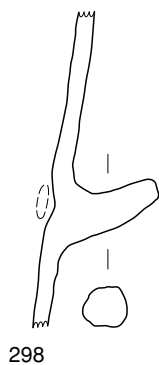
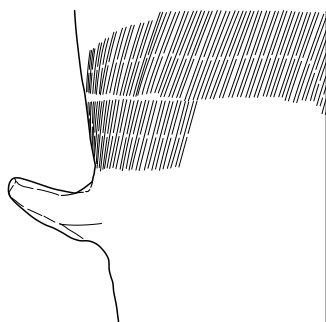
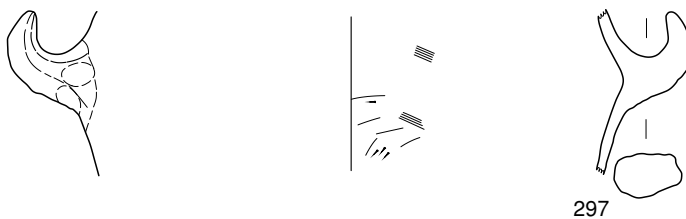
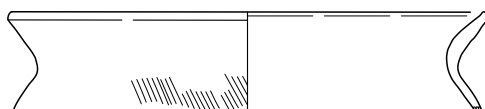
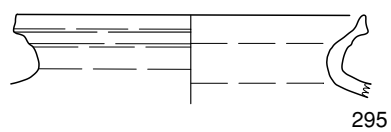
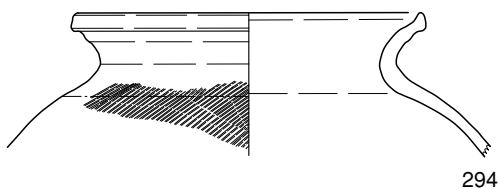
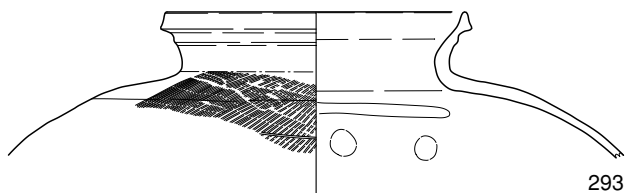
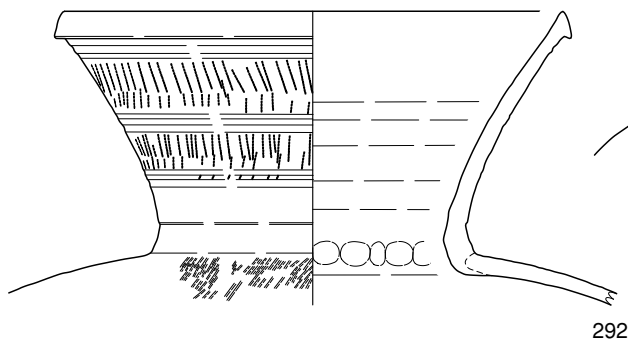
0 10cm

図版 48

NR02-第2層

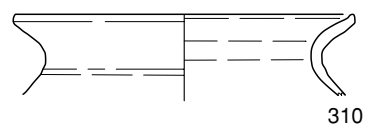
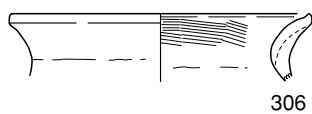
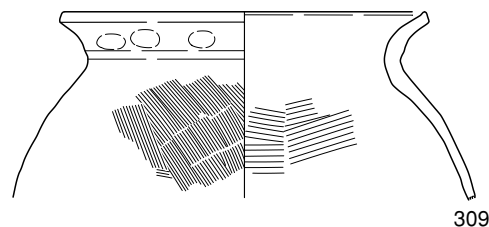
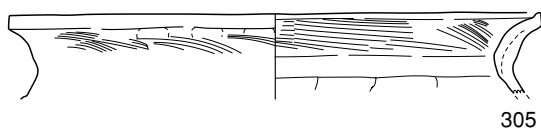
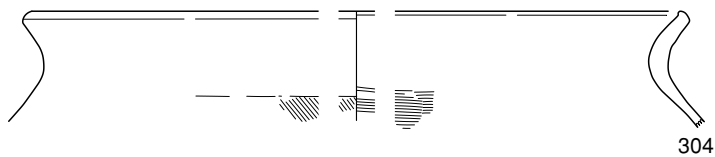
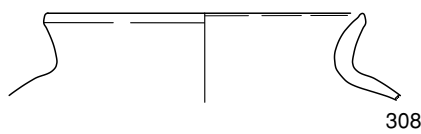
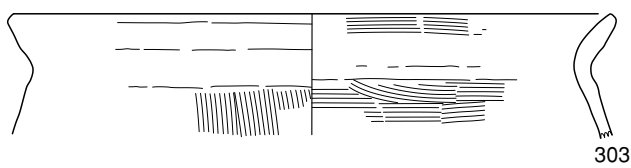
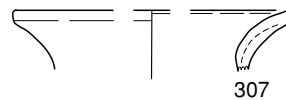
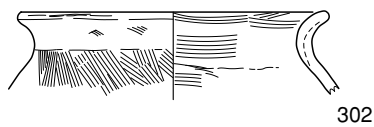
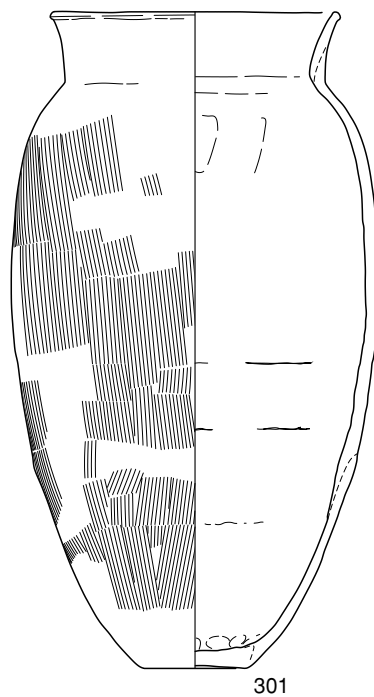
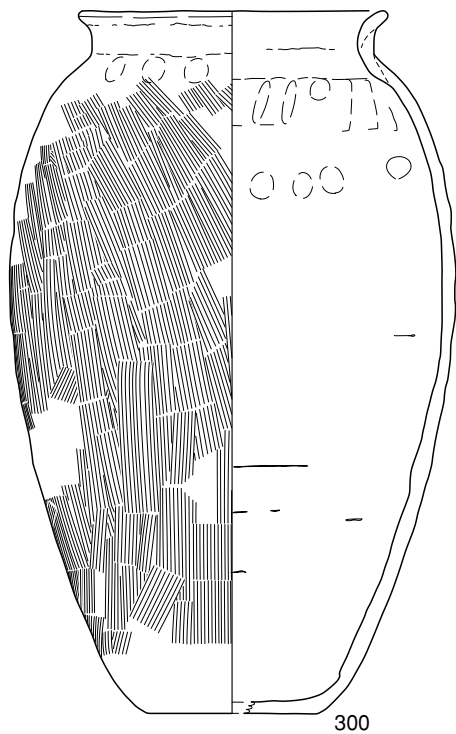


NR02-第2層

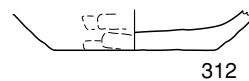
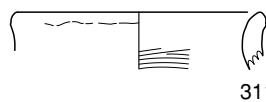


0 10cm

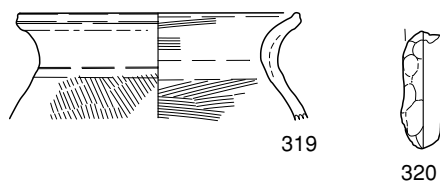
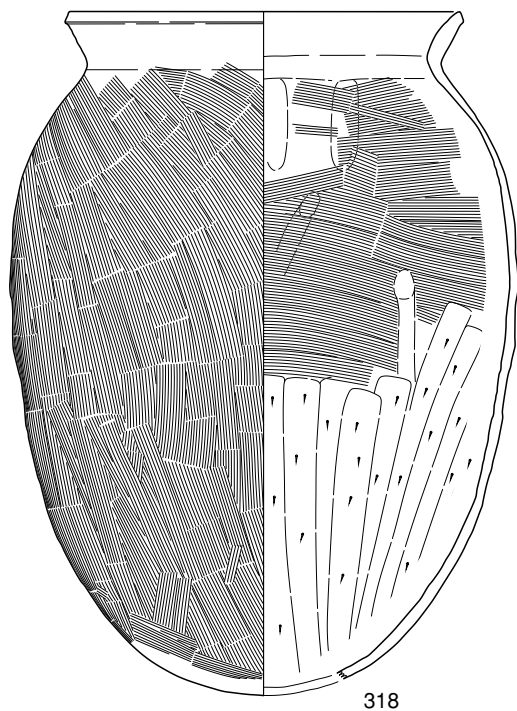
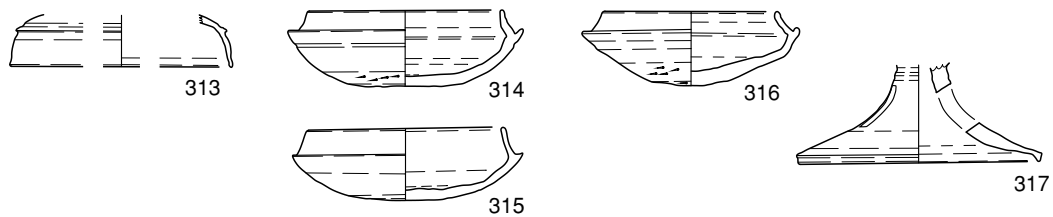
NR02-第2層



0 10cm

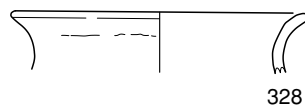
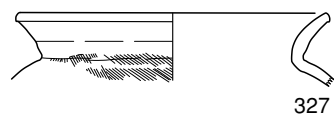
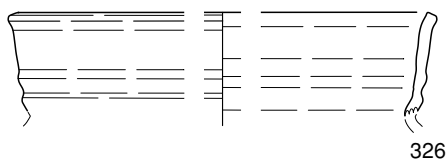
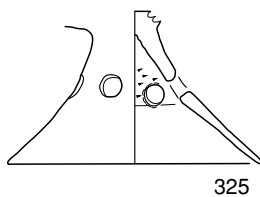
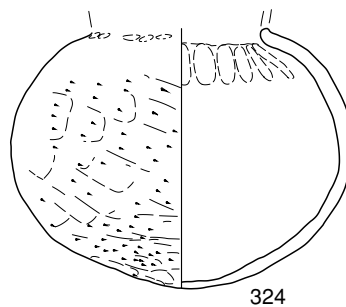
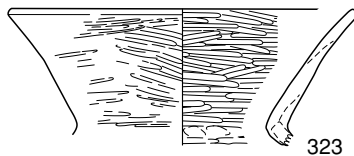
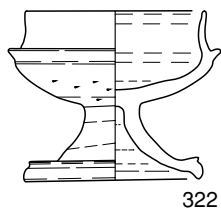
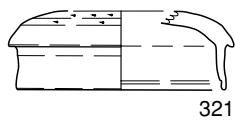


NR02-第3層

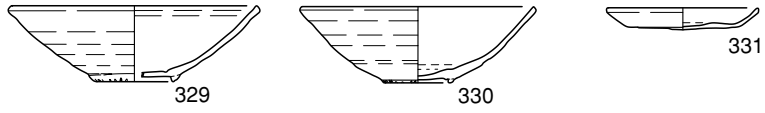


0 10cm

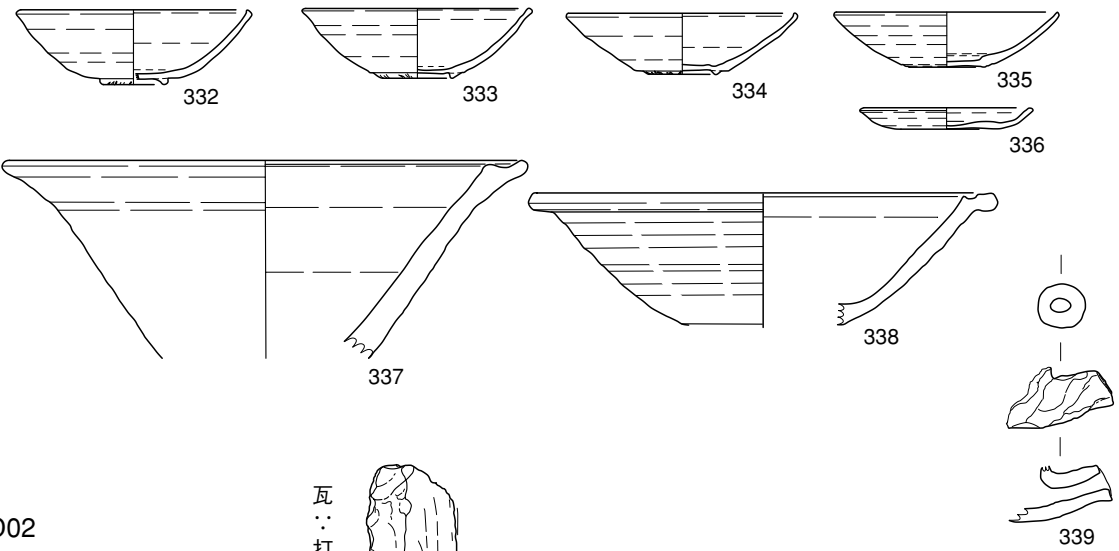
NR03



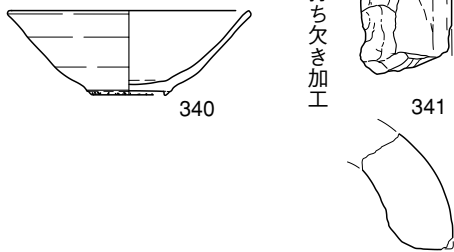
SD02-第1層



SD02-第2層



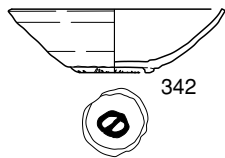
SD02



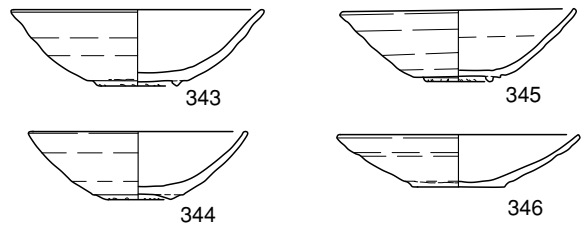
瓦
打
ち
欠
き
加
工

0 10cm

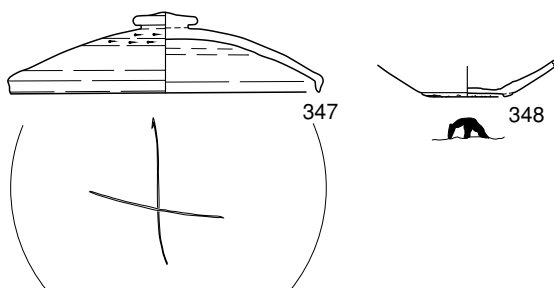
SD05



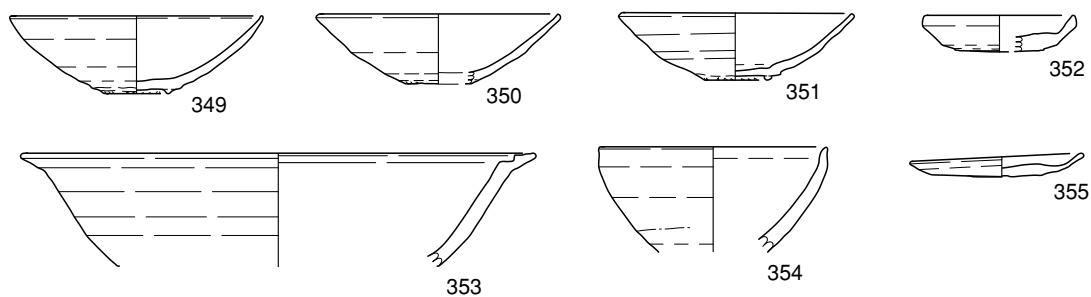
SD06



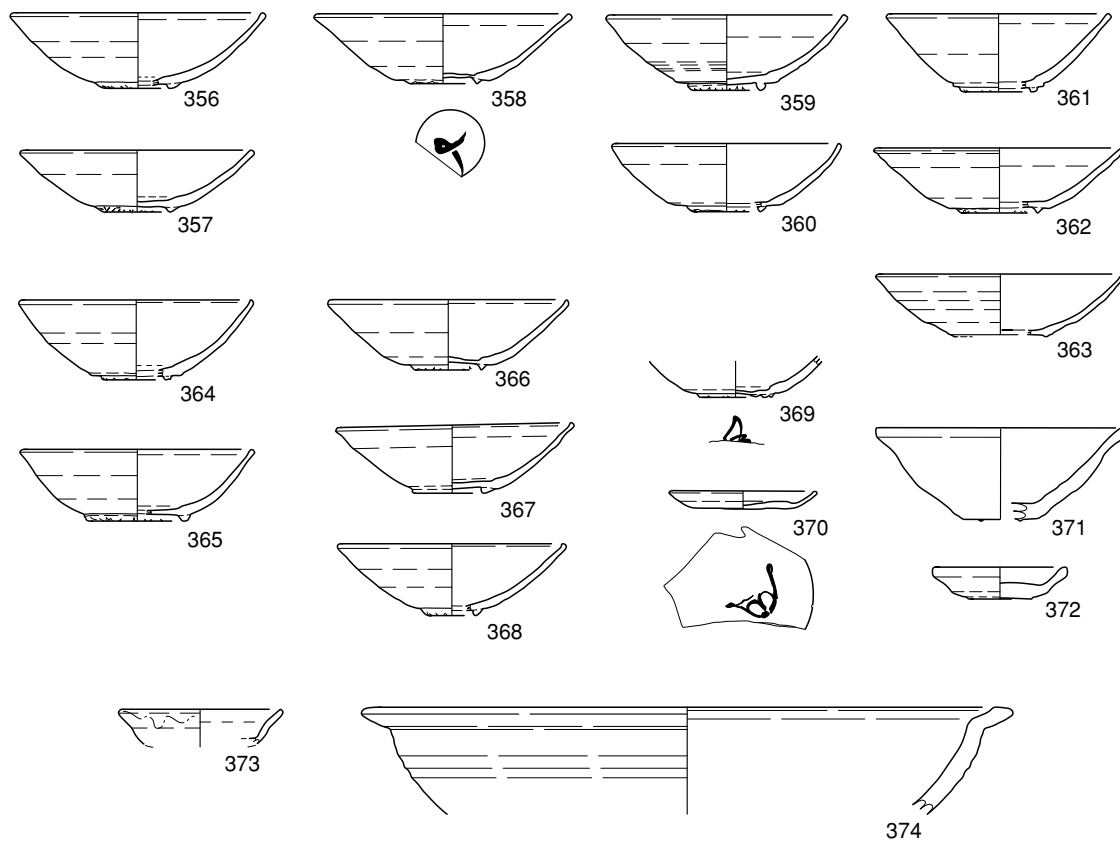
SD08



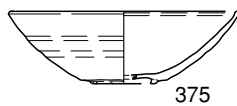
SD04-第1層



SD04-第2層



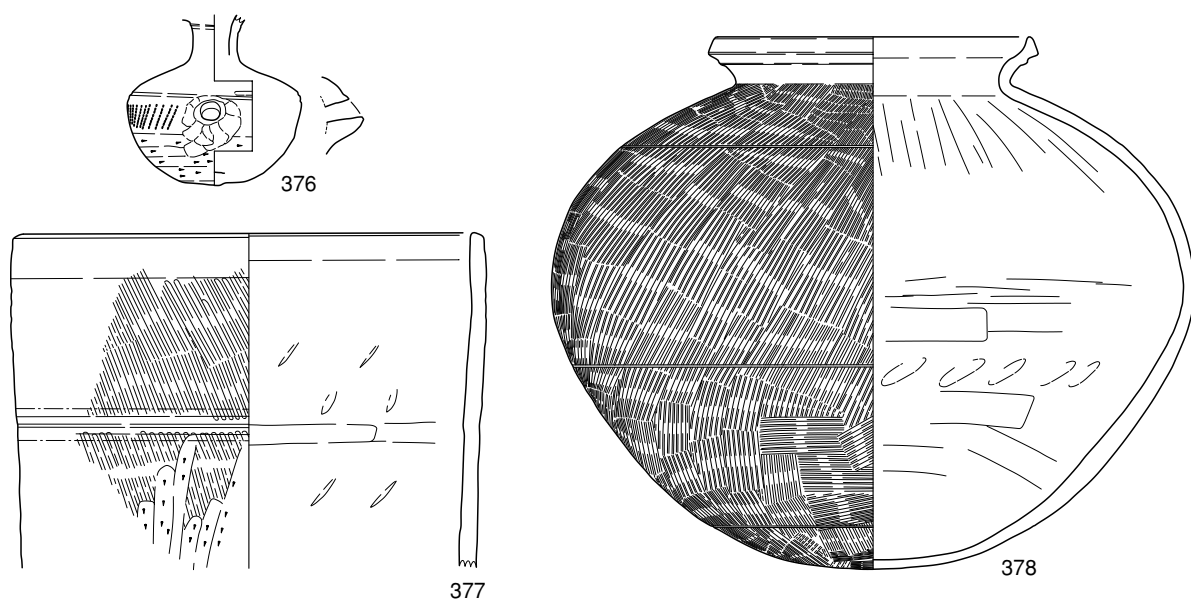
SD04



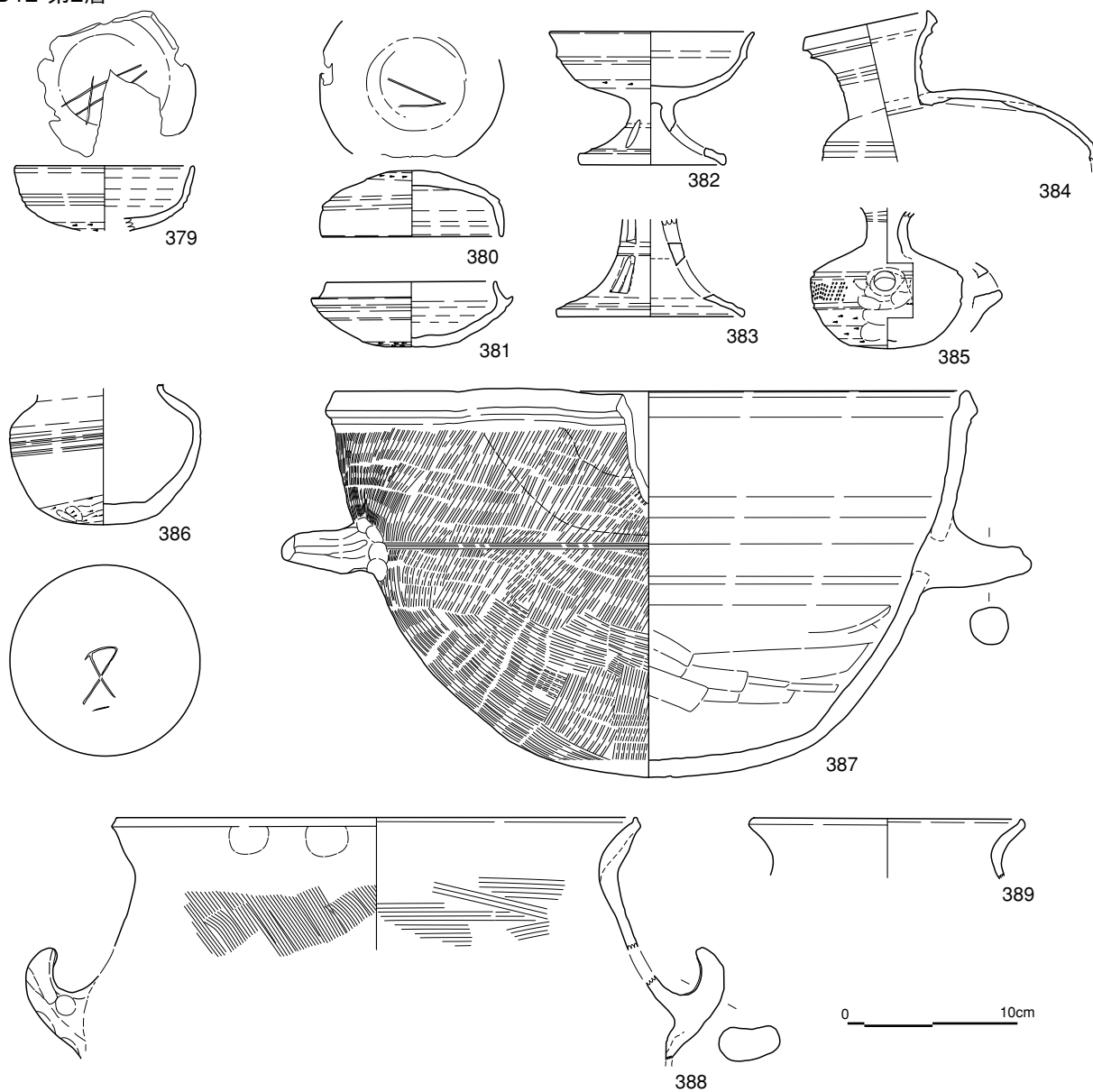
0 10cm

图版 54

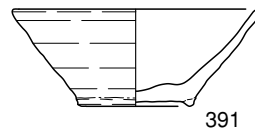
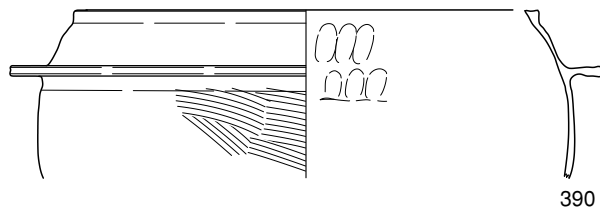
SD12-第1層



SD12-第2層



SD13



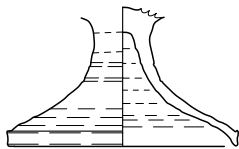
390

391

SD15-第2層

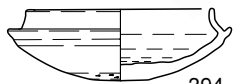


392



393

SD15



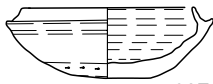
394



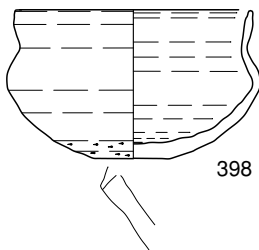
396



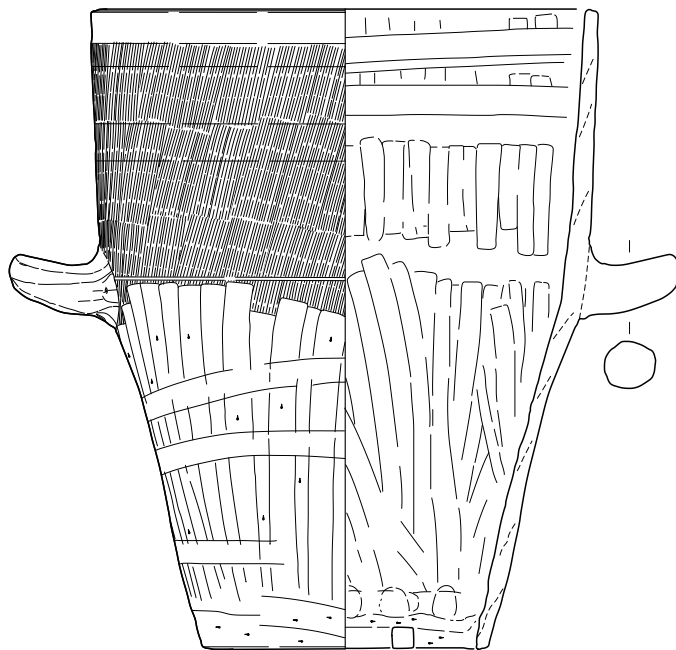
395



397

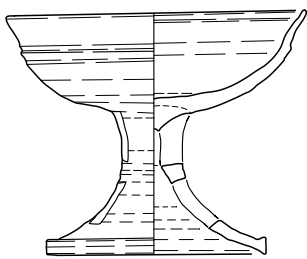


398



399

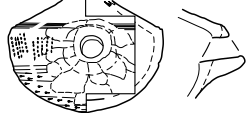
SD17-第2層



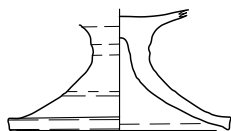
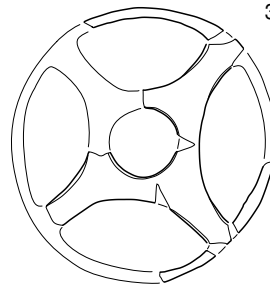
400



402



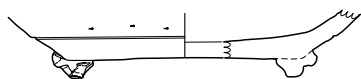
403



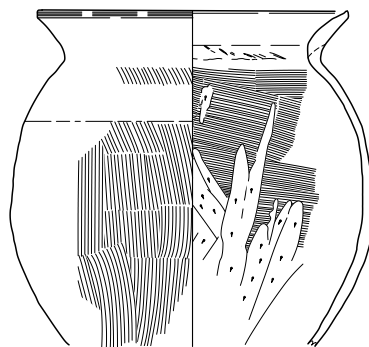
401

0 10cm

SD02/SD05



405

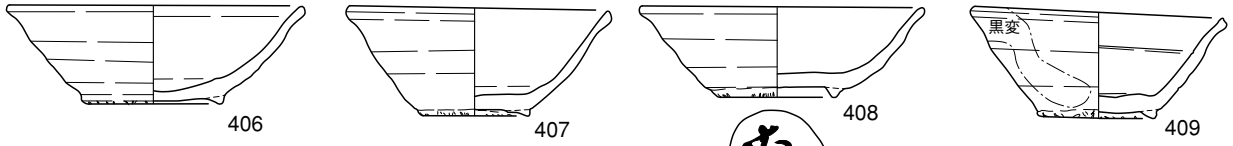


404

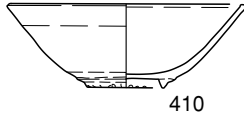
SD17-第1層/第2層

図版 56

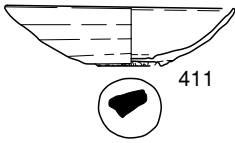
SG01(SE01)



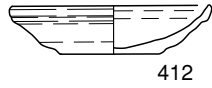
SE02



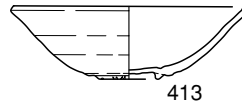
SK47



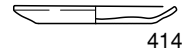
SK102



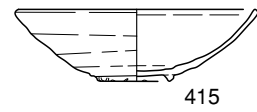
SK104



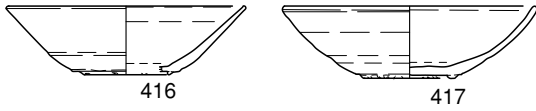
SK108



SK118

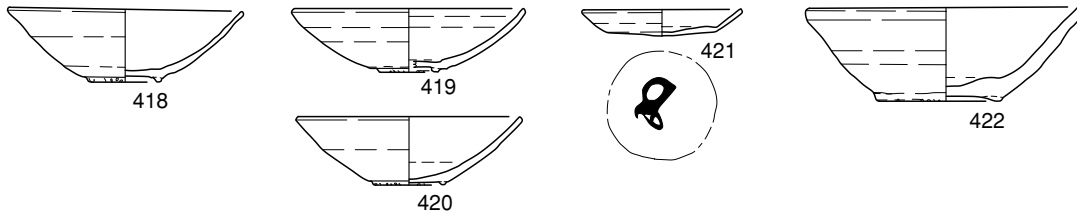


SX01-第2層

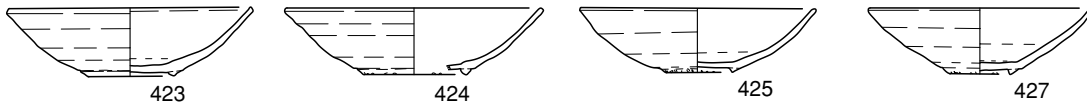


0 10cm

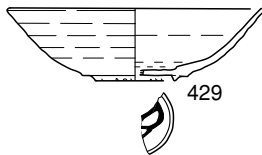
SX01-第3層



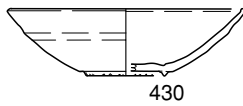
SX01



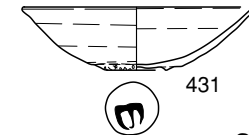
SX01-北壁



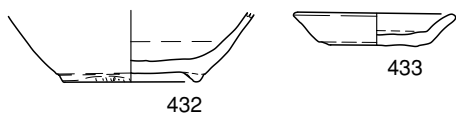
SX01-T



SX01/SX01-第3層



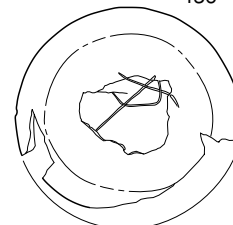
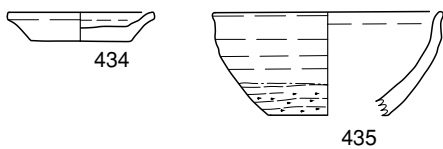
SX02

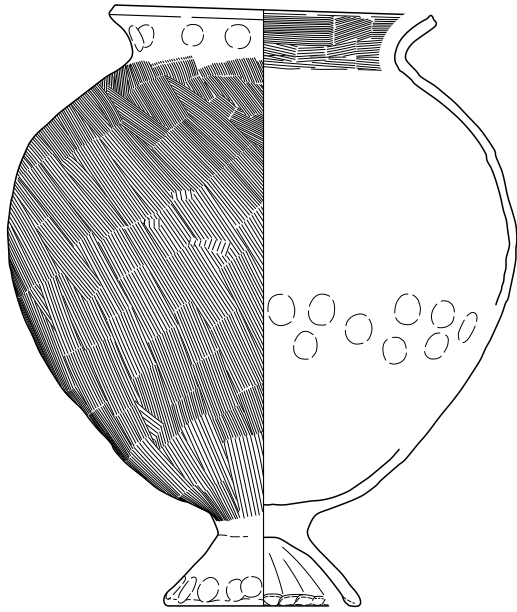


SX01/SD03

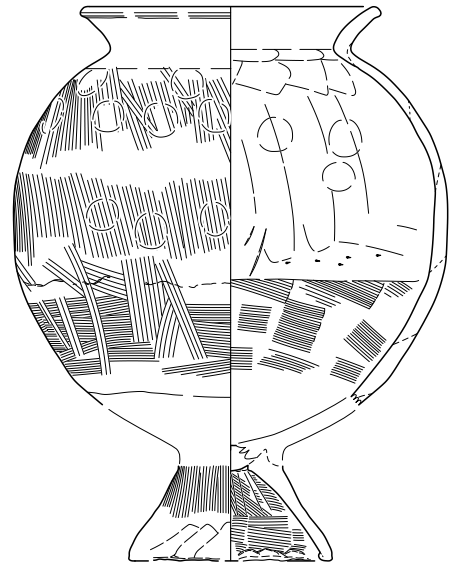


SX04

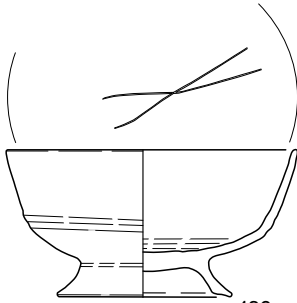




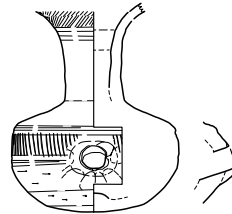
437



438

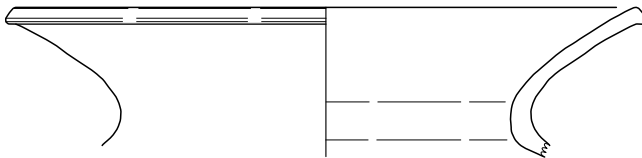


439

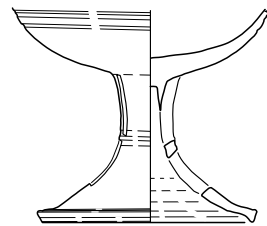


440

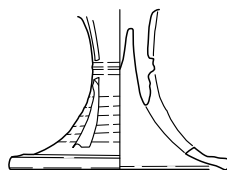
0 10cm



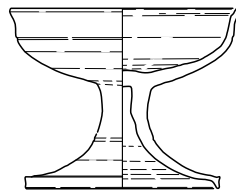
441



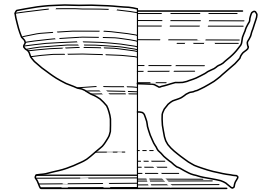
442



443



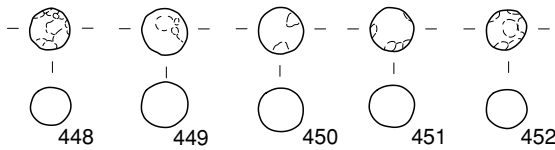
444



445



446



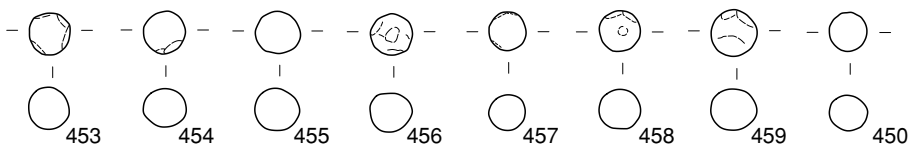
448

449

450

451

452



453

454

455

456

457

458

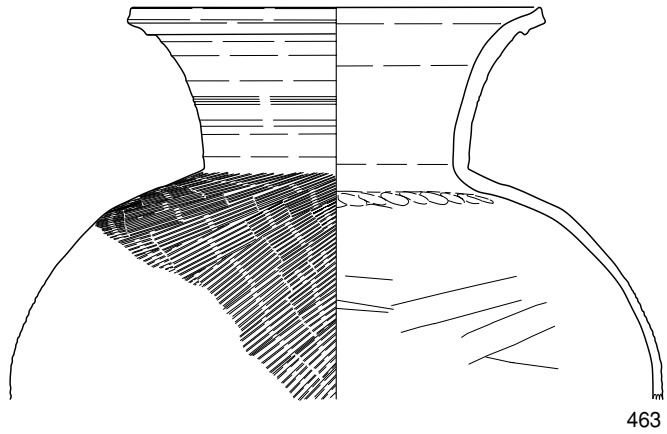
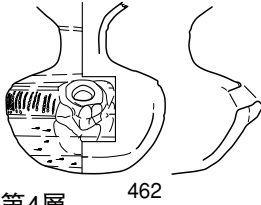
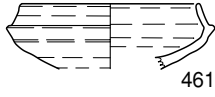
459

460

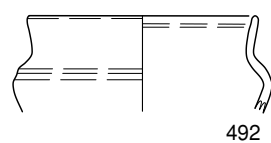
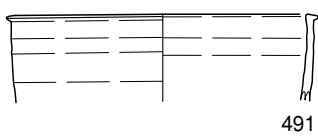
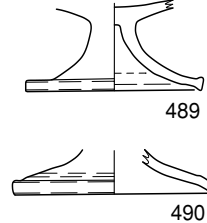
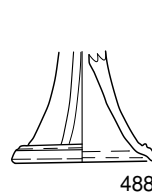
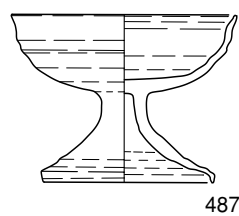
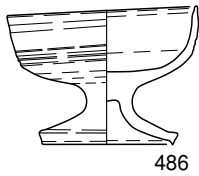
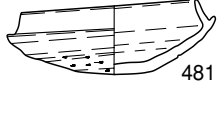
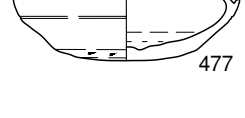
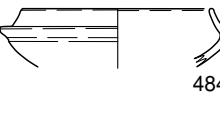
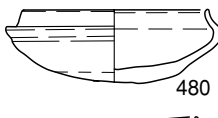
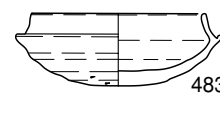
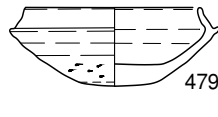
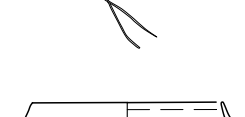
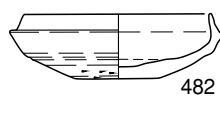
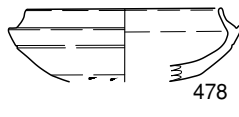
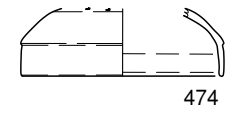
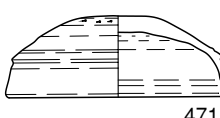
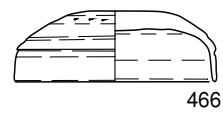
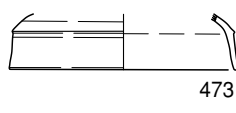
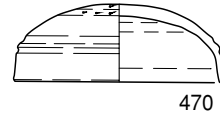
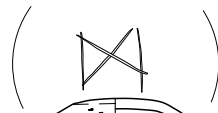
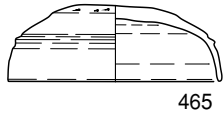
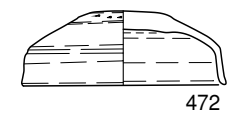
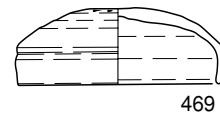
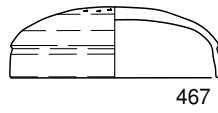
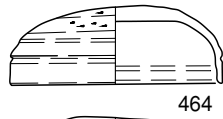
0 5cm

00C区

NR01-第3層

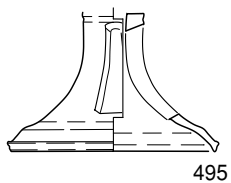
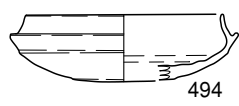
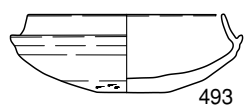


NR01-第4層

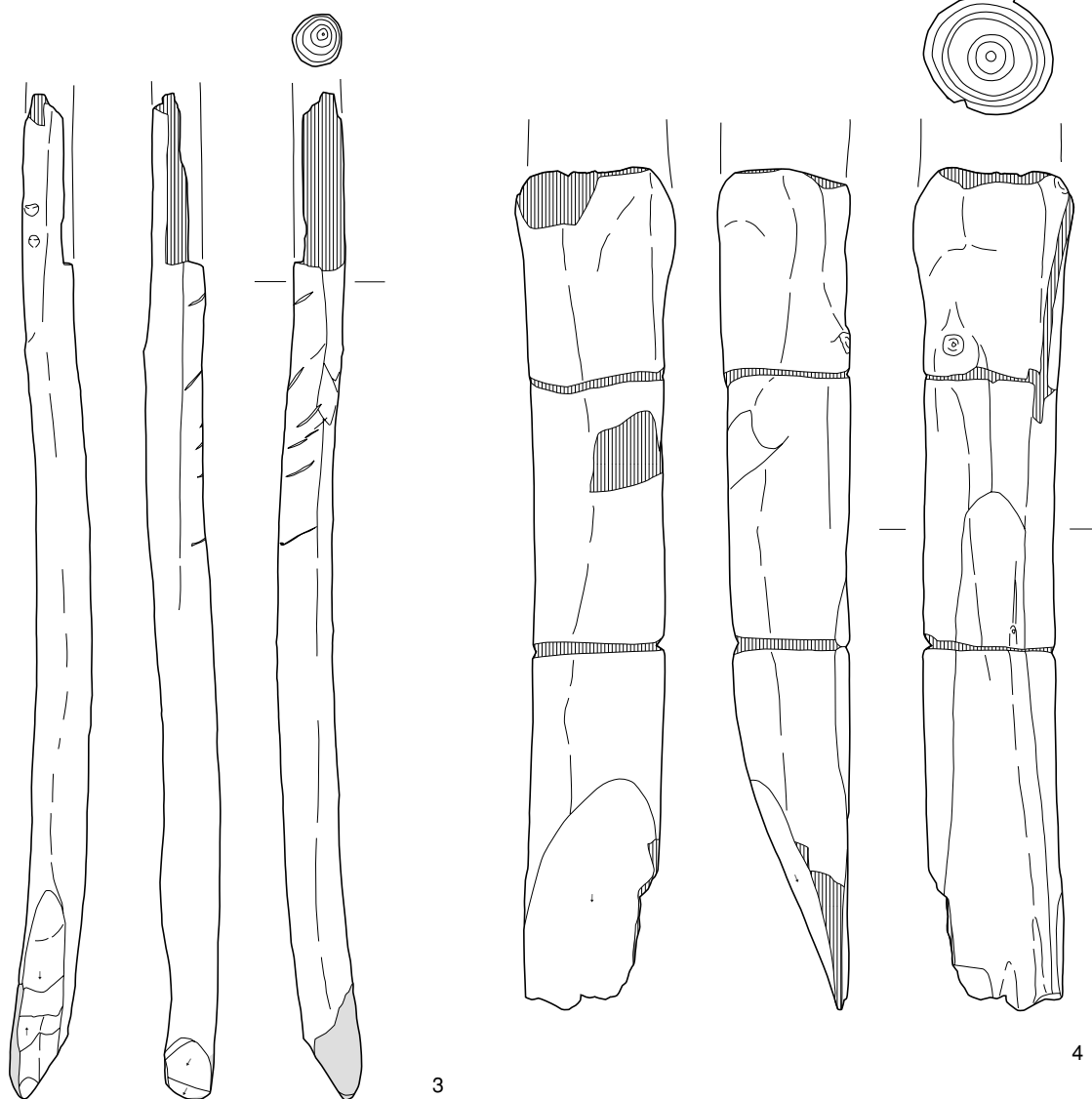
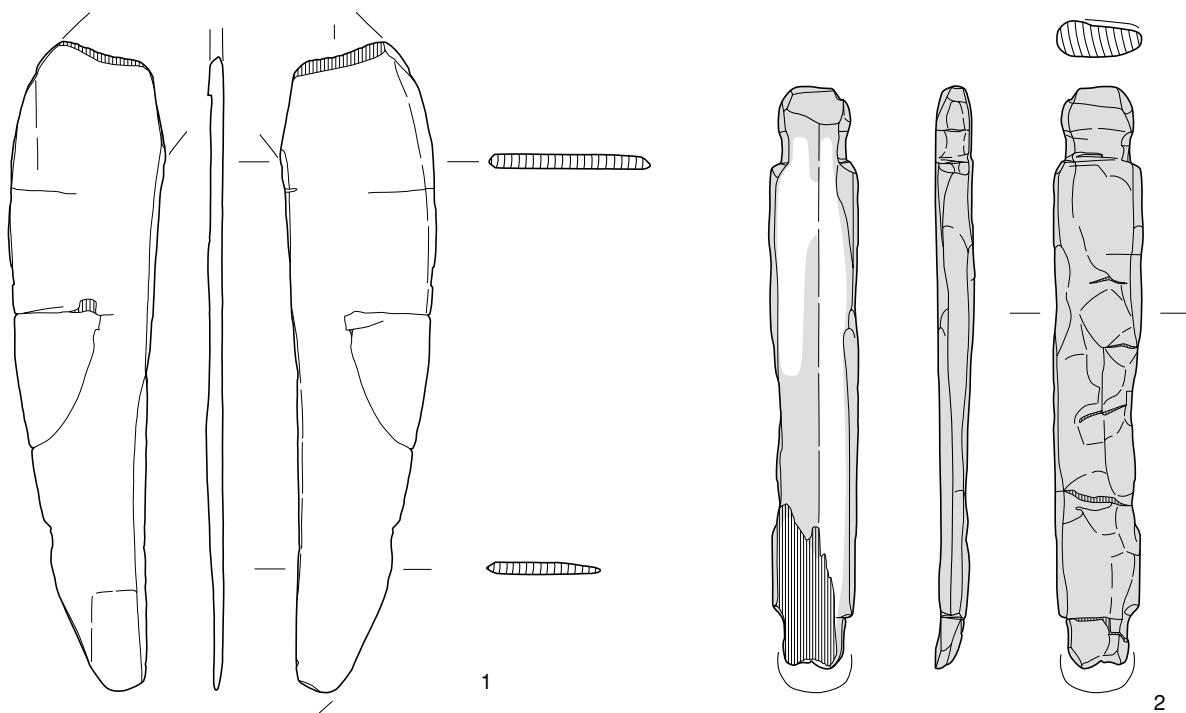


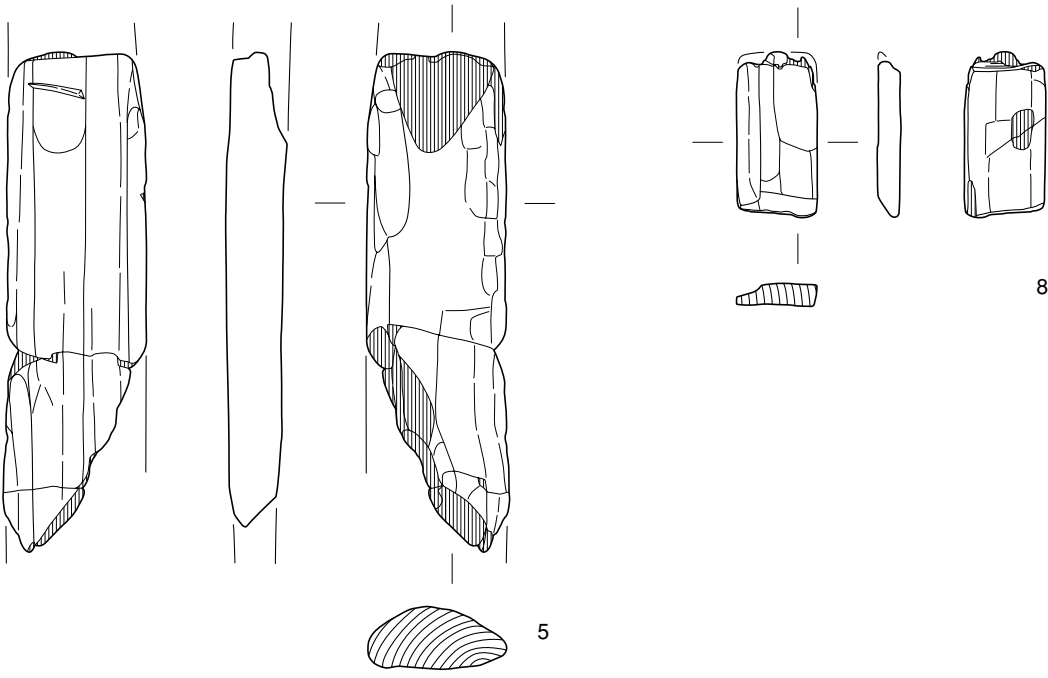
NR01-第4層/第5層

NR01-第5層



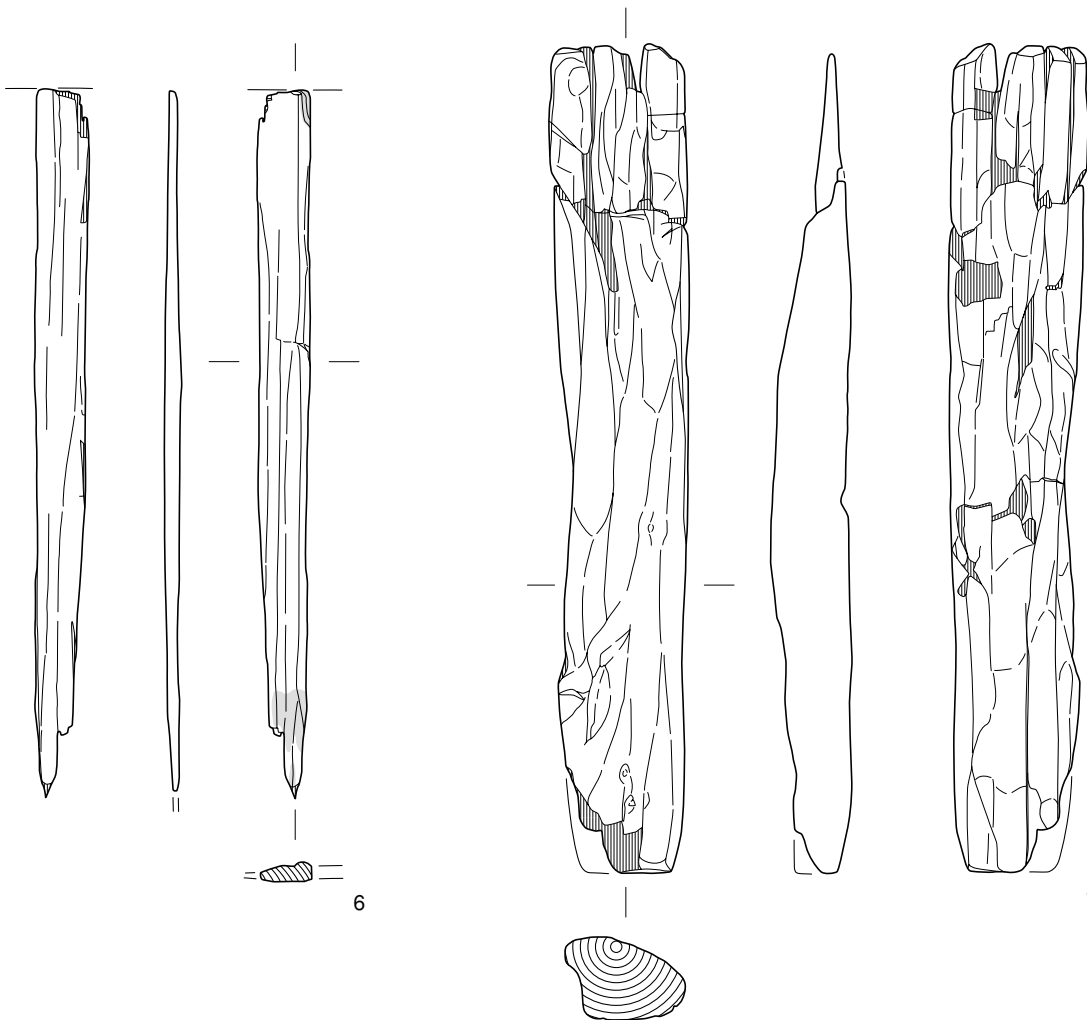
0 10cm





5

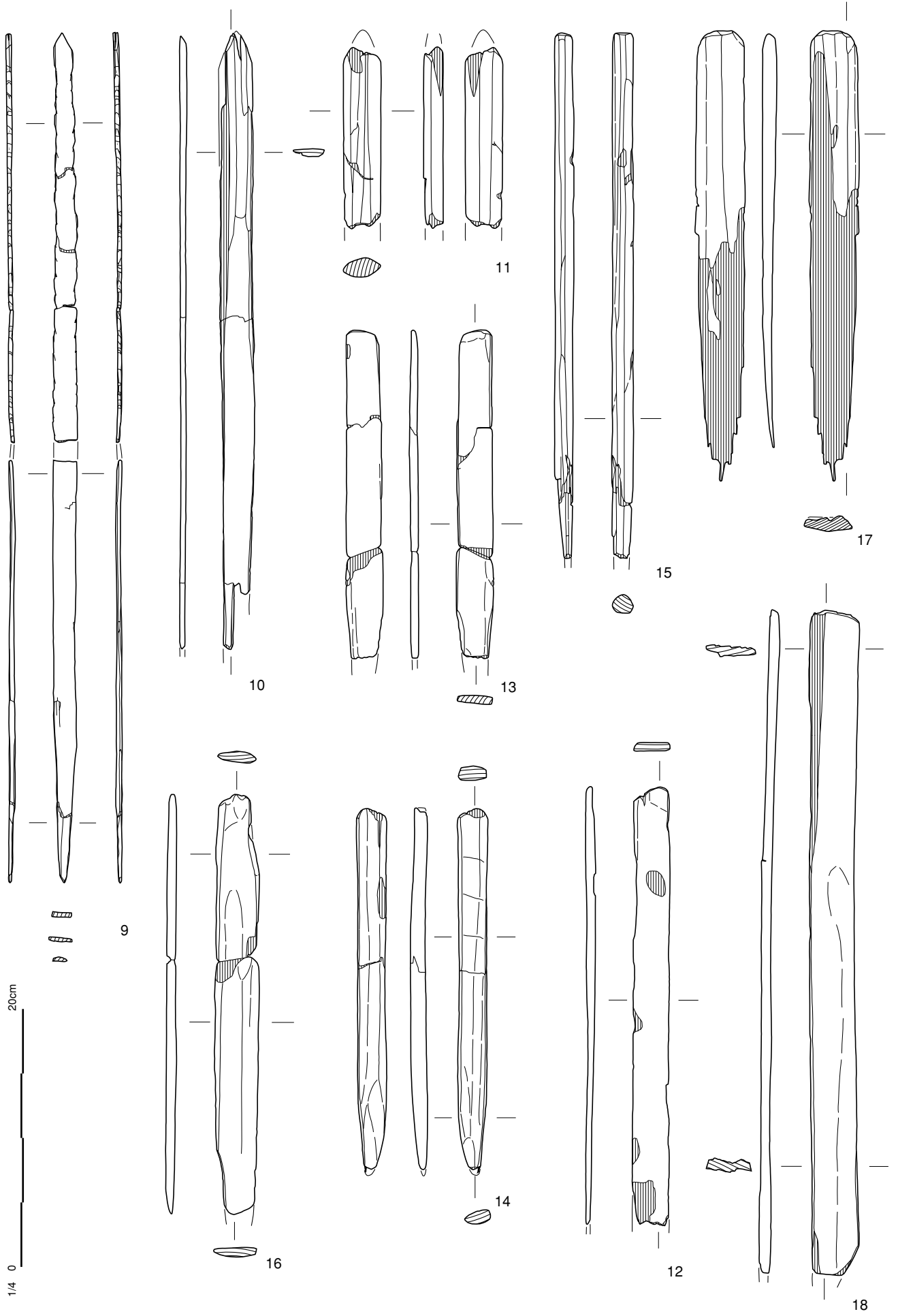
8



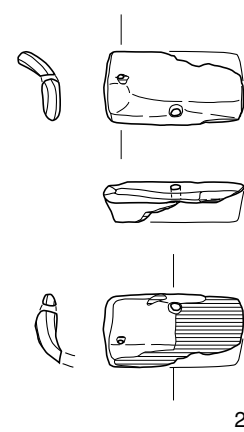
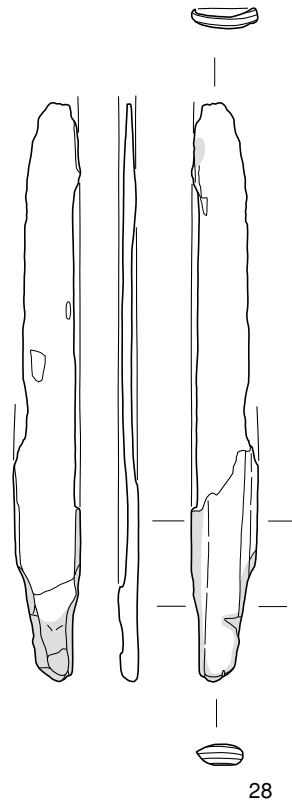
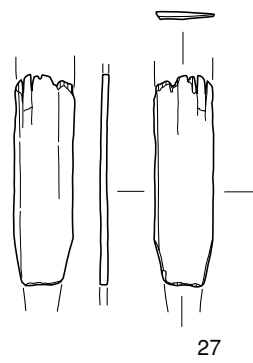
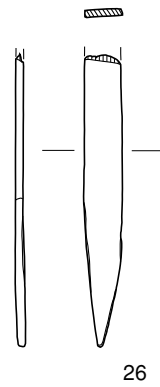
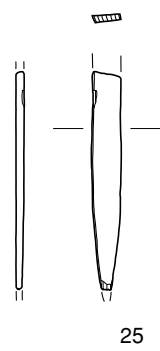
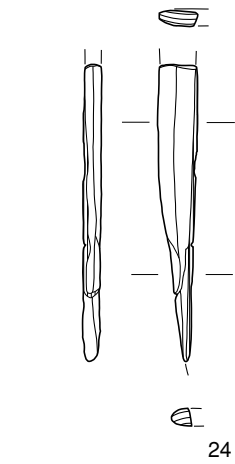
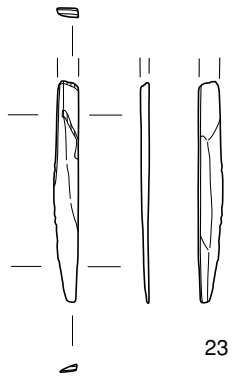
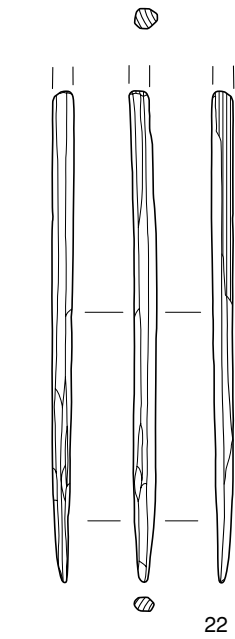
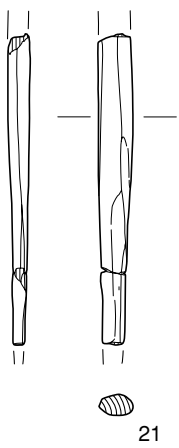
6

7

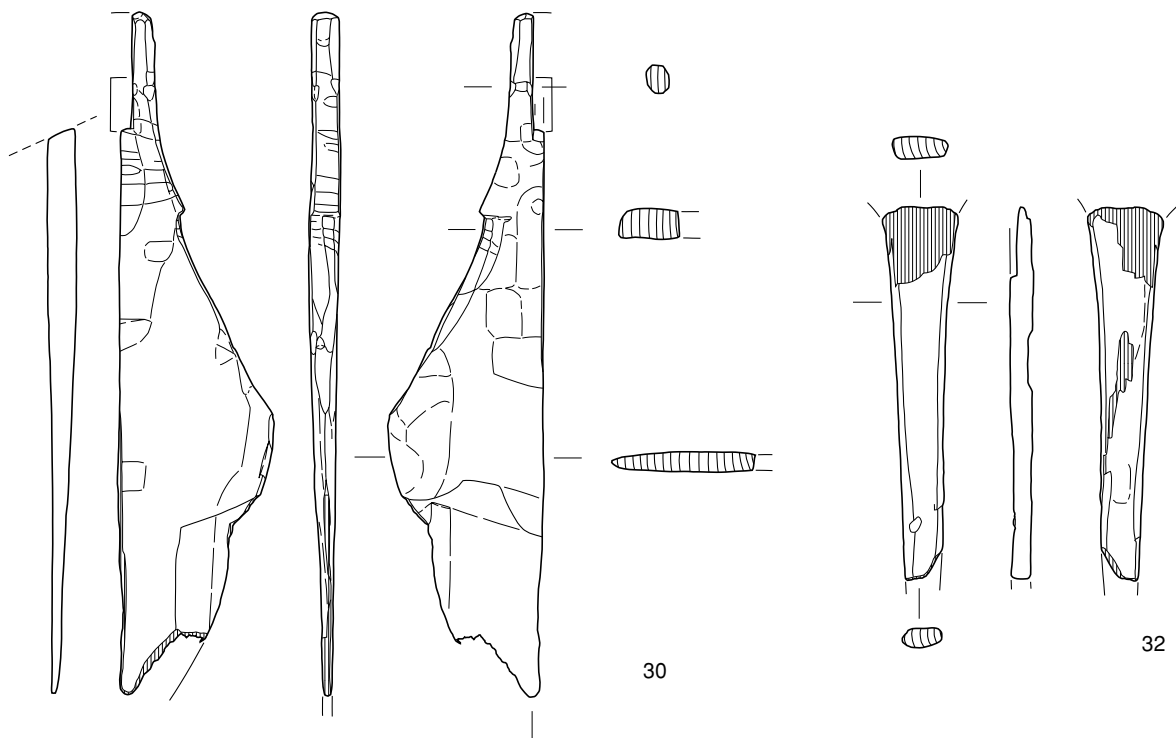
1/4 0 20cm



1/4 0 20cm

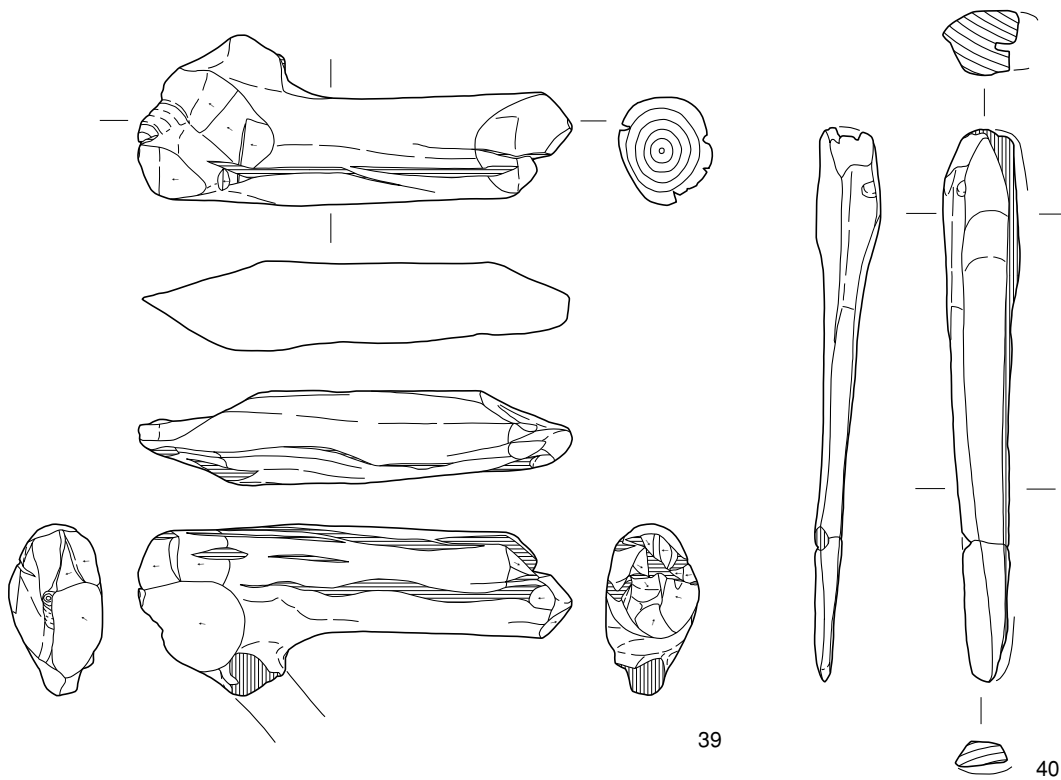


1/4 0 20cm



30

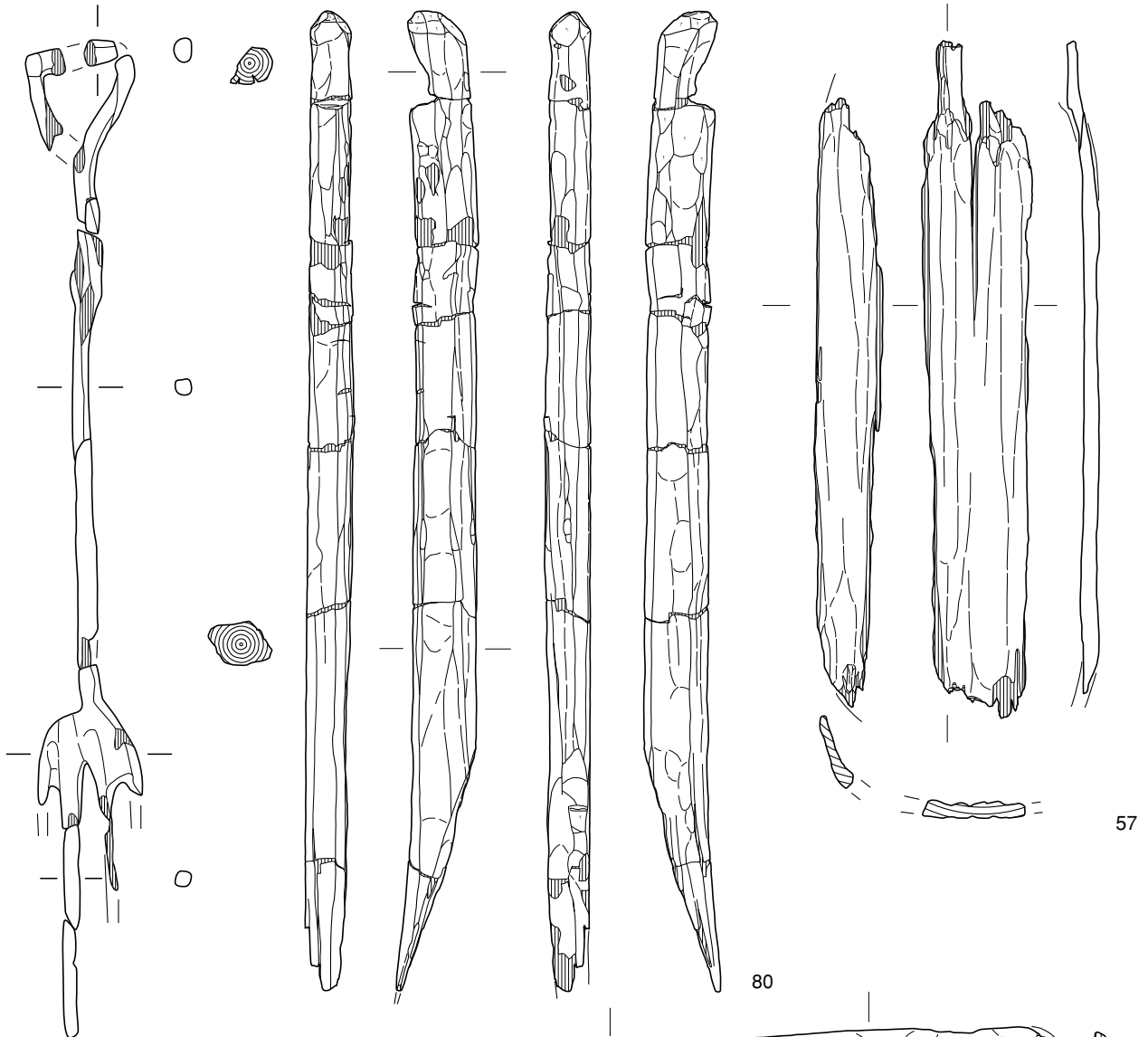
32



39

40

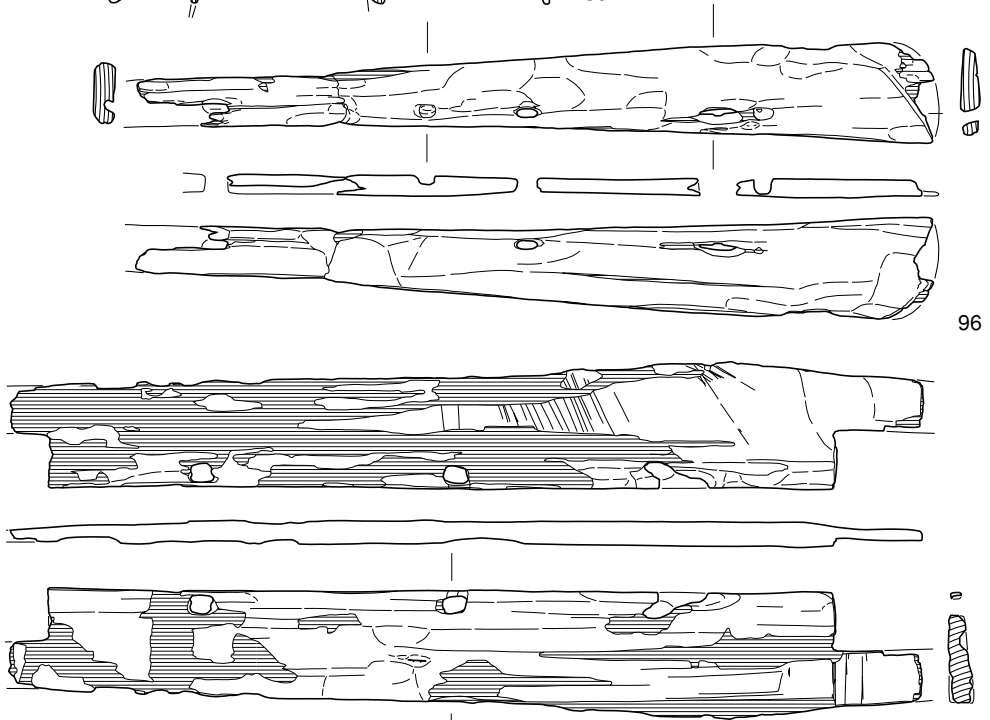
1/4 0 20cm



31

80

57

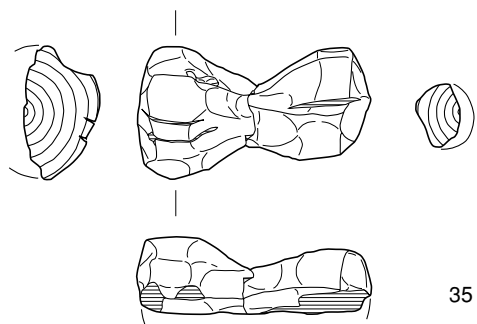


96

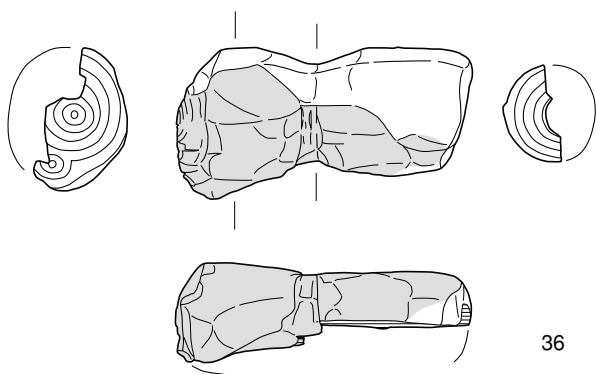
97

1/8 0

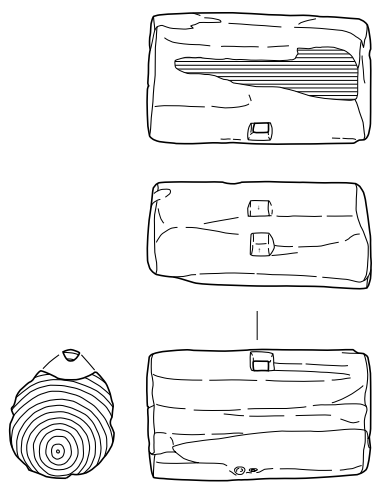
40cm



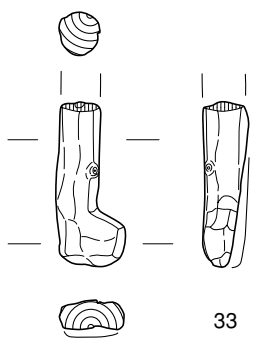
35



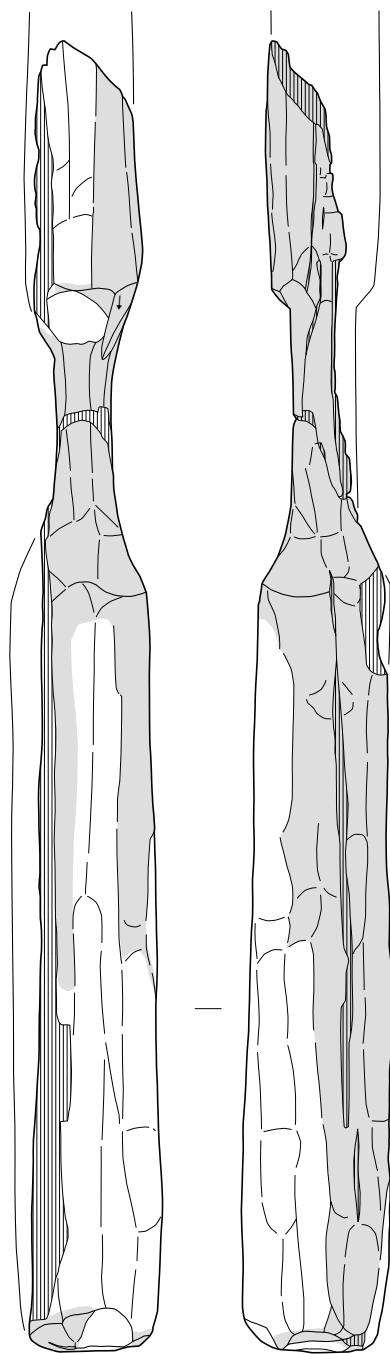
36



37

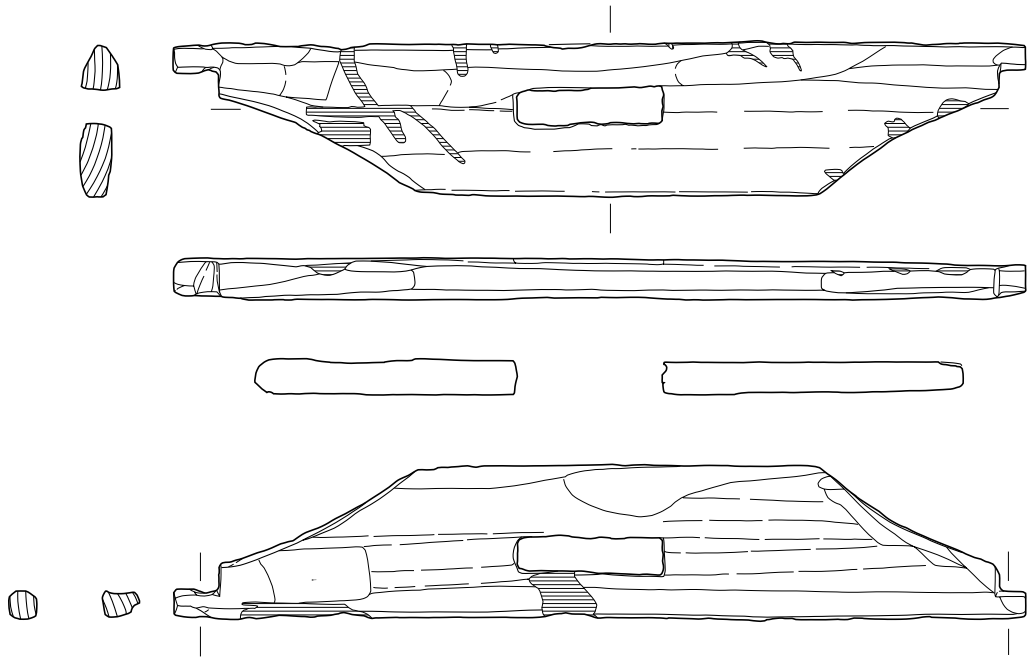


33

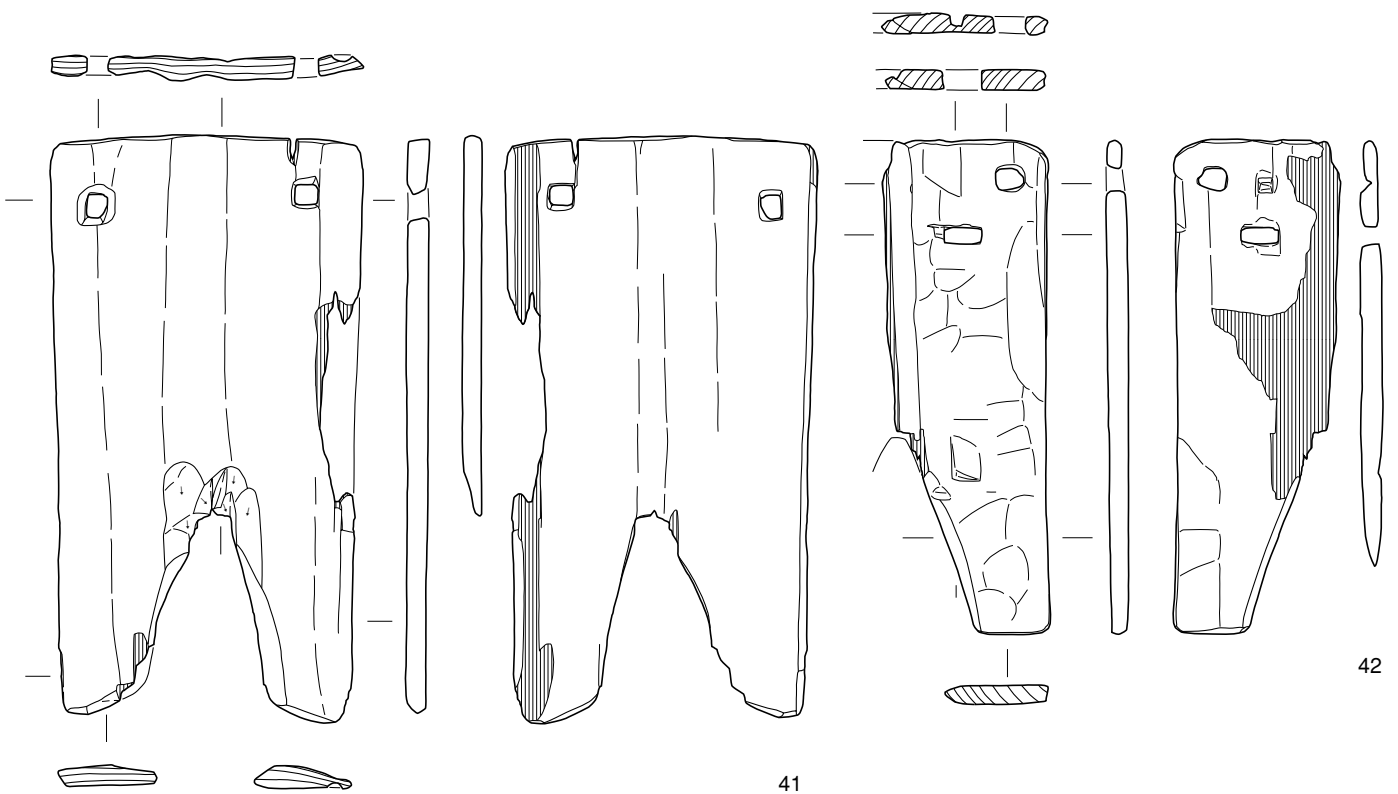


34

1/4 0 20cm

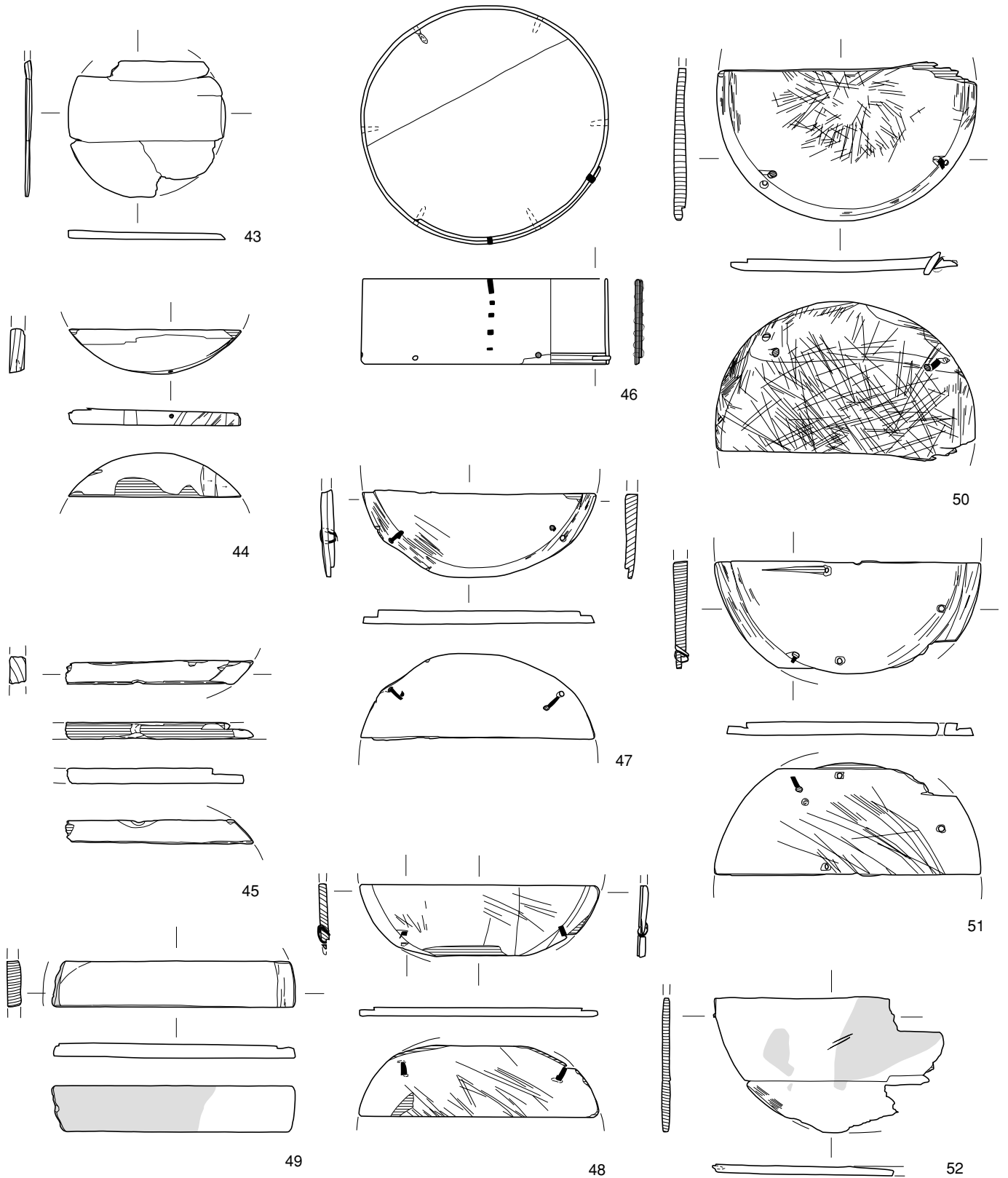


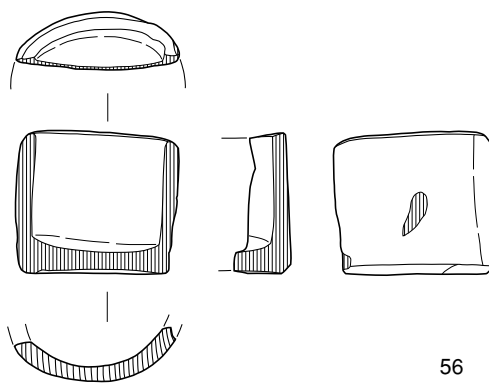
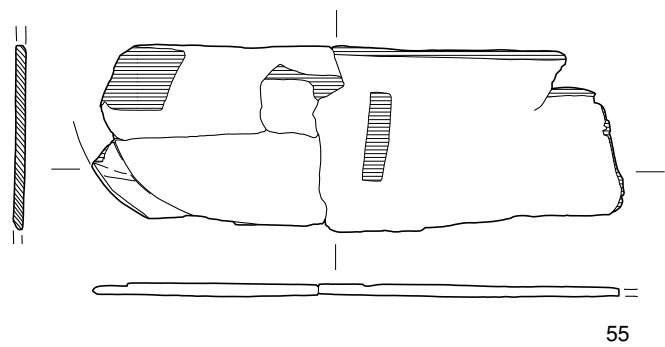
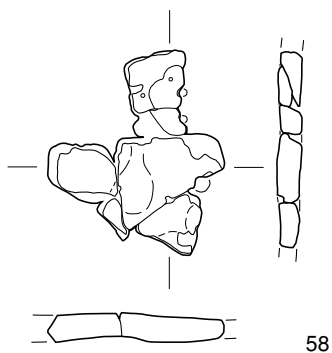
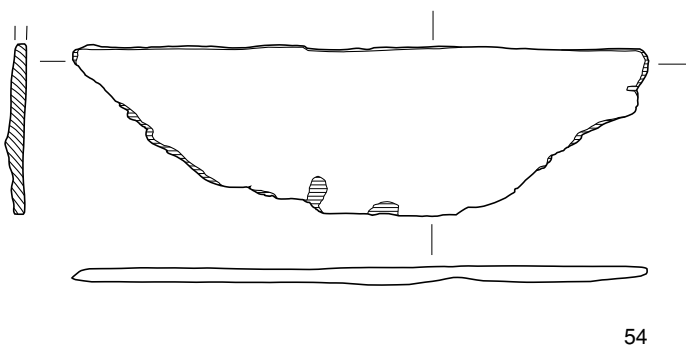
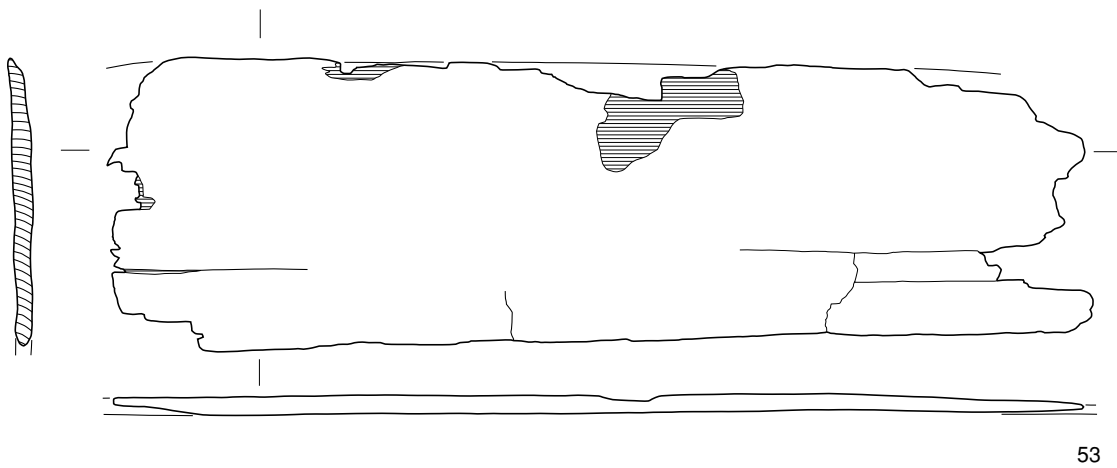
38

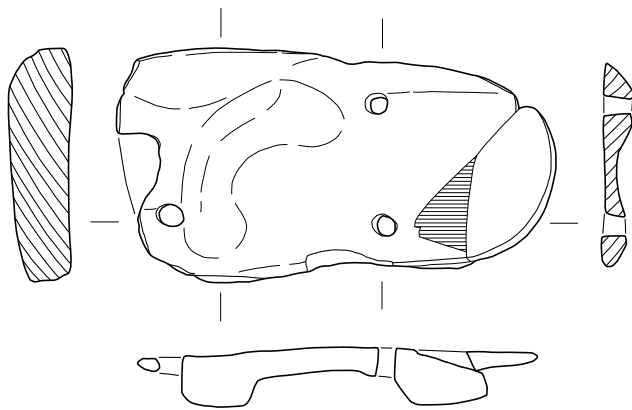


41

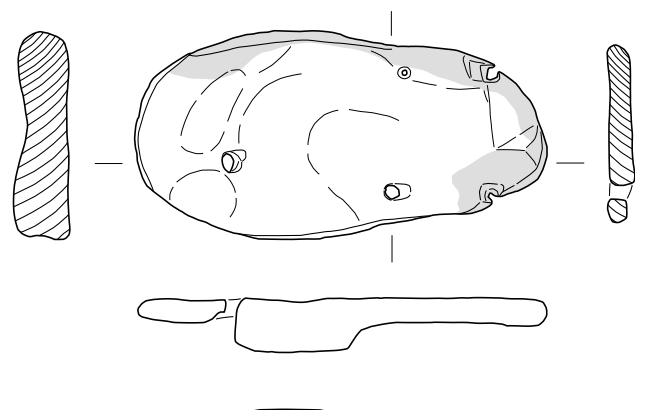
42



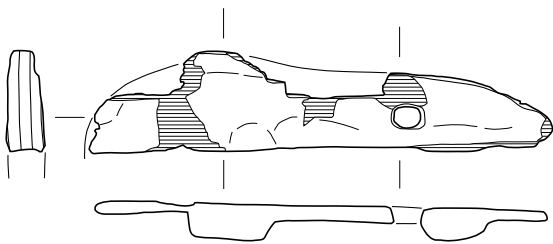
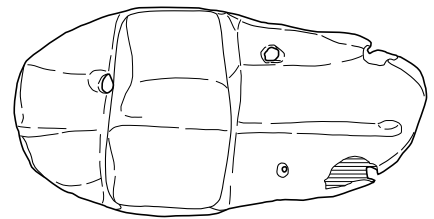
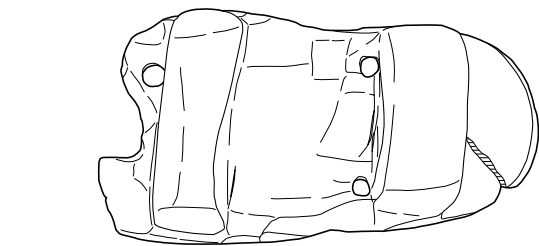




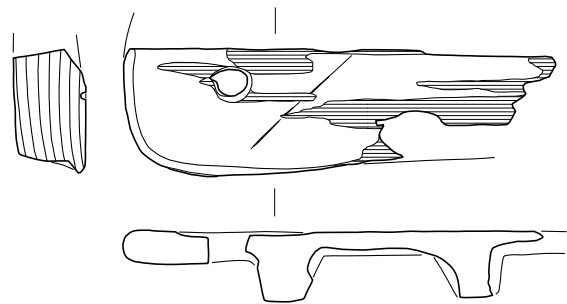
59



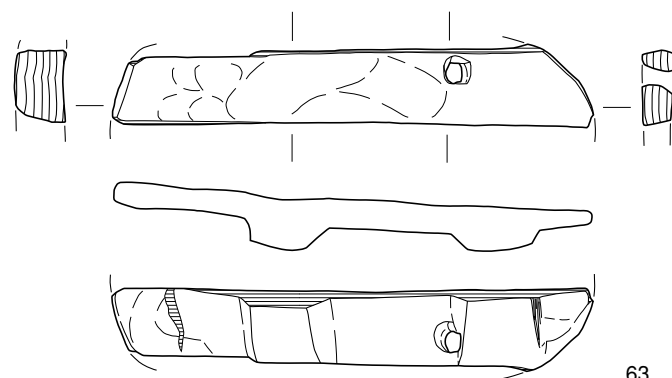
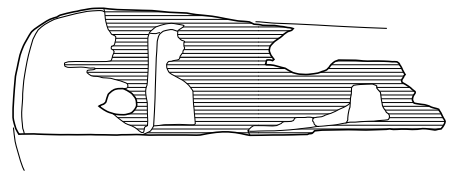
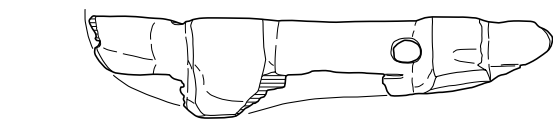
60



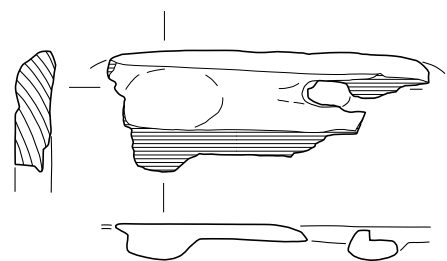
61



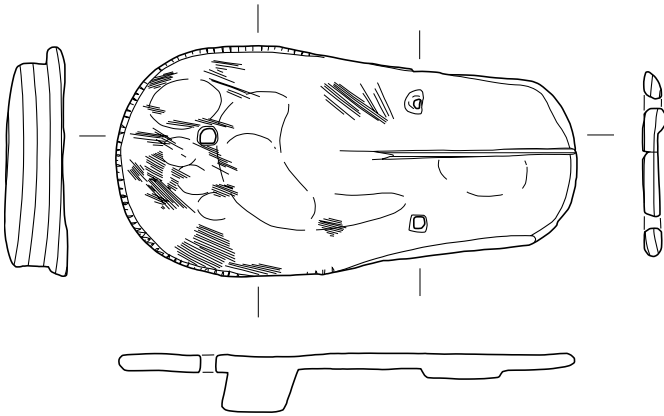
62



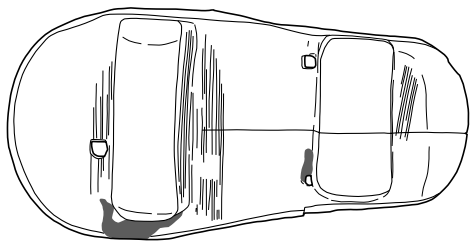
63



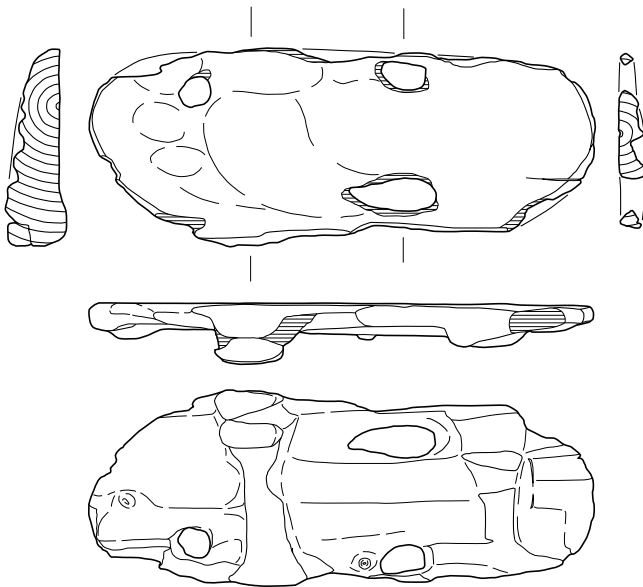
64



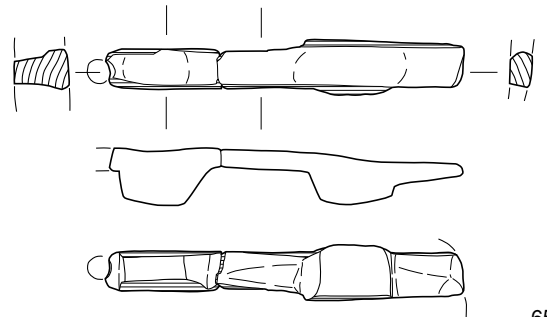
67



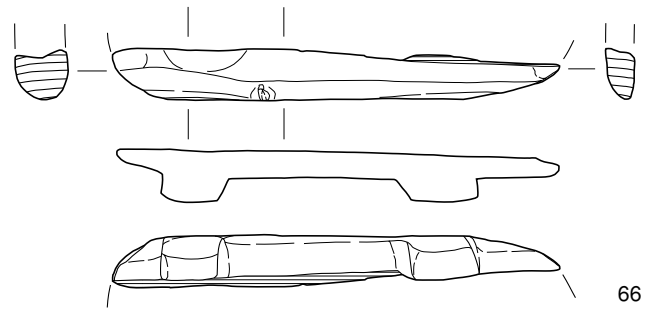
68



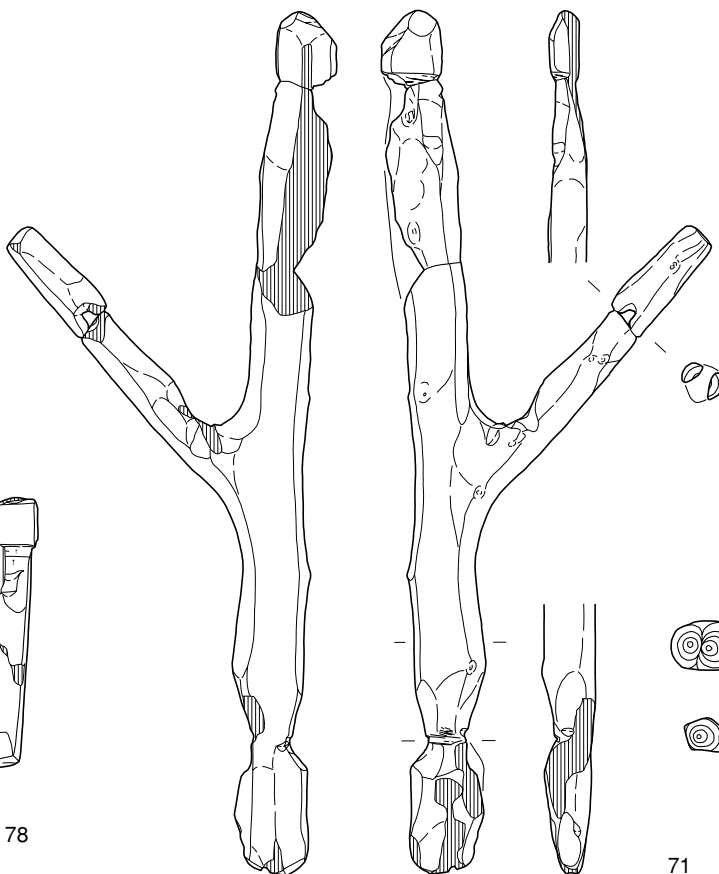
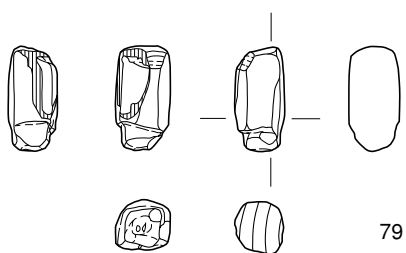
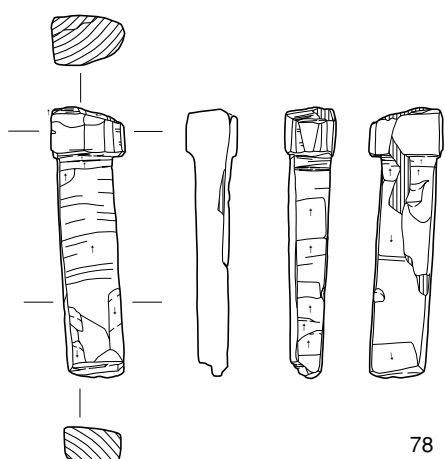
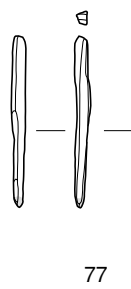
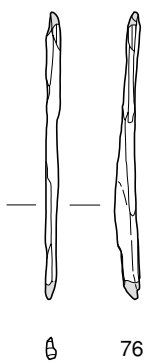
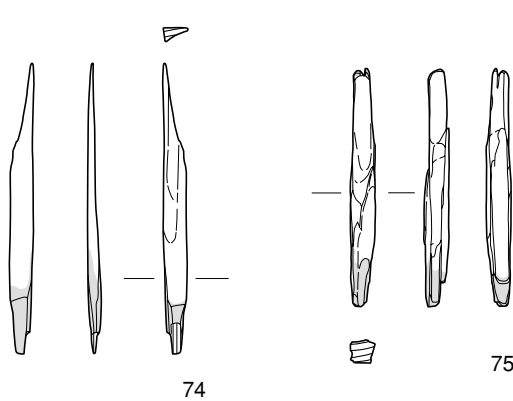
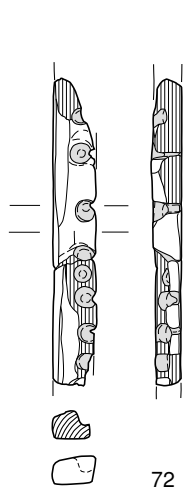
69



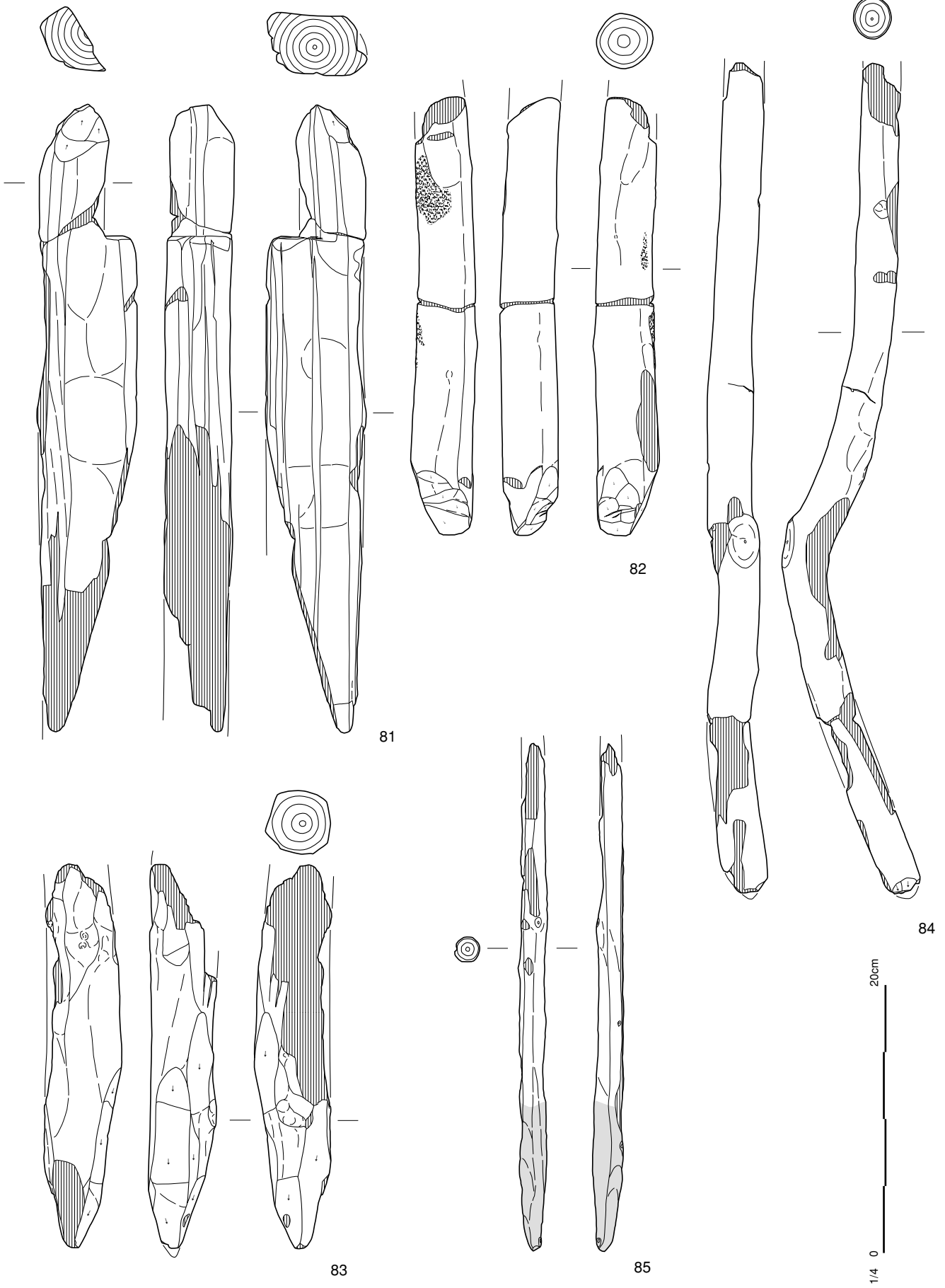
70



66



1/4 0 20cm



81

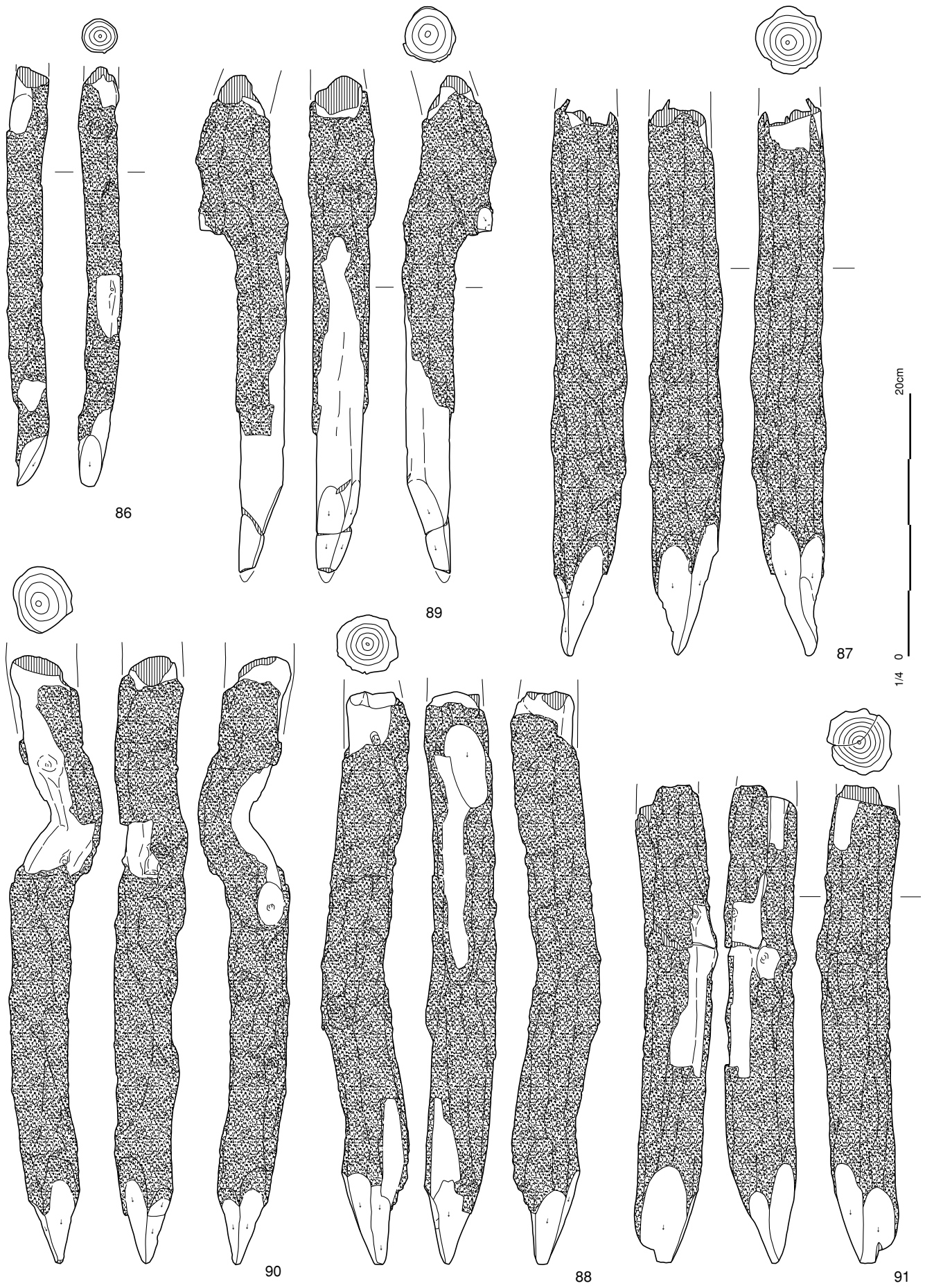
82

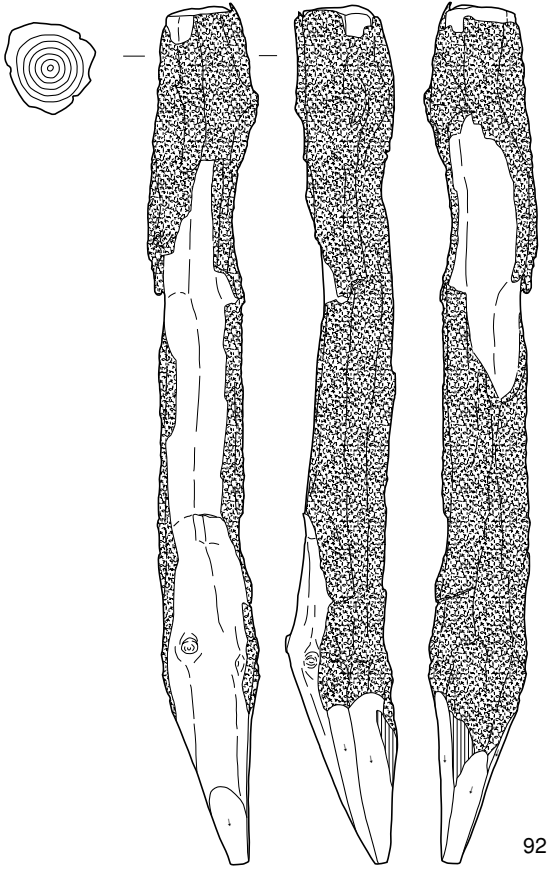
84

83

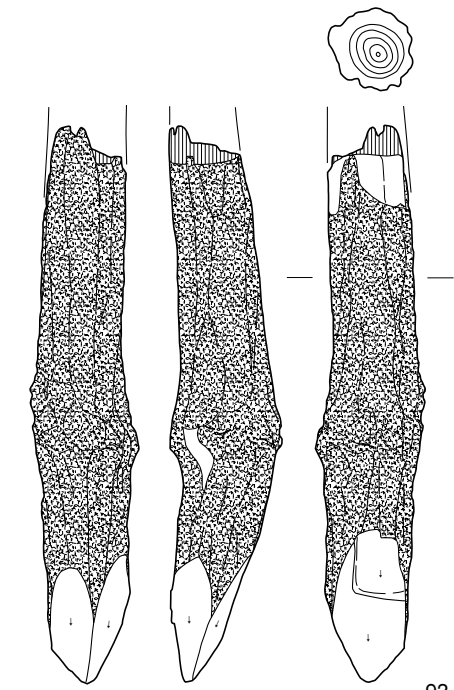
85

1/4 0 20cm





92



93

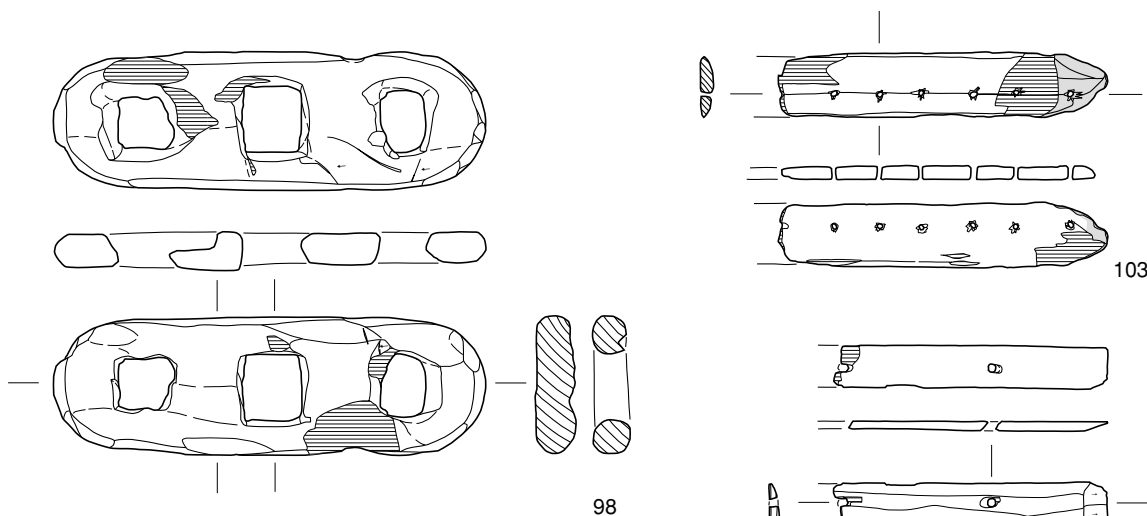


94



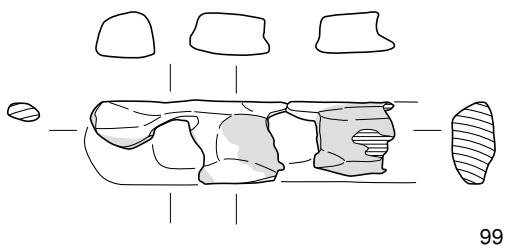
95

1/4 0 20cm

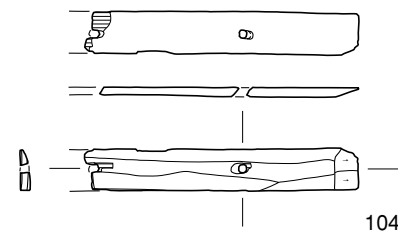


98

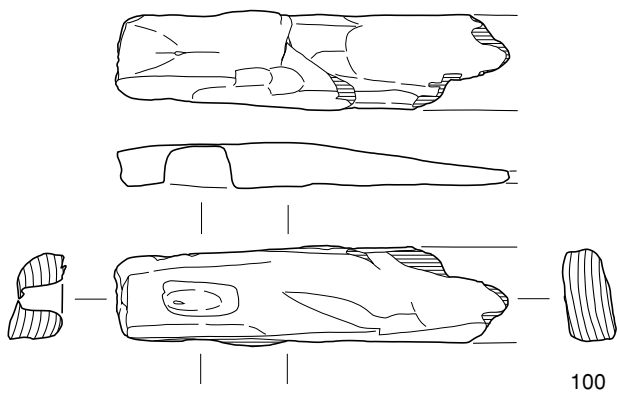
103



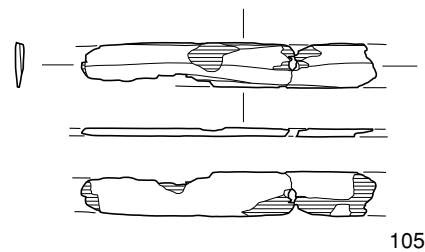
99



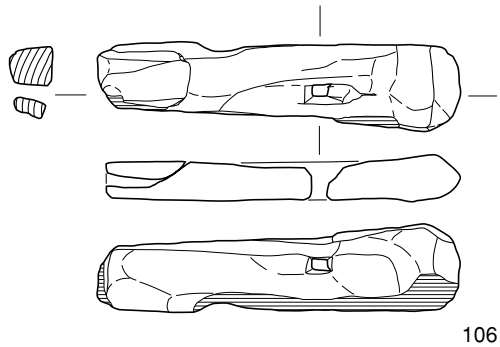
104



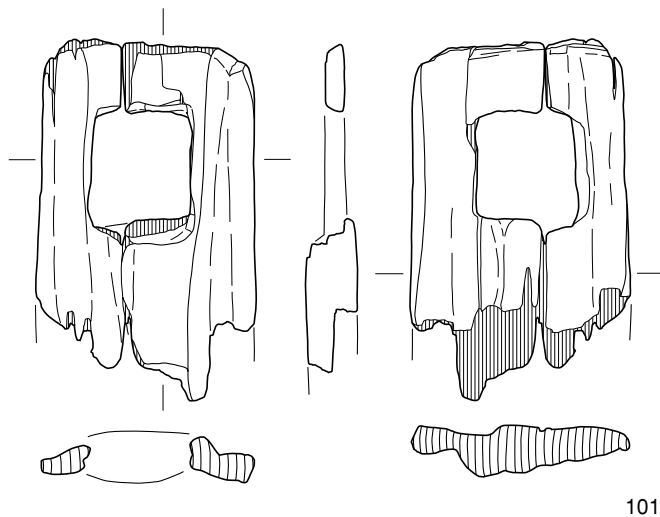
100



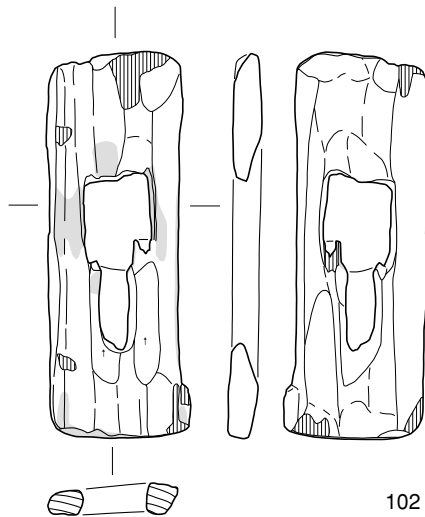
105



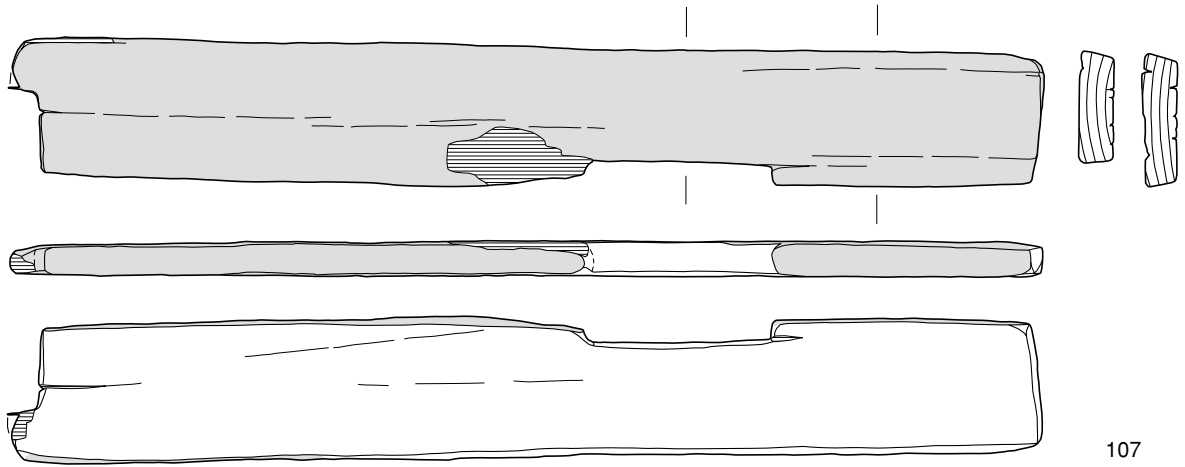
106



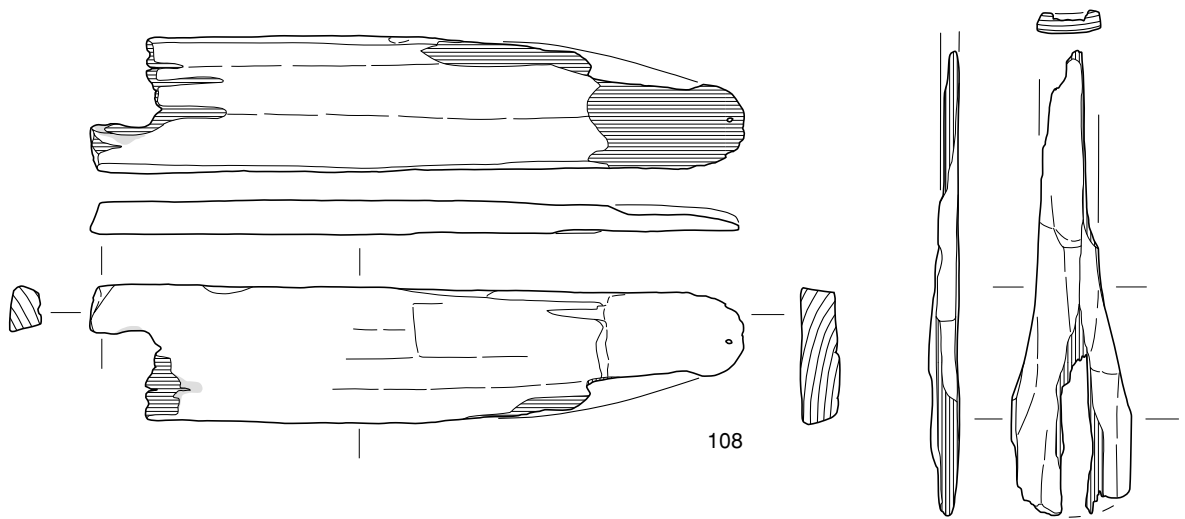
101



102



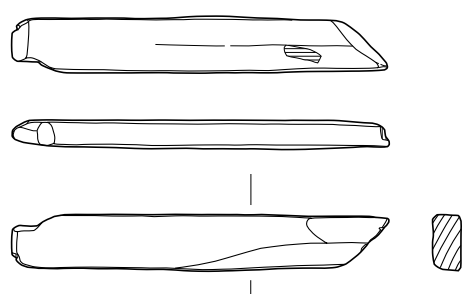
107



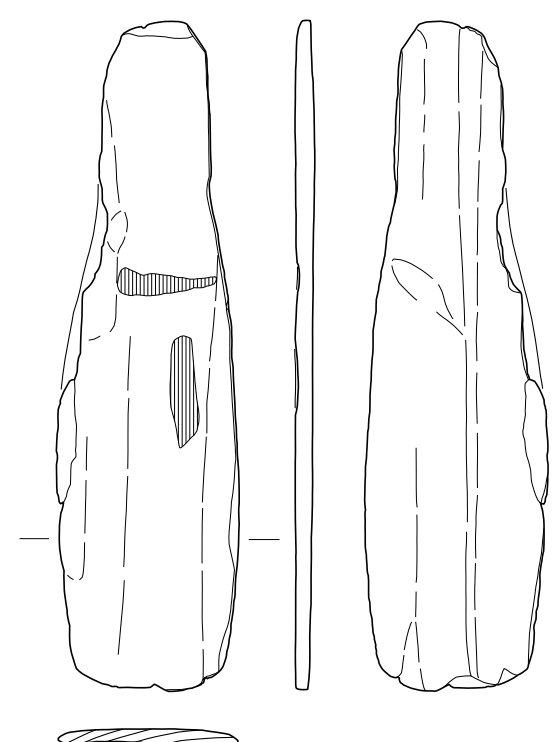
108



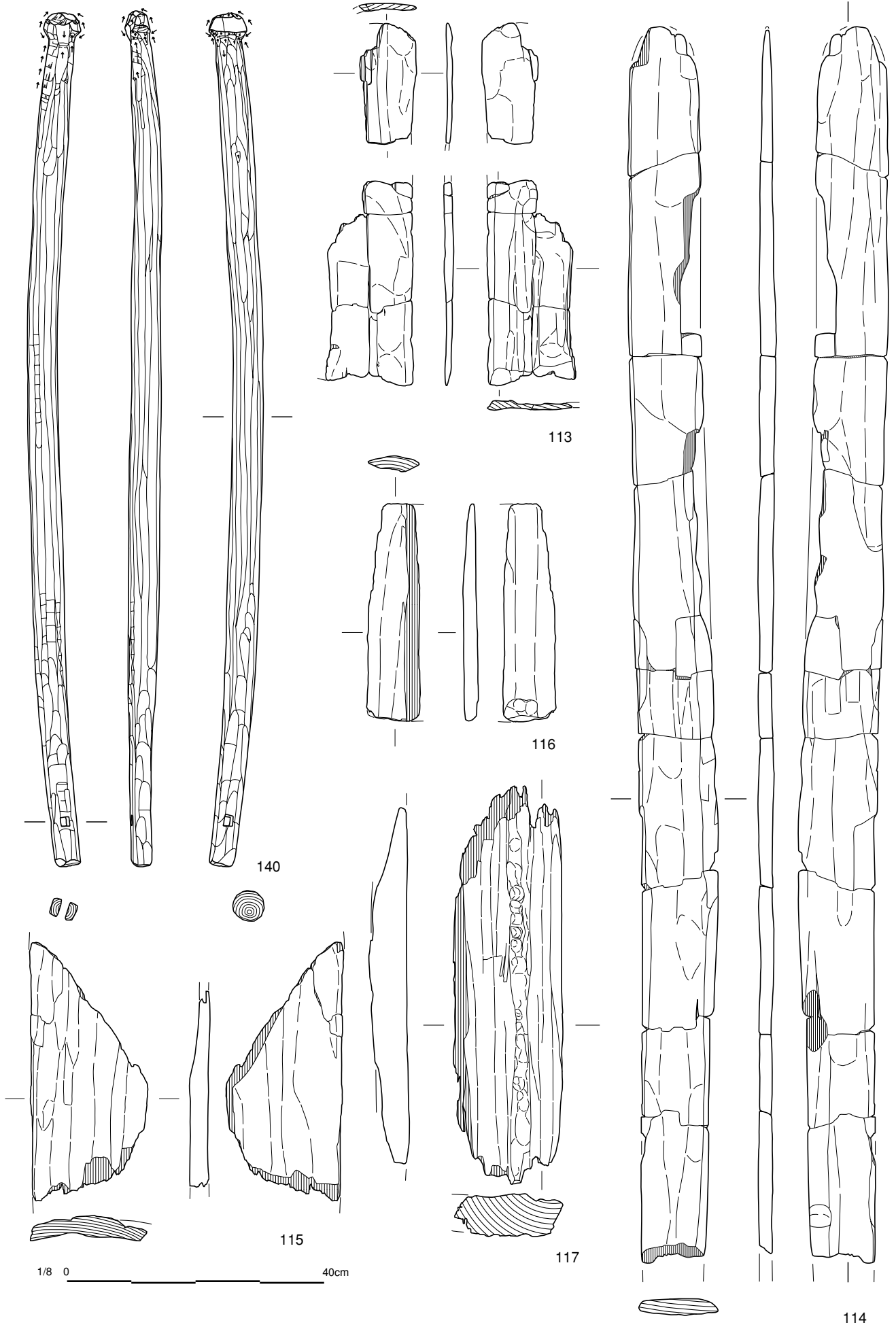
110

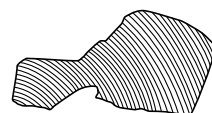
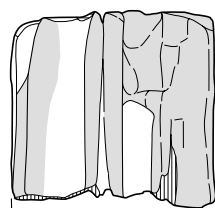
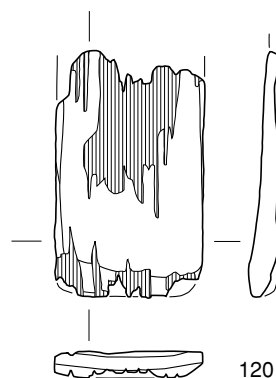
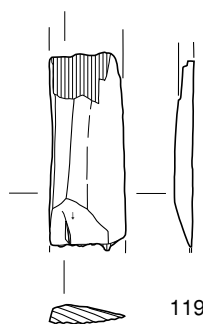
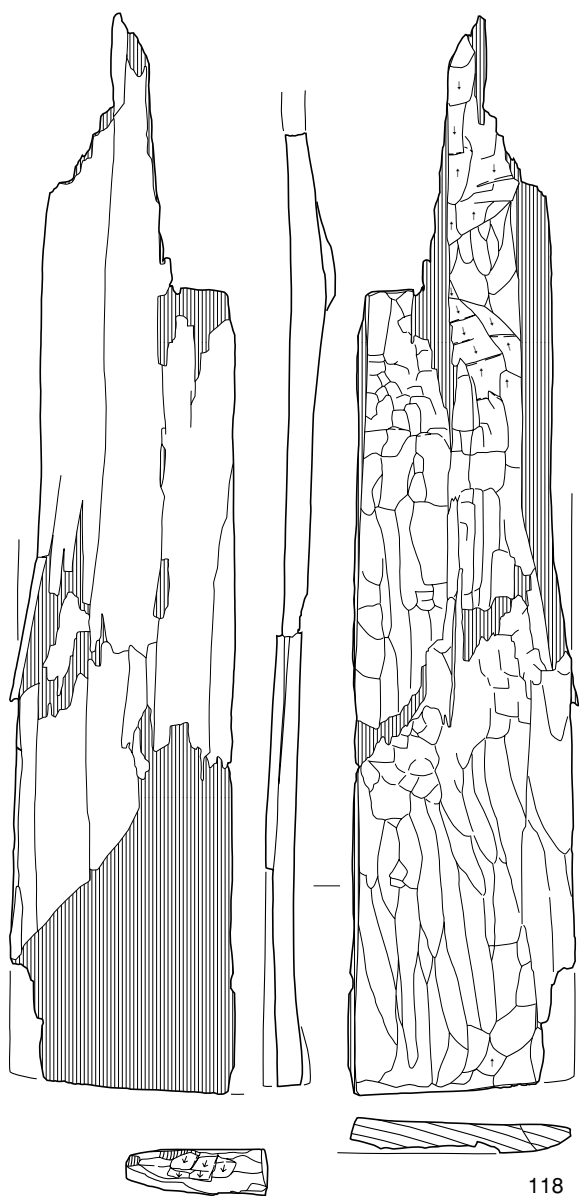


112

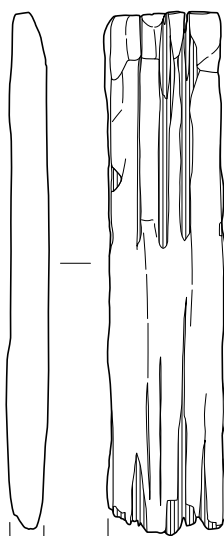


111

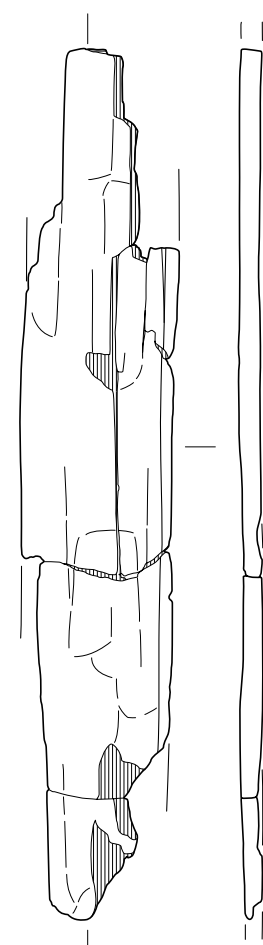




121



123



125



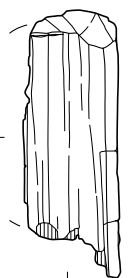
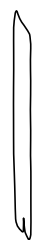
118



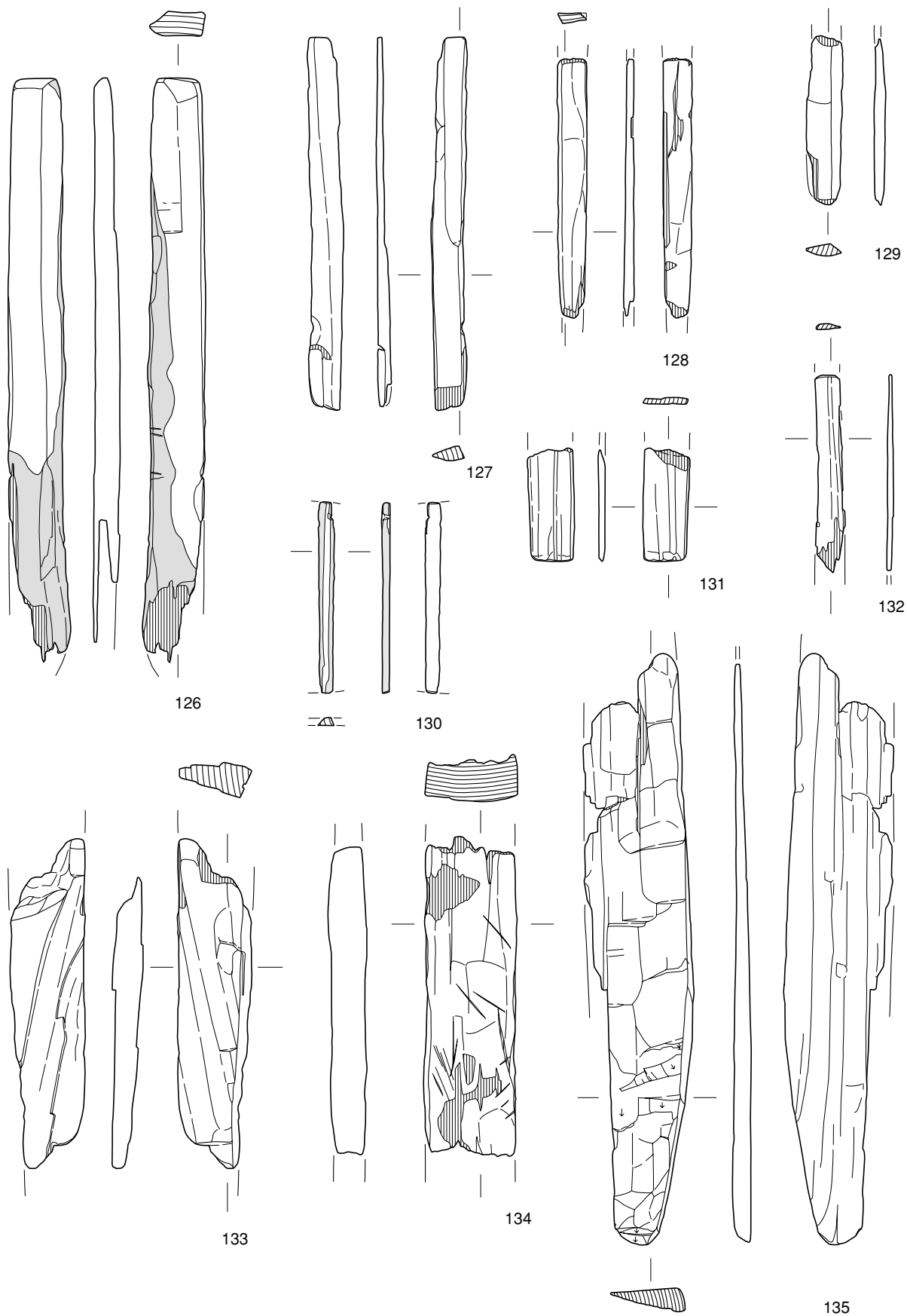
122

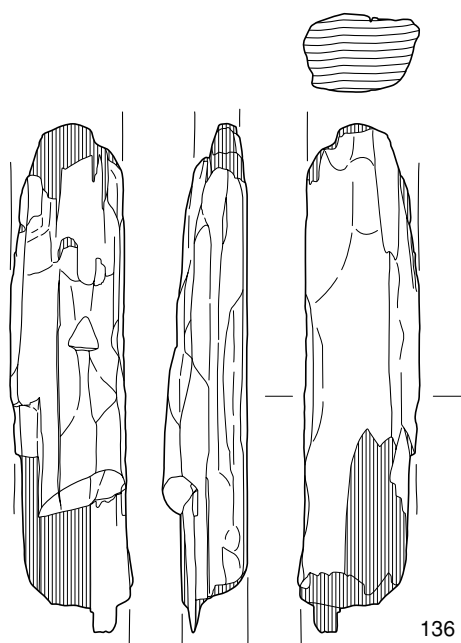


124

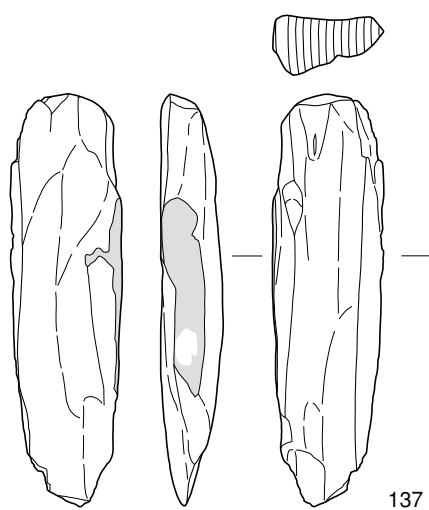


1/4 0 20cm





136



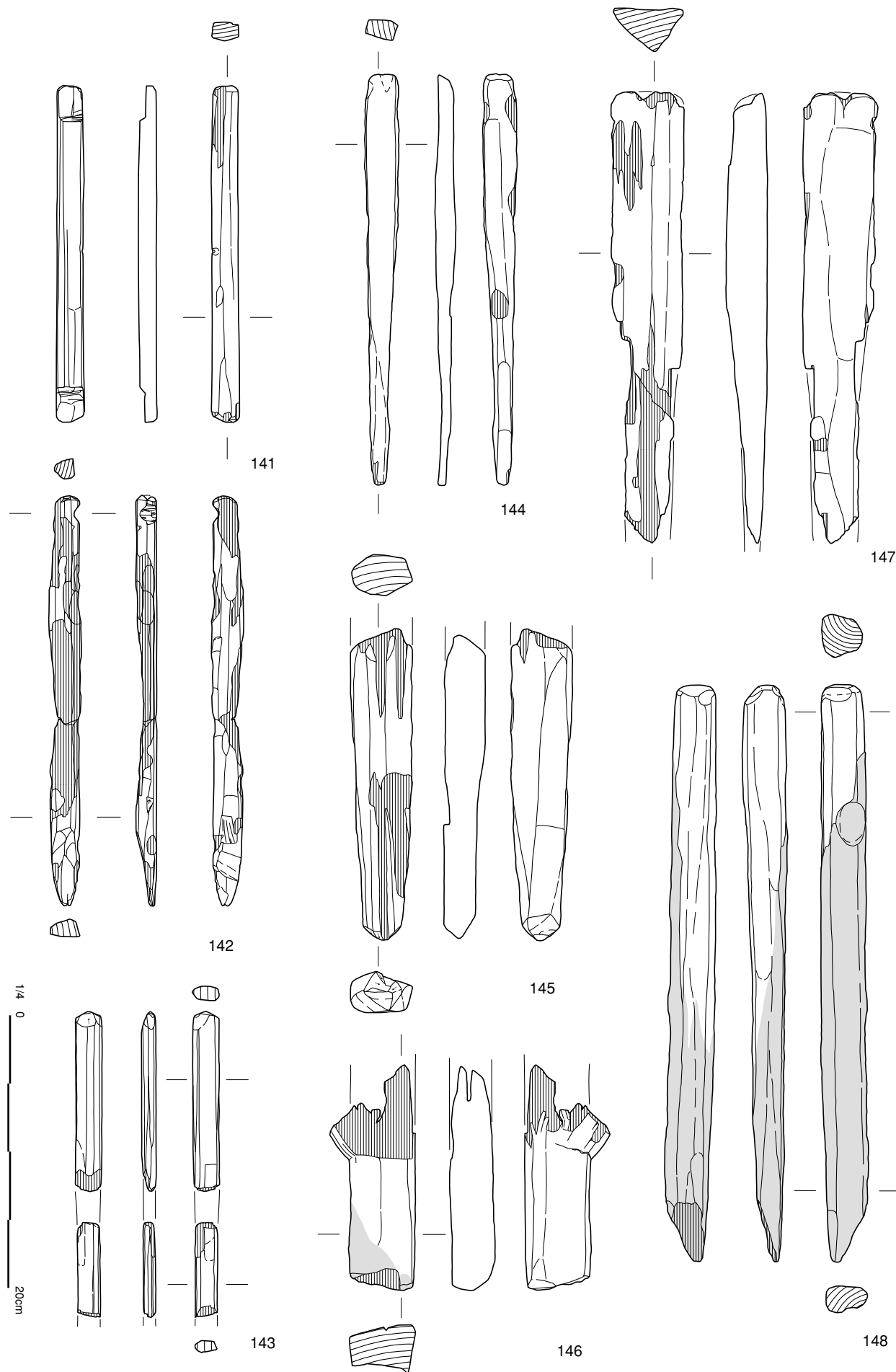
137

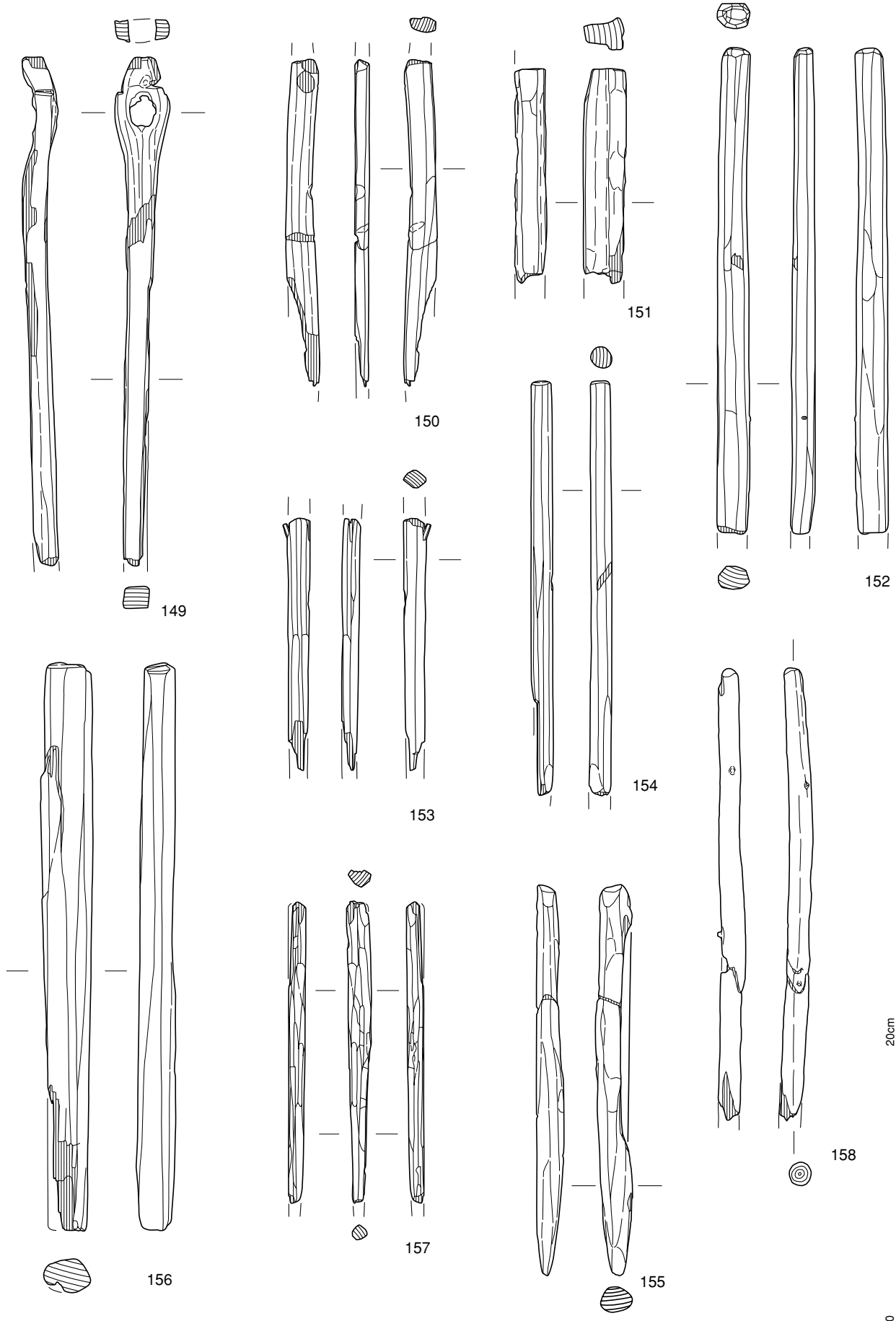


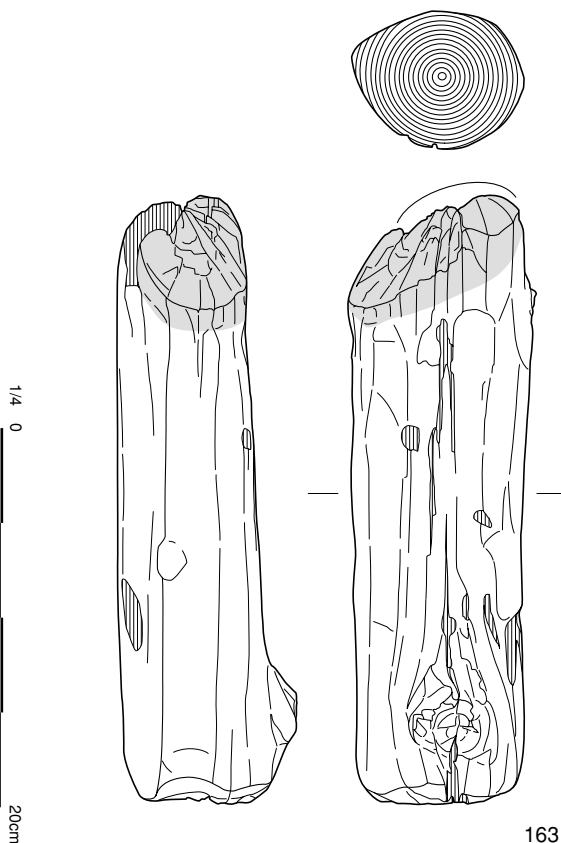
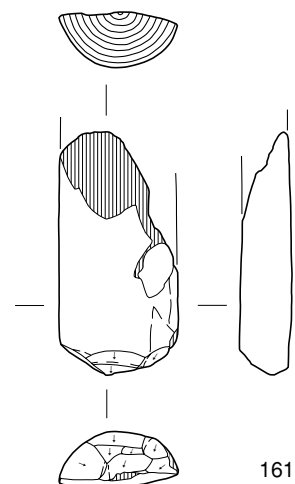
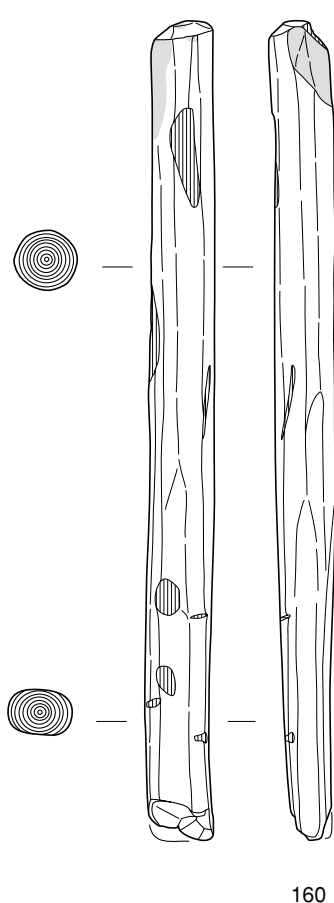
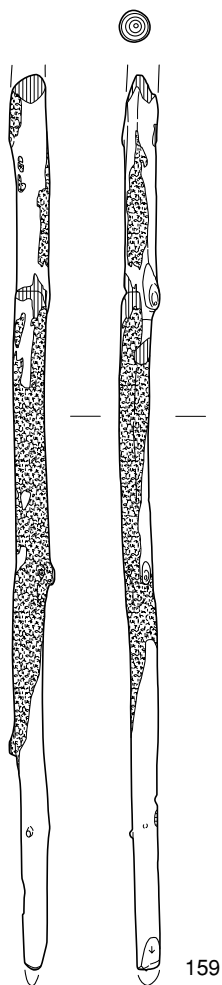
138



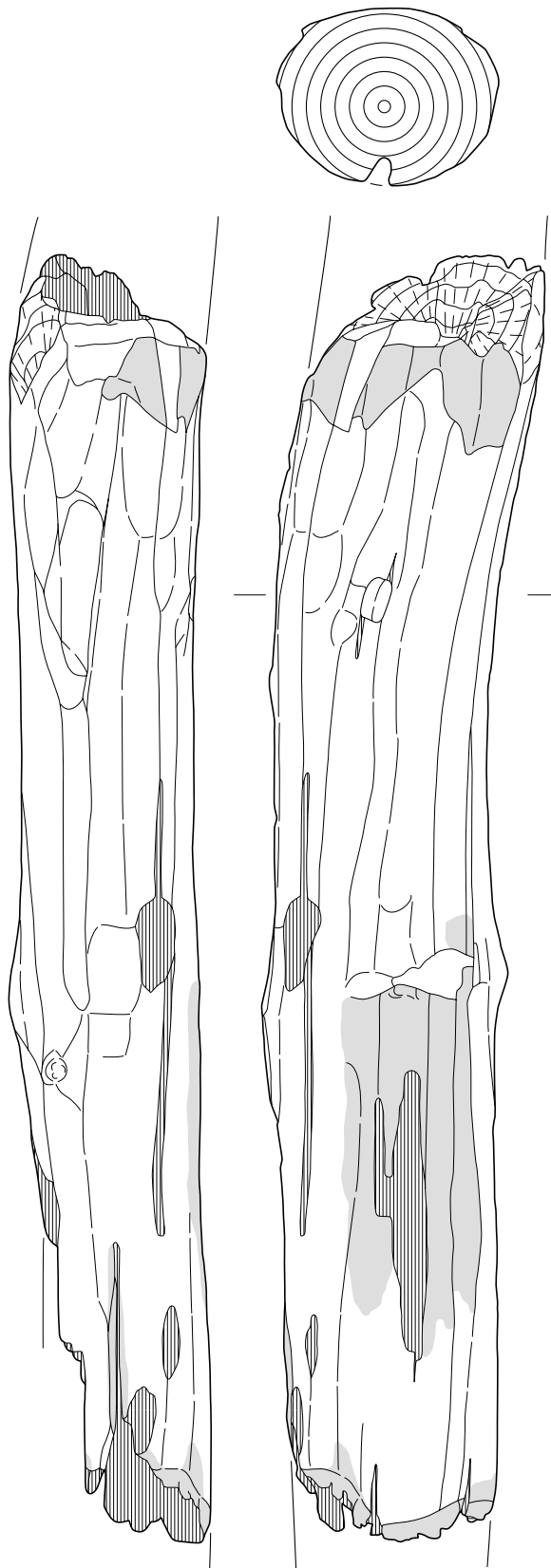
139







1/4 0 20cm

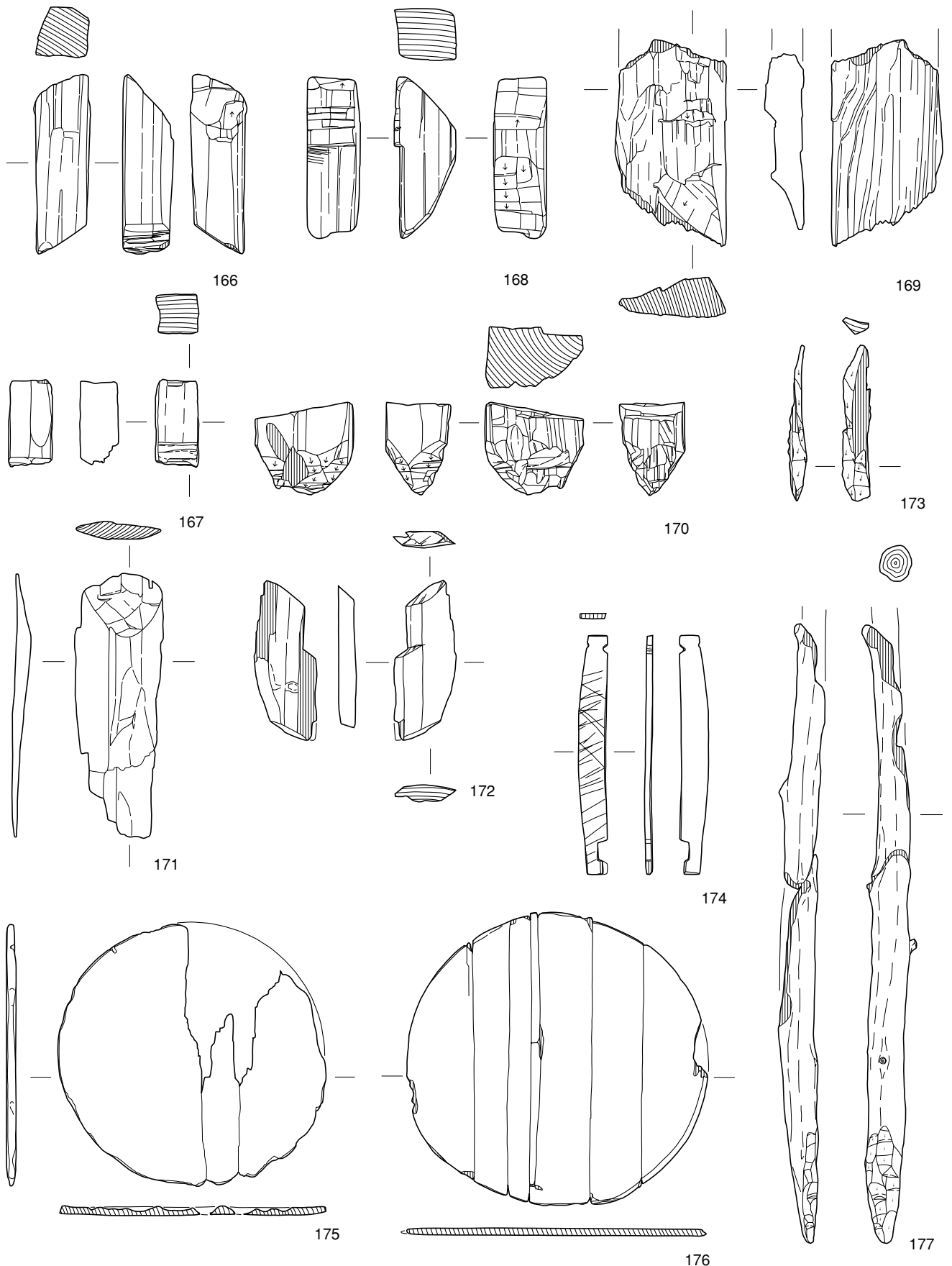


164



165

1/4 0 20cm



●調査前風景 南東から





● 00A区
上面全景
西から



● 00A区
上面全景
南から

● 00A区
上面中景
西から



● 00A区
SD02
西から



● 00A区
SD02 遺物
北から



● 00A区
SD08
箱状遺物
北から



● 00A区
SD08
箱状遺物
北から



● 00A区
SK292・305(1)
西から



● 00A区
SK292・305(2)
西から



● 00A区
SK305 曲物
西から



● 00A区 SK168 北から



● 00B 区
上面全景
北西から





● 00B区
上面全景
西から



● 00B区
上面西半部
西から





● 00B区
SK102
東から



● 00B区
SK102
西から



● 00B区
SK02
東から



● 00B 区
上層水田
西から



● 00B 区
下層水田
西から

图版 96



6



21



22



23



24



15



29



31



30



18



7



34



35



37



38



48



46



47



49



62



63



70



76



77



81



85



93



96



95



97





157



158



160



168



171



175



347





215



216



220



240

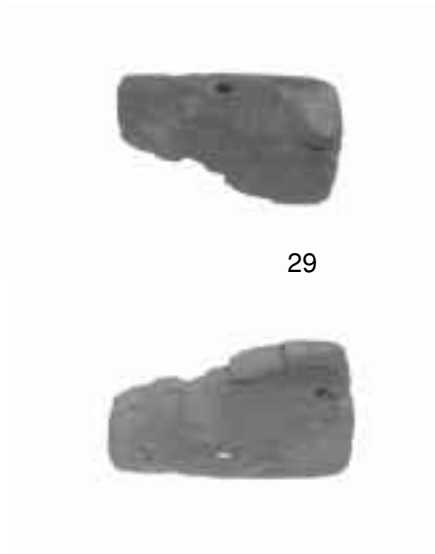


233



387







34



35



36



37



38



46



50



56



41



42

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第121集

志賀公園遺跡Ⅱ

2004年8月31日

編集・発行 財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 サンメッセ株式会社